

JAMS

マレーシア研究

Malaysian Studies Journal

第 6 号 2017 年

〈シンポジウム〉 サラワクから見るマレーシア研究

趣旨説明	山本 博之	1
マレーシアのなかのサラワク、マレーシア研究のなかのサラワク研究	祖田 亮次	3
サラワク人類学の系譜と今日的課題	佐久間 香子	21
サラワク州政治エリートの中長期的変化とマレーシア政治への影響	森下 明子	43
サラワクにおける生物多様性と生態系サービスの評価	竹内 やよい	56
サラワクのロングハウス社会におけるインドネシア人移住者との共住	加藤 裕美	71
熱帯雨林の英雄か国家の敵か—ブルーノ・マンサーとブナン人の闘い	金沢 謙太郎	86
一党優位体制の資源としてのサラワク	鈴木 絢女	98
サラワク作家のダヤク人表象—李永平と張貴興を例に	及川 茜	107
コメント 1: Sarawak for Sarawakians	石川 登	130
コメント 2: マレーシアの中のサラワク	篠崎 香織	133

〈研究ノート〉

マレーシアの中等教育における歴史考査問題にみる国家的価値観	内藤 裕子	136
-------------------------------	-------	-----

〈エッセイ〉

知識探訪—多民族社会マレーシアの横顔を読む（エッセイ 24 編）		156
----------------------------------	--	-----

英文要旨		185
------	--	-----

日本マレーシア学会

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

趣旨説明

山本博之

マレーシア 13 州のうちボルネオ島北部に位置するサラワク州とサバ州は、首都クアラルンプールを含む半島部マレーシアと南シナ海によって隔てられていること、半島部マレーシアで植民地行政を通じて形成されたマレー人、華人、インド人という民族分類とほぼ無縁の人々が多く暮らしていること、世襲のマレー人スルタンを元首に戴く諸邦の連合体が独立した半島部マレーシアとは異なってマレー人スルタンと切り離された植民地空間として形成され独立したという植民地化と脱植民地化の過程を経ていること、そしてマレーシア結成の過程で連邦憲法によってサラワク州とサバ州に高度な自治が認められていることといった地理的・社会的な要因や歴史的・政治的な経緯などのため、マレーシア国土の約 6 割の広さを占めるにもかかわらず、制度の上でも意識の上でもマレーシアの一部としての扱いを十分に受けてこなかった。このことはマレーシアを対象とする研究にも反映されており、1963 年のマレーシア結成から半世紀を経てもなおマレーシア研究の多くが「サラワクとサバを除外する」と断り書きする状況が続いてきたことにもよく表われている。

この間に、サラワクとサバは、マレーシア研究という一国研究から半ばはみ出した形で、それぞれ独自の地域として研究が進められてきた。特にサラワクについては、生態環境、社会文化、政治経済を含む幅広い分野で多くの研究が進められており、国際的にも研究者の層は厚く、日本人研究者もその例外ではない。ただし、このような特徴を持つサラワク研究が、その良し悪しとは別に、マレーシアの他地域を対象とするマレーシア研究と十分に接合されない形で発展してきたことも否めない。

2000 年代に入り、主に半島部マレーシアの政治状況に規定されて、マレーシアにおけるサラワクとサバの重要性が高まりつつある。いまや、政治経済のみならず、生態環境や社会文化を含めて、サラワクとサバを除外してマレーシア全体について語ることは難しくなっている。このことは、サラワク研究をマレーシアという枠組みに位置付けることの重要性も増していることを意味している。むしろ、これまでのサラワク研究はイシューごとに適切な枠組みに位置付けられて行われてきたのであり、サラワク研究がサラワク研究として閉じていたということではなく、それを位置付ける枠組みの 1 つとしてこれまであまり目が向けられてこなかったマレーシアという枠組みの重要性が相対的に高まっているということである。

本特集は、これまでサラワク研究がどのような課題に取り組み、何をどこまで明らかにしてきたのかを確認した上で、より大きな枠組みに位置付けることでサラワク研究の新たな展開の可能性を探るため、より大きな枠組みの 1 つとしてマレーシアに焦点を当てるものである。はじめに本特集の序論に相当する祖田亮次論文により、マレーシアにおけるサラワクの位置づけと、これまでのサラワク研究の展開およびそのマレーシア研究における位置づけについて包括的な見取り図を示した上で、現在サラワク研究の最先端でどのような研究課題が取り組まれているのかを、民族分類（佐久間香子論文）、政治エリート（森下明子論文）、生物多様性と生態系サービス（竹内やよい論文）、インドネシア人移住者（加藤裕美論文）、熱帯雨林伐採と先住民の抵抗運動（金沢謙太郎論文）の 5 つのテーマに即して論じる。

それに続く論考は、サラワクをマレーシアあるいはそれと部分的に重なる別の広がりにおいて捉えている。鈴木絢女論文はマレーシア政治、及川茜論文は華語文学の立場からサラワク（研究）にアプローチする。また、本特集は 2016 年 11 月 27 日に行われた日本マレーシア学会の 2016 年度研究大会シンポジウム「サラワクから見るマレーシア」での発表と議論を発展させたものであり、シンポジウムでコメンテーターをつとめた 2 人の寄稿（石川登原稿と篠崎香織原稿）は、シンポジウムの内容を踏まえて本特集の議論をさらに広げる試みである。

この特集が、サラワク研究とそれ以外のマレーシア研究の結びつきを一層強め、サラワク研究に新しい文脈を加えるとともに、サラワク研究と接合することでマレーシア研究をさらに発展させ、マレーシア研究を真にその名にふさわしいものへと更新する一歩となることを期待する。

(やまもと・ひろゆき 京都大学)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

マレーシアのなかのサラワク、マレーシア研究のなかのサラワク研究

祖田亮次

はじめに

2014年ごろから「Satu Malaysia (One Malaysia)」という標語が、マレーシア・サラワク州（以下、サラワク）の各所で見られるようになった。この標語がマレー半島においてどのように広がり受け止められているのか筆者は把握していないが、サラワクの内陸先住民¹たちと会話を交わしていると、東西マレーシアの統一やムスリム／非ムスリムの融合というイメージが先行していることを、強く感じさせられる。

サラワクの住民（サラワキアン）は、華人やマレー人も含め、半島あるいは首都クアラルンプールによってサラワクが経済的に搾取されているという意識を、多かれ少なかれ持っている。とくに、焼畑や狩猟採集を主要な生業としてきた内陸先住民は、その多くが非ムスリムであるがゆえに「二級市民」あるいは「二級ブミプトラ」とみなされていると感じており、サラワクにとって連邦政府は「搾取」と「差別」の元凶であるという認識を持つ者も少なくない。そうした人々にとって、この「Satu Malaysia」はかなり白けた印象を持たざるを得ない標語のようである。いくつかの村々でこの話題に触れると、「中味のない政治的キャンペーンだ」とか、「わざわざ Satu Malaysia と言わなければならないということは、一つになっていないからだ」とか、「我々はこの一つ（Satu）のなかには入れられてはいない」といった皮肉や揶揄、自嘲が頻繁に聞かれる。

実は、1990年代末に、マハティール前首相が「西マレーシア」「東マレーシア」という呼称を避けるように呼びかけたことがあった。マハティールの呼びかけ自体は一時的なもので大きな話題にはならなかったが、サラワキアンの一部はやや敏感に反応していた。つまり、朝鮮半島や、かつてのドイツ、パキスタンなどを想定して、「東西」や「南北」といった地域表現が国家の分裂をイメージさせるので、それを嫌ったのだらうと噂されたのである。サラワクの人々にとっては、近年の「Satu Malaysia」も、20年前の動きと同じように受け止められているのかもしれない。ただ、このような標語に対する、時に過剰に見

¹ サラワクの内陸に住む人々のなかには、現在のインドネシア・カリマンタンも含めて広範かつ頻繁な移動履歴を持つ者も多く、その「先住性」は時に疑問視されることもあるが、本稿では便宜的に「先住民」と呼ぶことにする。

える反応は往々にして一過性のものであり、外部者から見ても独立や分裂の機運が高まっているように感じられない。

その一方で、近年のサラワクでは「Sarawak for Sarawakians」という標語も話題になっており、州内各地でこの標語を掲げた看板やステッカー、あるいはTシャツ等を見かけるようになった。何人かのサラワキアンに聞くと、この標語はイバン人を中心とした内陸先住民の反タイプ運動に過ぎないとする見解もあれば、華人もマレー人も含め、多くのサラワキアンがこの運動に参加していると強調する人も多い。独立をまじめに考える運動だと語る者もいれば、一時的な盛り上がり過ぎないと冷静な見方をする者もいる。

こうした状況を見ていると、サラワクは、半島あるいは連邦政府といまだに微妙な距離を取り続けていることは確かであるが、サラワク内部においても認識や見解の不一致・不統一が見られるように思われる。サラワクはマレーシアという連邦国家のなかで、どのようなスタンスを取ろうとしているのだろうか。また、そうした地域で「マレーシア研究」を行うことの意味は何なのだろうか。

本稿では、マレーシアにおけるサラワクの位置づけについて若干の考察を加えたうえで、日本人によるサラワク研究がどのような状況にあり、マレーシア研究のなかにおいてサラワク研究をどう位置付けうるのかを議論したい。

I サラワクの位置づけ——半島との関係性

1. ペニンスラ・コネクション

これまで、サラワクを含む東マレーシアは、いろいろな意味で「例外」として扱われることが多く、研究者の関心も高くはなかった。サバ州（以下、サバ）とサラワクは、半島から地理的に離れているだけでなく、半島部とは異なる歴史的背景を持ち、また、民族構成や行政の単位・機構も異なることから、単純な比較が難しく、統一的な統計データが得られない場合も多い。1963年の独立およびマレーシアの結成に際して、それぞれ一定の自律性を維持するための条件が承認されており、政治的構図や政権基盤のあり方にも違いが見られるため、両州はしばしば「別物」として扱われてきた。

しかし、東マレーシアは全国土面積の約60%（サラワク37.68%、サバ22.41%）を占めており、人口規模で見ても連邦全体（約2,972万人）の約20%を占める（サラワク8.4%、サバ10.8%）。GDP（2012年）に関して言えば、連邦全体の912,261 million RMのうち、サラワクは94,013 million RM（10.3%）、サバは61,223 million RM（6.7%）となっており、これらの数値を見ると、連邦全体から見てもサバ・サラワク両州はそう簡単に無視できる存在ではないことが分かるであろう。たしかに、サラワクやサバへの入州には、マレーシア国民であっても身分証が必要になるなど、州としての自律性が強調される

ことが多い。しかし、1963年の独立および連邦国家結成から50年以上を経て、両州はマレーシアの中の重要な州となっている。

より現実的な見方をすれば、独立後まもなく両州ではいろいろな意味で「マラヤ化」が進んできた。田村（1988）は、政治的な観点からサバ・サラワクの独立直後におけるマラヤ化の進展を考察しているが、1970年代以降もマラヤ化は徐々に進展し、近年はこれが加速しているようにも思われる。そして、かつて田村が指摘したような、政治的な意味でのマラヤ化だけでなく、社会的・経済的にも半島とボルネオは接近していると言える。

一例として、半島とサラワクとの間の人の移動について見てみよう。1963年のマレーシア成立以降、サラワクの人々が半島に行くことも特に珍しいことではなくなっていたが、1990年代まではやはり、距離的・金銭的・心理的に半島は遠い場所であった。たとえば、1997年の経済誌『*Far Eastern Economic Review*』に、「Identity Crisis: Who is Exactly a Bumiputra?」という記事が掲載された²。この記事によると、半島に移住したサラワクのイバンやサバのカダザンたちが、「東マレーシア出身でムスリムでもないから、ブミプトラではない」とされ、ブミプトラ対象の各種補助・助成を申請しようとしても受け付けてもらえないという事態が頻発したことから、多くのサラワキアンやサバハン（サバ住民）にとって、「ブミプトラとは何か?」という疑念が改めて浮上するようになったという。

この記事は、サバ・サラワクの先住民の観点から、半島部に行くことは自らの「二級ブミプトラ (second class Bumiputera)」性を強く意識するだけでなく、ブミプトラでさえないとされることへの戸惑いを、「アイデンティティの危機」として表現したものである。マレーシアという国家の枠組みのなかで、マレーシア人として生きることを選択せざるを得ないことは理解しつつも、現実としてはブミプトラの一員として認められないことへの苛立ちは、サラワクで調査していた筆者に対してもしばしばぶつけられた感情であった。

このようにサラワクの人々にとって半島は物理的にも心理的にも遠い存在であったが、近年になって半島とサラワクとの間の人の移動は急増している。図1を見ると、サラワクを出入りする人の移動は過去10数年で2倍以上に増加していることが分かる。

半島との距離感は、金銭的な意味でも近くなった。その要因として、エアアジアの就航は大きい。内陸の村々でも、エアアジアの就航は話題になり、そのキャッチフレーズ「Now everyone can fly!」に対して、冗談交じりに「even Iban, even Penan…」などと付け加えることも一部で流行した。両地域の往来が頻繁になったことで、サラワキアンであると同時にマレーシアンでもあるという重層的アイデンティティは強化され、現在ではその矛盾の認識と妥協点の模索は、より日常化されていると思われる。

² *Far Eastern Economic Review*, 12 June, 1997.

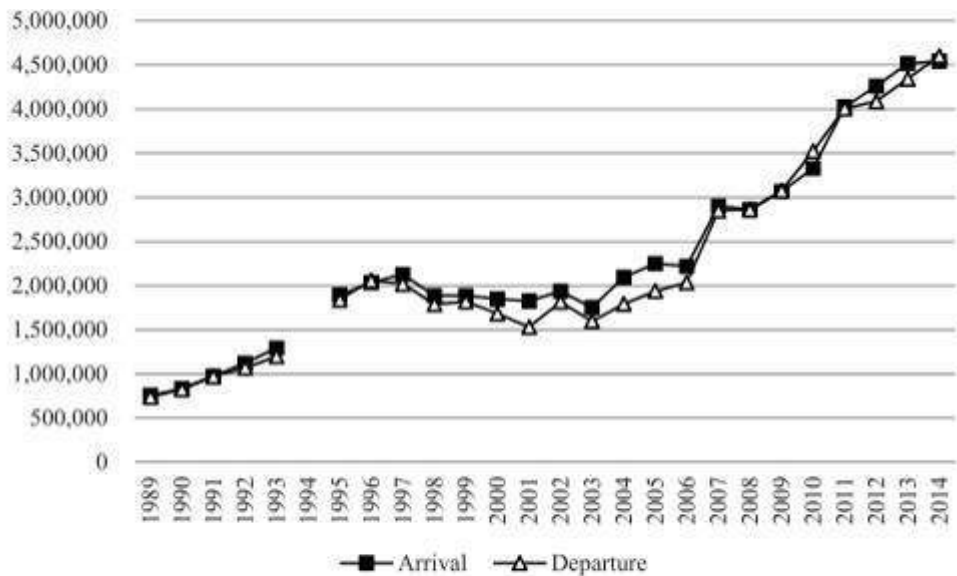


図1 マレーシア・サラワク州の出入者数の推移

『Yearbook of Statistics, Sarawak』各年版より作成（一部データ欠損）

半島とのつながりは、人の移動のほかにも、いろいろなところで見ることができる。アブラヤシの調査をしている者にとっては、たとえば、フェルダ（FELDA）やサイム・ダービー（Sime Darby）社がサラワクの森林開発に参入してきたという点でも実感することができる。サイム・ダービー社の経営するプランテーションは、現在、サラワク内に18ヶ所存在し、4つの製油工場を操業している。

サラワクにおける従来のアブラヤシ・プランテーションの特徴と言えることは、多くの農園は、商業的木材伐採の操業跡地や、二次林（焼畑休閑林等）で開発が進められてきたという点である。天然林における有用樹の択伐という資源利用から、皆伐後のアブラヤシ植栽という面的な土地利用への転換は、景観面で大きな変化をもたらした。しかし、ほとんどのアブラヤシ・プランテーションは、木材伐採企業や関連企業（その多くはサラワク資本）によって操業されており、森林開発の主体となる企業体のあり方は一貫性を有していた。そこに半島資本が入ってくることは、大きなインパクトになりうる。半島の巨大資本がサラワクの土地資源や森林資源の活用に乗出してくることは、以前は考えにくかったことで、サラワクの開発企業の間では警戒感が強まっているという。

これ以外にも、たとえば山本（2016）が指摘しているように、1990年代後半以降、半島の野党・民主行動党（DAP）がサラワク進出したことも、サラワク政治にとっては大きな変化である。サラワクにはまだ統一マレー国民組織（UMNO）が入ってきておらず、与党連合はサラワクの地域政党によって構成されているが、「DAPが躍進したらUMNOがサラワクに進出してくるぞ」という危機感を持つ契機にもなっている。

過去 20 年間、社会的・経済的・政治的な面で、サラワクと半島の顕著な接近が見られるようになってきているのは確かであり、こうした状況は俗に「ペニンスラ・コネクション」と表現されることもある。このように、半島を意識する契機は、サラワクの住民レベルでもそこかしこに現れるようになったのである。

2. サラワキアンのためのサラワク？

半島との関係が強くなってくる一方で、サラワクにおいて「Sarawak for Sarawakians (S4S)」という標語が目立ち始めたのが、ここ数年のことである（本特集所収の石川氏コメントの写真を参照）。実はこの標語は、ちょうど 50 年前に使われたもののリバイバルでもある。

サラワク独立後の初代州首席大臣にカロン・ニンカンという人物がいた。民族的にはイバンであったとされる³。しかし、連邦政府の強引な手法で 1966 年に彼が州首席大臣を解任されたとき、つまり田村の指摘に従えば、独立後に本格的な「マラヤ化」が推し進められつつあったとき、ニンカンとその周辺のいわゆる「サラワク・ナショナリスト」たちが、ニンカン政権奪回のためのキャンペーンを展開した。その際に、この「Sarawak for Sarawakians」という標語が使用されたのである。

結局、ニンカンの政権闘争は失敗に終わり、その後はムスリム・リーダーによるサラワク統治へと一気に傾くことになったが、近年の状況をこの 50 年前の政権闘争になぞらえれば、連邦あるいは半島からの介入・関与（federal factor）（Soda, 2007）が強化されることと、それに対する人々の警戒感・嫌悪感が増幅され、サラワクの主権回復・自治権強化の主張が高まるというのは、相関性のある事象と言えるかもしれない。

ただ、50 年前と異なる現状としては、現在のサラワキアンたちはさまざまなキャンペーンや標語を打ち出しつつも、マレーシア人としての一定のアイデンティティを持つようになっているという点であろう。たとえば「Sarawak for Sarawakians only?」という *Star* 紙の記事は、2016 年の州議会議員選挙期間中の S4S の盛り上がりを指摘しつつ、一方で、選挙が終われば現実に戻る（つまり、サラワキアンからマレーシアンとしての生活に戻る）という実態について、やや皮肉なニュアンスを込めて書かれている⁴。

その意味では、先述の「Satu Malaysia」というのは、一つでないマレーシアを一つにしようというキャンペーンというよりは、すでに一つになってしまったマレーシアにおけるサラワクの位置づけを再確認し、それをどう理解するのかという契機を与えるものであり、サラワクがマレーシアという連邦国家に包摂されていることは、一定の不満を抱えつ

³ ただし、華人の祖父を持っていたため、華人へのシンパシーも強かったと言われる。

⁴ *The Star Online*, 11 May, 2016.

<http://www.thestar.com.my/metro/views/2016/05/11/sarawak-for-sarawakians-only/>

つも既成事実として認めているようである。そうした前提の下であるからこそ、S4S という運動が展開できるのかもしれない。つまり、それは独立運動の機運の高まりというよりは（そういう面を強調する人もいるが）、政治的キャンペーンの場で、重層的アイデンティティを自覚しつつマレーシアのなかでのサラワクの位置付けを再考しようとする動きととらえてよいのではないだろうか。

この動きに関連して、サラワキアンから頻繁に聞かれることは、サラワクは独立後、マラヤ連邦という既存の半島国家に加盟（join）したのではなく、他州とともに（対等の立場で）マレーシアという新しい連邦国家を形成（form）したのだ、という主張である。それは、1960年代に「マラヤ」からの「同化（マラヤ化）」を強いられたことへの反発や抵抗というよりは、「マレーシア」という連邦国家の一部を構成しているという前提の下での「地域アイデンティティ」の発露の仕方なのかもしれない。

いずれにせよ、1960～70年代に「マラヤ化」を経験したサラワクでは、2000年代以降、それとは異なる形で半島との関係が強くなっている。連邦国家を構成する重要な州であることを自認しているのであれば、近年の動きは「マレーシア化」と言ってもよいかもしれない。すくなくとも「federal factor」や「peninsular connection」は過去20年間でいっそう拡大し、強化されていることは間違いないであろう。そうした中で、サラワクをとらえ直す新しい研究枠組みあるいは研究視角というものが、今後は求められていくのかもしれない。以下では、これまで「サラワク研究」がどういう形で進められてきたのか、現在どのようなテーマやトピックが中心的な話題となっているのかを確認したうえで、それらがマレーシア研究といかに接合しうるのかという点について、若干の議論を提示しておく。

II サラワク研究の特徴

1. サラワク研究の活性化

サラワクでは、1930年頃まで英国王立地理学協会（Royal Geographical Society）の支援による探検調査旅行が何度か行われ、各種の地理学雑誌に数多くの論文が掲載された。また、植民地行政官による駐在担当地区の報告書やキリスト教会の活動記録も、地誌的な情報源として重要な役割を担っていた。しかし1950年代以降、植民地支配の影響が弱くなると同時に、そうした地誌的な記述や報告は減少し、その一方で、文化人類学的な研究が隆盛することになった（祖田，2008，Cleary and Lin，1991）。

日本人によるサラワク研究も、1990年代半ばまでは文化人類学者が中心となってきた。そのなかでも、たとえば内堀基光のように、サラワクを主要な調査地とする研究者（サラワク研究者）が現れるのが1970～80年代である。1990年代半ばになると、文化人類学以

外の分野も含めて、いわゆる「サラワク研究者」の数が徐々に増加していった⁵。

ただ、半島において、政治、経済、民族、文化、宗教、文学、芸能、教育、都市、建築、農業、環境、観光など、多岐にわたるテーマで研究が進められてきた一方で、サラワクに関しては、やはり人類学的な研究が中心であったと言える。政治や経済、産業に関する議論は相対的に少なく、民族論や文化論がその主流を占めていた⁶。欧米のサラワク研究者やローカルの研究者のなかには、1990年代以前から政治学や環境論の立場から研究を行う者もいたが（たとえば、Aeria, 1997, Chin, 1996, Hong, 1987, Leih, 1974）、その数は限定的で、やはり民族や文化の研究が卓越していたと言える。この背景には、後述するように、政治経済や森林資源に関わる研究が、サラワクでは非常に難しかったという事情がある。

2000年代以降になると、科学研究費補助金などを利用した大小のプロジェクトが立てられ、サラワク研究者が共同研究を行うようになった。そのうちの代表的なものとして、次のプロジェクトが挙げられる⁷。

- 1) 科学研究費補助金基盤研究（A）（2000～2003年度）「サラワク先住諸民族社会における自然環境認識の比較研究」（内堀科研）
- 2) 科学研究費補助金基盤研究（A）（2005～2008年度）「ボルネオ島における「自然災害」の人文的研究」（津上科研）
- 3) 総合地球環境学研究所プロジェクト（2006～2012年度）「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」（山村・酒井プロ、対象地：サラワク・モンゴル）
- 4) 科学研究費補助金基盤研究（S）（2010～2014年度）「東南アジア熱帯域におけるブランテーション型バイオマス社会の総合的研究」（石川科研）
- 5) 科学研究費補助金基盤研究（B）（2013～2017年度）「熱帯原生林の狩猟採集民と農耕民の共生に関する人類学的研究」（金沢科研）

このように、21世紀に入ってから、プロジェクト・ベースの研究が行われるように

⁵ 本稿脱稿後、イバン研究を中心にしたサラワクの学術雑誌『*Ngingit*』の特集号で、日本人によるサラワク研究をまとめた Uchibori (2017) の論考が掲載された。この特集では、日本人のサラワク研究者7人（内堀基光、祖田亮次、市川昌広、長谷川悟朗、奥野克巳、加藤裕美）と、日本で学位を取ったサラワキアン1人（エレナ・チャイ）が寄稿している。あわせて参照されたい。

⁶ その象徴的なものはいわゆる「イバン研究」であろう。サバ、ブルネイ、インドネシア・カリマンタンを含めても人口100万人に満たないエスニック集団に関して、人類学や民俗学、言語学などを中心に膨大な研究・報告が蓄積され、2001年には、A4版で4分冊2,783ページに及ぶ『イバン研究百科事典（*The Encyclopedia of Iban Studies*）』が出版された。単なるイバン事典ではなく、「イバン研究」の事典である点が特徴的であり、その研究蓄積の分厚さが分かる（祖田, 2008）。また、前注の雑誌『*Ngingit*』もイバン研究を志向したもので、2012年に創刊した。

⁷ 生態学者が中心となったサラワク研究プロジェクトはこれ以外にもあるが、ここでは人文社会系の研究者が一定程度含まれているものを挙げている。

なり、それまで単独調査が主流だった人文社会系のサラワク研究者の間で、実質的な交流が始まることになった。

一方、生態学を中心とする自然科学分野においても、やはり 1990 年代以降にサラワクを主要なフィールドとする研究者の数が増加した。とくに、ランビル国立公園における調査プロットの設定 (Yamakura et al., 1995, Lee, 1997) は、日本人による生態学的調査を進展させるうえで重要な意味を持った。近年では、国立公園内だけでなく、人為的影響を強く受けている焼畑休閑二次林やプランテーション地域での生態学的調査も行われるようになり、社会的・経済的要因を分析指標として取り入れる動きもみられるようになってきている (たとえば、Sakai et al., 2016, Takeuchi et al., in press)。このような状況が、後述する文理融合型の研究を進める素地を形成していった。

2. 自然資源への注目

サラワクにおいては、森林資源から得られる利益が州政府の主たる財源となり、また重要な政権基盤として機能してきた。そのため、森林に依存して生きる内陸先住民と、外貨獲得手段として森林資源を利用したい州政府との間で、資源配分をめぐるコンフリクトが頻発してきた (Hong, 1987)⁸。民族や文化を主要な研究対象とする場合でも、焼畑民や狩猟採集民にとって森林は重要な生業・生活基盤であり続けたため (内堀, 1996)、人文社会系の研究者でも、資源や政治との関係性については常に注意を払う必要があった。

しかし、サラワクにおいては、民族政策を含む政治的・政策的な議論を行うことや、森林資源の配分に関わる問題を指摘することはタブーとされ、こうした敏感問題に触れる研究には調査許可が下りないという時代が長く続いた。サラワク経済を考えるにあたっても、森林や土地、環境に触れないわけにはいかないが、それは容易なことではなかった。とくに、1990～2000 年代は州政府企画庁 (State Planning Unit) による調査許可審査が非常に厳しくなっていた。内部事情を知る現地の元行政官によれば、欧米の研究者による調査許可申請書はしばしば敏感問題に触れており、その多くは却下され、場合によって入州拒否という事態もあったという。

一方、日本人研究者の間では、敏感問題を (表面的には) 避ける調査許可申請書の執筆の工夫が共有され、多くの申請が許可されることになり、この時期からサラワク研究における日本人研究者の相対的な割合が高まることになった。資源や政治の問題を調査することや、それについて執筆することは依然として困難を伴う。しかし、サラワク研究者の多くは調査許可剥奪や州外退去命令等に脅えながらも、資源ポリティクスには常に関心を払

⁸ プナンによる林道封鎖等の活動はとくによく知られている。これらについては、金沢 (2009; 2015) や奥野 (2003) を参照されたい。

い続けてきた。

このように、民族論・文化論に特化してきた傾向はあるものの、その周辺で政治や経済、自然生態といった要素にも、何らかの形で目を向けてきたのは事実であり、実際、内堀科研にせよ、津上科研にせよ、そのメンバーは人類学者を中心としつつも、「自然認識」や「資源利用」を主要なテーマの一つとして掲げていた。こうした自然資源への関心の持続が、その後の生態学系研究者との協働を可能にしたと言える。先述の通り、2000年代に入ってから、生態学者の間でも国立公園の外での調査が視野に入れられるようになり、人文社会系の研究者との共同調査が重視されるようになってきた（本特集所収の竹内論文を参照）。

最近10年ほどは、文理融合型のものを含め、サラワク研究者が集まる研究プロジェクトが複数立ち上がるようになった。日本においてプロジェクト・ベースの研究が主流になっているという状況を反映していることは事実だが、上述のような関心の所在が文理融合型プロジェクトの成立に寄与したことは間違いない。これは、半島の研究状況と比較して、サラワク研究の特徴の一つと言えるだろう。

III マレーシア研究との接合可能性

文理融合や民族間関係論、あるいは後述の流域社会論などは、サラワク研究の特徴として挙げられる。しかし、その対象はいずれもサラワク内に限定され、いわゆる「サラワク研究」の枠から出ることは少なかった。地理的に近接するサバヤカリマントンとの関係性について考察する研究は各分野で一定程度蓄積されてきたが（たとえば、松村, 2016, Soda and Seman, 2011, Ishikawa, 2010, 石川, 2008, Kendawang et al., 2005, Wadley and Eilenberg, 2005, 中島, 1993; 1992）、マレーシアという枠組みを意識した研究はごく限られている。

独立以前や、1960年代のようなサラワク・ナショナリズムが前提としてあった時代であれば、「サラワク研究」というのは、他地域における国家単位の地域研究と同列に扱うものだったかもしれない。しかし、先に示したように、半島との様々な「コネクション」が（それへの反発も含めて）実質化しており、マレーシアという国家を形成する重要な地域となっているサラワクの位置付けを考慮した場合、サラワク研究のあり方にも何らかの変化が求められるのかもしれない。

以下では、サラワク研究にとって、半島における研究とどのような比較や接合がありうるのかについて、本特集所収論文との関連も含め、いくつかのトピックを挙げながら提示しておきたい。

資源と政治 先述の通り、サラワク研究者の多くは、何らかの形で土地・森林資源の問題

に注目してきた（たとえば、津上，2013，森下，2013，金沢 2001，市川昌，2010，2008，祖田，2009，藤田，2008，奥野，2001）。この土地・森林資源に関する問題を政治学的な観点から直接的に扱ったものは森下の研究に限られるが、先述の通りサラワクにおける土地・資源の話題は、そのまま政治的文脈に結びつく。それは、州内の利権の問題であると同時に、州と連邦との間の自治権をめぐるせめぎ合いの主要な材料でもある。さらに、半島部における与党連合（BN）の存在感が低下する一方、サラワクの選挙結果は、連邦全体のパワーバランスを左右する可能性も出てきているため、政治学的な考察は、サラワク研究をマレーシア研究へ接合あるいは昇華させるために、最も重要な要素となるであろう。これらの点については、森下（2013）のほか、本特集所収の森下論文および鈴木論文を参照されたい。

民族間関係 先述の通り、民族論は数多く行われてきたが、そのなかでも民族境界や民族間関係に関する研究に一定の蓄積が見られる（たとえば、佐久間，2017，Kato，2016，市川哲，2010，石川，1997a，内堀 1994）。サラワクにおける研究としては、内陸の焼畑民や狩猟採集民が中心であったが、サラワク・マレーを扱った研究も少ないながら存在する。たとえば、石川（1997b）のサラワク・マレーに関する考察は、半島におけるマレー性（Malayness）に関する研究はもちろん、サバやインドネシアも含めた、より広いマレー世界におけるマレー性の議論と接合させることが可能であろう。また、佐久間（2017）や、Langub and Ishikawa（2016）、Kato（2016）は、それぞれの立場から「流域社会」という研究対象の地域的ユニットに注目し、そこでの交易関係や移動パターン、社会的ネットワーク形成などの調査を行っている。先述の金沢科研もバラム川上流域における焼畑民と狩猟採集民の関係性を中心的なテーマとしている（金沢ほか，2017）。

一方、半島でも内陸先住民をめぐる歴史的な交易や、河川流域を単位とする社会構成の重要性などが指摘されている（河合，2017；2016）。単に焼畑民や狩猟採集民の比較というだけでなく、流域における民族間関係やネットワーク形成という意味での比較研究や一般化も可能になる程度の情報が、半島とサラワクの双方で蓄積されつつあると言えるだろう。

ツーリズム サラワクにおいては、1990年代の木材産業の斜陽化のなかで、新たな外貨獲得手段としてエコツーリズムとエスニック・ツーリズムの抱き合わせ商品の開発が進められ、予想以上の成功をおさめてきた（吉岡・増田，2011，祖田，2005）。その際に重要な要素となったのは、国立公園や鳥獣保護区の設置とその利用である。こうした動きは、半島部でも見られる。たとえば、連邦環境省の国家エコツーリズム計画のもとで、国立公園を利用した外国人観光客を誘致する戦略（沼田ほか，2010）や、タマン・ヌガラ周辺に居住する民族の「原始性」イメージを創出する過程（Dove et al., 2011）などは、サラワク

のツーリズム推進⁹と類似する部分もある。こうした、自然環境と民族、伝統文化などを商品化するツーリズム戦略はサラワクが先行してきたと言える。その意味では、半島における国立公園を利用した観光イメージ操作はサラワク・モデルを部分的に採用し始めていると考えてよいのかもしれない。

新林産物 森林産物はマイナーな商品で広く注目されることは少なかったが、古くから世界市場とボルネオの内陸社会をつなぐ商品が数多く産出されてきた。先述の佐久間（2017）のように、内陸河川交易と民族間関係に焦点を当てた研究は、シンガポールを中心とする東南アジア域内交易の研究と接合可能性を持つ。同様の可能性は、ラタン流通の歴史的展開と現状を考察した Takeuchi et al. (forthcoming) にも当てはまる。また、個人レベルでサラワクと半島の双方を視野に入れて調査を行っている事例もある。たとえば、沈香の流通を扱っている金沢（2009）や、動物胃石に注目した奥野・市川（2014）らは、サラワクだけでなく、シンガポール、ペナン、クアラルンプールほかでも調査を行っている。こうしたマルチサイト民族誌（multi-sited ethnography）とも呼びうるアプローチは、サラワクと半島との経済的な結びつきを考察する契機になるだけでなく、マレーシアや東南アジアという範域を越える研究の広がりの可能性をも持つ。

プランテーション サラワクは、マレーシアにおける最後のアブラヤシ・フロンティアとされ、2000年代以降、急速なプランテーション開発が進められてきた一方、近年は小農アブラヤシ栽培も拡大している（Soda et al., 2015, 加藤・祖田, 2012）。小農栽培に関しては、インドネシアやタイ南部、フィリピン南部との比較検討が今後必要と思われるが、プランテーションに関しては、半島の巨大資本がサラワクでの操業を拡大している点が、従来とは異なる動きとして注目に値する。半島資本のプランテーション企業による土地・森林開発の過程と論理はどのようなものなのか。それは半島の経験をベースにした開発なのか、あるいは半島資本の開発戦略も「サラワク化」されているのか。これらのことは、半島におけるプランテーション開発の歴史や現状との比較検討が必要になるであろう。サラワクの森林と土地は、サラワクの独立およびマレーシア結成の後、州政府が独自の権限を持つ資源であり続けた。これがどのように変化するのか（しないのか）は、サラワクのオートノミーにもかかわる問題であり、FELDA 等を中心に蓄積されてきた半島の研究成果を意識して調査を進める必要があるだろう。

環境政策 環境の問題に関しては、2014年に33年間州主席大臣の座にいたモハマド・タ

⁹ サラワクは1990年代後半以降、斜陽化する木材産業・輸出に変わる外貨獲得手段として、外国人観光客の誘致を進めることになった（奥野, 2001）。その際、Culture、Adventure、Natureの頭文字をとって「CAN ツーリズム」と銘打ったキャンペーンを推進した。

イブが退陣し、アデナン・サテムに政権が移譲されてからは、以前のような強引な土地接収・開発は少なくなった（本特集所収の金沢論文を参照）。在任中のアデナンの急逝（2017 年 1 月）によってアバン・ジョハイリが新首席大臣になり、再保守化が懸念されてはいるが、かつてのような体制に逆行することはないだろうというのが、大方の見方である。このような状況のなかで、今後は、たとえば森林認証やアブラヤシ認証の取得が進展する可能性が指摘されている。国際的な認証制度に関してサラワクは、半島やサバ、あるいはインドネシア・カリマンタン各州に大きな後れを取っており、今後は周辺地域の取り組みをモデルにすることになると推測される。その意味で、政府を告発するような反開発主義の立場を超えて、政府・企業・NGO・地域住民らと連携した研究・実践の手法を展開させるにあたって、半島やサバでの先行事例に学ぶべきところは多いと思われる。

華人研究、華語文学研究 本特集では、これまで「サラワク研究」と接触の少なかった華語文学に関する報告も所収している。従来サラワクをメイン・フィールドとする研究者の間では、華語文学はあまり顧みられることはなかったが¹⁰、本特集では及川茜氏による論考を所収している。かならずしもサラワク・プロパーでない研究者によって、「馬華文学」の視点から、マレーシア研究のなかにおけるサラワク研究のあり方を模索するヒントが提示される可能性は高い。また、半島ではなく、台湾やその他地域に移住したサラワク出身作家の創作活動は、マレーシアの範疇に収まらないサラワク（あるいはボルネオ）へのまなざしを理解するための重要な研究対象にもなりうる。さらに言えば、そこに描かれている、熱帯雨林の開拓史や、華人と先住民との関係性、共産党の活動実態など、これまでのサラワク研究でも重要視されてきたテーマに、新たな視点をもたらす可能性も期待できるのではないだろうか。

一方、華人研究という点に関して言えば、サラワク独特の華人の企業活動や移動パターンがあり、半島マレーシアとの直接的なつながりというよりも、中国本土やオセアニア各地域との関係でサラワクを超える社会的ネットワークが研究対象になってきた（市川哲 2010; 2012）¹¹。このように、華人ネットワークという観点からサラワク研究を相対化する契機は存在する。

おわりに

以上のように、「サラワク研究」を半島における研究と結びつける要素はいくつか提示

¹⁰ サラワクの華語文学の数少ない研究例として、たとえば小木（1992）や舛谷（1992）が挙げられる。

¹¹ 1960 年代以降のボルネオ華人による越境的な共産主義活動も興味深い研究対象である（松村、2016）。

可能であり、そうした要素は20世紀末以降、増加傾向にあると言える。それは、政治的にも経済的にも社会的にも、半島との関係性（ペニンストラ・コネクション）が強くなっている状況のなかで、当然のことと言えるだろう。ただ現状では、サラワク研究が単純にマレーシア研究に「包摂」されるということは考えにくく、個々の事象ごとに半島との結びつきを視野に入れたり、比較検討を行ったりする段階を超えるのは容易ではないように思われる。

本特集所収のいくつかの論考を見ても、いわゆるマレーシア研究¹²とは異質な視点やテーマ性を持っており、これらをマレーシア研究というカテゴリーに含み込もうとすれば、従来のマレーシア研究のあり方自体を問い直す必要が生じるかもしれない。もし、マレーシア研究の枠組みそのものが再構築されとするならば、「サラワク研究から見たマレーシア研究」という視点を持つことも無意味ではないだろうが、既存のマレーシア研究に依拠する形でサラワク研究を再構成することは、多くのサラワク研究者にとって本意とするところではないだろう。

そもそも、マレーシア研究という枠組みがあるのかどうか、そのこと自体が明瞭ではないため、サラワク研究とマレーシア研究との接合というものが何を意味するのか、考察すること自体が難しい。マレーシアという連邦国家の「一部」であるサラワクで研究する以上、サラワク研究はすべてマレーシア研究であるという言い方は可能なのか、サラワク研究というものと同列でジョホール研究やクランタン研究というものが展開されてきたと言えるのか、こうした点も含めて、サラワク研究とマレーシア研究の関係性を再考すべきなのかもしれない。

先に見たように、サラワク研究者たちは21世紀に入ってから、濃淡さまざまではあるが相互に関与・連携しながら、独特の研究アリーナを形成してきた。ただ、サラワクの歴史的・民族的・自然的な特徴（特殊性）を「盾」にして、サラワク研究がある種の「タコツボ」的状況に安住してきたことも否定できない。こうした状況を脱してサラワク研究の方向性を再考しようとする、考察対象によっては、半島とのコネクションだけでなく、マレーシアという国家そのものを超える枠組みやネットワークを意識せざるを得ないこともある。たとえば、沈香やツバメの巣、ラタン、動物胃石などの森林産物は、シンガポールやクアラルンプール、ペナンだけでなく、香港や大陸中国、日本、西アジアまで視野に入れる必要が生じる（奥野・市川，2014，小林，2014，チュウ，2013，金沢，2009）。その意味では、マレーシアという枠組みには収まりにくい研究対象も少なくない。

また、半島をまったく経由しない形で、インドネシアやオーストラリア、パプアニューギニア、その他地域との直接的な関係性が強く見られる事象も多い。工場労働者やプランテーション労働者の「インドネシア化」などは、半島における経験の模倣ともいえるが、

¹² サラワクの立場からすれば「マレー半島研究」と言い換えることも可能であろう。

サラワクのインドネシア人労働者はカリマンタンから直接陸路で流入したり、サバ経由でサラワク入りしたりしており、こうした経路を利用したインドネシア人ネットワークの形成や、サラワクの在地社会への浸透は、半島におけるインドネシア人の在地化（永田 1994）とは異なる状況を示している（本特集の加藤論文を参照）。また、木材伐採企業の国外（州外）展開や、それと密接にかかわるサラワク華人・サラワク先住民の国際移動は、サラワクとオセアニア諸地域との直接的なつながりを強化してきた（市川哲，2004、祖田，2005）。

サラワク研究の相対化の必要性は、多くの研究者が認識していることではあるが、その方向性は、かならずしも国家の枠を意識するというだけでなく、その空間スケールは多様であり、かつ現象の広がりも多方向的である。その意味で、マレーシア研究という枠組みのなかでサラワク研究を考えることは、サラワク研究を相対化するための重要な選択肢の一つではあるものの、唯一の方法とは言えない。

本特集掲載論文の各著者には、無理に「マレーシア研究」を意識するのではなく、それぞれの分野・立場からサラワクを考察してもらうようお願いした。それは、サラワク研究の最前線を広く知ってもらうことが第一の目的であったからである。これらの論考がマレーシア研究としてどのような意味を持ちうるのかという点については、読者それぞれの評価に委ねたい。また、サラワク研究をマレーシア研究にすり合わせるだけでなく、サラワク研究に対して、半島ベースの研究者からどのようなアプローチがありうるのかを考えるためにも、本特集が一つの契機になることを期待したい。

〈参考文献〉

日本語文献

- 石川登（1997a）「境界の社会史—ボルネオ西部国境地帯とゴム・ブーム」『民族学研究』第 61 巻第 4 号。
- （1997b）「民族の語り方—サラワク・マレー人とは誰か」青木保編『民族の生成と論理』岩波書店。
- （2008）『境界の社会史—国家が所有を宣言するとき』京都大学学術出版会。
- 市川哲（2004）「マレーシア華人の国際的な活動領域にみるローカルなネットワーク—パプアニューギニアにおける活動を事例として」『華僑華人研究』第 1 巻。
- （2010）「「現地化」の多元性—マレーシア・サラワク州における華人のファミリー・ヒストリーを事例として」『白山人類学』第 13 巻。
- （2012）「移住経験が生み出すコミュニティ、移住経験が変容させるアソシエーション—オーストラリア都市部に居住するパプアニューギニア華人」平井京之介編『実

- 践としてのコミュニティ移動・国家・運動』京都大学出版会。
- 市川昌広（2008）「うつろいゆくサラワクの森の 100 年—多様な資源利用の単純化」秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森に何が起きているか—熱帯雨林とモンスーン林からの報告』人文書院。
- （2010）「マレーシア・サラワク州の森林開発と管理制度による先住民への影響」市川昌広・内藤大輔・生方史数編『熱帯アジアの人々と森林管理制度—現場からのガバナンス論』人文書院。
- 内堀基光（1994）「民族の消滅について—サラワク・ブキタンの状況をめぐって」黒田悦子編『民族の出会いのかたち』朝日新聞社。
- （1996）『森の食べ方』東京大学出版会。
- 小木裕文（1992）「サラワク華語文学の歴史発展」『立命館言語文化研究』第 4 巻第 1 号。
- 奥野克巳（2001）「森林伐採からエコツーリズムへ—マレーシア・サラワク州の森へのまなざし」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第 101 号。
- （2003）「ブルーノ・マンサーの死とプナン人の闘いの変貌」『JAMS News（日本マレーシア研究会会報）』第 26 号。
- 奥野克巳・市川哲（2014）「ベンジャール・ストーン現在の現在—ヤマアラシの胃石と先住民・ミドルマン・華人」『熱帯バイオマス社会』第 18 号。
- 加藤裕美・祖田亮次（2012）「マレーシア・サラワク州における小農アブラヤシ栽培の動向」『地理学論集』第 87 巻第 2 号。
- 金沢謙太郎（2001）「生物多様性消失のポリティカル・エコロジー—サラワク、バラム河流域のプナン集落における比較調査から」『エコソフィア』第 7 号。
- （2009）「熱帯雨林と文化—沈香はどこから来てどこへ行くのか」池谷和信編『地球環境史からの問い—ヒトと自然の共生とは何か』岩波書店。
- （2009）「熱帯雨林のモノカルチャー—サラワクの森に介入するアクターと政治化した環境」信田敏宏・真崎克彦編『開発の風景—南アジア・東南アジアの現場から』明石書店。
- （2015）「平和の森—先住民族プナンのイニシアティブ」宇沢弘文・関良基編『社会的共通資本としての森』東京大学出版会。
- 金沢謙太郎・分藤大翼・小泉都・佐久間香子（2017）「熱帯原生林の共生社会論—ボルネオの原生林を守る民族間コミュニケーション」『信州大学総合人間科学研究』第 11 巻。
- 河合文（2016）「オラン・アスリの川筋ナビゲーション」『The Daily NNA マレーシア版』第 05724 号。
- （2017）「マレーシア半島部における民族カテゴリーと民族間交流—クランタン州ルビル流域の「マレー」と「バテッ」を事例として」（日本文化人類学会第 51 回研究大会発表要旨）

- 小林篤史 (2014) 「サラワク官報・貿易統計の紹介—地域経済史の構築に向けて」『熱帯バイオマス社会』第 19 号。
- 佐久間香子 (2017) 「ボルネオ内陸部の交易拠点としてのロングハウス—19 世紀末のサラワクにおける河川交易からの考察」『東南アジア研究』第 54 巻第 2 号。
- 祖田亮次 (2005) 「マレーシア・サラワク州をめぐる国際労働移動」石川義孝編『アジア太平洋地域の人口移動』明石書店。
- (2008) 「東南アジアの農村—都市間移動再考のための視角—サラワク・イバンの事例から」『E-Journal GEO』第 3 巻第 1 号。
- (2009) 「マレーシア・サラワク州における環境改変と「環境問題」」『史林』第 92 巻第 1 号。
- 田村慶子 (1988) 「マレーシア連邦における国家統一—サバ、サラワクを中心として」『アジア研究』第 35 巻第 1 号。
- チュウ, ダニエル (2013) 「ツバメの巣の商品連鎖—サラワクと東アジアのあいだ」『熱帯バイオマス社会』第 12 号。
- 津上誠 (2013) 「カヤン系諸民族の移動性と柔軟性—リロケーションの観察から」『熱帯バイオマス社会』第 14 号。
- 中島健二 (1993) 「東マレーシア (サバ, サラワク) の木材資源と石油資源の政治的経済的連関」『国際経済』第 44 号。
- (1992) 「サバ, サラワクの木材産業の持続的発展の見通しについて」『経済論叢』第 150 巻第 5・6 号。
- 永田淳嗣 (1994) 「ジョホール・マラッカ海峡沿岸におけるある在地権力者の農園経営」『東南アジア研究』第 32 巻第 3 号。
- 沼田真也・野田江里・木下万里・生亀正照・川原晋 (2010) 「マレーシアのエコツーリズム—マレーシア森林研究所における取り組みを事例に」『観光科学研究』第 3 号。
- 藤田渡 (2008) 「悪評をこえて—サラワク社会と「持続的森林管理」のゆくえ」『東南アジア研究』第 46 巻第 2 号。
- 舛谷鋭 (1992) 「ラジャン河畔の詩人—呉岸点描」今富正巳先生古希記念論文集刊行会編集『馬華文学とその周辺—シンガポール・マレーシア華文文学』今富正巳先生古希記念論文集刊行会。
- 松村智雄 (2016) 「9・30 事件とサラワク独立政体の挫折」『アジア太平洋討究』第 26 号。
- 森下明子 (2013) 「サラワクの森林開発をめぐる利権構造」市川昌広・祖田亮次・内藤大輔編『ボルネオの〈里〉の環境学』昭和堂。
- 山本博之 (2016) 「サラワク州議会選にみる地元政党の圧倒的存在感」『The Daily NNA マレーシア版』第 05763 号。
- 楊曉文 (2014) 「マレーシア華文文学の特質に関する一考察」『言語文化論集』第 35 巻第 2

号。

吉岡玲・増田美砂（2011）「民族観光の発展と人々の反応—サラワクのビダユ集落を事例として」『筑波大学農林技術センター演習林報告』第 27 号。

英語文献

- Aeria, A. (1997) “The Politics of Development and the 1996 Sarawak State Elections,” *Kajian Malaysia* Vol. 15.
- Chin, J. U. (1996) *Chinese Politics in Sarawak: a Study of the Sarawak United People’ s Party (SUPP)*, Oxford University Press.
- Cleary, M. and Lian, F. J. (1991) “On the Geography of Borneo,” *Progress in Human Geography* Vol. 15. No. 2.
- Dove, M. R., Sajise, P. E. and Doolittle, A. A. (2011) “Changing Ways of Thinking about the Relations between Society and Environment,” In Dove, M. R., Sajise, P. E. and Doolittle, A. A. eds. *Beyond the Sacred Forest: Complicating Conservation in Southeast Asia*, Duke University Press.
- Hong, E. (1987) *Natives of Sarawak: Survival in Borneo’ s Vanishing Forest*, Institut Masyarakat. (ホン, E. (北井一・原後雄太訳) (1989) 『サラワクの先住民—消えゆく森に生きる』法政大学出版局。)
- Ishikawa, N. (2010) *Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland*, Ohio University Press.
- Kato, Y. (2016) “Resilience and Flexibility: History of Hunter-gatherers’ Relationships with their Neighbors in Borneo,” *Senri Ethnological Studies* No. 94.
- Kendawang, J. J., Tanaka, S., Soda, R., Seman, L., Wasli, M. H. and Sakurai, K. (2005) “Difference of Rice Farming Practices of the Iban in a National Boundary Area in Borneo and Its Socio-economic Background. *Tropics* Vol. 14. No. 4.
- Langub, J. and Ishikawa, N. (2016) “Community, River and Basin: Watersheds in Northern Sarawak as a Social Linkage,” In King, V. T., Zawawi Ibrahim and Noor Hasharina Hassan eds. *Borneo Studies in History, Society and Culture*, Springer.
- Lee, H. S. (1997) *Restoration of Deforested and Degraded Sites in Sarawak Malaysia*, Ph. D. Thesis, University of Ehime.
- Leigh, M. (1974) *The Rising Moon: Political Change in Sarawak*, Sydney University Press.
- Sakai, S., Choy, Y. K., Kishimoto-Yamada, K., Takano, K. T., Ichikawa, M., Samejima, H., Kato, Y., Soda, R., Ushio, M., Saizen, I., Nakashizuka, T. and Itioka, T. (2016) “Social and Ecological Factors Associated with the Use of Non-timber

- Forest Products by People in Rural Borneo,” *Biological Conservation* No. 204 (Part B) . DOI: 10.1016/j.biocon.2016.10.022.
- Soda, R. (2007) *People on the Move: Rural-urban Interactions in Sarawak*, Kyoto University Press and Trans Pacific Press.
- Soda, R., Kato, Y. and Hon, J. (2015) “The Diversity of Small-scale Oil Palm Cultivation in Sarawak, Malaysia,” *The Geographical Journal* Vol. 182. No. 4. DOI: 10.1111/geoj.12152.
- Soda, R. and Seman, L. (2011) “Life Histories of Migrants: Bejalai Experiences of the Iban in Sabah, Malaysia,” *Geographical Studies* Vol. 86.
- Sutlive, V. and Sutlive, J. eds. (2001) *The Encyclopedia of Iban Studies (volume I-IV)* , The Tun Jugah Foundation.
- Takeuchi, Y., Kobayashi, A, and Diway, B. (forthcoming) “Transitions in the Local Utility and Global Trade of Rattans in Sarawak: Past and Present,” In Ishikawa, N. and Soda, R. eds *Human-nature Interactions on the Plantation Frontier: An Ethnography of Anthropogenic Tropical Forests*, Springer.
- Takeuchi Y., Soda R., Diway B., Kuda T., Nakagawa M., Nagamasu H., and Nakashizuka, T. (in press) Biodiversity Conservation Values of Fragmented Communally Reserved Forests, Managed by Indigenous People, in a Human-modified Landscape in Borneo. *PLoS ONE*.
- Uchibori, M. (2017) “Introduction for the Special Issue of NGINGIT,” *Ngingit* Vol. 9.
- Yamakura, T., Kanaki, M., Ito, A., Ohkubo, T., Ogino, K., Chai, E. O. K., Lee, H. S. and Ashton, P. S. (1995) “Topography of a Large-scale Research Plot Established within a Tropical Rain Forest at Lambir, Sarawak,” *Tropics* Vol. 5. No. 1/2.
- Wadley, R. L. and Eilenberg, M. (2005) “Autonomy, Identity, and ‘Illegal’ Logging in the borderland of West Kalimantan, Indonesia,” *The Asia Pacific Journal of Anthropology* Vol. 6. No. 1.

(そだ・りょうじ 大阪市立大学)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワク人類学の系譜と今日的課題

佐久間香子

はじめに

本稿の目的は、一点目に、これまで膨大な数が編まれてきたサラワク（ボルネオ島）における人類学／民族誌研究を、人類学やグローバルな社会情勢の動向に照らして相対化すること、二点目に、そうすることで、サラワクの人類学研究の特殊性と直面する課題を確認することである¹。具体的には、イギリスが導入した客観的科学としての人類学に基づいた民族分類が導入されて以来、それが踏襲されてきた研究の状況と、こうした状況に対するある人類学者の挑戦の意義を確認する。その上で後半では、民族分類と実際の人々の生活と大きくかい離している状況と、局所的に強化される場面を実証的データに基づいて考察する。こうした作業を通して、サラワク人類学が直面する課題を整理し、展望として提示したい。なお、サラワクを舞台に編まれてきた人類学／民族誌研究の一群を、便宜上、本稿では「サラワク人類学」と称し、以下、本稿を通してこのタームを使用する。

I イギリス職業人類学者が築いた土台

1. サラワク王国時代の地方行政官

サラワク州は、1841年、クチン（現在の州都）一帯がブルネイ・スルタンからイギリス人のジェームズ・ブルック（James Brooke）に割譲され、以来、1941年までの100年間、イギリス人のブルック一家が統治する「サラワク王国」として、徐々にその領土を拡大してきた。サラワク王国の起点であるクチン一帯が第1省（the first division）と呼ばれ、続く新領土は、獲得の順に従って序数が用いられていた。最終的に、サラワク王国は5つの省を構成するにいたった²。

¹ その上であらかじめ断っておくと、本稿は膨大な既往研究の仔細な分析を意図していない。最近公刊されたボルネオにおける人類学を中心とするこれまでの既往研究の網羅的レビューとして King (2013)、ボルネオの人類学研究の再検討を試みる論集に King (ed.) (2016) がある。

² 現在では、後者の地名に由来する行政区名称が、学術研究の分野だけではなく、在来民社会や州の地方行政においても一般的である。サラワク王国の領地拡大の過程については Ooi (1995)、Pringle (1970)、Walker (2002) に詳しい。

筆者がこれまで調査してきたバラム河流域は、1882年にブルネイ・スルタンの支配下からサラワク王国の第4省 (the forth division; 現在のビントゥル省とミリ省を含む範囲) として割譲された。「サラワク・マレー方言を学習することなしに管轄区に赴任が許されなかった」(石川, 2008:127) と言われるサラワク王国の地方行政官の中でも、同省の2代目地方行政官に就任したチャールズ・ホーズ (Charls Hose) の仕事ぶりは、彼の民族誌家としての高い能力なしには成しえなかったといっても過言ではない。

19世紀後半のバラム河流域は戦乱期のただ中にあり、首狩りをともなう部族間闘争が頻発していた。ブルック政府は、サラワク王国建国以来、在地民による首狩り行為を禁じる政策をとってきたが、戦乱状態において彼らから首狩り行為と武器を取り上げることは決して容易な仕事ではなかった。この混沌とした第4省の地方行政官としてチャールズ・ホーズが任命されたとき (1888年8月1日付)、彼はまだ24歳の若者であった。1904年7月1日付で第3省に赴任するまでの約17年の間に彼は、幾度となく部族間の戦闘の調停と儀礼を執り行ってきた³。いくら禁じても武器を手放さず、首狩りや戦闘行為を繰り返す人々を召喚して大規模儀礼を開いて和平交渉を取り付けることができた背景には、第4省の行政官在任中に彼がバラム河流域の村々を訪ね歩いて細やかな聞き取りを重ねること得た、在地民との人間関係と在地民社会の深い知識がある。彼の好奇心と洞察の結晶は、重要かつ膨大な民族誌データを収録した古典として、現在でも研究者らに参照され続けている (e. g. Hose and McDougal, 1912, Hose, 1926, 1927)。

ホーズほど強く民族誌的、あるいは博物学的好奇心を持って在地民社会と向き合った行政官は、実際には特異な例ではあるが、それでも、サラワク王国の統治は、少なくとも現地語を理解し話せる地方行政官らの活躍によって支えられているところが、大きかったのである。

2. 戦後復興のサラワク人類学

サラワク王国の統治に不可欠だった在地民社会に対する民族誌的知識を最前線で収集し記録してきたのは、各省に赴任した地方行政官だった。他方、太平洋戦争後にその役目を担ったのが、イギリス政府に雇われた職業人類学者らであった。

100年間続いたサラワク王国は、太平洋戦争が勃発し、1941年には3代目白人王ヴァイナー・ブルック (Vyner Brooke) がオーストラリアへ亡命して日本軍政期 (1941~1945年) に入った。その後、イギリス直轄植民地支配期 (British Crown Colny; 1946~1963

³ 中でも最も大規模な調停は、1899年にチャールズ・ブルックからの要請とクニャ人チーフ、タマ・ブラン (Tama Buln) とタマ・クリエン (Tama Kulieng) の仲介で実現した400~500人もので、カヤン人やクニャ人の戦士を召喚して執り行われた (Hose and McDougal, 1912:1:300, Hose, 1994:129-30)。

年)を経て独立し、1963年にサラワク、サバ、そしてシンガポール、マラヤ連邦を含めたマレーシアとなった⁴。

太平洋戦争の終結後、サラワクが初めて英国の直接的な支配下におかれた時期、戦争で疲弊したサラワクの復興を名目上の目的として、英国政府は内情把握のために人類学者に協力を要請した。これに名乗りを上げたのが、ビルマでの調査を終えたエドモンド・リーチ (Edmund Leach) であった。リーチが企図したのは、サラワクの在来民社会における社会文化システムの理解のための調査であった。これまで、民族誌的な記述といえば宣教師や植民地行政官、探検家たちの手記にしかみられなかったサラワクにおいて、発展的な成果をあげるためにリーチが採った方策は、調査対象として人口規模の大きい集団かつ、もっとも「伝統的」な社会を保持している集団に焦点をあてることであった (Leach, 1950: 27)。

戦後復興の名のもとに展開されたリーチのプロジェクトこそが現在のサラワク人類学の基礎となったことは、次の成果を見れば明らかであろう。デレック・フリーマン (Derek Freeman) の著名なイバン人の民族誌 (Freeman, 1970 (1955)) をはじめ、南シナ海沿岸部のイスラム教に改宗した在来民ムラナウ人 (Melanau) 社会を扱ったステファン・モリス (Stephan Morris) の民族誌 (Morris, 1971 (1953))、ウィリアム・ゲデス (William Geddes) による焼畑民ビダユ人 (Bidayuh) の研究 (Geddes, 1985 (1957))、そしてサラワクの華人研究の先駆けである田汝康 (Tien Ju-K' ang) (Tien, 1980 (1953)) など、古典的民族誌が次々と公刊されていった。かくして、イギリス政府主導の社会人類学研究が土台となって発展したサラワク人類学は、使用言語圏や民族分布を面的に示した地図が端的に示すような、博物学 (分類学) 的に民族集団を塗り分けて識別する、平板な在来民社会理解が採用、強化されてきた。

このような、近代人類学の父であるラドクリフ＝ブラウン (Radcliffe-Brown) が追求めたような「社会の自然科学」は、いかなる社会においても文化の本質が存在し、すべての社会はその本質に基づいて博物学 (分類学) 的に分類できるはずという前提のもとに、フィールドワークで観察される様々な社会・文化事象相互の機能的関連の解明を最重要課題としてきた (杉島, 2001)。杉島が指摘するように、近代人類学がおこなってきたことは、社会・文化事象を「体系内にしめる位置的価値」(positional, systemic value) (Thomas, 1989: 120) にそくして把握する分析であり、杉島は、こうした人類学的説明や解釈を「体系内分析」と総称している (杉島, 1996: 81)。こうした社会・文化理解がイギリス人類学の影響のもとサラワク人類学に移植され、その後 1965 年に新生国民国家マレーシアとして歩み始めてから現在に至るまで、確実に継承されている。

他方で、こうした人類学研究の流れはサラワクに特異の現象というより、世界各地に広

⁴ 1963 年のマレーシアにはシンガポールも含まれていたが、1965 年には脱退した。

がった人類学のフィールドで見いだされるし、事実、たくさんの民族誌が生み出されることとなった。だが同時に、サイードによるオリエンタリズム批判（サイード 1993 (Said, 1978)）が人類学に激震をあたえたことは、現在でも鮮烈な記憶として思い起こされることも少なくない。この余波で、1980年代～90年代には人類学による人類学批判が巻き起こり、民族誌研究の非歴史性、通文化的対置、民族誌的権威など様々な問題設定に基づく人類学批判が展開された。それらは、人類学がそれこそ生死をかけて真剣に乗り越えようとしてきた問題であったのである。

そうであるからこそ人類学は、単純化された対象社会の体系内分析から距離をおき、違った分析方法を模索して自ら方向転換の舵をとり、新しい人類学を切り開こうと努力してきた。しかし、サラワク人類学は、「民族」という概念に代表される体系内分析を基本的枠組として使い続けることで独自に発展してきた。例えば、フリーマンによって先鞭をつけられた「イバン社会」の研究にはクリフォード・セイザー (Clifford Sather) や内堀基光のような人類学者を輩出するだけではなく、ベネディクト・サンディン (Benedict Sandi) やピーター・ケディット (Peter Kedi) などのような、イバン社会を研究するイバン人の人類学者を生み出した。ボルネオにおける人類学研究のひとつのジャンルと化したイバン研究は、これまでに膨大な数の研究が発表されており、それらを整理・列挙した全4巻からなる『イバン研究百科事典』(Sutlive, J. and Sutlive, V., 2001) が公刊される活況をみせている。

II 「民族」の呪縛と解体—ある人類学者の挑戦

1. 「民族」への疑問

上記のようなサラワク人類学の状況に対して、「民族」の解体の必要性を訴えてきた人類学者がいる。葬送儀礼の人類学的研究をおこなってきたピーター・メトカーフ (Peter Metcalf) である。彼の研究者としてのキャリアを決定づけたのが、1982年に出版された単著 (Metcalf 1982) である。これは、彼の博士論文をもとに公刊された彼の処女作であり、バラム河の支流ティンジャール川集流域に位置する大きなロングハウス、ロング・テル村における二次葬 (*nuLang*) ⁵をめぐり儀礼研究である。本書においてメトカーフは葬

⁵ 「二次葬」(*nuLang*) とは、社会的地位の高い人物が亡くなった時におこなわれる葬送儀礼で、遺体を一度土に埋葬する一次埋の後、数カ月から数年経過してから再び土を掘り返して肉や臓器が朽ちて剥がれ落ち、骨だけの状態になったものを取り出す。掘り出した遺骨を川などできれいに清めてから、中国製の壺などの棺桶に遺骨を納めて、それを墓標の上に設置する。遺骨が納められた墓標は、いずれも荘厳な彫刻が施されている。このことからわかるように、二次葬には大変な費用がかかるために、立て続けに二次葬の対象となる人物が亡くなった場合には、一つの墓標に二人分の遺骨を納めて費用をおさえることもされていた。他方で、墓標は河

送儀礼の実証的データをとおして、これまでクニヤ人（Kenyah）の下位集団として扱われてきた「ブラワン人」（Berawan）を、クニヤ人と決定的に区別するものとして二次葬を強調している。つまり、「ブラワン人」を「ブラワン人」たらしめる装置として葬送儀礼を位置付けたのであり、この意味で、この本はサラワク人類学のメインストリームに位置していたのである。

同書以降、サラワク在来民社会の死の儀礼の専門家として広く知られるようになったメトカーフは、2002年に発表した研究（Metcalf, 2002）で転機を迎える⁶。彼の議論をまとめると以下のとおりである。

本書は、人類学における「真実」と「嘘」について、あるいは、観察と対象化という人類学の営為について考察したエッセイである。話の起点は、彼が1970年代におこなった調査から約30年の時を経て、わだかまりとして残っていたビロ・カシ（Bilo Kasi）という女性がメトカーフに何度も語って聞かせた、死と祖先についての神聖な叙事詩である。

インフォーマントとの打ち解けた対話で人類学者は、彼らが真実を話していると錯覚し、それを無邪気に信じて書かれ、対象地域の人びとを表象する民族誌はまさに寓話的性格を有している。だが、そこには多分に、はぐらかし、誇張、妄想、そして部分的真実といった「嘘」が含まれており、それは一体どこまでが「真実」なのか、あるいは、人類学者がいかにかそれを「真実」として書いてきたのか、彼は自問する。調査し始めた頃の彼を悩ませたのは名称である。調査地の人びと（They）が人類学者たち（We）に語ってきた個々人の呼び名は、子孫たちでさえ特定できないほど何度も変わりうるし、民族名だと思われた名称には実は、彼らの内部で使用されてきたもうひとつの呼び名が対外的にマレー語表現に変化したものであった。本書でメトカーフが自戒を込めて告白した民族名と彼らの呼び名の不一致は、次の著書で、「エスニシティの考古学」（An Archaeology of Ethnicity）へと昇華する。

メトカーフが次に著した *The Life of Longhouse: An Archaeology of Ethnicity* (2010) で展開される思索の基礎は、前述のとおり、土台は2002年の短編に凝縮されているとよい。*The Life of Longhouse* の出発点は「中央ボルネオの人びとはなぜ（今でも）にロングハウスに住んでいるのか」というシンプルだが、これまでどの民族誌も正面から考察しようとしてこなかった問いである。ロングハウス・コミュニティ⁷をリーダーシップ、

川を航行するボートや徒歩で森を歩く者に見えるように、樹冠よりも少し高く作ることで、これだけの経済力と政治力を持つ人物を輩出した村であることを周囲に誇示する役割も持っている。

⁶ この前に彼の2つ目の単著作が1989年に発表されている。彼はここで、ロングハウス共同体に幸福を引き寄せるために精霊に唱える祈禱文を詳細に記述してテキスト分析をおこなうと同時に、彼の調査地ロング・テル村の言語（ブラワン語）をIPA表記にしたグロッサリーを提示した。この書物は、言語学からも一定の評価を獲得している。

⁷ 同書においてメトカーフが「コミュニティ」というタームを使用するとき、その語が多様な解釈を可能にする曖昧性を含み持つことを念頭に、「ロングハウス・コミュニティ」と記する場合にしか使用していない。

交易、儀礼に焦点をあてて民族誌的・歴史的データの双方からより広い文脈の中で検討することで、上記の問いに答えるのが同書の目的である。

ロングハウス・コミュニティは、即座にある特定の「民族集団」(ethnic population)に回収することはできるものではない。人びとはいたるところに拡散し、ある集団の中に異なるエスニシティが往々にして混ざり込んでいることを、彼は強調している (Metcalf, 2010: 2)。その一方で彼は、いたずらに「民族」の虚構性を嘆くことを避けて、ロングハウスを「民族」の生成と消滅の場と視点を転換することを提唱し、サラワク人類学を新たなロングハウス社会の理解へと導こうとする。

メトカーフの研究においてもっとも評価できる点は、民族ラベルの脱構築だけにとどまらず、人類学者がこれまで疑うことすらしなかった村落の名称や個人名にまで踏み込んで、解体したことである。別な見方をすれば、そこまで解体しないとオーストロネシア語族の諸特徴と整合性と比較の材料がでてこないほどに、理解の枠組みとしての「民族」が厚い地表を形成しており、もはや村の古老の記憶の片隅に頼ることすら難しい状況に、今日の人類学は直面しているのである。

メトカーフは、あらかじめ構造化され、その正しい表象はひとつに収束するという想定(實在論)を放棄して、個人の名前にまで言及する脱構築(解体)の結果、ロングハウスそれ自体が「民族」ラベルを生み出すのであり、またコミュニティを去って別のコミュニティに入った時、その人の民族名称も同時に新しくなる動態を描き出したのである (Metcalf, 2010: 312)。

2. 「民族の考古学」の問題

これまでサラワクを舞台に編まれてきた多くの民族誌が、ひとつのロングハウス・コミュニティをひとつの民族集団と同義として、その内部の詳細を描くことに関心を払ってきた。それに対して、明確に異議を唱え、徹底的にロングハウス・コミュニティを掘り下げた同書の学術的貢献は評価されるべきだろう。

しかし、そうであるからこそ、同書が孕んでいるいくつかの自己矛盾が返って際立ってしまっていることも事実である。ここでは本稿の趣旨に則した点についてのみ考察したい。

個人、場所、集団の複雑な名乗りに率直に向き合うことで「民族」の解体に乗り出したメトカーフは、同書の結として、「民族」という分析単位は放棄する必要はなく、あくまでもその重要性を下げることを主張する。しかしながら、拙稿(佐久間, 2017)で論じたように、内陸部の強大化したロングハウス・コミュニティは、決して容易に「民族」に還元されえない。そこは、他のロングハウス同様、近隣ロングハウス・コミュニティとの生業や儀礼などで使用する森林空間の重複や、他村出身者との通婚によって、異なる出自や言語が混在することが常態化してきた小宇宙である。この状況は彼が詳述してきたティ

ンジャール川の巨大ロングハウス・コミュニティとも共通している。だが同書では、現在のロングハウス・コミュニティを内包するサラワク在地民社会において、「民族」を分析単位とすることの積極的な意味づけが十分になされているとは言い難い。

先に述べたとおり、同書は歴史資料と民族誌データの双方からロングハウス・コミュニティを考察している。ここでいう歴史資料とは、ブルック王が統治したサラワク王国で発行された全てのサラワク官報（Sarawak Gazette；1870年発行開始）、および植民地行政官などによる探検記、日記、業務記録、イギリス王室との往復書簡を中心とするブルック以降の記録である。民族誌的データは、1982年のデビュー作と同じく、彼が1971年12月から1974年1月の間に行ったフィールドワークに基づく実証データを使用している。ここでポイントとなるのは、メトカーフ自身が書いているように、彼が調査をおこなった1970年代のサラワク在来民社会には、「ロングハウスの住人がそれ全体を1つの文化を共有する集合体として捉える認識はなかった、あるいはほとんど重要ではなかった」（Metcalf, 2010:8）のである。

だが、Ⅲ章で述べるように、アイデンティティをめぐるこうした状況は1980年代にはじまったプナン人（Penan）を中心とした先住民慣習地における熱帯雨林の伐採に反対する道路封鎖等の抗議活動を機に一転し、先住民運動のグローバル・ネットワークと連携した「民族」の政治学が内陸部住人の間でも色濃く反映されるようになる。つまり、同書で使用するデータからも明らかなように、「民族」の括りが机上の論理を超えて、実体として人びとの生活の中に立ち現れるようになった後の社会について、補足的に言及されるものの、最後まで深く考察されることはない。

これは次のような問題につながる。「民族」ラベルが生活の上で意味を持たなかった時代の調査に基づいたデータを使用して、それを脱構築することは、民族誌において「民族」ラベルに従った全体表象を採用してきたことへの自戒として評価できるだろう。しかし、メトカーフが紙幅を割いて説明した歴史的事象が、いかにその後の世界を規定しているか、時間をまたいだ諸事象の因果関係の説明にまで考察が及んでいないがために、現在と乖離してしまっているのである。換言すれば、メトカーフによって「根源」まで掘り起された在来民社会はしかし、近年、大きな変化を経験した現在のバラム河流域の人びとの「生」の中に、いかに残存し、それがどのような局面で表れ、いかに人びとの観念や価値観、倫理観に基づく行為を規定しているか、これらのことについては何も答えてはくれないのである。

そこで以下では、バラム河流域の人々の生活の中に、民族意識が強化されて意味を持つ局面として、1980年代にこの地域を震源としてグローバルに展開した、サラワクの先住民／環境保護運動（以下、「運動」）と人類学（者）の関わりから考察していく。その際、具体的な例として、筆者の調査地の事例をとりあげる。

Ⅲ 「先住民」プナン人をめぐる問題

1. 「運動」の中のプナン人研究

サラワクないしボルネオは、アフリカや南米と並んで狩猟採集民研究が盛んにおこなわれてきた地域である。1970～80年代以降の人類学の危機以降、無時間的に「永遠の未開人」像を再生産し続けてきたことへの人類学批判は、当然、狩猟採集民研究にも向けられた。だが、ポストコロニアル転換以降のサラワク人類学は、80年代以降に勃興した先住民／環境保護運動と連動することで、戦略的本質主義的な「民族」描写へと展開していく一方で (e.g. Hong, 1987, Chen, 1990, Kig, 1993, Langub, 1996)、民族誌研究の非歴史性が自覚的に検討されてはこなかった⁸。以下では、サラワクにおける一連の運動の展開と其中で果たしてきた人類学(者)の役割を、狩猟採集民であるプナン人研究を中心に概観する。それは、以下にみるように、森林という生態環境に大きく依存して生きてきたプナン人が、サラワクからグローバルに展開した運動の象徴的存在となっていくからである。

サラワクのプナン人社会を中心に研究をおこなってきたアメリカの人類学者ピーター・ブロシアス (Peter Brosius) は、商業伐採に対する「東プナン」(Easter Penan) と「西プナン」(Western Penan) の対照的な反応に注目し、「近代化」が熱帯雨林に生活する小規模社会に持ち込んだ課題を明瞭に整理している (Brosius, 1997)。ブロシアスがこの論文で指摘しているとおり、一連の「運動」の興隆には、それを援護し国際環境 NGO や海外の研究者、幅広いネットワークを持つ海外メディアが連携した組織的展開力に負うところが非常に大きかった。とりわけ人類学者の「運動」へのコミットメントは大きく、「運動」に連動して1980年代後半には、国家やドミナント社会に対する「先住民」としてのプナン人 (あるいは狩猟採集民) 研究の萌芽期を迎えた (e.g. Hong, 1987, Lau, 1987)。

90年代以降の「運動」は、これまでになかった在地民社会出身の活動家の登場と国際社会との連携強化という新たな局面を迎えた。この頃には、国家あるいはよりグローバルな世界との関係において、プナン人などの遊動狩猟採集民の(再)定住化や農耕民化の過程で、彼らの社会における変化を、フィールドワークに基づいて論じた研究が主流となっていた。同時に指摘できる傾向として、とりわけ狩猟採集民研究において、定住後のプナン人や他の遊動民の弱者性を過度に強調する傾向が顕著な点がある (e.g. Chen, 1990, Manser, 1996, Langub, 1996, 金沢, 2001, 2005, 2012, 奥野, 2003, 2006)。

長年遊動プナン人たちと生活を共にしたスイス人運動家ブルーノ・マンサー (Bruno Manser) が発信したプナン人の声は、この過程でボルネオの狩猟採集民を代表する「先

⁸ プナン人が当時経験し、また現在も直面する諸問題については本特集の金沢の論考を参照されたい。

住民」として、研究対象として以上に運動のアイコンとして広く取り上げられ、欧米や日本のメディアにおいてサラワクで起きていることがセンセーショナルに伝えられた。人類学者が住民側の立場から積極的に関与・支援した例は、水力発電ダムで村と慣習地全てが沈むことを余儀なくされたカヤン人を守るために立ち上がったジェローム・ルソー (Jérôme Rousseau) の活動がもっとも熱心な部類に入るだろう。巨大なバクン水力発電ダム建設によって調査地がダム湖の底に沈むことを知ったルソーは、ダム建設およびそれに伴う「先住民」の再定住地 (resettlement) に対して、地元 NGO⁹ と連携して抗議活動を展開した。彼は、大変人類学者らしく、カヤン人やプナン人をはじめバクン・ダムの開発によってダム湖に沈むなどの理由で再定住を強いられた全ての民族集団が、いかにこの土地の生態環境と調和して生活してきたか、そして、そのような環境を彼らから奪うこと (強制的再定住) が、彼らにどんな受苦を強いることになるのかという点に重点をおいて、多くの学術論文を集結させた報告書を作成し、それをサラワク州政府に提出した (Rousseau, 1994, 1996, Rousseau and International Rivers Network, 1994)。

環境保護活動家のマンサーや人類学者ルソーなど、海外からの活動家たちは戦略的本質主義的論法を採っている点で共通している。長期にわたるフィールド調査をおこなう人類学者たちは、その過程でフィールドへ様々な葛藤を経験して特別な想いを投下することになることを鑑みると、彼らの行動は、フィールドワーカーとしての良心や倫理観に突き動かされたものだろうことは想像に難くない。事実、「運動」はプナン人たちの声を発信する経路を提供し、黙殺することができなくなった州政府は彼らへの行政サービスと補償の拡充に向けて重い腰を上げざるをえなくなった。さらには、原告「先住民」側に先住民慣習権 (Native Customary Rights; NCR) が認められる司法判断が続くなど¹⁰、海外からの圧力による功績は評価されてしかるべきことであろう¹¹。

⁹ 特に SNS での発信など精力的に活動している NGO には Sahabat Alam Malaysia (SAM) や International Rivers Network (IRM) などがある。

¹⁰ 契機となったのは、2001 年にボルネオ・パルプ・プランテーション社 (Borneo Pulp Plantation Co.) が伐開しようとしていた 672ha の土地に対して、イバン人ロングハウス、ルマ・ノル村 (Rumah Nor) が集団的慣習権を求めて起こし、住民らが勝訴した裁判である。1958 土地法に基づいて「先住民」に NCR を認めた画期的な司法判断であり、以降、NCR を認める判決が続いたことが示すように、NCR 獲得の途を切り開いた画期的判例として知られている。

¹¹ 実際、一連の「運動」が国際社会に与えた影響力は大きかった。プロシアスによると、ニューズウィーク (Newsweek)、タイム (Time)、ザ・ニューヨーカー (The New Yorker)、ザ・ウォールストリート・ジャーナル (The Wall Street Journal)、ローリングストーン (Rolling Stone) などの雑誌媒体、CNN ニュース、ナショナル・ジオグラフィックのドキュメンタリーチャンネル (National Geographic Explore) などが、伐採道路を封鎖して開発と闘う「先住民」として、プナン人たちを大きくとりあげた。プナン人の窮状への理解と支援を訴えた著名人は、アル・ゴア元アメリカ副大統領、イギリスのチャールズ皇太子の名前が挙げられる。さらに、イギリス、ドイツ、スイス、スウェーデン、デンマーク、オランダ、ベルギー、オーストラリアなど環境問題に関心の高いヨーロッパ諸国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、日本の NGO がプナン人らに手を差し伸べようと動き出した (Brosius, 1997: 48)。

こうした人類学者の「運動」への積極的なコミットメントの一方で、90年代後半以降には運動から一步引いた視点からの研究が散見されるようになってきた。例えば、反開発の中でロマンティシズムに脚色された遊動民像に距離を置き、運動期のプナン人社会とドミナント社会の関係を冷静に分析した研究 (Brosius, 1997)、定住化した遊動民を単なる弱者としてではない姿を提示した実証的研究 (Huntnyk, 1999, Bendig, 2006) が挙げられる。さらに2000年代に入ると、運動に親和的な立場からも、プナン人でも行政サービスを楽しんだり国際的発信力を獲得できたりしたのはほんの一握りで、大多数のプナン人の生活基盤は脅かされたままであることが指摘されるようになってきた (Lungub, 2002, 金沢, 2012)。

しかしながら、その一方で、州政府や巨大資本を有する伐採企業との裁判闘争からは距離を置いた (あるいは、置かざるを得なかった)、各種メディアで注目を集めることもなかった大多数の在来民の生活に「運動」がどのような影響を与えたのか (与えなかったのか) について、十分に検証されてきたわけではない。現在、水力発電ダムの建設サイトやアブラヤシ・プランテーションの開発をめぐって、局所的にこれまでの運動の方法を継承する抗議運動が起こっているものの、国際社会からサラワク在地民社会へ関心は80~90年代の「運動」のようには高くはない。変動の激しい外部の関心とは関係なしに、現実として今もサラワクの森には、プナン人も非プナン人も入り交って生活している。こうした現状において、非プナン人が「先住民」としてスポットライトを浴びてきたプナン人と対峙した時、その強烈なコントラストが浮き上がる。サラワクの森の民の間で「民族」分類が意味を持って立ち現れるのは、こういうときなのである。

そこで以下では、プナン人と隣り合わせで生きる人々の状況を調査に基づいて具体的に記述することで、「運動」がサラワクの森に暮らす人々の生活に残したつめ跡を検証し、その上で、サラワク人類学の展望を議論することにしたい。

2. 「運動」のつめ跡

筆者が調査してきたのは、商業伐採に反対するプナン人が林道を封鎖する抵抗運動が最初におこなわれた震源地に近く、同時に、最も活発におこなわれた流域に位置するロング・テラワン村 (以下、LT村) というロングハウス・コミュニティと、LT村から派生したムル集落である。この集落は、グヌン・ムル国立公園 (Gunung Mulu National Park) での観光産業への参入を目的として段階的にLT村の村人が移住することで形成されたコミュニティである。そのすぐそばには、プナン人定住村 (Penan resettlement) として建設されたバトゥ・ブンガン村 (Batu Bungan村、以下BB村) がある (図1)。

LT村およびムル集落の人々は、バラム河流域がブルネイ・スルタン統治下にあった19世紀末期にはすでに、ロングハウスを構え、林産物交易や焼畑による陸稲栽培に従事して

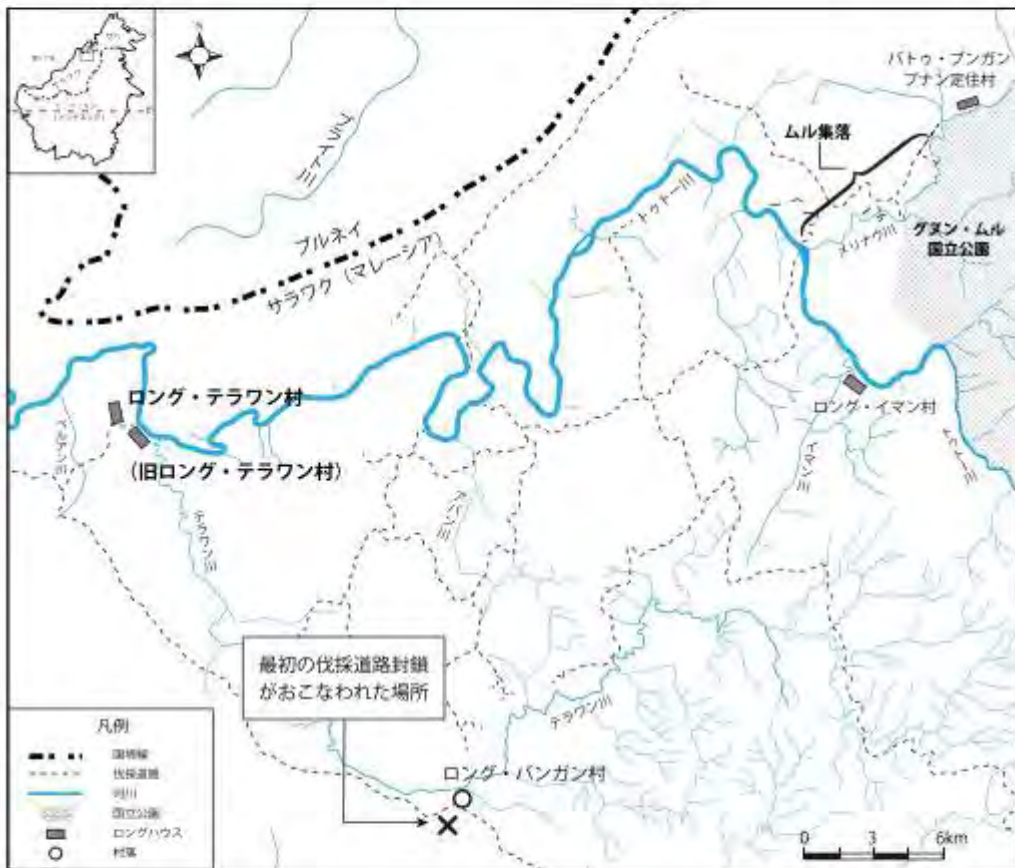


図1 調査地の位置関係

出典：筆者作成

いた。バラム河流域がサラワク王国に割譲された後も、林産物交易によって強大化し、周囲のロングハウス・コミュニティやロングハウスを構えずに暮らしてきたプナン人のような狩猟採集民諸集団に対して政治的、経済的に影響力のある立場にあった¹²。それに対して、BB村は、現在グヌン・ムル国立公園となった地域を含むメリナウ川流域の森林で、特定の場所に定住することなく狩猟採集を中心とした生活を営んできた複数の小規模集団を定住させるために、90年代初頭に州政府主導で創られた村である。国立公園の観光開発とプナン人への定住化という明確な政策目的をもって建てられた同村は、木製ロングハウス（当時、居室は28戸）と、クリニック、農業訓練所がそろったプナン・サービスセンター（Penan Service Centre、以下PSC）を兼ね備えており、ムル集落を含むこの地域で唯一の教育機関と医療機関でもある。そのため現在では、民族を問わずムル集落の子

¹² 詳細は、佐久間（2017）を参照されたい。

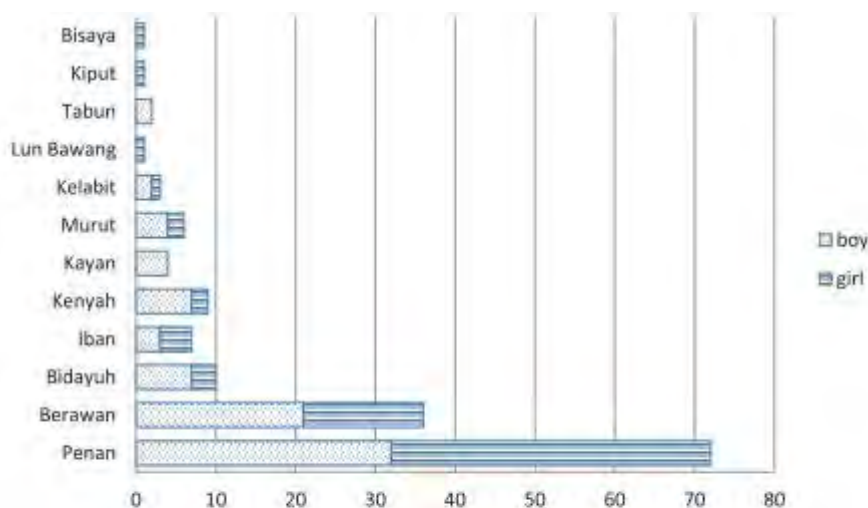


図2 バトゥ・ブングアン小学校の民族別生徒数

出典：筆者のフィールドワーク（2011年1月）

供たちもBB村の小学校に通っている（図2）。一方の大人たちも、年間を通して多くの観光客が訪れる国立公園で、観光ガイド、料理人、トランスポート、小規模宿泊施設の運営など、観光に携わって生計を立てており、ムル集落とBB村の住人は日常的に顔を合わせる間柄である。

このような日常風景からは、ムル集落の住民が隣人のBB村の人々を蔑むような発言が飛び出すことは想像しにくいかもしれない。しかし、筆者の調査中、農作業中や狩猟の後の宴、村の集会など様々な場面で、サラワク州政府の教育や医療サービスがプナン人集落に偏っていると、不満をあらわにする村人の発言と度々出くわした。例を挙げよう。筆者がBB村での聞き取り調査から、居候していたムル集落の家に戻ると、すかさず家の人が筆者にこう話しかけてきた。「(BB村の) ロングハウスに誰かいたか？ どうせ部屋の中は空っぽだったろ？ みんな森にいるんだ。あいつら（BB村のプナン人たち）にあんな立派なロングハウスが必要ないんだ」と。筆者が返事に困っているとすかさず別の方向から、「サルならいただろ？」という声が飛んできて、そこで家中に大きな笑い声が響いた。ここでいうサルとは、プナン人のことを指していたのだ。

調査のはじめのうちは、集落内で頻繁にでくわす、こうしたあまりにも露骨なプナン人蔑視の発言や態度に少なからず戸惑いを覚えた筆者だが、このことをもって、調査地の人々を単なるルサンチマンとして片づけるわけにはいかない経緯を、次第に了解していった。というのも、ムル集落の人々から発せられるこうした言葉の多くは、プナン人に対してというよりも、PSCが備わったBB村とそこに住む人々に向けられていたからである。

ムル集落の人びとの口からプナン人へというよりBB村の人びとへ向けて、これほどに

憎悪と軽蔑を含み込んだ発言が次々と飛び出す現状を説明するには、BB 村という特殊な定住村ができた経緯を理解しなければならない。

3. バトゥ・ブンガン村の公共サービス

ボルネオテツボクを用いた 4 棟立てのロングハウス（全 28 戸）と農業訓練センター、小学校、そして簡易診療所の、いわゆる PSC（Penan Service Centre）の 3 点セットがそなわった BB 村は、他のプナン人定住村とは政治的な意味合いが違っていた。BB 村が、いかに「特別」な村であるのか、プナン人に対する「公共サービス」およびその一環である PSC から説明したい。そうすることで、ムル集落の人びとが BB 村を仮想敵とみなして、その存在を非難する背景が明瞭になるだろう。

現在 BB 村の一連の「公共サービス」は、バラム河流域のプナン（東プナン）の人々を中心に展開されてきた伐採道路の封鎖とそれに対する世界中の環境保護論者の熱い視線と支援に危機感を募らせたサラワク州政府がとった、プナン人への懐柔策である。具体的には、一連の運動を機に国内外の環境政策の専門家や NGO などから、プナン人のために「生物圏保存地域」（biosphere reserve）や共有林の設置をすべきだという政策提言が相次いだのだが、州政府はこうした提言を拒絶するかわりに、プナン人に対して社会経済上の特別の施策の実施を決めた。それが、ロングハウスや小学校、診療所といった PSC の設置と、生活改善員の派遣、農業プロジェクトの実施であった。実際にはこれらは住民局、森林局、保健局など担当局のこととなる別々のプロジェクトなのだが、そのいずれも「プナン人」と呼ばれる人びとに限定して、彼らに「発展」と「進歩」もたらすための施策と標榜するものであるため（Sarawak Tribune, Oct. 20, 1993）、これら一連の施策を本稿では、金沢（2001; 2012）にしたがって「公共サービス」とまとめてよぶことにする。

公共サービスとして具体的に実施される事業は、それぞれの定住村によってかなりばらつきがあった¹³。2007 年にサラワク州調査局（State Planning Unit）が作成した地図に基づけば、現在、バラム河流域で PSC が設置されているのは、BB 村とロング・クヴォット村（Long Kevok）、ロング・ジュキタン村（Long Jekitan）の 3 つだけである（図 3）。

この 3 つの PSC がある定住村は、その後まったくことなる方向を歩んでいった。1991

¹³ 金沢（2001; 2012）は、公共サービスを受けている村と受けていない村の双方を含めた、バラム河流域にある次の 6 つの定住村を選定して、政府の施策がプナン人たちの生活にどのような影響をもたらしたのかを分析している。バ・ライ村、ロング・ウィン村、ロング・スィアン村、ロング・ラマイ村、ロング・クヴォット村、ロング・イマン村の 6 つであり、この中でもっとも公共サービスが集中的に実施されているのはロング・クヴォット村である。それには、この村が「奥地へ延びる林道の分岐点に位置し、交通の要所」である点が指摘されているまた、最初の 3 つの村は公共サービスを受けていない（金沢、2012:166）。

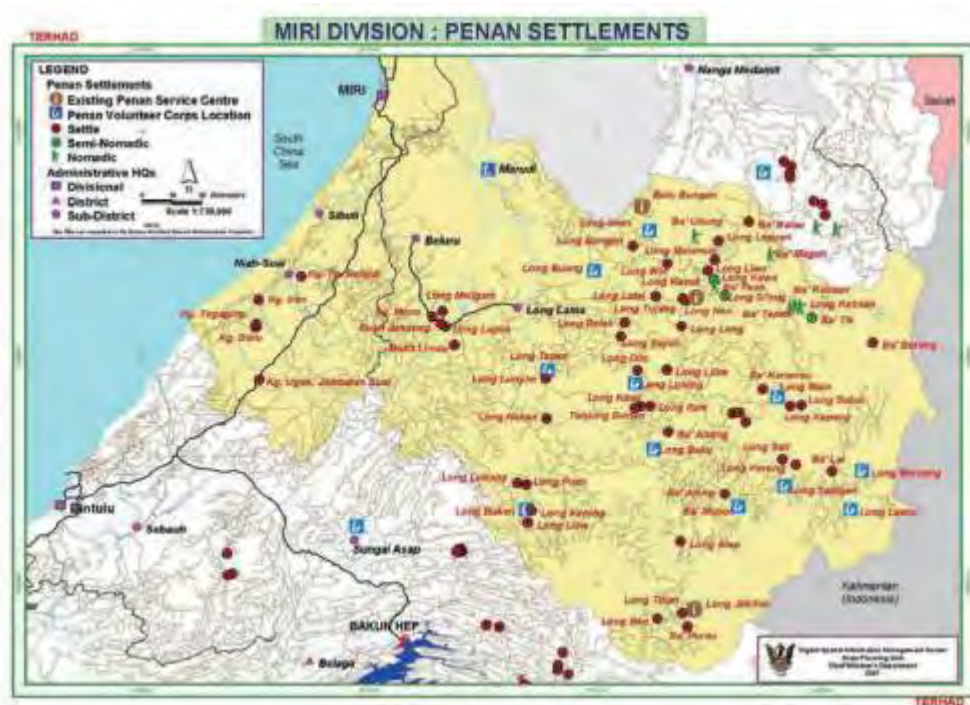


図3 サラワク州政府が作成したバラム河におけるプナン人の居住状況及び
公共サービスの配置図

出典：サラワクのNGO「SarawakUpdate」のウェブサイト<<http://sarawakupdate.com/home/wp-content/uploads/2010/08/2010-8-19-PENAN-011.jpg1.jpg>>より
2011年3月に取得。現在、当該記事および地図は削除されており閲覧不可。

年に設置されたBB村は、PSCの一つである農業訓練センターがほとんど機能しておらず、開設後1～2年足らずで活動は停止している¹⁴。

州政府がBB村建設時に用意したロングハウスは28戸しかなく、それはすでに満員状態である。その後、子供世代の結婚や、BB村の恵まれた環境（PSCと国立公園での現金獲得の機会）に引き寄せられるように集まって来た人びとが、ロングハウスの周辺に自分たちの住居を建て始めたのである。筆者がGPSを片手に全住居を数えて回ったところ

¹⁴ その理由は、森林公社（2003年に森林局から分離して国立公園事業を中心におこなうセクター）の職員によると、「ここ（BB村）の人たちのほとんどが稲作したがらず、すぐに国立公園の中にいってしまうから、職員がさじを投げたから」だという。稲作はその後、学校の給食やムル集落の世帯の稲作を手伝うことでコメ食を食す機会が増加したことで、バトゥ・ブンガン村の若者の間でコメ食を好むものが徐々に表れるようになってきたのを背景に、ムル集落の人びとや教会・学校関係者の手ほどきをうけながら自分で稲作をする者もあらわれるようになってきた。



図4 バトゥ・ブンガン村およびその周辺の住居分布図

出典：筆者によるフィールドワーク（2011年1月）。

その数は55軒にもおよび、ロングハウスの28戸を合わせると、BB村だけで83戸にも上ることが明らかになった（図4）。この数は、バラム河流域の多くのプナン人定住村が人口100人前後、20～30世帯の規模であることに鑑みると、BB村の人口規模はこれまでの研究では報告されたことのない、最大規模のものだということが明白となろう¹⁵。

PSCの設置目的の一つに、他のプナン人もサービスセンターのある村に定住することが期待されたが、すでに半定住して2～3世代を経たプナン人たちは他の定住村への移住を拒むことが多く、サービスへのアクセスは一部のプナンに限られていた（奥野，2003：43）。しかし、BB村の人口増加状況を整理すると次の3点にまとめられる；（1）積極的に複数のプナン人定住村からの移住者が集まってきている点、（2）PSCの村の出身者がいる点、（3）その結果として、83世帯という、これまで報告されたことのない大きな規模のプナン人定住村が出来あがった。この意味で他地域のプナン人の移住は、プナン人の共存戦略ともいえる。

しかしながら、「公共サービス」の対象外である人びとがその施策の恩恵を受けるには、

¹⁵ BB村とは対照的に、別のPSC設置定住村であるロング・クヴォット村にロングハウスが建てられた1986年当時の人口は現在の2倍の約150人だったが、その半数が森での遊動生活に戻ったため、25世帯が入居可能なロングハウスには、現在13世帯しか入居していないという（金沢，2012：180-88）。

バトゥ・ブングアン村の村人と結婚する以外に方法はない。周囲の「非プナン人」(non-Penan) たちは、そうでもしない限り、隣の村にばかり政府や外部からの援助が注ぎ込まれるのを傍観するしかないという現実がある。そして、筆者の調査地ではムル集落の人々がまさにそれにあたる。

1980年代半ばから90年代の終りにかけて、バラム河流域を主な舞台として世界中のメディアを巻き込んで盛り上がった「運動」だが、それ以降、人びとの関心は徐々に薄れ、一部のNGOや活動家を除いて、表面上トーンダウンした。現在のサラワクにおける人びとの生活に目を転じると、運動のアイコンとして一躍世界中のメディアで取り上げられたプナン人とそれ以外の非プナン人の間には、政治的立場に顕著な格差が生じている。例えば、ごく一部のプナン人の発言はすぐさまインターネットを通して国際社会に届くし、州政府の行政サービス¹⁶は他の民族よりもプナン人の村として登録されている村に偏る傾向があり、政策への影響力も一定程度あるというのが大半の非プナン人社会の間での認識である。

LT村およびムル集落住人の州政府への不満は、1992年の暴動という形で表面化した。彼らは、国立公園にきた観光客を乗せた小型プロペラ機の着陸をボイコットし、国立公園内でも抗議行動を展開したのである¹⁷。しかし州政府は、根拠もなく暴力的にムルー帯の権利を主張しているLT村の人々こそが、プナン人の生活を脅かしている、と暴動を逆手にとって彼らをスケープゴートに仕立てたために、やりどころのない怒りを抱えたまま、彼らの抵抗は不可視化されることとなった。「先住民」としての特権と「公共サービス」を享受して生活するプナン人と隣り合わせのムル集落において、日常生活で直面するプナン人との政治的境遇の差異は、LT村出身者に、これまでの社会的立場の逆転を強烈に印象付けるのに十分すぎるものだった。今日、ムル集落の住人の間では、日常の他愛もない所作言動から、プナン人への蔑みを含んだ発言が見受けられ、そうした感情がある出来事をきっかけに怒りとして噴出することがある。その槍玉がBB村の「公共サービス」をめぐることで繰り広げられることにつながっているのである。

先述した「運動」により、国際的な発信力や政府からの公共サービスの享受などといった特別なチャネルを持ったプナン人は、実際にはサラワクの中でもほんの一握りの存在でしかない。この不均衡が公共サービスを享受できるプナン人とできないプナン人、あるいはプナン人と非プナン人との間に明確な格差を生み出した。この地域の場合、それがBB村とムル集落という二分に当てはまったために、今日にみられる緊張状態が醸成されてき

¹⁶ 教育や医療施設、水道や発電設備の供給、橋や道路の建設など。

¹⁷ この抗議活動の際、国立公園内の一部の機器が発火してボヤ騒ぎとなったことで、暴動と放火の罪でLT村出身者4人が首謀者として逮捕された。当時の話は、逮捕者の一人WK氏のインタビューに基づいている。同氏は現在、フリーランスのツアーガイドで生計を立てながら、インターネット上に記事を投稿したり海外NGOとコンタクトを取り続け、小規模ながら「運動」を続けている。

た。

IV むすびにかえて：ポスト「運動」の日常生活へ

ここでは、いたずらに両者の対立を強調することを避け、緊張が続く状況においてなお、彼らが現にそこに暮らしている現実に着地してから、今後のサラワク人類学の課題を整理する。というのも、本稿でみてきたように互いの存在に対する不寛容さが顕著な緊張した状態で、隣り合わせで生活し続けることは、想像以上のストレスを住民間に生み出すものであり、それを緩和する道が無ければ、いつ暴動が起きても不思議ではないはずである。そうならず両村落の生活が保たれているのは、こうした言動以外に目を向ければ、すぐに状況が了解できよう。つまり、日ごろのバトゥ・ブンガン村への悪態とは裏腹に、ムル集落住人と BB 村住人の間には通婚があり、彼らは国立公園の同僚スタッフとしてともに働き、生業活動での労働交換や雇用関係が機能しており、食糧の売買や困窮時の生活必需品の提供など、日常の協力関係が歴然と存在しているのであり、両者は四六時中緊張関係にあるわけではないのである。

双方の関係を了解する上で重要なことは、これまでメリナウ川上流域の広大な一次林のなかで遊動、あるいはメリナウ川沿いに半定住してきたプナン人たちとは、彼らが LT 村で一時滞在するとき以外に、常に顔を合わせるような距離で生活するような空間はこれまで経験のないことだということである。

国立公園もムル集落もまだなかったころ、プナン人らが交易品を LT 村に売りにやってきたときや、下流の村や町に行くためにエクスプレス・ボートを待つとき、あるいは農繁期の焼畑の手伝いなどは、一時的に村に滞在することは日常の一部であった。そのため、かつて LT 村には、山側（ロングハウスの裏手）にこうしたプナン人が滞在するための小屋が用意されていた。ムル集落の住民によると、この小屋にプナン人が立ち寄るときにロングハウスへ挨拶やことわりを入れる必要は誰も感じておらず、プナン人が自由に訪れ、用事がすめば勝手に立ち去って行ったという。焼畑の手伝いや交易品の持ち込みなど定期的に LT 村を訪れていた顔なじみのプナン人は、居室に招き入れられ、食事を提供されることも珍しくなかった。そしてその際に、農耕技術、ボート作りや操縦の技術がプナン人へ伝達されていった。こうしたことは、LT 村やムル集落、そして BB 村の住人からも共通して聞かれる話である。

プナン人にとっても LT 村の住民にとっても、こうした一時的な同居は、とりたててストレスを感じることはない生活の一部であった。しかし、今日のようなムル集落と BB 村は、共に「定住」したまま互いの存在を意識しないでおくことが不可能な状況という、これまでの一時的同居とは全く異質な空間を作りだした。これは、広大な森林と極端に低い人口密度という環境条件の上に成り立っていた両者の関係が、1990 年代以降、急速に圧

縮された生活空間でもある。つまり、これまでお互いに「自分たちとは違う」集団であると認識しつつも、不必要に干渉せずに、林産物交易、通婚などを通して互助関係を維持してきたのが、ある日突然、一方が「戦う先住民」としてセンセーショナルに取り上げられることで、それ以外の人々はその強すぎる光の「影」となったのである。

以上が示唆する問題は、これまでの「運動」後の先住民社会の研究は、プナン人社会（あるいは他の民族）と州／国家の構図の中の分析にとどまっており、サラワクの「森の民」の生活世界にどのような影響をもたらしたのか、という視点から「運動」の検証や評価は十分にはなされてはいないということである。この点は、「運動」を扇動する側にあったサラワク人類学が向き合うべき課題であるはずである。プナン人の窮状を詳細に調査し発信に寄与してきたのが人類学者であれば、「運動」によって存在を陰に追いやられた人々の声なき声を聞き取り文字化することができるのも、人類学や地域研究のなせる業である。

アリーナをマレーシアという国家に拡大した場合、次の課題もやはり重要だろう。国家主導による開発によって在地の人びと（とりわけ、先住民）が受ける多大な影響が生み出す国内のコンフリクトは、マレーシアが独立以来、抱えこんできた問題群のひとつでもある。近年では、マレーシアの半島部とボルネオの2州（サバ州、サラワク州）に共通する現象として、隣国インドネシアとの激しい競合関係にあるアブラヤシ・プランテーション事業の拡大に対して、人びとが異議を申し立て、土地に対する権利などをめぐって裁判闘争となるケースが目立ち始めている。しかしながら、半島部とボルネオの間には、一括りに「マレーシアの先住民運動」として説明することができない顕著な差異があり、それが結果として、マレーシアという国家における「先住民」の位置付けに対する包括的な理解を妨げることになっている。

例えば、マレーシア半島部のオラン・アスリと総称される人びとを取り巻く状況において、先住民運動やそれを支援するNGO活動が活発化するようになったのは、1993年の国連による国際先住民年以降の比較的最近のことである。また、半島部では1980年代以降のオラン・アスリに対する政策は、イスラーム化（マレー人化）促進を目的とした経済開発政策がすすめられてきた。そのため開発は、生業活動や経済状況ばかりか、人びとの宗教やアイデンティティも変えてしまう側面を持っている。イスラーム教徒人口が全体の半分以下であるサラワク州とは違い、半島部はいずれの州もイスラームが圧倒的多数派であり政治的に優位な立場にある状況において、イスラームへの改宗を受容するか拒否するかという選択をオラン・アスリに迫ることは結果的に、オラン・アスリ社会の分裂を招くこととなった（信田, 2004）。

このように、同じマレーシアという国家に属しながらも、それぞれの「運動」が直面する問題や「運動」の分析視角は、同列に議論できない齟齬がある。サラワク州では既に、「ポスト先住民運動」期にさしかかった分析が求められる段階にある。半島部のオラン・アスリ社会における同様の「運動」は、その組織や国連の先住民作業部会や国内外のNGO

との連携などの側面において先行のサラワクのそれに負うと同時に、半島部独自の事情に応じた戦術が必要となる。それ故、半島部のオラン・アスリ社会における先住民運動の動向を分析し、半島部とボルネオの研究を架橋するには、サラワクの状況をふまえることが不可欠な作業となるだろう。

〈参考文献〉

日本語文献

- 石川登（2008）『境界の社会史——国家が所有を宣言するとき』（地域研究叢書 17）、京都大学学術出版会。
- 金沢謙太郎（2001）「生物多様性消失のポリティカル・エコロジー —— サラワク、バラム河流域のプナン集落における比較調査から」『エコソフィア』第7号、87-103。
- （2005）「サラワクの森林伐採と先住民プナンの現在」池谷和信編『熱帯アジアの森の民——資源利用の環境人類学』文書院、273-301。
- （2012）『熱帯雨林のポリティカル・エコロジー：先住民・資源・グローバリゼーション』昭和堂。
- 金沢謙太郎、分藤大翼、小泉都、佐久間香子（2017）「熱帯原生林の共生社会論——ボルネオの原生林を守る民族間コミュニケーション——」『信州大学 総合人間科学研究』第11号、19-34。
- 奥野克巳（2003）「サラワク先住民プナン社会における疾病、林道封鎖、NGO」『経済学雑誌』第104巻第2号、37-53。
- サイード, E. W. (1986) 『オリエンタリズム』(今沢紀子訳) 平凡社。
- 佐久間香子（2017）「ボルネオ内陸部の交易拠点としてのロングハウス：19世紀末のサラワクにおける河川交易からの考察」『東南アジア研究』第54巻第2号、153-181。
- 杉島敬志（1996）「歴史研究にもとづく人類学批判」『民博通信』71号、pp. 78-98。
- 杉島敬志（2001）「ポストコロニアル転回後の人類学的実践」、杉島敬志編『人類学的実践の再構築——ポストコロニアル転回以後』、京都：世界思想社、1-50。
- 信田敏宏（2004）『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』（域研究叢書 15）、京都大学学術出版会。

英語文献

- Bending, Tim (2006) *Penan Histories: Contentious Narratives in Upriver Sarawak*.
Koninklyk Instituut Voor Taal Land.
- Boyd, T. Stirling (1936) "The Law and Constitution of Sarawak," *Journal of Comparative Legislation and International Law*, Vol. 18, No. 1: 60-70.

- Brosius, J. Peter, Anna Lowenhaupt Tsin, and Charles Aerner (eds.) , (2005) *Communities And Conservation: Histories And Politics Of Community-based Natural Resource Management (Globalization and the Environment)* , Oxford: Altamira Press.
- Brosius, J. Peter (1997) "Prior transcripts, divergent paths: resistance and acquiescence to logging in Sarawak, East Malaysia", *Comparative Studies in Society and History*, 39 (3) : 468-510.
- Clay, J. W. (1993) "Looking back to go forward: predicting and preventing human rights violations", Miller, M. S. (ed.) , *State of the Peoples: A Global Human Rights Report on Societies in Danger*. Beacon Press, Boston: 64-71.
- Cleary and Eaton (1992) *Borneo: Change and Development*. Oxford University Press, New York.
- Freeman, Derek. 1970 (1955) . Report on the Iban. Athlone Press and Humanities Press.
- Hong, Everyne (1987) *Natives of Sarawak: Survival in Borneo's Vanishing Forests*. Institut Masyarakat, Kuching.
- Hose, C., and McDougall, William (1912) *The pagan tribes of Borneo: a description of their physical, moral and intellectual condition, with some discussion of their ethnic relations (2vols)* . London: Macmillan and co., limited.
- Hose, C. (1926) *Natural man: A record from Borneo*. London: Macmillan and Co. Limited.
- Hose, C. (1927) *Fifty years of romance and research: or, a jungle-wallah at large*. Hutchinson & Co.
- Humen, G. G. (1981) *Native Land Tenure Protection in Sarawak*. LLB (Honors) Thesis, Faculty of Law, University of Malaya.
- Hutnyk, John (1999) "Resettling Bakun: Consultancy, Anthropologists and Development", *Left Curve* 10: 82-90.
- Ishikawa, Noboru (2010) *Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland*. Singapore and Copenhagen: NUS Press and NIAS Press.
- King, Victor T. (1993) Politik pembangunan: The political economy of rainforest exploitation and development in Sarawak, East Malaysia. In *Global Ecology and Biogeography Letters*, 3: 235-244.
- King, Victor T. (1995) "Indigenous peoples and land rights in Sarawak, Malaysia: To be or not to be a bumiputra", Barnes, R. H., Gray, A., and Kingsbury, B. (eds.) , *Indigenous Peoples of Asia. The Association for Asian Studies*, Monograph and Occasional Paper Series, Number 48, Ann Arbor: 289-306.
- Langub, Jayl (2003) "Penan Response to Change and Development", Christine Padoch

- and Nancy Lee Peluso (eds.) , *Borneo in Transition: People, Forests, Conservation, and Development (Second Edition)* . Oxford University Press: 131-150.
- Langub, Jayl (2010) "Making Sense of the Landscape: Eastern Penan Perspectives", *A Conference on United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples: Implementation and Challenges*. organized by the Centre for Malaysian Indigenous Studies (CMIS) , and Centre for Legal Pluralism and Indigenous Law (CLPIL) at the Faculty of Law, Universiti Malaya, November 9-10, 2010. unpublished.
- Lau, Dennis (1987) *Penans: The Varnishing Nomads of Borneo*. Kota Kinabaru: Interstate Publishing Co.
- Leach, Edmund R. (1950) *Social Science Research in Sarawak: A Report on the Possibilities of a Social Economic Survey of Sarawak Presented to the Colonial Social Science Research Council, London, March 1948 - July 1949*. New York: Johnson Reprint Corp.
- Lembat, T. S. D. G. (1994) "Native Customary Land and the Adat", *Paper presented at the Seminar on NCR Land Development*, September 29 to October 3, 1994, Kuching.
- Manser, Bruno (1996) *Voices from the Rainforest: Testimonies of a Threatened People*. Bruno Manser Foundation and INSAN.
- Metcalfe, Peter (1982) *A Borneo Journey into Death: Berawan Eschatology from Its Rituals*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- (1989) *Where Are YOU/SPIRITS: Style and Theme in Berawan Prayer*. Washington D. C: Smithsonian Institution Press.
- (2002) *They Lie, We Lie: Getting on with Anthropology*. London: Routledge.
- (2010) *The Life of the Longhouse: An Archaeology of Ethnicity*. New York: Cambridge University Press.
- Morris, Stephan (1971 [1953]) *Report on a Melanau sago producing community in Sarawak (Colonial research studies, No. 9)* . London: Johnson Reprint.
- Ooi, Kiat Gin (1997) *Of Free Trade and Native Interests: The Brookes and the Economic Development of Sarawak, 1841-1941*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Prigle, Robert (1970) *Rajahs and Rebels: The Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941*. London: Macmillan.
- Rousseau, Jérôme and International Rivers Network (1994) *Bakun Dam Materials*. International Rivers Network.
- (1994) "Review of Socio-economic Studies and Preliminary Recommendations

- for the Resettlement of the Kayan and Lahanan of the Upper Balui”, *The Bakun Project*.
- (1995) The Bakun HEP Project and Resettlement: A Failure of Planning in “Power Play: Why the Bakun HEP is Damned”: INSAN.
- Sutlive, J. and Sutlive, V. (eds.) (2001) *The Encyclopedia of Iban Studies*. Kuching: Tun Jugah Foundation.
- Thomas, Nicholas (1989) *Out of Time: History and Evolution in Anthropological Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tien, Ju-Kang (1980) *The Chinese of Sarawak: A Study of Social Structure*. New York: AMS Press.
- Walker, John. H. (2002) *Power and Prowess: the Origins of Brooke Kingship in Sarawak*. Honolulu: Allen & Unwin and University of Hawaii Press.

(さくま・きょうこ 立命館大学)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワク州政治エリートの中長期的変化とマレーシア政治への影響

森下明子

はじめに

マレー半島部で野党が躍進した2008年の総選挙以降、マレーシア政治におけるサラワク州とサバ州の重要性はこれまでになく高まった。与党連合の国民戦線（BN）がサラワク州とサバ州で得られるBN議席なしに連邦下院議席の過半数を確保できなくなったためである。サラワク州とサバ州がBNの「堅固な票田（fixed deposit¹）」と呼ばれるようになった所以である。しかし、サラワク州とサバ州は本当にBNの堅固な票田なのだろうか。今後もこの2州は、連邦下院選挙においてBNの議席過半数確保に貢献するといえるのだろうか。

そこで本稿ではサラワク州に焦点を当て、過去およそ50年間の州議会選挙の当選者を分析し、サラワク州における与野党の中長期的変化を明らかにする。そしてそこから、連邦下院選挙を含む今後の連邦・州関係におけるサラワク州の動向を考察する。州議会議員に注目する理由は、サラワク州では州議会議員が連邦下院選挙における集票力の要であり、彼・彼女らが下院議員候補者のために有権者の票集めに尽力するからである。州議会議員たちは地元の顔役であり、特にBN構成党の場合は、広大な内陸部に散在する有権者との間にパトロン・クライアント関係を築いている。逆に言えば、党執行部が選定した下院議員候補者が、その選挙区の州議会議員の意にそぐわない人物である場合には、州議会議員たちは地元での集票を取って怠ることもできるのである。こうしたサラワク州の選挙政治の実態に鑑み、本稿では州議会議員に注目する。

本論に入る前に、サラワク州特有の政治的特徴について確認しておきたい。サラワク州の政治的特徴は、選挙日程、BN構成党、州首相の3点にある。

第一に、サラワク州の州議会選挙は他の12州と異なり、連邦下院選挙と異なる日程で開催される²。そのため、一般的にサラワク州議会選挙は次の連邦下院選挙のBN支持率

¹ “fixed deposit” は直訳すれば（BN票の）「定期預金」である。一般的にBNの堅固な票田を意味する。

² 半島部1州では1964年以来、サバ州では204年以来、連邦下院選挙と州議会選挙が同日開催されている（中村2016）。

を測る重要な指標と考えられている (中村 2016)。しかし、サラワク州議会選挙の結果は単純に連邦下院選挙の結果を予測するものとして捉えることはできない。その理由のひとつは、次に挙げる第二の政治的特徴に由来する。

サラワク州の第二の政治的特徴とは、サラワク州の BN が地方政党で構成されていることである。サラワク州には、半島部 11 州とサバ州の BN 構成党である統一マレー国民組織 (UMNO)、マレーシア華人協会 (MCA)、マレーシア・インド人会議 (MIC)、マレーシア人民運動党 (Gerakan) 等の支部が存在しない。サラワク州の BN 構成党は、2016 年 5 月の州議会選挙時点で、サラワク統一ブミプトラ保守党 (PBB)、サラワク統一人民党 (SUPP)、サラワク人民党 (PRS)、サラワク進歩民主党 (SPDP) の 4 党である³。2016 年の州議会選挙では、この 4 党に加えて無所属の BN 直接候補者 (BN Direct) が出馬した⁴。このことから、本稿では便宜上、サラワク州の BN を「サラワク BN」、半島部の BN を「半島部 BN」と称す⁵。なお「BN」とのみ述べる場合は、連邦下院における BN を指す。

第三の政治的特徴は、サラワク州では 1981 年から 2014 年まで州首相が交代せず、33 年の長期にわたってタイブ・マフムドが州首相としてサラワク政治の頂点に君臨したことである⁶。タイブ・マフムドは州首相在任中、州行政ポストの分配と天然資源開発の利権の分配を通して、州内に広く政治経済的パトロンクライアント・ネットワークを構築した。また、開発利権に絡んだファミリービジネスを展開し、サラワク州において多大な政治経済的影響力をもった⁷。しかし、タイブ・マフムドは 2014 年に州首相を辞任し、後任としてタイブ・マフムドの妹の元夫であるアデナン・サテムが州首相に就任した。さらに 2017 年 1 月 11 日にはアデナン・サテムが州首相在任中に死去したため、アバン・ジョハリ副州首相が新たに州首相に就任した。このように 2014 年以降になって州首相が次々と変わるなか、サラワク州の政治は今後どのように変化していくのだろうか。この点もまた本稿の関心事項である。

ただし本稿では、アデナン・サテム前州首相及びアバン・ジョハリ現州首相による政策やメディアでの発言、タイブ・マフムドの辞任後に初めて開催された 2016 年の州議会選

³ サラワク州の BN 構成党の支持基盤や 2008 年の連邦下院選挙における結果については森下 (2008) を参照。

⁴ 2016 年のサラワク州議会選挙に出馬した BN 直接候補者には、サラワク州の BN 構成党から離党した人々で結成された新党のメンバーが、一旦無所属となって出馬した例が含まれる。

⁵ サバ州の BN 構成党は半島部の BN 構成党および地方政党からなる。本稿ではサバ州の BN については言及しないため、特に呼称を設けない。

⁶ マレーシアの地方行政の基本構造は、州元首を戴き、行政権は州首相を長とする行政機関 (半島部では州執行理事会、サバ州では州内閣府、サラワク州では州政府評議会とよばれる) により行使される。州首相の選出過程は、州議会の中で最も議員の信任を得られると見込まれる議員 (通常、州議会でも最も多く議席を獲得した政党の代表) が州元首によって州首相に任命される。

⁷ タイブ・マフムドおよびタイブ・マフムド州首相時代のサラワク政治と利権構造については、Leigh (1974), Brown (2001), Morishita (2009), Aeria (2016) などを参照。

挙に特化した選挙結果の分析など、個々の政治日程の詳細な分析は行わない⁸。本稿では、サラワク州の政治的变化を約 50 年の中長期的視点から捉え、そこからポスト・タイプ時代のサラワク政治において何が変わりつつあるのかを明らかにすることに主眼を置く。そのなかで冒頭に述べた問い、すなわち、サラワク州が今後も連邦下院選挙における BN の堅固な票田であり続けるのかについて考察する。

サラワク政治の変化を中長期的に捉えるために、筆者は州政治エリートに注目する。州政治エリートとは、サラワク州の政党幹部、州政府の閣僚、州議会議員、州選出の連邦下院議員等を指す。州政治エリートに注目する理由は、タイプ州首相時代およびその前後で州政界にどのような地殻変動が起きたのかを、まずは大掴みに把握するためである。本来は州政治エリート全体の分析が必要であるが、本稿では州議会議員に焦点を当てる。その理由はすでに述べた通り、州議会議員が連邦下院議員よりも有権者の投票行動に影響力をもつからであるが、これに加えて、州議会議員が政党幹部と州政府閣僚を含む州政治エリートの母集団であることも重要である。筆者は 1969 年の第 1 回州議会選挙から 2016 年の第 11 回州議会選挙までの全当選者について、インターネット上およびマレーシア選挙委員会発行の州議会選挙結果に関する資料を用いて、選挙区、氏名、政党、サラワク BN か否かの 4 項目についてデータベースを作成した⁹。本稿ではこのデータベースを用いて分析した結果を、以下に大きく分けて 3 つ指摘したい。

I 州議会選挙当選者にみるサラワク政治の変化 (1) ——野党の変化

1969 年から 2016 年までのサラワク州議会選挙の当選者データをみると、まず浮かび上がってくるのは、野党にみられる 2 つの変化である。

ひとつは 1996 年の州議会選挙を境に、主要な野党が地方政党から全国政党に移ったことである。1996 年までの主要な野党は、一般にダヤクと総称される非ムスリム・ブミブトラと華人の一部を支持基盤とするサラワク国民党 (SNAP) と、SNAP からの離党者を中心に結成されたサラワク・ダヤク民族党 (PBDS) であった。これらの政党は主に内陸部の選挙区を牙城としていた。しかし、両党はいずれも 1996 年の州議会選挙までにサラワク BN に加入し、それ以降、主要な地方政党は全てサラワク BN の構成党となった¹⁰。

⁸ 2016 年の州議会選挙については中村 (2016) の分析が詳しい。

⁹ 本データベースは以下の URL にて公開している。
http://researchmap.jp/mulixkpln-209713/#_2209713

¹⁰ SNAP は 1976 年から 204 年までサラワク BN への加入と脱退を繰り返し、2004 年以降は野党となった。しかし党幹部間の争いの末に 2013 年に解党した。PBDS は 1983 年の州議会選挙後にサラワク BN に加入し、その後脱退、1996 年に再び加入した。しかし最終的には党幹部争いの末に 2004 年に解党した。現在のサラワク BN 構成党の一つである PRS は、PBDS を前身とする。

他方、1996年の州議会選挙以降、都市部の華人が多い選挙区では全国規模の野党である民主行動党(DAP)に票が集まるようになった。その背景には、1990年代半ば頃からタイブ・マフムド州首相(当時)のファミリービジネスに対する不満が都市部で高まったこと、そして、華人を支持基盤とするSUPP内部で幹部間争いが生じたことにあるといわれている¹¹。さらに2006年の州議会選挙以降は、DAPと同じく全国規模の野党である人民公正党(PKR)にも徐々に票が集まるようになった(表1参照)。

しかし、DAPやPKRの議席はほぼ都市部の選挙区に限られている。内陸部の場合、後述する第二の野党の特徴にも関係するが、1996年の州議会選挙までに、それまで野党であった地方政党が全てサラワクBNに加入したため、それまでの野党票の多くがサラワクBNに流れた。これに加えて、サラワクBNは投票の見返りに住民に生活資金の提供や集落のインフラ整備などを行い、有権者との間にパトロン・クライアント関係を築いた。そのため今日のサラワク州内陸部において比較的野党票が多い地域は限られており、たとえば州政府による開発事業によって住民の生活が脅かされ、野党の活動家から支援を

表1. サラワク州議会選挙における主要与野党*の構成 (1969-2016年)

*議席を獲得した政党のみ記載。

選挙年	与党連合の構成党	野党
1969	与党連合Alliance: サラワク・ブミプトラ党 (BUMIPUTERA) サラワク華人協会 (SCA)	SNAP SUPP (選挙後にAlliance加入) サラワク・ブサカ党 (Pesaka)
1974	与党連合サラワクBN (以下同): PBB, SUPP	SNAP
1979	PBB, SUPP, SNAP	なし
1983	PBB, SUPP	SNAP (選挙後にサラワクBN加入) PBDS (選挙後にサラワクBN加入)
1987	PBB, SUPP, SNAP	PBDS サラワク・マレーシア人民協会 (PERMAS)
1991	PBB, SUPP, SNAP	PBDS
1996	PBB, SUPP, SNAP, PBDS	DAP
2001	PBB, SUPP, SNAP, PBDS	DAP
2006	PBB, SUPP, SPDP (SNAPの分派) PRS (PBDSの後身)	DAP, SNAP, PKR
2011	PBB, SUPP, SPDP, PRS	DAP, PKR
2016	PBB, SUPP, SPDP, PRS	DAP, PKR

出所: サラワク州議会選挙当選者データベースより筆者作成

¹¹ サラワク政治に詳しい地元ジャーナリストへの電話インタビューによる (2017年1月7日)。

受けている地域や、候補者争いに敗北した地元のサラワク BN 政治家が選挙区の住民に敢えて野党に投票するように指示した地域などに限られる。こうした地域が含まれる選挙区では野党が州議会議席を獲得する場合もある¹²。一方、都市部の場合、サラワク BN に所属する州議會議員と有権者の間には、多くの場合パトロン・クライアント関係がない。また、都市部では内陸部よりもインターネットへのアクセスが容易であるため、有権者は新聞やテレビでは報道されないタイプ・マフムドのファミリービジネス問題やサラワク BN 政治家の汚職、全国規模の野党による連邦政府批判、マレーシア政治全体の動向等を知ることができる。こうした社会政治的環境の違いやアクセスできる情報量の違いが、1990 年代半ば以降の野党票の地理的分布にも反映されていると考えられる。

サラワク州の野党のもうひとつの特徴は、特定の選挙区で二期以上再選している州議會議員が政党あるいは与野党間を移動していることである。これは 1996 年の州議会選挙以前に多く見られた特徴であり、内陸部の選挙区に集中している¹³。たとえばゲマ区 (Ngemah)、パカン区 (Pakan)、マルディ区 (Marudi)、テラン・ウサン区 (Telang Usan) などでは、たとえ同じ候補者が再選していたとしても、当選者の所属する政党が前回と異なっていたり、あるいは、政党は同じでも政党の立ち位置が野党から与党に変わっていたりする場合が見られる。こうした特徴の背景には、前述した 1996 年の州議会選挙を境とする野党構成の変化が影響している。政党あるいは与野党を移動した議員は、1996 年以前の主要野党 (SNAP, PBDS) のメンバーであり、政党の分裂・解党等によって政党を移籍し、移籍後の州議会選挙では移籍先の政党から出馬し当選した人々である。また、政党そのものが野党から与党に鞍替えしたことが反映されている場合もある。

このことはすなわち、サラワク州内陸部の一部選挙区では、有権者の投票行動を規定する要因が政党ではなく、候補者にあることを示すと考えられる。こうした選挙区では、与野党の勝敗は有権者によって決まるのではなく、地元で支持率が高く再選が確実な候補者がどの政党から出馬するのか、あるいは、候補者の所属政党の党首が与野党どちらにつくことを選ぶのかによって決まるといえるだろう。言い換えれば、当該選挙区では有権者ではなく州政治エリートの判断によって与野党の勝敗が決まると考えられる。

以上のサラワク州における野党の変化に関する 2 つの特徴は、サラワク政治および連邦・州関係を分析する上でどのような意味をもつのだろうか。まず、第一に挙げた 1996 年を境にした野党構成の変化からは、1990 年代半ば以降、選挙における対立構造が「地方政党 (与党) vs 地方政党 (野党)」から「地方政党 (与党) vs 全国政党 (野

¹² たとえば 2011 年と 2016 年の州議会選挙では、内陸部のバクララン区 (Ba' kelalan) でバル・ビエン (PKR サラワク支部長) が当選した。バル・ビエンは弁護士であり、開発事業をめぐる内陸部での土地争議や土地権問題について住民側の弁護士として活動してきた人物である。

¹³ 1996 年以降の州議会選挙では、無所属の州議會議員が次の選挙でサラワク BN の構成党から出馬し当選した例が 2 件みられるのみである。

党)¹⁴」という構図に変化したことがわかる。そしてこのことは、サラワク BN が 1990 年代半ば以降に直面した政治的限界を示している。サラワク州の主要な野党が地方政党であった時代には、サラワク BN が野党勢力を取り込むことは比較的容易であった。しかし、主要な野党が全国政党になったことで、サラワク BN が野党を取り込むことは極めて難しくなった。なぜなら、半島部にある野党の中央執行部がサラワク州の与野党関係をめぐる新たなステークホルダーとなったからである。サラワク BN は、半島部における半島部 BN と野党の関係を考慮した上で、州内での野党対策を講じなければならなくなった。しかし、その方策はおそらくまだ見つかっていない。また、仮にサラワク BN が DAP や PKR の州支部を取り込むことができたとしても、今度は半島部 BN や、DAP および PKR の中央執行部との折衝が必要となる。そうなれば、連邦・州関係だけでなく連邦政治にも大きな影響を与えることになるだろう。

サラワク州の野党の第二の特徴（二期以上の当選者の政党・与野党間移動）からは、サラワク州に二つのタイプの選挙区があることがみえてくる。一つは有権者の投票行動が政党によって規定される選挙区であり、もう一つは有権者の投票行動が候補者によって規定される選挙区である。後者の選挙区は内陸部に見られ、次の連邦下院選挙におけるサラワク BN の動向をうかがう上で注目すべき選挙区であると考ええる。その背景には、1963 年のマレーシア連邦成立以降、連邦政府とサラワク州政府の間で常に争点となっている「自治の問題」がある。詳細は後述するが、サラワク BN は連邦下院選挙において、自治をめぐる駆け引き材料として候補者重視の選挙区を利用するかもしれない。当該選挙区では、当選可能性の高い候補者を「サラワク BN ではあるが、連邦下院においては非 BN 候補者である」として出馬させ、当選させることが可能だからである¹⁵。そうなれば連邦下院選挙において BN は議席数を落とすことになる。

ここで「自治の問題」について触れておきたい。1963 年のマレーシア連邦成立に先立ち、サラワクはマレーシア連邦下における 18 の自治権（宗教、言語、入州管理、教育な

¹⁴ ここでいう全国政党とは、半島部に中央執行部が置かれ、全国に支部をもつ政党を意味する。しかし中央執行部が州支部の運営に関して絶対的な決定権を持つわけではない。DAP と PKR のサラワク州支部は独自財源で運営しており、出馬する選挙区や候補者の選定等でも州支部の意向が反映される。サラワク州に DAP や PKR の支部が設立された背景には、党中央執行部がサラワク BN に批判的な地元活動家に支部設立を働きかけたという経緯があったと考えられるが、反サラワク BN 活動家の立場で考えると、サラワク州で地方政党を設立するには人的・資金的リソースに限界があったとも考えられる。

¹⁵ そもそもサラワク BN を構成する地方政党は、連邦下院選挙において必ずしも連邦下院の BN に参加する必要はない。しかし、サラワク BN の戦略として、サラワク BN の全ての構成党が連邦下院の BN に参加しないという選択肢は基本的にあり得ない。なぜなら半島部 BN の幹部たちがサラワク BN 構成党の幹部たちに直接働きかけて BN に入るように促す可能性があるだろうし、また、かつてのサバ州のように半島部の BN 構成党がサラワク州に支部をつくる機会を与えかねないからである。サバ州に UMNO の支部がつくられた経緯については Chin (1999) を参照。

ど)に関する覚書を取り交わしており、サラワク州政府はこの覚書に基づいて、これまで連邦政府に自治権の拡大と保障を求めてきた¹⁶。一般にサラワク州では、連邦政府の政策は半島部マレー人を優遇する政策として捉えられており、たとえば石油政策やブミプトラ政策などはサラワク州の石油資源、宗教、教育、公務員人事等への自治権を侵害するものとして受け止められている。今日のサラワク社会では、こうした考え方が州政治エリート間だけでなく州民の間にも広がっており、マレーシア連邦成立時に約束されたはずの18の自治権の全面的付与を連邦政府に求める声が強まっている。2010年代半ば頃からは、「サラワク人のためのサラワク (Sarawak 4 Sarawakians, S4S)」と名乗る市民グループが街頭デモを行うようになり、その規模は年々拡大している¹⁷。

こうした状況のなか、2016年のサラワク州議会選挙では、サラワク BN の応援に駆けつけたナジブ首相が、サラワク州の自治権の拡大に関して今後も連邦政府と州政府で話し合いを続けると発言した (*Channel News Asia*, 7 May, 2016)。このナジブ首相の発言を受けて、サラワク BN は、ナジブ首相が次の連邦下院選挙が開催されるまでの間に自らの発言を実行するかどうかを注意深く観察している。もしサラワク州の自治に関して進展がなかった場合、サラワク BN は次の連邦下院選挙において半島部 BN に全面的に協力しないということもあり得る。ナジブ首相は、サラワク BN がそうした戦略に出ないように、サラワク州首相に対して様々な政治的駆け引きを行うと考えられる。

II 州議会選挙当選者にみるサラワク政治の変化 (2) 絶え間ない「新陳代謝」

サラワク州議会選挙の当選者データから浮かび上がる第二の特徴は、州政治エリートの

¹⁶ 現在のマレーシアは、1957年にイギリスから独立したマラヤ連邦が、1963年にシンガポール、イギリス領北ボルネオ（現サバ州）、イギリス領サラワク（現サラワク州）と統合して成立した。なお、シンガポールは1965年にマレーシアから独立した。

¹⁷ S4Sの設立者は、海外のNGOや活動家と組んでタイプ・マフムド元州首相の汚職問題を糾弾する地元の活動家たちである。リーダーのピーター・ジョン・ジャバンはイバン人で、ラジオ・フリー・サラワクのDJである。ラジオ・フリー・サラワクは、タイプ・マフムドなどサラワク BN 政治家の汚職に関する情報を伝える短波放送のラジオ局である。S4S自体は野党よりの団体であるが、そのスローガンは与野党を超えてサラワク州民に広がりつつある。S4Sの活動については以下のオンライン記事などを参照。

“S4S rally outside Sarawak assembly for autonomy,” *Free Malaysia Today*. 21 November, 2016.

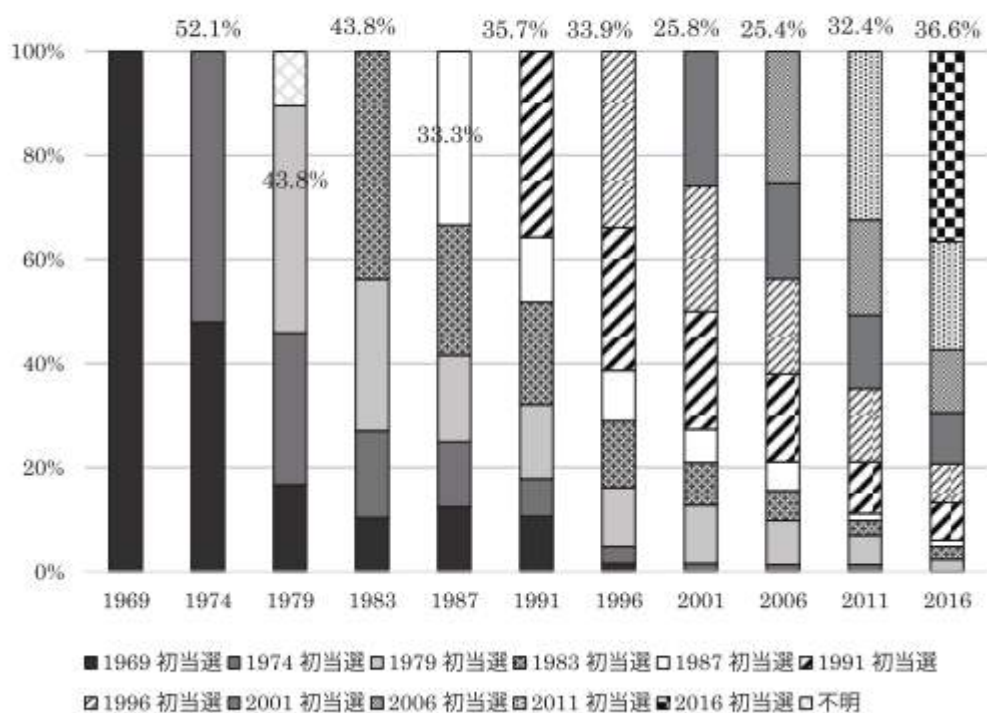
<http://www.freemalysiatoday.com/category/natin/2016/11/21/s4s-holds-rally-opposite-state-assembly-calls-for-sarawak-motion-to-be-tabled/> (2017年2月4日最終アクセス)

“S4S: Sarawak should control its own resources,” *Free Malaysia Today*. 6 December, 2016. <http://www.freemalysiatoday.com/category/natin/2016/12/06/s4s-sarawak-should-control-its-own-resources/> (2017年2月4日最終アクセス)

絶え間ない「新陳代謝」である。サラワク州では、州議会選挙のたびに新人候補者が一定割合で当選しており、少ないときでも当選者の25.4%（2006年州議会選挙）、多いときには当選者の52.1%（1974年州議会選挙）を初当選者が占めている（グラフ1.参照）。また、初当選者数を見ると、過去11回の州議会選挙のうち2016年の州議会選挙の初当選者数が最も多い（30人）。なお、初当選者の人数や割合は野党の獲得議席数に比例しているわけではない。サラワク BN の最大与党である PBB においても「新陳代謝」は起きている。PBB に所属する当選者のうち初当選者が占める割合は、少ないときで2.9%（2006年州議会選挙）であるが、多いときでは56.3%（1979年州議会選挙）に上る。なお、2016年の州議会選挙ではPBB に所属する当選者のうち33.3%が初当選者であった（グラフ2.参照）。

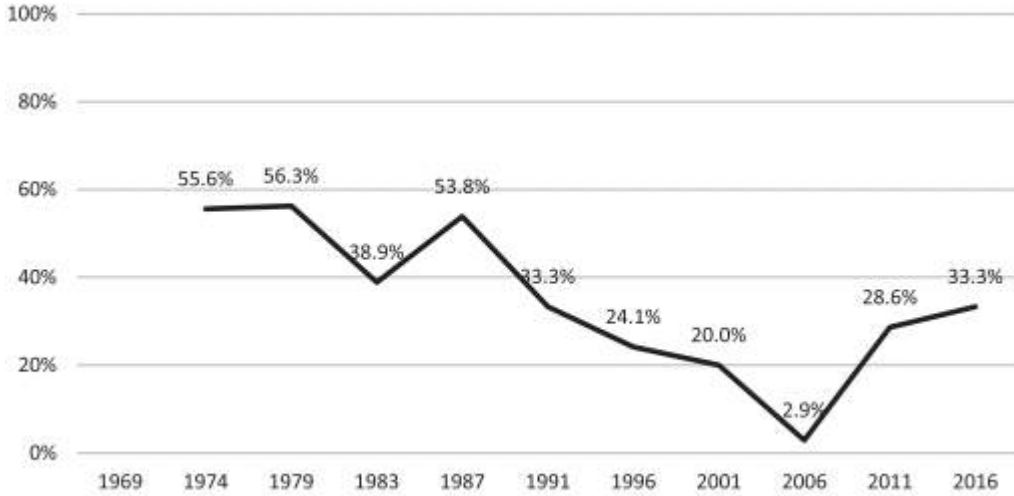
さて、こうした州議会議員の絶え間ない「新陳代謝」は、サラワク政治および連邦・州関係においてどのような意味をもつのだろうか。この問いを検討するには、初当選者の顔ぶれや候補者の選定理由などについて、さらなる調査・分析が必要である。現時点で一つ考えられることは、サラワク BN に所属する州議会議員の新陳代謝が盛んになればなるほど、DAP や PKR に所属する州議会議員のなかから、サラワク BN の所属議員よりも

グラフ1. サラワク州議会選挙の当選者における初当選年の分布と初当選者の割合
(選挙年別) (1969-2016)



出所：サラワク州議会選挙当選者データベースより筆者作成

グラフ 2. PBB に所属する当選者における初当選者の割合（1969-2016）



出所：サラワク州議会選挙当選者データベースより筆者作成

議員歴の長い議員が出てくる可能性がある、ということである。将来的にはサラワク BN と DAP および PKR の州議会議員の議員歴の平均値が逆転するかもしれない。そのときには州議会の審議過程において DAP 議員や PKR 議員がサラワク BN 議員よりも政治的経験と手腕に長け、たとえ DAP や PKR が野党であったとしても、彼らの提案事項や意見が州議会を通る可能性が出てくるのかもしれない。

Ⅲ 州議会選挙当選者にみるサラワク政治の変化（3） ——州政治指導者と州政治エリートの州議会議員歴の乖離

さて、前節ではサラワク州の州議会議員にみられる「新陳代謝」を明らかにしたが、その一方で、サラワク州の政治指導者たち（州首相、州政府閣僚、サラワク BN 構成党の幹部等）の多くは古参の州政治エリートたちである。例えば、故アデナン・サテム前州首相（前 PBB 党首）は 1979 年の州議会選挙で初当選し、以後再選を繰り返してきた。またアバン・ジョハリ州首相（PBB 党首）およびジェームズ・マシ副州首相（PRS 党首）は、1983 年の州議会選挙に初当選して以来の州議会議員であり、次期州首相候補ともいわれるアワン・トゥング第二資源管理・環境大臣（PBB 上級副党首）は 1987 年の州議会選挙に初当選して以来の州議会議員である。

こうしたサラワク州の政治指導者層の州議会議員歴（政治的経験値と言い換えてもよいかもしれない）と、彼らが率いる州議会議員の議員歴は年々乖離していく傾向にある。直近の 2016 年の州議会選挙の当選者をみてみると、現在の政治指導者層を構成する古参議員の割合は極めて少ない¹⁸。具体的にみていくと、2016 年時点で 1969 年の第一回州議会

選挙あるいは1974年の第二回州議会選挙で初当選して以来の州議会議員は1人もいない。1979年の州議会選挙に初当選して以来の議員は2人（故アデナン・サテム前州首相、アンブロス・ブリカウPBB州議会議員）、1983年以来の議員は2人（アバン・ジョハリ州首相、ジェームズ・マシ副州首相）、1987年以来の議員は1人（アワン・トゥンガPBB上級副党首）だけである。これに対して、1991年以降の州議会選挙で初当選して以来の議員は77人いる（当選者の93. %）。前述のとおり、2016年の州議会選挙の初当選者数は過去最大であり（30人）、今後の州議会選挙でも当選者の一定数が初当選者であると考ええると、サラワク州における政治指導者層とそれ以外の州議会議員の政治的経験値のギャップは今後ますます拡大すると考えられる。

このことは、現在のサラワク州の政治指導者たちが引退した後、次の指導者層がどのような特徴や傾向をもつ人々になるのか、ということに影響を与えると考えられる。現時点で予測することは困難であるが、注目すべきはサラワクの自治をめぐる問題と政党関係だろう。

第一の注目点は、前節で述べた連邦政府とサラワク州政府の間の「自治の問題」をめぐる今後の政治的駆け引きである。次のサラワク州の政治指導者たちが連邦政府に対して自治権をどの程度求めるのか、また、交渉においてどのような戦略・方法をとるのが注目される。これまでのサラワク州の政治指導者たちは、1963年にマレーシア連邦が成立した当時の記憶をある程度実体験としてもち、また、現在の連邦政府の政治指導者たちよりも政治経験が長いため、政治的交渉に長けている。たとえば、ナジブ首相の政界入りは1976年であるのに対して、タイプ・マフムド元州首相は1962年から政党活動を始め、1963年にはサラワク州政府のコミュニケーション・労働大臣に就任した。また、アバン・ジョハリ現州首相は1977年にはすでに州政府の産業・インフラ大臣に就任している¹⁹。

しかし、こうした古参の州政治エリートがサラワク州政界から引退すれば、次の担い手となるのはおそらく現在の州議会議員の中堅グループである²⁰。彼らは現時点で議員経験をそれなりに積んでいるが、現在州政府の閣僚ポストに就いているのはわずか4人である²¹。他方で、彼らの交渉相手となる連邦政府の政治指導者たちは、今後大きな政治変動や政界

¹⁸ 本稿では、便宜上、州議会議員の古参グループを1987年以前の州議会選挙で初当選して以来の州議会議員とする。2016年時点での州議会議員歴は29年以上ということになる。

¹⁹ ナジブ首相は1953年生まれであり、1976年の連邦下院選挙では23歳の若さで初当選を果たした。初入閣は1978年であり、連邦政府のエネルギー・通信・郵政副大臣に任命された。

²⁰ 本稿では、中堅グループを便宜上191年から2006年までの州議会選挙で初当選し、現在まで州議会議員に再選し続けている人々とする。2016年現在の彼・彼女らの州議会議員歴は10-25年ということになる。

²¹ 2017年1月時点のサラワク州政府閣僚9人のうち州議会議員の中堅グループは、ウォン・スーンコー第二財務大臣（BN Direct, 元 SUPP, 華人, 男性）、マイケル・マニン青年・スポーツ・団結大臣（PBB, 非ムスリム・ブミプトラ, 男性）、ステフェン・ルンディ公共施設大臣（PBB, 非ムスリム・ブミプトラ, 男性）、ファティマ・アブドゥラ福祉・女性・コミュニティ大臣（PBB, ムスリム・ブミプトラ, 女性）の4人である。

再編が起きない限り、おそらく現在の連邦政府大臣や UMNO 中央執行部幹部、UMNO 州支部幹部などで構成されることになるだろう。彼らは現在のサラワク州議会議員の中堅グループよりもおそらく政治経験を豊富に持ち、政治的交渉にも長けた人々であると予想される。そうした連邦政府の政治指導者たちに対して、次のサラワク州政治指導者たちは一体どのように自治権拡大の交渉を進めるのか。彼らはサラワク州の「自治の問題」をどのようにとらえ、どのような戦略を立てるのか。今後のサラワク政治を分析する上で注目すべき点であると考ええる。

第二の注目点は、サラワク BN 内の政党関係や各政党内のパワーバランス、与野党間関係である。これらが次の世代の政治指導者の下でどのように変化するのか。特に注目すべきはサラワク BN の最大与党である PBB である。本来 PBB には様々なレベルの派閥が存在するが²²、これまではタイプ・マフムド元州首相による強いリーダーシップと各派閥に対する巧みな政治的采配によって党内の統一が維持されていた。タイプ・マフムドは現在も PBB に対して影響力を持つが、すでに 80 歳を迎えた彼の政治的影響力が今後も長く続くとは考え難い。では、将来タイプ・マフムドが実質的に政界から去った後、誰が PBB の指導者になるのか、その人物はどの派閥から出て来るのか、新たな PBB 指導者は党内人事や選挙時の候補者選定、州閣僚人事等においてどのような采配を振るのか、それによって PBB 内のパワーバランスはどう変化するのか。もし特定の派閥が優遇されることになれば、PBB が分裂する可能性もある。そうなればサラワク BN の構成党が変化する可能性があり、また、政党のもつ集票力も変わるだろう。もはやサラワク州が BN の堅固な票田であり続けるかどうかは予測できない。

IV 結びにかえて マレーシア政治研究における意味

本稿で述べたサラワク州議会議員に関する分析は、マレーシア政治研究の文脈においてどのような意味を持つのか。最後に 3 つ整理しておきたい。

一つは選挙動向との関係である。具体的に言えば、今後の連邦下院選挙におけるサラワク BN の貢献度ということになる。次の連邦下院選挙でのサラワク BN の貢献度については、2016 年のサラワク州議会選挙でのナジブ首相による「自治権の拡大に関する話し

²² PBB の派閥には、1973 年の政党設立以前の前身政党 (Pesaka, Bumiputra) による派閥、エスニック集団レベルでの派閥 (マレー、ムラナウ、イバン、ビダユ、クラビット・カヤン・ケニヤなど)、マレー人どうしの出身地レベルでの派閥 (クチン周辺、北部、中部) や政治的志向の違いによる派閥 (連邦政府支持派、サラワク州政府支持派)、イバン人どうしのリーダーごとの派閥などがある。なお、マレー人の出身地別派閥は異なる指導者を支持する傾向をもち、クチン周辺のマレー人はマレー人のアバン・ジョハリ現州首相の支持派、北部と中部出身のマレー人はアワン・トゥンガやタイプ・マフムドなどムラナウ人指導者の支持派といわれる。サラワク州政治に詳しい地元ジャーナリストへの電話インタビューによる (2017 年 1 月 21 日)。

合いの継続」という発言に対する連邦政府の対応次第であると考えられる。今後アバン・ジョハリ州首相とナジブ首相がどのような駆け引きを行うのかに注目したい。また、他にも連邦政府の施策や発言の中にサラワク州の政治行政にマイナスに作用し得る事柄があれば、サラワク BN は候補者重視の選挙区を利用して BN の議席数をコントロールするかもしれない。

より中長期的な選挙動向については、タイプ・マフムドが政界を去った後の PBB 指導者が誰になるのかによって左右されることが考えられる。今後の PBB の党内政治次第でサラワク BN には大幅な再編が起きる可能性があり、再編によってサラワク BN の集票力が弱まることもあり得る。そうなればサラワク州が今後も BN の堅固な票田であり続ける保証はないだろう。

第二に、サラワク州の次の世代の政治指導者が「自治の問題」にどう対応するのかという問題があり、これが将来のマレーシア連邦の政治的安定に影響を与える可能性がある。今日のサラワク州の経済的状況は、マレーシア連邦が成立した 1963 年当時とは全く異なる。かつてのサラワク州はほぼ未開発の熱帯雨林地帯であったが、現在では天然資源開発が進み、また、今後のさらなる産業発展に必要な技術や大資本を持つ地元企業がある。また、サラワク州は半島部とは異なる独自の社会、文化、歴史を持つ。すでに述べたように、今日のサラワク州では自治権の保障を求める動きが社会的にも広まりつつある。そうした声が今後サラワク社会にさらに広がり、サラワク BN のなかにも急進的な自治権保障の運動を支持する政治家が増えてくれば、サラワク州の政治指導者たちは連邦政府との交渉において、これまでのような政府間の政治的駆け引きではなく、住民動員を伴う急進的戦略をとることもあり得るかもしれない。

最後に、サラワク州の州議会議員にみられる絶え間ない新陳代謝は、今後のマレーシアにおける政治家と企業、あるいは政治家と選挙区民の間のパトロン・クライアント関係に関する議論に新たな視点をもたらすかもしれない。サラワク州に限らず、州議会議員の新しい新陳代謝はおそらくどの州においても起きていると考えられる。新たに州政界入りした州議会議員たちは、過去の州議会議員が築いた地元企業や選挙区の住民とのパトロン・クライアント関係にどのように組み込まれていくのか。あるいは、全く新しいパトロン・クライアント関係を構築するのか。また今後は与党議員を凌ぐ州議会議員をもつ野党議員が現れる可能性があり、そうなれば野党議員と有権者の間にも何らかのパトロン・クライアント関係が構築されるかもしれない。パトロン・クライアント関係の多様化は、今後のマレーシア政治研究における新たな分析課題になる可能性がある。こうした中長期的な今後の政治的变化を探る上でも、サラワク州政治の動向は、マレーシア半島部の政治家やマレーシア政治研究者にとって、これまで以上に見逃せないものになるだろう。

〈参考文献〉

日本語文献

- 森下明子 (2008) 「なぜサラワクとサバではBNが「圧勝」したのか」 山本博之編『日本マレーシア研究会 Discussion Paper1 「民族の政治」は終わったのか?——2008 年マレーシア総選挙の現地報告と分析』日本マレーシア研究会、135-140 頁。
- 中村正志 (2016) 「マレーシア：第 11 回サラワク州議会選挙の結果と政局への影響」 ジェトロ・アジア経済研究所 (2016 年 1 月 6 日最終アクセス、http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Region/Asia/Radar/pdf/201605_nakamura.pdf よりダウンロード)

英語文献

- Aeria, Andrew (2016) "Economic Development via Dam Building: The Role of the State Government in the Sarawak Corridor of Renewable Energy and the Impact on Environment and Local Communities," *Southeast Asian Studies*, Vol. 5. No. 3: 373-412.
- Brown, David Walter (2001) "Why Governments Fail to Capture Economic Rent: The Unofficial Appropriation of Rain Forest Rent by Rulers in Insular Southeast Asia Between 1970 and 1999," Ph. D. Dissertation. University of Washington.
- Chin, James (1999) "Going East: UMNO's entry into Sabah Politics," *Asian Journal of Political Science*, Vol. 7. No. 1: 20-40.
- Harding, Andrew J. and Chin, James. eds. (2015) *50 Years of Malaysia: Federalism Revisited*. Marshall Cavendish International (Asia) Pte Ltd.
- Leigh, Michael. B. (1974) *The Rising Moon: Political Change in Sarawak*. Sydney University Press.
- Morishita, Akiko. 2009. "Politics and Timber in Malaysia," *Asian Transformations in Action: The Work of the 2006/2007 API Fellows*. The Nippon Foundation, pp. 1-6.

新聞記事

- "Pressure mounts on federal govt as Sarawak calls for greater autonomy," *Channel News Asia*. 7 May, 2016.
- "S4S rally outside Sarawak assembly for autonomy," *Free Malaysia Today*. 21 November, 2016. <http://www.freemalaysiatoday.com/category/nation/2016/11/21/s4s-holds-rally-opposite-state-assembly-calls-for-sarawak-motion-to-be-tabled/> (2017 年 2 月 4 日最終アクセス)
- "S4S: Sarawak should control its own resources," *Free Malaysia Today*. 6 December, 2016. <http://www.freemalaysiatoday.com/category/nation/2016/12/06/s4s-sarawak-should-control-its-own-resources/> (2017 年 2 月 4 日最終アクセス)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワクにおける生物多様性と生態系サービスの評価

竹内やよい

はじめに

日本の生態学者が東南アジア熱帯林で大々的に調査を開始したのは、1960 年代後半にさかのぼる。当時、生物生産力の解明を課題とする国際生物学事業計画 (International Biological Program, IBP) が立ち上がり、生態学者は海外へ調査研究を広げていった (黒岩, 1990:51-73)。高温多湿の熱帯林も対象の一つで、マレーシアをはじめとする国々で熱帯林の生産力の高さを明かにする研究を行い大きな成果を上げた。それから 50 年。学術的、人的交流を深めながら東南アジア各地で調査が展開され、IBP をはじめとする国際的共同研究の下、東南アジア熱帯林生態系について多くの知見が蓄積されている。一方、この 50 年で熱帯の自然環境・社会環境は大きく変化した。開発や資源採集のために熱帯林が切り開かれ、それによる環境の変化も地域、地球規模で起きている。本稿では、「生物多様性」「生態系サービス」をキーワードとして、熱帯林を巡る地球環境問題とその解決に向けた研究を取り上げる。

最初に 2 つのキーワードを整理しておこう。「生物多様性」とは、その名の通り生物が多様な状態を示すものである¹。特に熱帯林は地球上の生物の約半数が生息しており (Hurlbert and Jetz, 2007:13384-13389)、生物多様性のホットスポットであるといわれている (Myers et al., 2000: 843-845)。「生態系サービス」は、生物多様性を含む生態系が人間社会にもたらす恩恵を指す² (MA, 2005)。生態系と人間社会を結びつけるための

¹ 生物多様性は、「生態系」「生物種」「遺伝子」の 3 つの階層をもつと一般的に定義される。「生物種」の多様性は、複数の生物種が同時に存在する状態を指す。また、同じ種内でも個体によって遺伝的な違いがあれば「遺伝子」が多様な状態といえる。また、森林・湖沼・農地などの「生態系」の多様性は、それぞれの生態系に特有の生き物にとっても重要である。

² 国連ミレニアム生態系評価 (MA, 2005) では、生態系サービスを次の 4 つの区分に分類している。1) 供給サービス：食料、燃料、木材、繊維、薬品、水等、農林水産業等を通じてもたらされている人間の生活に重要な資源を供給するサービス、2) 調整サービス：森林があることによって気候が緩和されたり、洪水が起これにくくなったり、水が浄化されたりといった、環境を制御するサービス、3) 文化的サービス：精神的充足、美的な楽しみ、宗教・社会制度の基盤、レクリエーションの機会等を与えるサービス、4) 基盤サービス：上記 1) ～3) を支えるサービスであり、植物の光合成による炭素隔離、土壌形成、栄養循環、水循環等がこれに当たる。

用語であり、この 10 年で認識がより高まっている。本稿では、まず生物多様性と生態系サービスに関する研究の背景、その中でもボルネオやマレーシア・サラワク州の位置づけについて説明し、筆者らが現在取り組んでいるサラワクでの研究を紹介する。最後に、特に人文社会系と生態学との協働によって明らかにできると考えられる今後のサラワク研究の展開について議論したい。

I 生物多様性と生態系サービスと社会

地球規模での生物多様性や生態系サービスの評価を初めて行ったのは、国連ミレニアム生態系評価である (MA, 2005)。地球規模で生物多様性が減少しており、生態系サービスが劣化し、現在の利用が持続可能ではないことを報告した (Díaz et al., 2006: e277; MA, 2005)。それ以降、生物多様性と生態系サービスは人間の福利において不可欠であることが一般的な理解となりつつあるが、地球規模でいまだにどちらも減少・劣化が続いている (SCBD, 2014: 155)。国際社会では、将来に渡っての生物多様性と生態系サービスの利用の維持を実現することを目指して掲げている (e.g., 愛知目標 戦略目標 D (SCBD, 2010), 国連持続的開発目標 15 (UN, 2015))。こういった社会の要望を受けて、生態学の学問分野においても、生物多様性、生態系機能を理解することだけにとどまらず、地球環境問題の文脈で生物多様性、生態系機能と生態系サービスとの関わりを明らかにすることが求められている (図 1)。

生物多様性及び生態系機能それぞれについては、地域の生物相のインベントリー調査、

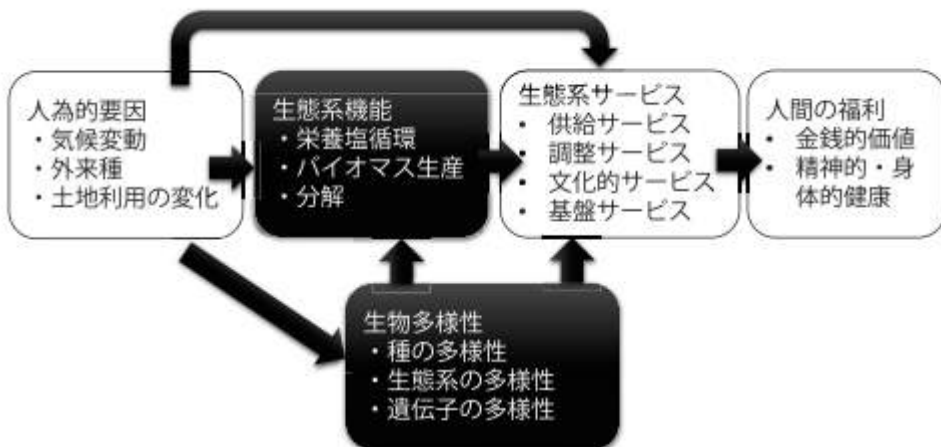


図 1. 人為的要因が生態系機能、生物多様性、生態系サービス、人間の福利に与える影響のフロー (Isbell et al., 2015:119-134 を改変)。塗りつぶし部分は生態学がこれまで取り組んできた研究内容。

土壌・水環境を含む生態系観測、生物群集や生物間の相互作用などの研究が地道に進められてきており、理解が進んでいる。現在は、各地で取得した観測データをつなぎ、地球規模での解析につなげるための国際的なネットワークの構築が課題となっている (e. g., GEOSS (Walters and Scholes, 2017))。生物多様性と生態系機能の両者の関係性についても、生態学の中心課題の一つであるため知見が蓄積されている。先行研究では、種数が多い生態系では生産性が高くなることが示されているが (Balvanera et al., 2013: 49-57; Tilman et al., 2012: 10394-10397)、いまだ議論は続いている。種数と生態系機能が独立ではなく、双方の間に相関関係があるならば、種多様性の減少は、生態系機能にも負の影響を与え、ひいては人間の福利に不可欠である生態系サービスにも影響を与えることとなる。持続的な生物多様性、生態系サービスの利用のためには、人為的要因による土地利用の変化や生息地面積の変化が、生態的・社会的プロセスを経て人間の福利に影響を与えることを包括的に捉えることが不可欠である (Diaz et al., 2015: 1-6; Isbell et al., 2015: 119-134)。

人為的要因と言いつても、気候変動や温暖化は地球規模の問題である一方、人間活動による生息地の減少、環境汚染、外来種問題は、局所～地域規模であり、空間スケールには大きな違いがある。特に、生物多様性の減少は、生息地破壊などの地域レベルでの影響が強く、既に深刻な影響が出ている (Newbold et al., 2015: 45-50)。森林が分断化する景観はどの熱帯地域においても一般的にみられる光景であり (Mayaux et al., 2005: 373-384)、分断化後 25 年の森林で小型哺乳類の在来種がほぼ絶滅するという最悪の結末も近年報告されている (Gibson et al., 2013: 1508-1510)。また、このままのペースで森林消失が進むと、東南アジア地域では哺乳類 13%、鳥類 16% が 2100 年までに絶滅するとの予測もある (Wilcove et al., 2013: 531-540)。

一方、生態系サービスの社会的な側面、例えばサービスの社会的需要と利用、サービス間の社会的なトレードオフ³などは理解が進んでいない (Villamagna et al., 2013: 114-121)。さらに、生態系サービスが人間の福利厚生に与える影響までのフローについての理解もまだ十分でない。また、これまでの生態系サービス研究では、経済的な価値に換算することに重きが置かれてきたが (Costanza et al., 2014: 152-158; TEEB, 2010)、サービス間にトレードオフがある場合や、市場がないために経済的な価値に換算できないタイプのサービスもあり (Adams, 2014: 549-551)、生態系サービスの評価法についても見直す必要に迫られている。

³ 例えば、森林から木を伐りだして木材として利用すれば (供給サービス)、バイオマス・炭素固定が減少する (調整サービス)。このように生態系サービス間にはトレードオフの関係が存在することが知られている。

II ボルネオ・サラワクの現状

世界の熱帯林の中でもボルネオは特に生物多様性が高く固有種も多い。例えば、マレーシア、サラワク州、ミリ市近郊のランビルヒルズ国立公園に設置された 52ha の植生プロットには、樹木種が 1,200 種近く記録されており、これは世界で最も種数が高い記録の一つとなっている⁴ (Plotkin et al., 2000:10850-0854)。熱帯林は、地球規模での生態系機能や生態系サービスを担う重要な場である (Gibson et al., 2011:378-381; Pan et al., 2011: 988-993)。地域スケールでは、地域の人々に食糧、水源、文化などの多様なサービスを与えている。特に発展途上国の貧困層や先住民族は、生活の中で生態系サービス (自然資本) の直接的な依存度が高いとの報告もある (TEEB, 2010)。しかしながら、熱帯地域は開発によって森林が急速に減少しており、生態系サービスの変化・劣化も起きている (Laurance and Balmford, 2013:308-09; Laurance et al., 2014:229-32)。

現在のボルネオ島の択伐林を含めた森林率は約 5 割で、原生林はそのうちさらに半分ほどと推定されている (Gaveau et al., 2014:e101654)。サラワク州全体では、森林のうち原生林は 15% 以下で、残りは択伐林であるため、ボルネオの中でも原生林率が低い州である (Gaveau et al., 2014:e101654)。開発のドライバーは、主に商業伐採⁵、アブラヤシやアカシアのプランテーションである。近年では、サラワク州はアブラヤシプランテーション開発が進行しており、1980 年代後半では州面積の約 0.5% に過ぎなかったが、2013 年の時点では 10% を超える。この数年で、企業による経営だけでなく、農村部の零細農家も焼畑をやめてアブラヤシを植えるケースも増えてきている (Soda et al., 2016:353-363)。現在、開発は農村部にまで広がっており、低地熱帯林では原生状態の森林はほぼ壊滅状態である。一方、開発によって伐採道路が農村部の集落まで伸びており、人々の交通手段が水上交通から陸上交通へと変化しつつある。実際、1973 年から 2010 年までのサラワク州の伐採道路の密度は、他のボルネオの地域よりも非常に高く開発が急速に進行している地域であることがわかる (0.89km/km²、ボルネオ平均 0.48km/km² (Gaveau et al., 2014:e101654))。都市部へのアクセスの向上は、結果的に農村部における土地利用の改変を促進したり、人々の生業や生活を転換させたりしている。サラワクの先住民の人々は、森林から様々な生態系サービスを享受しているが、開発の圧力によってその利用に変

⁴ ランビルヒルズ国立公園の 52ha プロットは、大規模面積での森林動態観測のために日本のグループやアメリカのスミソニアン熱帯研究所らが協働して 1990 年に設置したものである。プロット内の直径 1cm 以上の樹木約 35 万本がすべてマーキングされている。そして、5 年に一度、樹木の生存、生長を追跡している。また、林冠研究も盛んであり、キャノピーウォークウェイや林冠クレーンなどの設備がある。現在では熱帯生態学研究において、世界的にも著名な場所の一つである。

⁵ サラワク州における合板の最大輸出先は日本であり、日本にとっても最大の輸入先はサラワク州である。

化が生まれつつある (Meijaard et al., 2013:e73008; Sakai et al., 2016:340-49)。開発が先行し、熱帯原生林が減少する中、地域の生物多様性はどのように保全できるのだろうか？ また、地域住民への生態系サービスは担保されるのだろうか？ この問いに答えるため、筆者は現在サラワク州の農村部で生物多様性と生態系サービスについての研究を行っている。その一部について次で紹介したい。

Ⅲ 研究事例——開発が進む農村地域における生物多様性と生態系サービス

マレーシア・サラワク州の先住民イバンの社会は、伝統的に焼畑農業を営む。焼畑農業は、最初に森林を切り開き、火入れを行ったあとに、稲などの作物を栽培する農法で、東南アジアではよく見られる (チン, 1993)。火入れ後の開けた土地には、最初に丈の比較的短い一年生草本が生い茂るが、2 年目以降は稲を被陰する多年生草本が繁茂するために、一年から数年ごとに畑の場所を移動させるのが通常となっており、人口密度の低い熱帯地域では最も効率のよい農法といわれている (百瀬, 2006:146-155)。放棄された畑は、草原から二次林、森林へと遷移が進む。従って先住民の農耕地周辺には、遷移の度合いが異なる森林がモザイク状に広がる景観となっている。

この焼畑後の二次林 (休閑林) が優占する焼畑農業地の景観の中には、イバン語で「プラウ pulau (字義どおりには「島」を意味する)」と呼ばれる原生状態に近い森林が断片



写真 1. 小高い丘に残されたプラウ。周りは焼畑休閑林に囲まれている。
(ジェラロン川流域、成田正司撮影)

的に残されている。プラウの種類・成立条件を次に 3 つ挙げる (Sutlive and Sutlive, 2001)。1) 農耕不適地：土地がやせている、地形が急峻である、村からのアクセスが困難など、農耕地として不適な場所であるため使用できない場所。2) 禁忌森：精霊や妖怪が住んでいるため神聖あるいは不可触とされ、人の立ち入りが制限されている場所。3) 水源林：森林内の沢に小さな堰を作り、集落までパイプを引いて生活用水を採水している。集水のために維持された森である。プラウは、一般的に村での共有林のケースが多いが、その他にも個人の焼畑地に残された個人所有のプラウも存在する (Takeuchi et al. unpublished)。元々はこの 3 つの成立条件の中で最も多いのは 1) の農耕不適地であるため残されたケースであった。

プラウの伝統的な利用法としては、木材、ラタン、食物などの生活に必要な森林資源の調達やイノシシ・シカの狩猟も挙げられる。特に、プラウは木材の調達の場としてのバックアップとしての機能が重要視されていた (de Jong, 2002)。なぜなら、先住民が生活している共住家屋・ロングハウスは木材でできているため、火事による消失というリスクが常に存在するからである。火事は数十年に一度は発生しており、一度消失すると速やかに再建することが必要になる。村の領域内にあるプラウは、わずかな時間的経済的コストでロングハウスの再建に必要な建材を提供できる。そのために、多くの村ではプラウの樹木の伐採は最小限にとどめるという取り決めがあり、伐採のためには村長の許可を必要としているケースが多い。

このように、プラウは森林資源を確保するため大規模なかく乱が禁止されている、もしくは神聖で立ち入りが禁止されている場所であるため、原生状態に近い森林であるとされている (百瀬, 2006:146-155)。先行研究においても、プラウは「原生林」と定義されることが多い (Mulyoutami et al., 2009: 2054-2061)。このプラウが地域の生物多様性を保持し、人々に生態系サービスを提供する場であるならば、保全の価値が高い森林であるといえる。しかし開発インセンティブが増大し、土地利用の変化が著しい現在、プラウの所有、プラウに対する人々の考え方が変化している可能性がある。そこで筆者は、プラウが地域の生物多様性を保持し、人々へ生態系サービスを提供する場所であり保全対象として適切か、また開発は地域社会の生物多様性や生態系サービスに影響を与えているか、について明らかにするための研究を行っている。

研究の対象地としているのは、マレーシア・サラワク州ジェラロン川流域で、先住民族であるイバン、プナンの人々が居住する農村地域である。この地域は、伐採コンセッションの中にあり、近隣ではプランテーション開発も迫る場所である。ジェラロン川流域の 6 つの村を対象として聞き取り調査をした結果、6 村中 5 村が、水源林とする少なくとも 1 か所のプラウを保持しており、合計 10 か所のプラウを保持していることが分かった。各村の住民に、それぞれのプラウが原生林であるか否かを尋ねると、原生林であると答えたプラウは 10 か所中 3 か所だけであった。残りの 7 か所は、1950 年代から 2014 年まで

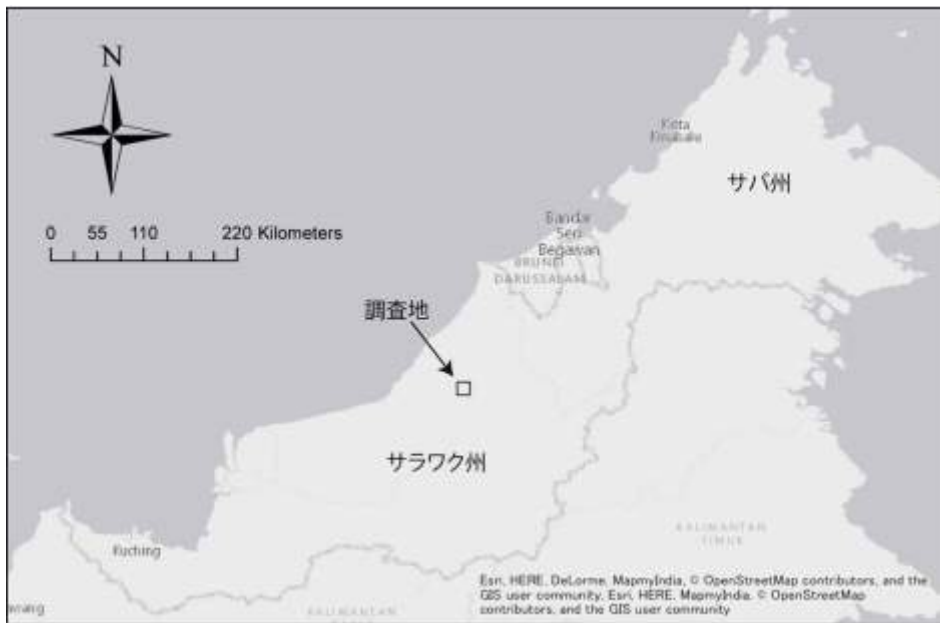


図 2. 調査地であるマレーシア、サラワク州ジェラロン川流域の位置図。

の間に少なくとも一度は択伐を受けた場所であるという。皆伐ではなく、択伐の強度もそれほど高くなかったため、劣化はしたものの森林は残されている。そこで、その森を「プラウ」として利用しているという。さらにそのうち、1 か所は既に企業によるアブラヤシプランテーション開発のため切り開かれることが決まっていた。つまり、伝統的な定義ではプラウは原生林とされていたが、実際は一度択伐が入った二次林も含んでいることが分かった。開発が進む社会環境に応じて人々のプラウの概念も変化していると考えられる。

プラウは、かならずしも完全な原生林ではなく、実際は択伐された二次林も含まれていたが、地域の生物多様性は維持されているのだろうか。もし、択伐林も含めた個々のプラウが原生林と同等の生物多様性を持ち、またそれぞれ異なった種のセットを保持するならば、複数のプラウを保護することが、地域的な生物多様性の維持に有効であろう。そこで、地域の生物多様性の貯蔵地としてのプラウの役割について明らかにした。

調査対象のプラウ 10 か所中、8 か所に計 16 個の植生プロットを設置して樹木の種多様性の調査を行った。植生プロットは、一辺 50m の正方形の区画で、その中に出現する胸高直径 10cm 以上の樹木を対象としている。すべての樹木にラベルをつけ、胸高直径を計測し、種同定を行った。これまでの結果、計 2,500 本以上の個体、540 種を超える樹木種みられた (Takeuchi et al., unpublished)。種の多様性については、生息地内の種数と複数の生息地間の種の構成の類似性を用いて評価を行った。種数については、プラウ内の森林とその地域に所在する国立公園内の原生林の間で、ほぼ同等の豊かさを持っていることが分かった (図 1)。一度択伐されたプラウの方が種多様性は低い傾向はあるものの、原

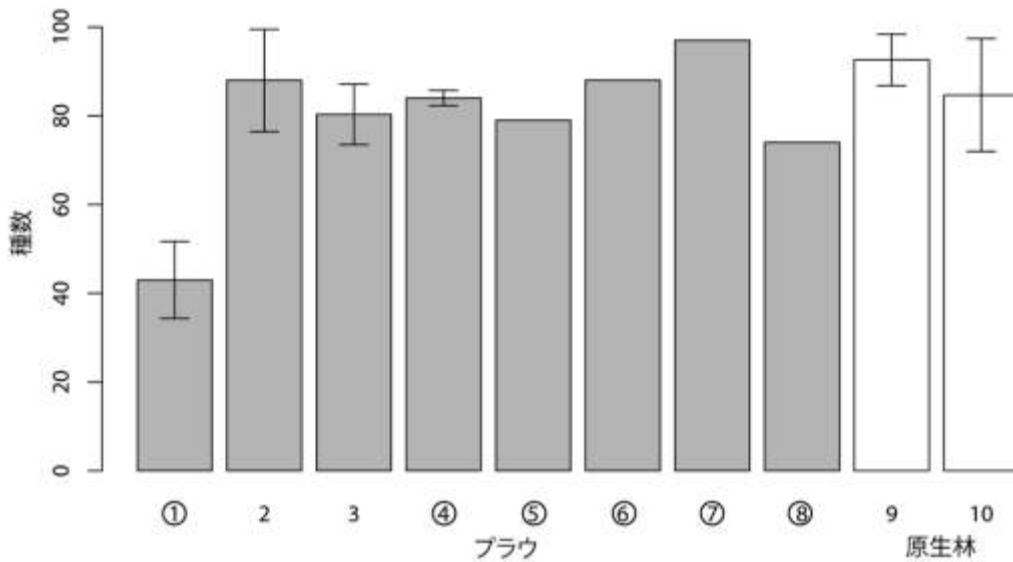


図 3. プラウ (1–8) と原生林 (9, 10) のプロット 0.25ha 内に出現した樹木種数 (バーは標準偏差)。

○は過去に伐採があったプラウ。1 は貧栄養土壌であるケランガス林で、その他 2～10 の低地・丘陵フタバガキ混交林よりも種多様性は低い。

生林の種多様性と有意な差は認められなかった。また、個々のプラウは特有の種に富んでおり、プラウ間の種構成の類似性は非常に低い状態であった。一方、択伐を過去に受けたプラウの胸高直径は原生林プラウに比べて小さかった。つまり、択伐によってバイオマスの減少があり、まだ回復には至っていない状態である。プラウの種多様性の高さを説明する要因としては、次の二点が考えられる。一つ目は、プラウの周りは焼畑休閑林で、古い二次林も含まれており、それらが種多様性の回復のための種子源となっていることである。伐採によって種多様性が減少しても、周りの二次林から種の供給があるために、多様性が回復した可能性がある。二つ目は、伐採が起きてからまだ年月がそれほど経っていないため、種多様性への影響が顕在化していないことである⁶。これらを検証するには、より長期的な観測が必要である。

次に、絶滅危惧種の保全の観点からのプラウの評価を行った。世界の絶滅のおそれのある生物種のリストであるレッドリスト (World Conservation Monitoring Centre, 2016) に掲載されている種と、サラワク州が指定している保護対象種リスト (Sarawak Government, 1998) に含まれる種がプラウ内の植生プロットにどれくらい含まれているかを検

⁶ 種多様性や種構成には、その群集を取り囲む景観構造や配置が影響を与えるが、この影響の顕在化は、一般的にタイムラグが生じていることが知られている。例えば、分断化された森林に残された樹木種は寿命が長いために、その集団から消滅するまでには数十年かかる。

討した。その結果、プラウ内で確認した樹木種のうちレッドリスト掲載種は 54 種あり、サラワクに生息するレッドリスト掲載種の 17%がこのプラウに存在していることになる。特筆すべき種は、ラミン（ジンチョウゲ科 *Gonystylus* 属）とガハル（ジンチョウゲ科 *Aquilaria beccarina*）である。プロット内ではラミン 3 種が出現しており、そのうちの 1 種 *Gonystylus macrophyllus* はレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。ラミンは、非常に質が高い建材となるため商業価値が高く、古くから国際的に取引きされていた。大量伐採によって数が激減したため、現在ではワシントン条約で取引きに制限がかけられており（付属書Ⅱ, CITES, 2015）、またサラワク州の保護対象種である（Sarawak Government, 1998）。市場では大変価値の高い建材である一方、先住民の人々はラミンを利用しない。なぜなら、ラミンから出る樹液に触れるとかゆみがでるためである。また、ガハルは沈香（香木）の材料となる種で、商品として主に中国に輸出されている（金沢, 2010）。乱獲が問題になり、個体数が激減したため、ラミンと同じく絶滅危惧種であり、保全の対象となっている（レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類、ワシントン条約付属書Ⅱ、サラワク州の保護対象種）。先住民イバンの人々の間では、伝統的に薬としての利用はあったものの、現在は西洋薬を用いているため利用はほぼない。ラミンとガハルは市場では価値が高いものの、先住民の社会での利用はほぼないために、樹木はそのまま手つかずの状態に残される可能性が高い。プラウはこれらの保全の場となりうることが考えられる。

これまでの結果からは、プラウは絶滅危惧種を含む地域の生物多様性を保持しており、保全の対象としては適切であるといえる。プラウから地域住民への生態系サービスは、食糧や材料の採集などの生物資源の伝統的な利用はいまだにあるものの、減少傾向にある。一方で、プラウの水資源の需要はより増している。実は、水源林としてのプラウの利用は比較的近年の利用法である。ボルネオの先住民イバンの村々は大河川沿いに立地している場合も多く、河川が主要な生活用水の調達であった。しかし、上流部の森林伐採やプランテーション開発に伴い土壌流出による汚濁、農薬や化学肥料の混入の懸念が高まっている。そこで質的劣化の少ない代替水源として、プラウ沢水の価値がより高まっているのだ。開発による生態系サービスの利用の変化は、特に生物資源と水資源の利用において対照的である。こういった変化は、開発による自然環境・社会環境への人々の適応の結果であり、まさしく現在のサラワクだからこそ顕著にみられる現象である。

IV 今後の展望

サラワク州において、今後も商業伐採やプランテーション開発が進むことは必至である。いかに開発と保全とのバランスを取り、今残されている豊かな生物多様性と地域住民への生態系サービスを両立することは大きな課題である。特に人文学・社会科学との協働が必要な研究の観点から、サラワクにおいて重要な方向性と考える点を次に 2 つ挙げる。

一つ目は、住民の保全のインセンティブの解明である。生物多様性や生態系サービスは地域の問題であるために、保全は地域住民の参加が欠かせない。そのためには、住民の保全のインセンティブや認識を明らかにすることが必要である。筆者らのこれまでの調査を通じて、人々の「生物多様性」に対する認識や評価は低いことが分かってきた。食糧とする植物、薪や樹脂などの燃料、ラタンや竹などの工芸・建築材料などの生物資源は、街に回っている野菜やプラスチック製の商品に置き代わっている。つまり、都市へのアクセスが向上するほど、プラウの生物資源は利用が減少することが考えられ、利用がないサービスは保全のインセンティブには結びつかない。そこで、持続的に利用されるサービスや需要の高いサービスについて明らかにする必要がある。例えば、イノシシの狩猟は、そのために週末に都市から村に帰ってくる人々もいるほど好まれる。理由として、野生動物の肉は市場での流通が禁止されているが、イノシシ肉は多くの人々にとって最高のご馳走であること、狩猟行為に娯楽性が含まれていることなどが考えられる。また、ラタン等でカゴやゴザを編んでそれをお土産として販売する村もあり、森林はその材料調達のための需要がある。さらに、先述のような水源林としての価値はより一般的な価値として認識しやすく、多くの人は水源として保全することに賛同している。こういった、各地域の生態系サービスの需要を多角的に捉えることは、プラウの社会的な保全価値を高め、さらに保全のインセンティブを明らかにできるので、保全政策の効果を高めるためにも重要である。

二つ目に挙げるのは、持続的森林経営の中の生物多様性と生態系サービスの位置づけである。現在、サラワク政府は持続可能な森林管理の政策を掲げている。違法伐採の撲滅だけでなく、持続可能な森林管理を行う企業には長期の伐採ライセンスを与えることを開始した (Borneo Post, August 21, 2014)。持続可能な森林管理を実践する上で重要となる項目は、1) 将来に渡っての持続的な木材生産性が担保されている、2) 生物多様性や、土壌、水資源が保全されている、3) 地域社会、特に地元の生態系サービスが維持されている、ことである。サラワクの農村部では地域住民が権利を持っている土地の範囲が明確になっていないことも多く、元々地域住民が焼畑を行っていた場所やプラウを含んだ地域に対して伐採ライセンスが発行されていることも多い。この場合地域住民の同意無しにプラウ内の森林が伐採され、地域社会との軋轢が生じたケースも多く存在する。持続可能な森林管理を達成するためには、森林の地域社会への生態系サービス供給機能の維持は欠かせない。持続可能な森林管理、生物多様性保全、地域社会への生態系サービスのそれぞれの関係性を経済的、生態環境的、社会的な側面から明らかにし、どのような条件の下で、すべてプラスの状態を達成するかについて検討することは、学術的・社会的に重要な課題であろう。

上記のどちらについても、生態学や環境学調査だけでなく、人文科学・社会科学の調査が重要なカギであり、今後ますます学際的アプローチが有効な手段となるだろう。さらに、研究成果を社会・環境問題解決のために応用、展開することまでを目指すのであれば、様々

なステイクホルダーとの協働は必須である。

今後、環境悪化が進むのか、それとも持続可能な社会へ向かうのかは地球環境分野が抱える最大の課題である。サラワクは開発が進む現状の中で、いまだ高い生物多様性を保持し、多様な生態系サービスを受けている地域社会が存在する場所である。筆者は、生物多様性・生態系サービスを保持した形での持続可能な社会への転換は、サラワクだからこそ非常に価値が高く、また実現可能なのではないかと考えている。また、本稿で議論した熱帯林とその利用の価値は限られたものであるが、実際は文化、知識、歴史などもっと複雑で多様な価値が含まれている。多分野協働によって多次元に評価、認識されることは新しい価値の創造につながる可能性があり、そのことも大きく期待される。

謝辞

本研究のサラワク調査許可は、サラワク森林局の Engkamat anak Ladings 氏、現地調査と種同定には、Sarawak Forestry Corporation の Julaihi Abdullah 氏、Bibian Diway 氏、Tinjan anak Kuda 氏とその他スタッフにご協力を頂いた。また調査・解析においては、大阪市立大学の祖田亮次氏、地球環境戦略研究機関の鮫島弘光氏に多大なるご助言を頂いた。本研究は JSPS 科研費 22221010, 16K00641 の助成を受けたものである。

〈参考文献〉

日本語文献

- 金沢謙太郎 (2010) 「熱帯雨林と文化：沈香はどこから来てどこへ行くのか」 池谷和信編『地球環境史からの問い』岩波書店。
- 黒岩澄雄 (1990) 『物質生産の生態学—光合成から繁殖まで』東京大学出版会。
- チン, S. (1993) 「サラワクの焼畑と伐採」 竹内直一『熱帯雨林とサラワク先住民族』明石書店。
- 百瀬邦泰 (2006) 「焼畑は湿润熱帯における合理的な食糧生産手段」『理戦』85、146-155。

英語文献

- Adams, W. M. (2014) “The value of valuing nature,” *Science*, 346, 549-551.
- Balvanera, P., Siddique, I., Dee, L., Paquette, A., Isbell, F., Gonzalez, A., Byrnes, J., O’ Connor, M. I., Hungate, B. A., Griffin, J. N. (2013) “Linking Biodiversity and Ecosystem Services: Current Uncertainties and the Necessary Next Steps,” *Bioscience* 64, 49-57.
- Borneo Post, August 21, 2014 <http://www.theborneopost.com/2014/08/21/longer-tenure->

- for-timber-licence/
- CITES (2015) “Convention on International trade in endangered species of wild fauna and flora,” <https://www.cites.org/eng/app/appendices.php> (accessed July 23, 2015) .
- Costanza, R., de Groot, R., Sutton, P., van der Ploeg, S., Anderson, S. J., Kubiszewski, I., Farber, S., Turner, R. K. (2014) “Changes in the global value of ecosystem services,” *Global Environmental Change* 26, 152-158.
- Díaz, S., Demissew, S., Carabias, J., Joly, C., Lonsdale, M., Ash, N., Larigauderie, A., Adhikari, J. R., Arico, S., Baldi, A., Bartuska, A., Baste, I. A., Bilgin, A., Brondizio, E., Chan, K. M. A., Figueroa, V. E., Duraiappah, A., Fischer, M., Hill, R., Koetz, T., Leadley, P., Lyver, P., Mace, G. M., Martin-Lopez, B., Okumura, M., Pacheco, D., Pascual, U., Pérez, E.S., Reyers, B., Roth, E., Saito, O., Scholes, R. J., Sharma, N., Tallis, H., Thaman, R., Watson, R., Yahara, T., Hamid, Z. A., Akosim, C., Al-Hafedh, Y., Allahverdiyev, R., Amankwah, E., Asah, S. T., Asfaw, Z., Bartus, G., Brooks, L. A., Caillaux, J., Dalle, G., Darnaedi, D., Driver, A., Erpul, G., Escobar-Eyzaguirre, P., Failler, P., Fouda, A. M. M., Fu, B., Gundimeda, H., Hashimoto, S., Homer, F., Lavorel, S., Lichtenstein, G., Mala, W. A., Mandivenyi, W., Matczak, P., Mbizvo, C., Mehrdadi, M., Metzger, J. P., Mikissa, J. B., Moller, H., Mooney, H. A., Mumby, P., Nagendra, H., Nesshover, C., Oteng-Yeboah, A. A., Pataki, G., Rouget, M., Rubis, J., Schultz, M., Smith, P., Sumaila, R., Takeuchi, K., Thomas, S., Verma, M., Yeo-Chang, Y., Zlatanova, D. (2015) “The IPBES Conceptual Framework: Connecting Nature and People,” *Current Opinion in Environmental Sustainability* 14, 1-16.
- Díaz, S., Fargione, J., Chapin, F. S., III, Tilman, D. (2006) “Biodiversity Loss Threatens Human Well-Being,” *PLoS Biology*, 4, e277.
- de Jong, W. (2002) *Forest products and local forest management in West Kalimantan, Indonesia: implications for conservation and development*. Wageningen: Tropenbos International.
- Gaveau, D. L. A., Sloan, S., Molidena, E., Yaen, H., Sheil, D., Abram, N. K., Ancrenaz, M., Nasi, R., Quinones, M., Wielaard, N., Meijaard, E. (2014) “Four Decades of Forest Persistence, Clearance and Logging on Borneo,” *PLoS ONE* 9, e101654.
- Gibson, L., Lee, T. M., Koh, L. P., Brook, B. W., Gardner, T. A., Barlow, J., Peres, C. A., Bradshaw, C. J. A., Laurance, W. F., Lovejoy, T. E., Sodhi, N. S. (2011) “Primary Forests are Irreplaceable for Sustaining Tropical Biodiversity,” *Nature* 478, 378-381.

- Gibson, L., Lynam, A. J., Bradshaw, C. J. A., He, F., Bickford, D. P., Woodruff, D. S., Bumrungsri, S., Laurance, W. F. (2013) "Near-Complete Extinction of Native Small Mammal Fauna 25 Years After Forest Fragmentation," *Science* 341, 1508-1510.
- Hurlbert, A. H., Jetz, W. (2007) "Species Richness, Hotspots, and the Scale Dependence of Range Maps in Ecology and Conservation," *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 104, 13384-13389.
- Isbell, F., Tilman, D., Polasky, S., Loreau, M. (2015) "The biodiversity-dependent ecosystem service debt," *Ecology Letters*, 18, 119-134.
- Laurance, W. F., Balmford, A. (2013) "A global map for road building," *Nature* 495, 308-309.
- Laurance, W. F., Clements, G. R., Sloan, S., O'Connell, C. S., Mueller, N. D., Goosem, M., Venter, O., Edwards, D. P., Phalan, B., Balmford, A., Van Der Ree, R., Arrea, I. B. (2014) "A Global Strategy for Road Building," *Nature* 513, 229-232.
- Millennium Ecosystem Assessment (2005) *Ecosystems and Human Well-being: Synthesis*, Washington, D.C.: Island Press.
- Mayaux, P., Holmgren, P., Achard, F., Eva, H., Stibig, H.-J., Branthomme, A. (2005) "Tropical Forest Cover Change in the 1990s and Options for Future Monitoring," *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences* 360, 373-384.
- Meijaard, E., Abram, N. K., Wells, J. A., Pellier, A.-S., Ancrenaz, M., Gaveau, D. L. A., Runting, R. K., Mengersen, K. (2013) "People's Perceptions about the Importance of Forests on Borneo," *PloS ONE* 8, e73008.
- Mulyoutami, E., Rismawan, R., Joshi, L. (2009) "Local Knowledge and Management of Simpukng (Forest Gardens) among the Dayak People in East Kalimantan, Indonesia," *Forest Ecology and Management* 257, 2054-2061.
- Myers, N., Mittermeier, R., Mittermeier, C., da Fonseca, G., Kent, J. (2000) "Biodiversity Hotspots for Conservation Priorities," *Nature* 403, 843-845.
- Newbold, T., Hudson, L. N., Hill, S. L. L., Contu, S., Lysenko, I., Senior, R. A., Borger, L., Bennett, D. J., Choimes, A., Collen, B., Day, J., De Palma, A., Diaz, S., Echeverria-Londono, S., Edgar, M. J., Feldman, A., Garon, M., Harrison, M. L. K., Alhusseini, T., Ingram, D. J., Itescu, Y., Kattge, J., Kemp, V., Kirkpatrick, L., Kleyer, M., Correia, D. L. P., Martin, C. D., Meiri, S., Novosolov, M., Pan, Y., Phillips, H. R. P., Purves, D. W., Robinson, A., Simpson, J., Tuck, S. L., Weiher, E., White, H. J., Ewers, R. M., Mace, G. M., Scharlemann, J. P. W.,

- Purvis, A. (2015) “Global Effects of Land Use on Local Terrestrial Biodiversity,” *Nature* 520, 45–50.
- Pan, Y., Birdsey, R. A., Fang, J., Houghton, R., Kauppi, P. E., Kurz, W. A., Phillips, O. L., Shvidenko, A., Lewis, S. L., Canadell, J. G., Ciais, P., Jackson, R. B., Pacala, S. W., McGuire, A. D., Piao, S., Rautiainen, A., Sitch, S., Hayes, D. (2011) “A Large and Persistent Carbon Sink in the World’s Forests,” *Science* 333, 988–993.
- Plotkin, J. B., Potts, M. D., Yu, D. W., Bunyavejchewin, S., Condit, R., Foster, R., Hubbell, S., LaFrankie, J., Manokaran, N., Seng, L. H., Sukumar, R., Nowak, M. A., Ashton, P. S. (2000) “Predicting Species Diversity in Tropical Forests,” *Proceedings of the National Academy of Sciences* 97, 10850–10854.
- Sakai, S., Choy, Y. K., Kishimoto-Yamada, K., Takano, K. T., Ichikawa, M., Samejima, H., Kato, Y., Soda, R., Ushio, M., Saizen, I., Nakashizuka, T., Itioka, T. (2016) “Social and Ecological Factors Associated with the Use of Non-timber Forest Products by People in Rural Borneo,” *Biological Conservation* 204, Part B, 340–349.
- Sarawak Government (1998) *Wild Life Protection Ordinance* (Laws of Sarawak, Chapter 26) .
- SCBD (2010) Strategic Plan for Biodiversity 2011–2020, including Aichi Biodiversity Targets.
- SCBD (2014) Global Biodiversity Outlook 4, Montr 41.
- Soda, R., Kato, Y., Hon, J. (2016) “The Diversity of Small-scale Oil Palm Cultivation in Sarawak, Malaysia,” *The Geographical Journal* 182, 353–363.
- Sutlive, V. H., Sutlive, J. (2001) *The Encyclopaedia of Iban studies: Iban History, Society, and Culture*. Kuching: Tun Jugah Foundation.
- TEEB (2010) *The Economics of Ecosystems and Biodiversity Ecological and Economic Foundations* (Edited by Pushpam Kumar) , London and Washington: Earthscan.
- Tilman, D., Reich, P. B., Isbell, F. (2012) “Biodiversity Impacts Ecosystem Productivity as Much as Resources, Disturbance, or Herbivory,” *Proceedings of the National Academy of Sciences* 109, 10394–10397.
- UN (2015) “Transforming our World: The 2030 Agenda for Sustainable Development. Resolution adopted by the General Assembly (A/70/L.1) .”
- Villamagna, A. M., Angermeier, P. L., Bennett, E. M. (2013) “Capacity, Pressure, Demand, and Flow: A Conceptual Framework for Analyzing Ecosystem Service Provision and Delivery,” *Ecological Complexity* 15, 114–121.

Walters, M., Scholes, R. J. (2017) *The GEO Handbook on Biodiversity Observation Networks*. Springer International Publishing.

Wilcove, D. S., Giam, X., Edwards, D. P., Fisher, B., Koh, L. P. (2013) “Navjot’ s Nightmare Revisited: Logging, Agriculture, and Biodiversity in Southeast Asia,” *Trends in Ecology & Evolution* 28, 531-540.

World Conservation Monitoring Centre (2016) “The IUCN Red List of Threatened Species. Accessed on Oct 2016.”

(たけうち・やよい 国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワクのロングハウス社会におけるインドネシア人移住者との共住

加藤裕美

はじめに——マレーシアにおけるインドネシア人の増加

近年、マレーシア・サラワク州の内陸部において、インドネシア人の増加が顕著に見られるようになった。これまでも、多くのインドネシア人が木材伐採キャンプなどでの労働に従事してきたことはよく知られているが、彼らはサラワクの在地社会の人々と関係を築くことは限られていた。ところが、近年アブラヤシ・プランテーションで多数のインドネシア人が雇用されるのに伴って、そこから別の職業についたり、内陸部の先住民に雇われたりして、ロングハウスに暮らすインドネシア人が増えつつある。本稿では、サラワクの内陸部のロングハウスに暮らすインドネシア人に焦点を当て、彼らがどのような経緯でロングハウスに住み、どのようにロングハウスの人々と社会関係を築いているのかを考察する。

マレーシアでは、植民地期以前から近隣諸国との往来が盛んであった。特に経済的に発展した 1980 年代以降は、マレーシア国内での労働力の需要により、インドネシアやフィリピンからマレーシアへの労働移動が広く見られるようになった。政府の統計によると、1991 年には約 80 万人いた外国人労働者は、2000 年には約 138 万人に増え、2010 年には約 232 万人にも上っている (Department of Statistics Malaysia, 1992, 2001, 2011)。

マレーシアに滞在する外国人労働者のうち、出身国別ではインドネシアが最も多く 44% を占めている。次いでネパールが 17%、バングラデッシュが 15%、ミャンマーが 8% となっている。外国人労働者の就業先としては、業種別に最も多いのは、製造業が全体の 35% を占め、次いで建設業が 20%、プランテーションが 16%、サービス業が 12%、家事が 9%、農業が 8% を占めている。さらに、公的な統計資料に表れない非合法滞在の外国人労働者も含めるとその数は相当な人数となることが、マレーシア国内でも認識されている。

サラワクでの登録外国人は、2000 年に約 6 万人で (Department of Statistics Malaysia, 2001)、非合法の滞在者を合わせても 10 万人前後にとどまっていたと思われる。しかし、その後 10 年の間で、登録外国人数は 117,092 人 (Department of Statistics Malaysia Sarawak 2015) にまで増えた。そして、非合法のインドネシア人労働者がその 3 倍存在

するという新聞報道までなされている (Borneo Post 13, March, 2015)。一部の非合法のインドネシア人は、国境付近の非合法プランテーションで就業していると考えられるものの、近年、内陸のロングハウスに暮らすインドネシア人も増えている。本稿で対象とするカピット省ブラガにおいても、建設業や運搬業に携わるインドネシア人の男性が数多く存在する。ブラガ町で、食堂や商店の販売員として働くのは、多くがインドネシア人の女性である。地域社会の中にインドネシア人が暮らすことが当たり前の状況となっている。なかにはサラワクの人と結婚し、インドネシア人がロングハウスに住むことが日常的となっている。そこで問題となるのは、こうし非合法滞在のインドネシア人がどのように地域社会で生活をし、どのように在地の人々関わっているのかということである。

マレーシアの移民に関する先行研究では、19 世紀からのインド系移民や中国系移民を半島部のゴム・プランテーションや錫鉱山の労働者として受入れた状況を扱う研究がある。こうした研究では、同郷会の意義や出身地の地縁ネットワークの重要性、家族や親族の呼び寄せによる連鎖的な移住が指摘されてきた。近年みられるプランテーション会社でのインドネシア人雇用に関する研究では、外国人労働者の制度的政策的分析が行われている (Stahl, 1999, Riwant, 2004, Ford, 2006)。また、外国人労働者への懸念や非合法就労への対策について指摘されてきた (Pilai, 1994, Liow, 2003, Castls, 2004, Pyeet. al, 2012)。

一方、インドネシア人移民労働者に関する研究では、台湾や香港、サウジアラビアで働く女性の家事労働者に関する研究がおこなわれている (Loveband, 2004, Silvey, 2006, 澤井, 2016)。こうした研究では、インドネシア人女性家事労働者の一部が富を蓄積し、成功者として村に帰郷するものの、雇用者から不当に扱われたり、犯罪に巻き込まれたりする危険性もあることを指摘している。サラワクの内陸社会においては、言語がインドネシア語と通じ合えることも相まって、雇用者と労働者という経済的關係では一括りにできない関係が存在する。なかにはロングハウスに住み込み何十年も故郷に帰らない人があるなど、異なる状況がみられる。

こうしたサラワクのロングハウス社会の特徴に関する先行研究では、親族関係によって緩やかに繋がる人々がロングハウスに集まって住んでいるものの、多様な背景を持った人々を取り込んできたことが指摘されている (Metcalf, 2010)。そこで、本稿は、サラワクのロングハウス社会に入り込んで暮らす 6 人のインドネシア人に着目し、彼らの在地社会とのかかわり方について記述する。そして、ロングハウスに住むなかで、日々村人とどのような社会関係を築いているのかを考察する。

以下では、筆者が 2004 年からカピット省ブラガ郡の S 村で行ってきた情報をもとに、次のような構成で議論を進める。まず I で、調査対象とした S 村の婚姻関係に着目し、S 村にはどのように多様な背景を持った人たちが暮らしているのかを記述する。II では、S 村に暮らす 6 人のインドネシア人の事例を取り上げ、彼らがどういった経緯で S 村に暮らし、ロングハウスの村人とどのような関係を築いているのかを個別に記述する。その上

でⅢにおいて、非合法滞在のインドネシア人がロングハウス社会で暮らしやすい社会的な背景について考察し、Ⅳで S 村にインドネシア人が暮らすことによる、S 村の人々との社会関係の動態について考察する。最後に、マレーシアにおいてインドネシア人の増加という現象が、サラワクのロングハウス社会というミクロな世界において、どのような人と人との交渉が織りなされているのかを提示する。

I. 外部者を取り込むロングハウス社会——S 村を構成する人々

S 村は、ラジャン川の上流に位置する、人口約 240 人の村である（図 1）。表 1 は、ブラガ郡の人口構成を示している。この地域のマジョリティは、カヤンやクニャ、シカパンやクジャマンなど、長年焼畑農耕を行ってきた階層性社会¹の人々であり、バルイ川とブラガ川という両河川沿いにロングハウスを建てて暮らしている。より上流域には定住した狩猟民のプナンが暮らしている。こうした人々の多くがキリスト教徒であり、S 村の人々も同じくキリスト教を信仰している。ブラガ郡の中心であるブラガ町にはマレー人や華人

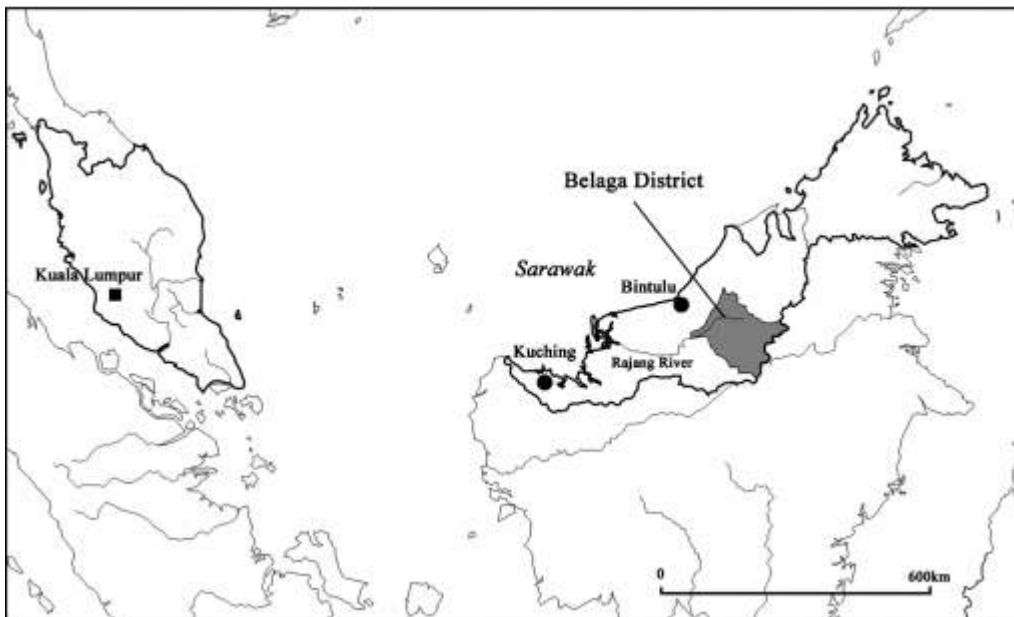


図 1. ブラガの位置

（出所）筆者作成

¹ 階層性社会（stratified society）では、首長（maren）を頂点に、貴族層（hipuy）、平民層（panyi）、そしてかつては奴隷層（dipen）が存在した。サラワクでは、ブルック統治以降、奴隷層が禁止されている [Rousseau 1990]。各層の名称は、民族集団によって異なる。

表 1. ブラガ郡における民族集団別村落数と人口

民族集団名	村落数	人口
Kenyah	16	9,073
Kayan	16	7,104
Penan	25	2,820
Punan Bah	5	1,457
Sekapan	2	1,085
Kejaman	2	962
Malay	2	820
Lahanan	2	758
Ukit(Bhuket)	1	518
Seping	3	470
Chinese	1	400
Sihan	1	240
Tanjong	1	179
Iban	1	156
Total	78	26042

(出所) PejabatDaerahBelaga2015 に基づき筆者作成

などもおり、様々な民族集団が暮らす地域である。インドネシア人は、この地域における伐採会社やプランテーション会社、ブラガ町の商店、あるいは在地の人々のアブラヤシ栽培やゴム植栽、農地伐開、小間使いなどに雇われ、散在して暮らしている。

S 村の人々は、プナンと同じく、歴史的には遊動狩猟採集を行ってきた人たちである。20 世紀半ばに焼畑耕作を始め、ロングハウスに住み始めるようになった。この地域でマジョリティである、カヤンやクニャなど階層性社会を持つ人々は、首長層 (*maren/paren*) の統率力が強く、婚姻や土地利用など、村落社会での慣習法 (*adet*) が厳しく定められているのに対し、S 村では、こうした首長層がおらず平等主義的な人々である。そのため、村長の統率力は弱く、慣習法による決まりが厳しくない点で異なる。

サラワクのロングハウス社会は、Metcalf (2010) が指摘するように、親族関係によって緩やかな紐帯がみられるものの、異なる出自の人々も存在する。S 村においても同様に、シハンという民族集団のほかに、イバン、プナン、華人、マレー、カヤン、クジャマン、ブカタン、クニャ、ラハナン、ビダユー、クラビット、シカパン、そして、インドネシア人など、様々な出自の人が S 村の人と結婚をして暮らしている²。S 村の人々は、歴史的にも古くから他民族集団との婚姻がみられた。19 世紀後半には、ルガットやブケット、ブカタンなどとの婚姻関係があり、20 世紀前半にはシカパン、カヤン、イバンとの婚姻関係がみられた。そして 20 世紀半ばになるとプナン、特にプナン・ブラガン³との婚姻

² S 村の人々は、この地域に暮らす多くの民族集団と同様に双系社会である。両親が異なる民族集団の場合、両方の出自を認め、父母どちらの出身村にも住むことができる。

³ プナン・ブラガン (Penan Belangan) はプナン・タルン (Penan Talun) とも呼ばれる。

が増えた。そのほか、少数ながら、クジャマンやラハナン、クニヤとの婚姻関係もみられた。さらに、1990 年以降は、内陸部で伐採業が盛んになり、伐採会社で働く遠方出身のイバンやインドネシア人との婚姻も見られるようになった。そして、現在では都市への出稼ぎに行く若者が増えたため、都市部の華人やマレー人など、より多様な地域出身の人々と婚姻関係がみられており、現在の S 村では様々な出自を持った人々が共存している。

S 村の人々は婚姻を通して、他民族集団の人々と共住してきた以外にも、時に全く血縁関係のない人々が S 村で暮らすこともあった。例えば、20 世紀前半には、イバンとの戦闘へ行く途中のブケットが、短期間 S 村に滞在することがあった。20 世紀半ばにはプナンの家族が S 村で暮らし、その子ども達が全員 S 村の人と結婚した。さらに、クジャマン、シカパンの家族が S 村の人と一緒に焼畑稲作をして暮らすこともあった。このように S 村では、婚姻による社会関係以外にも、まったく姻戚関係にない人が村に滞在することがかつてからみられた。

それは、筆者が調査をしていた 2000 年代にも観察された。調査のために滞在をしていた家族では、ある時全く血縁関係のないシカパンの男性がやってきて数か月一緒に暮らし、焼畑稲作や狩猟や漁労を一緒に行ったことがあった。また別の時には、娘の元夫のインドネシア人がやってきて娘の父母と数週間同居したこともあった。別のインドネシア人の青年が S 村の青年と一緒に暮らし、焼畑稲作や狩猟、漁労などを一緒に行うこともあった。さらに、村内の別の世帯では、フィリピン人女性を養子にし、フィリピン人の夫妻と子ども 3 人が同居する世帯もあった。そして現在では、不当な扱いを受け逃げてきたインドネシア人の女性をかくまっている世帯もある。このように、血縁関係のない外部者を受け入れ、共住する状況は、歴史的にも現在においても頻繁にみられ、外部者を受け入れやすい空間であるといえる。以下では S 村に暮らす 6 人のインドネシア人の事例を紹介し、彼らがどのように S 村に住みはじめ、村の人々とどのような関係を築いているのかを記述する。

Ⅱ. ロングハウスで生活をするインドネシア人

ここでは、S 村に住む 6 人のインドネシア人の事例を取り上げ、彼らがどういった経緯でサラワクに来て、どのように S 村に住むようになったのか、そして現在 S 村でどのような生活をし、村人とどのような社会関係を築いているのかについて述べる。

事例 1 PK さん—ジャワ島出身、42 歳、男性

PK さんは、2002 年にサラワクに入りブラガやバクンの伐採キャンプで働いていた。2005 年に S 村の女性 BT さん（当時 37 歳）が伐採キャンプにラタンを採集しに行ったこ

とがきっかけで知り合った。BT さんは 3 度の離婚歴があり、6 人の子ども⁴がいるが、PK さんと知り合った当時、配偶者はいなかった。初めは、BT さんが伐採キャンプに住み込み同居をしていたが、次第に PK さんは、BT さんの未婚の子ども 4 人と母、弟と同居をする形でロングハウスに住み始めた。当初、インドネシア語とマレーシア語を介して会話をしていたが、現在は S 村の言語を流暢に話している。

普段、PK さんはブラガ町の華人やマレー人に雇われて家の建築や補修の仕事を行っている。それ以外に村人と一緒に漁労をおこなったり、BT さんの世帯のメンバーとして稲作の労働交換に参加したりすることもある。また、時にはムルム・ダム建設や小学校建設のコントラクトを下請けし、S 村の人々を雇うこともある。しかし、S 村の人を雇う際にも、村人に食事や酒をふるまうことはしない。お金がある人は飲食を提供するべきという、S 村の人々の期待に背く行動を行うこともあり、そのことは、時に S 村の人々が違和感を覚えることにもなっている。

ムスリムであるため、PK さんは BT さんの家族と食事を共にすることはなく、一人で別の食事をする。この行動は、自分が食事をしているときには、食事をしていない他の家族にも声をかけるべきと考える、S 村の人々の慣習とは異なり、家族から「ケチである *makot*」という評価を付されることもある。また、PK さんが働いて、BT さんに生活費を渡しているときは、BT さんの家族は誰も不満を言わないが、働かないで居候する状態が長く続くと、家族が不満を漏らしたり、インドネシアに妻子がいて送金をしているのではないかという憶測を生んだりすることもある。しかし、最終的には BT さん本人が好んでいるため、家族が強く介入することはない。

有効なビザを所有していないため、PK さんは病気やけがをした際には政府のクリニックを受診することができない。そのため、ブラガ町の華人商店で売っている市販薬を服用したり、ビントゥルやシブの薬局から薬を買ってもらったりして対応せざるを得ない。

2015 年には、PK さんが S 村の 10 代の女性と浮気をするという騒動があった。その時 PK さんは BT さんの娘と激しい口論になり BT さんの家に住みづらくなった。その際、親しくしている S 村の別の家族の世話になり数週間暮らした。ほとぼりが冷めた頃に再び BT さんとの同居を始めた。この事例が示しているのは、同居しているロングハウスの家族との関係を大切にしているものの、その家族との関係が心もとなくなった際には、S 村の別の世帯に居候をさせてもらうことが可能だということだ。

PK さんは、インドネシアの家族とともに電話で話をしており、2016 年には 2 週間ほど一時帰国をして、パスポートを再発行して S 村に戻ってきた。BT さん本人や家族は、PK さんの正式な名前、出身村、家族構成、年齢、来歴、妻子の有無などについては何も知らない。こういった状況から S 村にやって来る人がどこの誰で、どういう来歴の人か

⁴ 6 人の子どものうち、1 人は養子に出し、1 人は養子にした子がいる。

は、あまり問題視されないようである。今後、警察の取り締まりが厳しくなれば、PKさんはS村に滞在することは難しくなるかもしれない。しかし、BTさんもそれを承知でPKさんと同居をしている。最終的にはBTさん個人の裁量として、BTさんの家族や村人は誰も口をはさむことはない。

事例2 LUさんー東カリマンタン出身、男性、48歳

LUさんはボルネオ島のマレーシアとインドネシアにまたがって居住するクニャという民族集団の出身で、キリスト教徒である。1993年よりバルイ川流域の伐採会社で仕事を始め、1997年にS村のBHさん（当時17歳）と知り合う。BHさんは当時S村出身の別の男性と結婚をし、2人の子どもがいた。しかし、夫が遠方に仕事に行っている間にたまたま村にやってきたLUさんと知り合い、そのまま結婚をした。その後4男を授かる⁵。普段、LUさんはブラガ町の華人に雇われてバイク修理の仕事をしたり、村人と狩猟をしたりして生活をしている。また、ロングハウスでアブラヤシ栽培を行っているほか、焼畑稲作の労働交換に参加することもある。BHさんの両親は、LUさんが働いてBHさんと子どもを養ってくれているので不満はないという。

特徴的なのは、LUさんがマレーシアの国籍を取得している点である。BHさんは、継父の名前で出生証明を作成していたため、LUさんは、BHさんの実父の名前を借りてアイデンティティ・カード（IC）を取得した。二人は後にオラン・ウルの結婚証明書も発行している。

S村の慣習では、村人にバイクを貸すのは、ただで貸すべきところ、LUさんは有料で貸すことがあり、そのことに不満を漏らす村人もいる。特に、マレーシア国籍を取得してからは傲慢（*subung*）になった、と語る村人もいる。LUさんは、S村の人と一緒に狩猟や農業を行うが、家族以外の村人と酒を飲んだり、個人的に親しくしたりすることはみられない。また、S村に滞在する他のインドネシア人や、近隣のクニャと交流することもなく、普段はS村の言語を話しBHさん家族との関係を重視しているようである。

事例3 IAさんースラウェシ島出身、女性、28歳

IAさんはスラウェシ島のブギス出身のムスリムである。2010年にサラワクのプランテーション会社で就労後、ビザが切れ、2012年よりS村のアブラヤシ栽培の労働者として働くようになった。それと同時期にS村のSEさん（当時28歳）と結婚し2男を授かっている。普段は子どもの面倒をみつつ、料理や洗濯などの家事をしてSEさんの家族とロン

⁵ インドネシア人との間に生まれた子どもでも、マレーシアで出生した場合には、出生証明書が発行され、マレーシア国籍を取得することができる。

グハウスで同居をしている。農作業や村人との労働交換に参加することはない。SE さんの親は、孫を生んでくれて、家事をしてくれるので不満を漏らすことはない。この地域では妻方居住が一般的であるため、結婚後、男性は妻の家族と同居しなければならない。しかしながら、SE さんは引き続き自分の親と同居をできるの点も好んでいるようだ。

S 村の人とは初めはインドネシア語とマレーシア語で会話をしていたが、現在は S 村の言語を流暢に話す。IA さんは、S 村の女性やこの地域にいる他のインドネシア人女性との交流は少なく、同じムスリムである近隣のマレー人との交流もない。SE さん家族との関係を大切にしており、夫が村の若者と一緒に飲食をしたり、散財したりすることを好ましく思っていない。彼女はインドネシアの家族と電話や SNS で連絡は取るものの故郷に帰ったことはないという。いずれは一時帰国をして故郷の家族に子どもの顔を見せたいと語る。

事例 4 IT さんー西カリマンタン出身、男性、27 歳

IT さんは西カリマンタン州サンバス地方出身のムスリムである。2007 年、18 歳の時にサラワクへやってきて各地の建設業で働いた後、ブラガで家を作る仕事をはじめた。初めは、仕事仲間であった S 村の男性と親しくし、よく家に遊びに行っていた。その後、この男性の友人の S 村の別の青年と親しくなり村に寝泊まりをするようになった。この家族と一緒にロングハウスに住み、同世代の青年たちと一緒に漁労や農業、薪木拾い、水汲みをし、町にいるときは村の青年と一緒に賃金労働に従事した。彼はムスリムであるので、豚肉は食べないが、それ以外は村人が出した料理と一緒に食べた。また、彼は S 村の言語を習得していなかったため、村人とはインドネシア語とマレーシア語で会話をしたがコミュニケーションには問題はない。IT さんは、常に S 村の青年と一緒に行動しており、彼がロングハウスに同居をしていることに対して、青年の家族はおろか、他の村人の誰も文句を言う人はいない。IT さんが高熱を出した時には、受け入れの家族が市販薬を与えて介抱をしていた。IT さんは、S 村のロングハウスに約 3 か月住んだあと、別の仕事を求めてこの村を離れていった。現在は、近隣のシカパンの村に住んでおり、いまでもたまにブラガの町で S 村の青年と会うそうである。

事例 5 JK さんージャワ島出身、男性、30 代

JK さんは、1995 年にサラワクへやってきて、バクンダム建設の仕事に携わっていた。当時バクンダムの食堂で働いていた、この村の女性 UP さん（当時 16 歳）と知り合い 1998 年に結婚する。女性の家族と一緒にロングハウスに同居していた。しかし、JK さんは大変嫉妬深く、UP さんが一人で森に食材を探しに行ったのに嫉妬をして山刀を使って

自殺をすると騒いだことがあった。この騒動を恐れた別の村人が警察に通報し、不意に非合法滞在が発覚してしまい、インドネシアに強制送還された。JK さんが帰国中の 1999 年に、女性は JK さんの子どもを出産した。その後女性はブラガ出身のプーナン・バー⁶の男性と再婚をした。JK さんは新しいパスポートを発行し、2004 年に再び S 村に戻ってきた。しかし、UP さんはすでに再婚し、子どもを産んでいたため、JK さんは彼女の両親や、事例 1 の BT さんのところ、S 村の別の家に数週間滞在した後、ブラガを去っていった。その後、JK さんがサラワクの別の場所で滞在しているのか、インドネシアに帰国したのかは不明である。JK さんと UP さんの子どもは UP さんの再婚相手のプーナン・バーの男性の名前で出生証明を発行しており、IC もある。現在は、UP さんの 3 度目の結婚相手であるイバンの男性と同居をして S 村で暮らしている。

事例 6 OR さん—ジャワ島出身、女性、19 歳

OR さんは、ジャワ島出身のマドゥーラの女性でムスリムである。2016 年に就労エージェントを通してサラワクにやってきて、ブラガにある華人商店で働いていた。ある時、この商店によく買い物に来る、インドネシア人の男性と知り合いになった。この男性はブラガのカヤンの警察官のもとでゴム植栽の仕事をしていた。買い物に来たこのインドネシア人の男性から、別に給料の良い仕事があると誘われ、騙されそうになるところを S 村に逃げてきた。同じ華人商店で働いていた OR さんの友人のインドネシア人の女性の恋人であった、S 村の男性 LD さんを頼って逃げてきた。現在は、LD さんの家族と同居をして、洗濯や料理などの家事を手伝っている。S 村の人からは、働き者で家事をよくすると評判だ。OR さんは元の仕事の契約期間が終わっていないので、エージェントに見つかってはならないという。また、騙したインドネシア人の男性に見つかることを恐れて、家から出ることはほとんどない。普段は家の軒先で S 村の女性と一緒に談笑をしたりビーズ製品を作ったりしている。LD さん家族や S 村の人とはインドネシア語とマレーシア語を介して会話をしている。OR さんは同じ S 村にいるインドネシア人どうして、インドネシア語で話をするのではない。華人商店で働く友人のインドネシア人の女性が訪れてきて、頻繁に情報交換をしている。今後 OR さんが、いつまで LD さんの家に住むのか、インドネシアに帰るのかは不明である。

Ⅲ. 外部者を受け入れやすいロングハウス社会の背景

上述のように、S 村には様々なインドネシア人が共住している。ここでは、ロングハウ

⁶ プーナン・バー (Punan Bah) はブラガに居住する民族集団である。

ス社会においてインドネシア人を受け入れやすい背景について考察したい。インドネシア人を受け入れやすい背景には、まず内陸部全体におけるインドネシア人人口の増加があげられる。これまでも伐採会社などで働くインドネシア人はいたが、特に 2000 年代以降は、プランテーションの拡大によって多数のインドネシア人が雇用されている。それ以外にも、製造業や建設業、サービス業に従事するインドネシア人が多数おり、日常生活においてインドネシア人が存在することが当たり前の状況となっている。多くのインドネシア人は労働者用の宿舎に集団で居住しているが、なかには、本稿で取り上げたように、ロングハウスに個人でやってきて住むインドネシア人も現れ始めている。

インドネシア人たちがロングハウスに暮らすようになる最大の理由は、ロングハウスにおける住みやすさであろう。ブラガ郡は都市部からは遠く、インドネシアとの国境に接した地域である。都市部では、幹線道路などで非合法滞在者への取り締まりが厳しいのに対し、内陸部ではロングハウスが河川沿いに点在しており、こうした村落で取り締まりが行われることはほとんどない。つまり、非合法滞在をしているインドネシア人にとってロングハウスは住みやすいシェルターのような役割がある。家賃は不要であり、村人について農業や漁労や採集をすれば、食べ物に困ることはない。また、ロングハウスの住民やブラガ町の華人、マレー人などのもとで賃金労働が可能であり、就労先がたくさんある。そのため、空間的に囲われた伐採キャンプやプランテーションでの宿舎に比べて、より自由で柔軟な生活が可能である。さらにサラワクの在地家族の支援があれば、LU さんのようにマレーシア国籍を取得することも可能である。

こうしたサラワク内陸部の事情に加え、S 村独自の事情もインドネシア人がロングハウスに住みやすい状況を作っていると考えられる。S 村の人々は先述したように、かつてからブカタンやブナン、ブケット、シカパン、クジャマンなど、近隣の民族集団の人々を受け入れ、一時的に共住することがあった。この地域の慣習では一緒に生業活動をおこなえば同じ分だけ分け前がもらえるので、一時滞在者に食費や宿泊費などの金銭を要求することはない。

また、カヤンやクニャなどの首長 (*maren/paren*) を頂点とする階層性社会とは異なり、S 村の人々はバンドを中心にした遊動生活を送ってきた。そのため村落組織としてのロングハウスの統率が弱く、個人や家族の自律性を尊重する傾向にある。村長は外部者を認識しているが干渉はせず、個人や世帯の裁量に任せて、介入はしない。だからといって、外部の短期滞在者を無視したり、拒絶したりすることもなく、共住者として一緒に焼畑稲作や狩猟をおこなっている。時に警察の取り締まり情報などがあれば、村人はインドネシア人たちに教えて、ロングハウスに留まるよう勧めたりもしている。

ロングハウスの各世帯においても同様に、村の若者と友人のインドネシア人や、IT さん、OR さん、PK さんのように泊るところがないインドネシア人を拒んだりすることはない。JK さんのように極端に村の慣習に逸脱する行為を行うと問題になる場合もあるが、

多くはたとえ働かずに居候を続けたとしても「怠け者だ (*jokwat*)」という不満が漏れる程度で済み、それが追い払われる理由にはならない。

さらに、S村の婚姻をめぐる慣習にも、近隣の階層性社会の民族集団とは異なり、外部者を受け入れやすい背景があると考えられる。S村では、婚姻をめぐる慣習法が厳しくないため、事実婚、あるいは妊娠が発覚してから結婚をする例が多い。そのため短期の結婚や離婚も多い。男性から女性への婚資の支払いは義務ではなく、結婚式や饗宴をひらいて村人全員に披露することも珍しい。村長に個別に報告することで済ませる人が多い。そのため、UPさんのように子どもが生まれた後で結婚に至らなかったとしても、あまり問題視されない。未婚の母の姉妹や母方の従姉妹が養子とすることで解決する。一方でカヤンやクニヤ、シカパン、クジャマンなどこの地域のマジョリティの民族集団においては、婚資の支払いを要求され、特に未婚のまま妊娠をした際には高額な賠償金を要求される。また、披露宴を行うことが一般的であり、饗宴のための経済的な負担が大きい。このような状況は近隣の民族集団に比べて特にS村においてインドネシア人が共住しやすい条件となっているであろう⁷。

S村において外部者やインドネシア人を受け入れやすい背景のもう一つには、養子 (*amung*) や擬制的親族 (*penyamo*) の慣習があることであろう。幼少期の育ちの悪さや妊娠中に離婚したといった理由により、子どもを養子にだすことはよくある。また同様に、夢見や結婚後に子どもができないといった理由で養子をもらうこともよくある。養子には、名目的な養子から、出生証明やアイデンティティ・カードまでを変更する実質的な養子まで幅広くみられる。BTさんの事例のように、S村においてはおよそ1家族に1人は養子関係のある人がある。同様に夢見によって血縁関係にない者同士が擬制的兄弟や姉妹になることも多い。こうした養子や擬制的親族の慣習によって、ITさんやORさんのように血縁関係や姻戚関係にない若者の面倒を見ることは自然におこなわれる。S村のこのような背景も、短期滞在のインドネシア人が住みやすい状況となっている。

IV. インドネシア人と暮らすことによるS村の社会関係の動態

ここでは、インドネシア人と共住することが、S村の人々の社会関係にどのような意味をもたらすのかを考察したい。ロングハウスに滞在するインドネシア人に対して、S村の人々は個人や世帯の自由として不干渉な場合が多いが、村人からインドネシア人に向けて聞かれる不満の多くは個人主義 (*mek arop arop*) あるいは、ケチ (*makot*) というものがある。例えば、S村の人々は、インドネシア人が共食やモノの共有、飲食の提供、時間

⁷ S村の人の話によると、S村と婚姻の慣習が似ているより内陸部のプナンの村においてもS村と同様に多数のインドネシア人が村に居住しているという。

や空間の共有をしないことに対して、否定的な評価をすることがある。こういった悪評には嫉妬が含まれることもあり、特に PK さん、LU さん、AL さんなど S 村の人と結婚をしているインドネシア人に対して聞かれた。同じ行動を、S 村の人が行くと「親族を捨てた」とより厳しい評価を受ける。しかし、インドネシア人に対しては、個人主義的であると言いつつも、ある程度は異なる背景を持つ人々として許容することが多く、最終的にはインドネシア人を受け入れる個人や家族の自律性に任せている。

インドネシア人が S 村の人々の社会関係に与える影響としてはモノや富の分かち合いという平準化作用の圧力からの解放という点があげられる。インドネシア人と暮らす家族は、「自分たちとは異なる人だから」という論理を使いコミュニティの平準化作用を回避する力が働く。S 村の女性が同じ村の男性と結婚したがない理由の一つに、この平準化作用によって村人に酒をふるまい、酔っぱらい散財する機会が増えるということがよく聞かれる。それに対して、インドネシア人男性が夫の場合、S 村に夫の親族がいないため、稼いだお金を自分の家族だけに費やしてくれる。もし、同じ村出身の夫だったら、夫の親族や友人に、お酒や食べ物をふるまう機会が増え散財してしまう。S 村の女性からすると、インドネシア人の夫にはモノや食べ物、時間や空間などを他の村人と共有するのではなくて、自分の家族とだけ共有してもらいたいという思いがあるようである。

インドネシア人にとって、S 村の人と結婚をし、新たな家族関係を築くことは S 村のコミュニティのメンバーとしてかかわる入り口となる。一方で、インドネシア人と結婚した S 村の男性あるいは女性というのは、彼らが他の村人と仲良くするよりも、自分の家族とだけ、お金や物を共有してほしいと望む。このようにして、インドネシア人との共住を通して、村のなかの平準化作用からの脱却を望む一面もみうけられる。

一方で、S 村に居住するインドネシア人の立場から考えると、村人と社会関係を築くことにどのような主体性がみられるのであろうか。これは、未婚者と既婚者でその対応が異なるようである。S 村の人と婚姻関係がある場合は、受け入れてくれる家族との関係が第一である。そのため、特に他の村人に飲食をふるまったり、集まったりして積極的に社会関係を築こうとしている様子は見受けられなかった。一方で婚姻関係にはない場合は、とくに親しくしてくれる村人との関係が大事である。IT さんのように、受け入れ家族との関係を大切にしつつも、村の若者と分け隔てなく付き合う事例もある。どちらの場合でも、S 村に暮らすインドネシア人どうしで、集まったりインドネシア語で談笑をしたりして、積極的にネットワークを構築しようとしている事例が見られなかった。インドネシア人の立場から考えると、社会関係を受け入れ家族だけに狭めてしまうのはリスクもあるのではないかと考えられる。しかし、インドネシア人同士で集まるよりも在地の家族といかに居心地の良い生活を送るかを重視しているようである。

おわりに

国境を越えたグローバルな人の移動は全世界で見られる現象であり、今後もその状況が進展していくと考えられる。マレーシアにおいても例外ではなく、恒常的な労働力不足から外国人労働力への依存が高まり、特に近年インドネシア人の増加は目覚ましい。本稿では、その結果サラワクの内陸社会に入り込みロングハウスに住むようになったインドネシア人について取り上げ、新しい家族を形成していく過程について記述してきた。そこで明らかになったのは以下の点である。

まず、インドネシア人自身のセキュリティの問題や、内陸部のロングハウスの事情によって、非合法滞在のインドネシア人労働者がロングハウスに住みやすい状況となっているということである。そして、S村の場合で言えば、S村出身の人とではなく、インドネシア人をはじめとする外部者の存在によって村内の平準化作用から抜け出したいと望むS村の人々の心理的様相も見られた。ロングハウス社会の外部や周縁に位置づけられてきた外国人労働者はS村の婚姻関係においては重要な存在となっている。また、インドネシア人自身もインドネシア人同士のネットワークに頼るよりは、自分の不安定な立場を守ってくれる新しい家族との関係を重視しているようである。

別の観点から述べると、個々人でロングハウス社会に入り込んでいくインドネシア人は常にリスクと隣り合わせでもある。まず一つ目にパスポートをめぐる問題である。現在、サラワクの都市部や幹線道路では、非合法滞在のインドネシア人に対する取り締まりが厳しくなっている。今後マレーシア政府が非合法滞在外国人の摘発を強化すれば、彼らはサラワクに滞在することが難しくなるかもしれない。2つ目に医療の問題である。有効なビザを持っていないインドネシア人は、政府の診療所を受診することができない。そのため、在地の家族の支援によって伝統医療や市販薬により治療を受けることになる。多くの場合は、こうした治療で問題ないが、高度な医療が必要になった場合には受診が困難となる。

インドネシア人の滞在をめぐるような様々な問題が存在するものの、サラワクの内陸社会、特に上流域では、本稿の事例が示したように、インドネシアの故郷を離れサラワクで新しい家族とともに生活をするインドネシア人が、ほとんどどの村にも存在する。彼らを送り出した故郷の家族がこの現象をどう捉えているのかは、現段階では知ることとはできない。しかし、現実問題として、住み慣れたインドネシアを離れサラワクという新天地において第二の家族を得て、第二の人生を繰り広げいく人々が多数存在している。本稿で提示したのは、閉鎖的で静的なロングハウス社会像ではなく、こうしたさまざまな背景を持った人たちを取り込み、混ざり合い、ある意味混沌としたロングハウス社会のありかたである。それは様々な個人の生が交差し、時に共同体との距離を離したり縮めたりしながら、共同性を模索していくロングハウス社会の様相である。

〈参考文献〉

日本語文献

澤井志保 (2006) 『『イェムじゃない』—香港で働くインドネシア人家事労働者の「つながり
の平等」による主体性—』『東南アジア研究』第 53 巻 2 号: 244-278。

英語文献

Borneo Post (2015) Borneo Post 13, March, 2015

Castles, S. (2004) The Myth of the Controllability of Difference: Labour Migration, Transnational Communities and State Strategies in the Asia-Pacific Region. In *Perspectives on Transnationalism in the Asia-Pacific*, edited by Yeoh, B. S. A.; and Willis, K., pp. 16-36. London: Routledge.

Department of Statistics Malaysia (2001) *Population & Housing Census of Malaysia 2000*. Kuala Lumpur: Department of Statistics Malaysia.

Department of Statistics Malaysia (2011) *Population & Housing Census of Malaysia 2010*. Kuala Lumpur: Department of Statistics Malaysia.

Department of Statistics Malaysia Sarawak (2015) *Yearbook of Statistics, Sarawak 2014*. Kuching: Department of Statistics Malaysia Sarawak.

Ford, M. (2006) After Nunukan: The Regulation of Indonesian Migration to Malaysia. In *Mobility, Labour Migration and Border Controls in Asia*, edited by Kaur, A.; and Metcalfe, I., pp. 228-247. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Liow, J. (2003) Malaysia's Illegal Indonesian Migrant Labour Problem: In Search of Solutions. *Contemporary Southeast Asia* 25 (1) : 44-64.

Loveband, A. (2004) Positioning the Product: Indonesian Migrant Women Workers in Taiwan. *Journal of Contemporary Asia* 34 (3) : 336-348.

Metcalfe, P. (2010) . *The life of the longhouse: an archaeology of ethnicity*. Cambridge University Press.

Pillai, P. (1999) The Malaysian State's Response to Migration. *Sojourn* 14 (1) : 178-197

Pye, O., Daud, R.; Harmono, Y., and Tatat (2012) *Precarious Lives: Transnational Biographies of Migrant Oil Palm Workers*. Asia Pacific Viewpoint 53 (3) : 330-342.

Riwanto, T. (2004) Cross-border Migration in Indonesia and The Nunukan Tragedy. In *International Migration in Southeast Asia*, edited by Ananta, A.; and Arifin, E. N., pp. 310-330. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Rousseau, J. (1990) *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*. Clarendon Press.

Silvey, R. (2006) Consuming the transnational family: Indonesian migrant domestic

workers to Saudi Arabia. *Global Networks* 6 (1) : 23-40.

Stahl, C. W (1999) International Labour Migration in East Asia: Trends and Policy issues. (Proceeding Paper Presented at the International Symposium on “New Trends in Migration in the Asia Pacific and Consequences for Japan.” September 23-26, 1999, Tokyo)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

熱帯雨林の英雄か国家の敵か

ブルーノ・マンサーとプナン人の闘い

金沢謙太郎

はじめに

2001 年 9 月 3 日付のアジア版『タイム』の表紙には、ブルーノ・マンサー (Bruno Manser) の顔があった。目次の見出しは「闘いの途中で消息不明」であり、次のように続いている (*Times*, Sep. 3, 2001)。

スイス人活動家、ブルーノ・マンサーは、ボルネオのプナン人¹と彼らの家である熱帯雨林のもっとも熱心な擁護者の一人だった。しかし、マレーシアの木材企業と役人によって危険視された彼の消息は昨年途絶えた。そして、森林は消え続けている。

ブルーノ・マンサーは、欧米のメディアを森に招き入れ、熱帯雨林の商業伐採によるプナン人 (Penan) の生活の侵害について世界の耳目を集めた。「熱帯雨林の英雄 (Rainforest Hero)」と呼ばれた (Suter, 2015)。一方で、サラワク州政府からは「国家の敵 (State Enemy)」と名指しされ、サラワク内での彼の行動は警察から追跡されていた。

2003 年 6 月の JAMS News で奥野克巳は「ブルーノ・マンサーの死とプナン人の闘いの変貌」という研究短信を寄稿している (奥野, 2003)。2001 年 8 月と 2002 年 8～9 月にバラム河 (Baram) 流域で奥野自身が行った現地調査を踏まえて、ブルーノ・マンサーの死を一つの区切りとするプナン人の抵抗運動の変化を報告したものである。それによれば、プナン人の林道封鎖は、「伐採を阻止し、生活を守るための手段 (ブルーノが国際的な関心を牽引した時代) から、政府と企業に対して生活水準の向上に向けて要求を通すための手段 (ブルーノがいなくなった時代) へと変貌を遂げた」とされる。また、ブルーノ

¹ 2010 年のサラワク州政府統計局のセンサスによれば、同州の人口は約 247 万人である。そのうち先住民族の占める割合は 7 割にのぼる。最も多いのはイバン人 (Iban) で、次いでムスリムのマレー人 (Maly) とムラナウ人 (Melanau)、ビダユウ人 (Bidayuh) と続く。その他の先住民族として、「上流の人びと」を意味する「オランウル (OrangUlu)」がいる。オランウルには、カヤン人 (Kayan)、クニャ人 (Kenya)、クラビット人 (Kelabit)、サバン人 (Saban) のほか、プナン人などが含まれる。

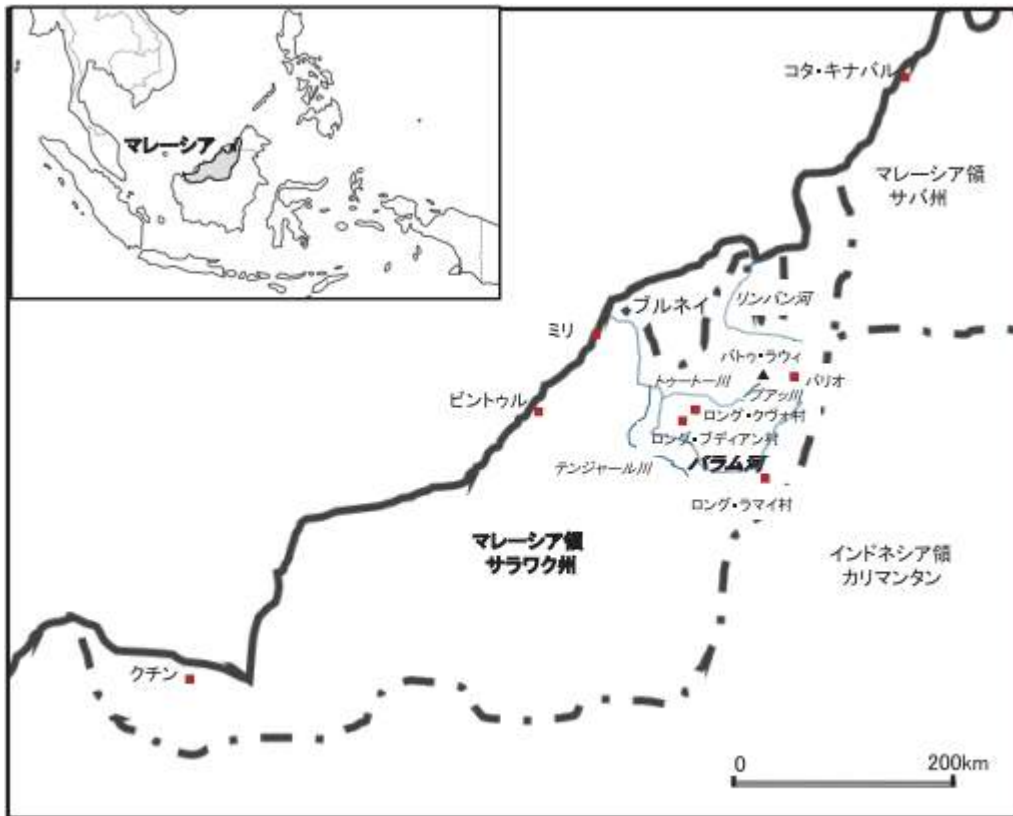


図 1 マレーシア領サラワク州：本文に出てくる主な地名

の死後もプナン人の抗議行動が続く背景には、ヨーロッパ人の活動家の関与や「ブルーノの霊」が力を与えているという噂もあるという（奥野, 2003:8）。

ブルーノ・マンサーがいなくなって 16 年余りが経過した。一方で、彼の生前に設立されたブルーノ・マンサー基金（Bruno Manser Fonds: BMF）は今日まで活動が続いている。他方、プナン人の闘いはその後どうなっているだろうか。本稿では、ブルーノ・マンサーと BMF の活動歴に注目しながら、この間のプナン人の闘いとの関連について考えてみたい。

なお、現地調査は、パラム河流域の 3 つのプナン人コミュニティで行なった（図 1）。ロング・クヴォ村（Long Kevok）で 2004 年 3 月、プア川（Puak）流域のモヨン（Moyong）集団に 2010 年 9 月、ロング・ラマイ村（Long Lamai）で 2014 年 3 月に行なった。BMF については、2014 年 11 月に来日したルーカス・ストラウマン（Lukas Straumann）事務局長に対して、最初の聞きとりを行った。2015 年 11 月にクアラルンプールで行われたジャーナリストのルディ・スッター（Ruedi Suter）の講演会と同月ペナン島でも行われた講演会に参加し、同席していた BMF のスタッフに聞きとりを行った。2016 年 2 月には、スイス、バーゼルの BMF 事務所を訪問し、事務局長らに再び聞きと

りを行った。

I プナン人の男

ブルーノ・マンサーは 1954 年 8 月 25 日にスイス、バーゼルで生まれた。高校卒業後、スイス人男性に課されている兵役の義務を拒否し、数ヶ月間投獄された経験をもつ。彼はインドのマハトマ・ガンディの戦闘的非暴力の考え方に影響を受けていた。その後、11 年間羊飼いととしてスイス・アルプスの山麓で暮らした。「木工や木材の伐採、家の建て方、羊や牛など家畜の育て方、チーズの作り方、造園、自分が使う陶器の焼き方などを覚えたり、ナイフを作ってみたり、皮をなめしてみたり」という日々は「ルーツに戻る」試みだったと自身で振り返っている (マンサー, 1991: 279)。しかし、ブルーノは高度に発展したスイスでの暮らしに飽き足らず、もっと根源的な何かを求めている (Suter, 2015: 58)。彼は図書館でアマゾンやボルネオの先住民について調べていく中で、サラワクに住むプナン人に興味をもった。そして、熱帯雨林での遊動生活に憧れ、プナン人の言語や生活様式を学びたいと考えるようになった。生活に必要なもののほとんどを自分たちで賄うことができる、つまり自律的で循環的な経済に生きる人びとに出会いたいというのがブルーノの望みだった。

1984 年にブルーノ・マンサーはその望みを叶え、以来 6 年もの間、サラワクの森で遊動プナン人とともに暮らした。近眼だったため眼鏡だけは手離せなかったが、当初身に着けていた衣類や靴は全て捨てた。ブルーノは、ことばを学び、狩猟採集に同行し、遊動民の一員となった。後に、彼は次のように述べている。「貧しく、財産をもっておらず、森の中でその日必要な食物を見つけるだけです。でも東京よりもプナンの方に幸せそうな人たちがいっぱいいます」 (マンサー, 1997: 45)。ほどなくして、彼はプナン人たちから「プナン人の男 (*Iaki Penan*)」と呼ばれるようになった。

ブルーノが後に「熱帯雨林の英雄」あるいは「熱帯雨林の十字軍」と称され、世界中から注目を集める環境保護活動家になっていくきっかけがあった。それはサラワクの森で 5 歳年下の同じスイス人の男との出会いである。ロジャー・グラフ (Roger Graf) は 1984 年から 2 年間にわたりアジアへ旅に出かけていた。友人とともにさまざまな国々の自然保護区を訪ねた。その後、友人と別れ、ロジャーは 1 人サラワクへと渡った。そのとき、初めてプナン人と接し、「すぐに彼らが静かで、とても親しみやすく、特別な人びとであると気づいた」 (Suter, 2015: 95)。

1984 年 12 月 24 日、ロジャーはカヤン人集落のロング・ブディアン村 (Long Bedian) を訪れた。そこで、遠目にブルーノ・マンサーらしき人物を見たが、はっきりとはわからなかった。数週間後、ロジャーはクラビット人とともに 2 日かけてロング・セリダン村 (Long Seridan) まで歩いた。1985 年 1 月に入って村の近くで魚釣りをしているブルー

ノと再会する。彼らは最初英語で話していたが、すぐにスイスなまりのドイツ語に切り替えた。意気投合した 2 人は遊動プナン人の集団を訪ね、2 週間過ごしている。同時に、ロジャーは、プナン人に迫っている危機的状況を目の当たりにし、彼らのために何かしたいと考えるようになった。もちろんブルーノとともに。

会計士の資格をもつロジャーは、帰国後すぐにチューリッヒの出版社に職を見つける。幸い、勤務先は協力的で、空き時間にブルーノから送られてきた手紙やテープなど整理することができた。1986 年からロジャーは「サラワクの最後の先住民族を救え」というキャンペーンを始める。バラム河とリンバン河（Limbang）の流域のプナン人が暮らす森での商業伐採を直ちに止めるよう、6,78 名の個人と 14 の環境団体や人権団体の署名を集め、サラワク州政府に要請した。

1987 年 3 月、サラワクのプナン人たちはついに大規模な林道封鎖を開始した。ロジャーは、ブルーノ・マンサーを主宰者とする BMF をバーゼルで立ち上げ、その初代事務局長となった。随時サラワクのニュースを発信したり、各国政府や国連などに対して各種の要請を行ったりした。また、ブルーノに関連する資料や映像ソフトのほか、プナン人や他の先住民族が作った籐のカゴや敷物など手工芸品の販売なども始める。

II 熱帯雨林の英雄と国家の敵

ブルーノは林道封鎖を行うプナン人らを鼓舞して回ったため、過激な外国人扇動者として治安当局から追跡された。もとより滞在ヴィザを延長していないので、違法滞在の身であった。州政府の高官らは、ブルーノ・マンサーを「国家の敵」と呼んだ。他の外国人の活動家やジャーナリストも一斉に検挙され、国外に退去させられた。州内の活動家や弁護士士の活動も厳しく制限された。

1990 年 4 月、ブルーノはついにスイスに戻る。当時 35 歳の彼は、国際社会にサラワク熱帯雨林の危機を訴えるキャンペーンを始める。それに呼応して、アメリカ上院議会では、サラワクの森林伐採に対して非難決議が採択された。イギリスのチャールズ皇太子はサラワクの森林伐採を民族の殺戮行為に等しいとして指弾した。

当時はサラワクで伐採された丸太の半分が日本に輸出されていた。そのため、ブルーノは日本でもサラワク材の輸入停止を訴えた。1990 年 6 月の環境庁（当時）での記者会見では、木材業者によって森林資源や食料などが奪われ、プナン人は栄養不足と生活の困窮に苦しんでおり、「人間性や倫理を経済活動と同じくらい重視してほしい」と話した（『朝日新聞』1990 年 6 月 6 日）。同年 11 月には、6 週間にわたってオーストラリア、欧州、北米を回り、その旅程の最後に再来日した。このときは、プナン人のムタン・トゥオ（Mutang Tuo）とウンガ・パルン（Unga Paren）、クラビット人のムタン・ウルド（Mutang Urud）とともに、森を奪われ、生活を脅かされている実情を訴えている。

1992 年、ブラジルのリオデジャネイロで開催された環境と開発に関する国連会議において、ブルーノ・マンサーは、マレーシア首相（当時）のマハティール（Mahathir bin Mohamad）と面会している。マハティールは事前にメディアに向けて次のように述べていた。「プナン人に教育を与えて、彼らが開発を望むのか、森にとどまるのか、選ばせたらよい」と（Ritchie, 1994: 209）。ブルーノは面会に際し、プナン人が森にとどまることを認めるべきであり、彼らはそれを望んでいると主張した。それに対して、マハティールは「プナン人に選択権があれば、彼らはすべてのマレーシア人が享受している施設やサービスを望むだろう」と答えた（Ritchie, 1994: 209）。33 年間にわたりサラワク州首相の座にあったタイプ（Abdul Taib Mahmud）も同様に、森林伐採は「隔絶と貧困を運命づけられた」奥地の森を開拓し、「農山村の半分以上の人びとの生活を変えてきた」と述べる（Ritchie, 2005: 200）。当時、政治の中枢にいた人びとの間では、プナン人の伝統的な生業や生活様式は「原始的」で「遅れている」という認識がにじんでいた。

加えて、タイプの長年の友人で、州の検事総長を務めたジョー・チュン（Joo Chung）は、サラワクの木材輸出は外貨獲得のために多大な貢献をしてきたと語っている。その一方で、プナン人たちは伐採業者に金を要求し、その要求額はエスカレートしていると非難している。林道封鎖を行うのも先住民の自発的意思ではないという。「先住民は頼まれてやっているだけで、NGO から 1 回につき 250～300 リンギを受け取っているのだ。私にはそんなことを止めることはできない。サラワク（マレーシア）は自由の国なのだから」（Kumar, 2014: 450）。ブルーノ・マンサーをはじめ NGO のリーダーたちは、森林保護で金を稼いだら、姿をくらまし、カリブ海あたりのビーチへ向かうとも述べている。

タイプはかつて次のように述べていた。「もしプナン人が森の中を歩き回って狩猟や漁猟をやりたいなら、そのための一角を保護するつもりだ。その保護区は伐採業者に売ることとはできない。定住が彼らの生存を脅かしかねない開発であるならば、その準備ができていない人びとに我々は定住を強いることはない」（*Star*, July 3, 1987）。実際、遊動プナン人に特別の森として生物圏保存地域を創出すると約束していた。にもかかわらず、その約束を破棄したばかりか、すべて伐採してしまった。BMF の事務局長、ロジャー・グラフにとって、この約束が果たされず、またそれにうまく対処できなかったことが大きなショックであった。そして、彼は BMF を去っていった。新たに事務局長として 26 歳のジョン・クンツリ（John Künzli）が就いた。

1999 年 3 月、ブルーノは再びサラワクに入り、州首相官邸にパラグライダーを使って飛来するという突拍子もない行動に出る。筆者はこのときクチン市内で、両翼にプナン人とタイプと大きく書かれた飛行中のパラグライダーを目撃し、驚いた。着陸後に直ちに逮捕され、即日シンガポールへの強制退国となった。

彼が最後にボルネオ島に入ったのは 2000 年 2 月である。インドネシア領カリマンタンで 3 ヶ月過ごし、熱帯雨林保全のキャンペーンに関する映像をスウェーデンの映画製作チー

ムと撮影した。その後、5月23日、カリマンタンとサラワクの国境を徒歩で越えた。翌日、ブルーノはプナン人の友人を連れてサラワクのバリオ（Bario）を発った（Suter, 2015:161）。その後、ブルーノは友人と別れて、アダン川（Adang）沿いに暮らす長年の友人、アロン・サガ（Along Saga）に会いに行くといって出かけた。途中、彼が好きだった石灰岩峰バトゥ・ラウィ（Batu Lawi）を通りながら。ブルーノの消息はそこで途絶えた。30kg前後のリュックサックも見つかっていない。事故死か、自殺か、他殺か、さまざまな憶測が飛び交った。遺体は見つかっておらず、暗殺されたという疑念も根強く残っている。

失踪後5年が経過した2005年3月20日、ブルーノ・マンサーは死亡したと推定されるとの宣告がバーゼル民事裁判所から出された。5月21日には、バーゼルのエリザベス教会で市民追悼集会が行われた。

III 終わらないプナン人の闘い

1. ロング・クヴォ村

カリマンタンとの国境付近を源流とするバラム河は、中流域でトゥートー川（Tutoh）及びティンジャール川（Tinjar）と合流して南シナ海へと流れ込んでいる。この流域にはサラワクで最も多くの6,000～7,000人のプナン人が暮らしている。

ロング・クヴォ村は、バラム河の中上流域に位置する村である。ちょうど奥地へ延びる伐採道路の分岐点に位置し、交通の要所である。村の近くには、木材伐採のキャンプがある。村の人口は13戸、72人である。村長によれば、彼らがこの地に定住し始めたのは1982年ごろだったという。当時から木材運搬のトラックが頻繁に行き交うようになった。この村は、バラム地域では例外的に林道封鎖に参加しなかった。州政府は1986年にこの地にロングハウスを建設し、月2回医師を派遣するようになった。

その後、ロング・クヴォ村に建設された施設は、小学校校舎、寮、給食施設などであり、それらの施設はまとめて「サービス・センター」と呼ばれる。センター建設に費やされた費用は、50万リンギとされる。その後、1991年3月に建てられたロングハウスには50万リンギが充てられた。この村のサービス・センター建設には、サムリン社（Samling）とリンブナン・ヒジャウ社（Rimbunan Hijau）が出資協力している。両社はともにサラワクの大手木材企業であり、現在では国境を越えたグローバルな多国籍企業として、世界各地の森林伐採事業に進出している。ロングハウス建設時の1986年のロング・クヴォ村の人口は現在の2倍、約150人であった。その後、当初入居していた人たちの半数は、森での遊動生活に戻ったという。2003年9月、ロング・クヴォ村で火災が発生した。幸い人命被害はなかったが、ロングハウスを含むすべての施設が焼失した。村長は政府と伐採会

社に陳情を繰り返し、新たなロングハウスが建設されることになった。

さきの奥野の報告によれば、1996 年以降の林道封鎖の目的は、森林伐採に全面的に反対するというのではなく、適正な森林伐採とそれに対する見返り、住環境、医療環境、教育などの迅速な割り当ての要求である（奥野, 2003:7）。ロング・クヴォ村はそれらの目的をほぼ達成している。しかし、この村で見られるようなプナン人に対する特別の社会経済上の政策（以下では「公共サービス」とよぶ）が実施されているのは、ごく一部の村にすぎない。州政府は、「公共サービス」についてプナン人を「発展」ないし「進歩」に導く手段と強調しているが、その立案過程には、伐採権を最大限に行行使するために、森の中を遊動しているプナン人を集住させるという意思決定が先にあった（金沢, 2009:144）。

2002 年 6 月上旬に 30 以上のプナン人集落の代表がバラム河上流域のロング・サヤン村（Long Sayan）に集まり、3 日間の集会をもった。その際、連邦政府、州政府への要望として「ロング・サヤン宣言」が提出された。主な内容は次の通りである。

- ・プナン人の先祖代々の土地でのあらゆる伐採を停止すること
- ・各プナン人コミュニティの先住慣習権を認め、共有林を設けること
- ・補償を提供し、森林と土地の管理に関する公平で開かれた、意味ある協議のプロセスを制度化すること

サラワク土地法では、先住慣習地（Native Customary Land）という土地区分が設定されている。しかし、プナン人のように、森の中で移動生活を続けていたり、法の施行以後に定住したりした者には先住慣習権が認められない。なぜなら、現行法では 1958 年以前に果樹栽培地、住居地、農耕地、墓地などに使用していた土地に限って先住慣習権が認められる規定になっているからだ。プナン人は州政府に対して、これまで繰り返し土地や森林の先住慣習権を求めてきた。しかし、バラム河流域で最も早く定住したロング・ラマイ村であっても、それが土地法の制定より後であるため先住慣習権は認められていない。

集会では、サラワク州政府の「公共サービス」にプナン人が採点している。それによれば、9 つのグループが平均点 F という落第点（Failure）をつけた（Sahabat Alam Malaysia, 2002）。宣言から 13 年後の 2015 年、再び 40 以上のプナン人集落の代表が集まり、声明を発表した（Sahabat Alam Malaysia, 2015）。彼らの土地に対する先住慣習権を求める訴えは変わらず、森林伐採に加え、アブラヤシのプランテーション開発やダム開発に対する懸念が示されている。

2. モヨン集団

モヨン集団は、2010 年にはバラム河中上流域のプアッ川沿いに 12 世帯、45 人が居住し

ている。1990年にラングブラの行った調査では、モヨン集団は11家族44人の構成でほぼ同規模であった（Langub, 1990: 19）。当時は現在よりやや北に位置するトゥマロン川（Temalon）の上流にいたとされる。この一帯はサゴ・デンプンがとれるヤシが自生しており、いわゆる遊動ブナン人の居住地域であった。ブナン人が特に好んで利用するのは、チリメンウロコ属（*Eugeissona*）のヤシである。チリメンウロコ・ヤシは、ボルネオ島の内陸部で広く分布し、急な斜面や尾根に自生している。自生するヤシの量にもよるが、遊動ブナン人は1カ所に数週間単位で滞在する。ヤシの自生地との距離は数キロと短いものの、移動には数時間～十数時間要する。彼らはサゴヤシの生育状況を予想して、次の遊動場所を決めていた。

しかし、1990年代半ばにこの地が商業伐採の対象となると、州政府や木材企業、NGOなど外部アクターが頻繁に行き交うようになった。まず近隣から宣教師や牧師が訪ねてくる。また、デンマークの篤志家はプアッ川沿いの遊動民に対して、滞在小屋の建設を申し出た。また、別のNGOの提案によって、チリメンウロコ・ヤシの植栽が始まった。他方、海岸部のビントゥルからサバ州コタキナバルまで内陸部を縦断する形で天然ガス・パイプラインの敷設工事が行われている。プアッ川流域の工事をめぐり、マレーシア国営の石油会社であるペトロナス社（Petronas）とブナン人との間でトラブルが発生した。そのためモヨン集団を中心にプアッ川周辺のブナン人は団結して抗議の意思を示すため、滞在小屋に留まって林道封鎖を始めた。彼らの中には、林道封鎖を続けるため数ヶ月森に入っていない者もいる。その一方で現在まで十分な炭水化物を保障してくれるのは、野生のサゴヤシに限られる。こうした状況下で、モヨン集団は家族ごとに交替でヤシの自生地までかけ、相当量のデンプンを滞在小屋に持ち帰ってくる。持ち帰ったデンプンを集団内で共有する。つまり、野生サゴのエコロジカルな知識をもとに、一定の遊動性と共有という行動習慣を最大限に活かしながら、林道封鎖という闘いを続けている。

3. ロング・ラマイ村

ロング・ラマイ村は、バラム河上流域に位置する。同村は650人前後の人口をもつサラワクで最大規模のブナン人集落である。村の中心に建てられたロングハウスに20戸、他の約100戸の世帯は戸別の小屋に暮らす。村の脇をバロン川（Balong）が流れている。

1940年代初めから、このバラム上流域にプロテスタント系の宣教師が相次いでやってきた。ほとんどはオーストラリア人であった。キリスト教がこの地域の人びとに浸透していくにつれ、近隣の農耕民であるクラビット人やサバン人の中から牧師になる者が出てきた。サバン人牧師のラハン・アポイ（Lahan Apoi）は、クリスマスにブナン人たちを自分たちの村へ招待したり、森の中に蓄音機をもって行き、賛美歌を聴かせたりした。森の中での礼拝は何年も続けられ、ラハンは1958年にブナン人への布教活動に専念すること

を決意した。当初プナン人たちは、ブラカ川 (Belaka) 沿いに定住先を求めたが、数ヶ月の間になんまり多くの人びとが集まったため、洪水でできた肥沃な平坦地へと移住した。それが、現在の村の立地地点である。

バラム地域の行政官は 1959 年 11 月にロング・ラマイ村を訪れ、2、3 週間滞在している。その報告書では、聖書を読める若者がいたことが驚きをもって記されている。1960 年代には 2 人の宣教師がロング・ラマイ村に着任した。彼女らは、賛美歌をプナン語に翻訳したり、プナン語の聖書を作ったりするなどして都合 4 年間、この村で布教活動を行なった。1962 年にロング・ラマイ村のある長老が亡くなり、どうやって埋葬するかにかんしてもめごととなった。プナン人の伝統的な慣習に従えば、遺体はその家に残して、他の者は新たな場所に移動することになる。当時は、キリスト教信仰と伝統的な慣習との間の葛藤が強く残っていた。結局、ジャンガン・カディル (Jangan Kadir) を代表とする親族はロング・ラマイ村から 20 キロほど北上したライ川 (Lai) 流域へと移住した。さらに 1983 年には、タマ・シモン (Tama Simon) を代表とする家族はライ川から 60 キロほど北上したパ・ブラン村 (Pa Berang) へと移動した。

先述の通り、これまで繰り返し彼らの土地の先住慣習権を州政府に対して求めてきた。しかし、バラム河流域で最も早く定住したこの村であっても、それが土地法の制定より後であるため認められていない。そこで、ロング・ラマイ村を含むバラム河上流域の 18 のプナン人集落は話し合いを重ね、2011 年に「平和の森—プナン人からの意見と行動計画、すべての人びとの利益のために—」という構想を発表した (Penan, 2011 ; 金沢, 2015)。この地に多く残る原生林とともに自分たちの生活環境を守っていききたいというのがプナン人の望みである。BMF はこれまで「平和の森」に関連した地図作りやキャンペーンなどをサポートしてきた。2015 年 5 月にアデナン・サテム (Adenan Satem) 州首相 (当時) がイギリスを訪問する機会があった。BMF がお膳立てをし、プナン人のビラン・オヨイ (Bilang Oyai) がクラビット人のムタン・ウルドとともに、州首相に「平和の森」構想を直訴した。ムタン・ウルドは、ブルーノ・マンサーと世界各国をキャンペーンに回った人物で、その後カナダに亡命し、先住民族の権利を支援する活動を行っている。

2016 年に入って、「平和の森」構想に関して進展が見られた。2016 年 2 月 18 日、サラワク州政府は 18 村のプナン人の代表と協議に応じたのだ (*Malysiakini*, 26 Feb. 2016)。プナン人側の代表として、ロング・ラマイ村のジェームス・ラロ (James Lalo) から正式な要望書が提出された。政府の代表は森林局長のサプアン・アハマド (Sapuan Ahmad) であった。政府代表はプナン人たちの提案を歓迎し、今後さらに村人たちと協力して調査検討していきたいと述べた。プナン人たちは政府の前向きな反応を喜ぶとともに、この地域の商業伐採を放棄するよう重ねて要求した。サラワク州政府が商業伐採に反対するプナン人コミュニティと対話したのはこの 30 年間で初めてであり、BMF も歴史的な会合であると評価している。

IV ブルーノの死と BMF の再生

ロジャー・グラフの後、BMFを引き継いだジョン・クンツリにとって、2000年のブルーノ・マンサーの失踪は予想外の出来事だった。以後4年間、主のいないプレッシャーの中、事実上1人でBMFを支えた。

2004年に新たな事務局長が就任した。当時36歳のルーカス・ストラウマンである。ルーカスは、農業開発の歴史に関する博士論文をもとにした自身の著書を出版している。ちなみに、ブルーノ・マンサーとは一度も会ったことはない。2004年の時点ではたった1人からのスタートだった。事務所の場所を旧事務所から歩いて20分ほどの距離にあるところに移転した。そこでは、資料を保管する倉庫や図書室のスペースなども確保できた。

2016年時点でBMFの正会員は3,900人、そのうち95%はスイス国内在住者である。活動資金は年間約150万スイスフラン（120円で換算して約1億8千万円）である。フルタイムの専従者はおらず、当初から分業型の組織運営を行っている。6名の理事を揃えるが、すべて無給である。事務局長以下のスタッフは、文書担当2人、キャンペーン担当2人、プロジェクト担当1人、資金集め担当2人と総勢8名を数えるまでになった。全員週3〜4日勤務である。ルーカス自身も妻と共働きで、共に子育てに時間をあてる。スタッフには、20代、30代の若手が多い。学生をリクルートするためにBMFが大学の地理学や文化人類学の研究室を訪問することもある。逆に学生からインターンシップの申し出もある。図書室はビジター向けに公開している。

ルーカスの歴史家としてのまなざしは、マネー・ロギングと題された自身の著書にも反映されている。そこでは、長年にわたり、かつ複雑な木材輸出に絡む汚職や不法資金の流れが詳らかにされている（Straumann, 2014）。タイプ元首相の一族は熱帯材輸出の独占体制を築き、日本への木材輸出の許認可を与えてきた。日本の木材輸入に関係する企業はその代わりに香港のペーパー・カンパニーにリベートを支払ってきた。リベート資金はペーパー・カンパニーから投資企業に振替えられて、北米の不動産購入の融資に充てられた。投資企業はタイプ一族によって秘密裏に管理されていた。

出版と同年にタイプは突然州首相を辞任した。ルーカスによれば、それまでの数年間、BMFが展開してきた木材輸出に絡む汚職批判のキャンペーンによって、タイプは追い込まれてきたと見ている。タイプの後任のアデナン・サテムは、就任後直ちにサラワク州の木材大手6社に対し警告を発している。許可地域外の違法伐採に関与しているとの理由からであった。また、違法伐採が改善されるまで伐採ライセンスの新規発行の停止も発表した。

ルーカスの組織運営の特徴は団体や個人のネットワークをより重視している点である。2016年5月には、「ブルーノ・マンサー勇気の賞（Bruno Manser Prize for Moral Courage）」を設けて、初の受賞者として、コメオク・ジョー（Komeok Joe）とピーター・

カラン (Peter Kalang) を選んだ。コメオクは、さきの「平和の森」構想の一角を占めるロング・クロン村 (Long Kerong) の出身者で「マレーシア先住民ネットワーク (Jaringan Orang Asal SeMalaysia)」のメンバーである。現地のプナン人たちと BMF をつなぎ、州政府との交渉役でもある。一方のピーター・カランは「河を救えネットワーク (Save Riers Network)」の代表を務める。サラワクでは近年複数の巨大ダムが建設されてきた。バラム河流域でもバラム・ダム (Baram Dam) の着工が始まり、プナン人を含む多くの流域住民が移住を迫られていた。ピーター・カランは、州の議員や内外の研究者らとともに協働して、バラム・ダム計画を撤回させる原動力となった (谷島, 2016)。

おわりに

ブルーノ・マンサーは「熱帯雨林の英雄」とも「国家の敵」とも呼ばれてきた。しかし、それぞれ外国人や政府高官によるバイアスのかかったイメージであり、ともに暮らしていたプナン人にとっては「ただの男」であった。ブルーノ亡き後、BMF は新たにルーカス・ストラウマンという歴史家を事務局長に迎えた。彼は BMF 内の分業や NGO ネットワークを重視しながら、よりフラットで開かれた組織体制を作ってきた。同時に、サラワクにおける長年の木材輸出に絡む汚職や不法資金の流れを追及し、その利権構造に切り込んだ。

一方、バラム河流域のプナン人たちの闘いは続いている。上流では森林の商業伐採、中流域ではアブラヤシ・プランテーション開発、ダム建設、天然ガス・パイプラインの敷設などに伴い、衝突が起きている。プナン人の土地に対する先住慣習権は依然として認められていない。他方、州首相がアデナン・サテムに代わって、これまでまったく届かなかったプナン人たちの声が届き始めたことは確かである。そうした中、2017 年に入ってまもなく心臓を患っていたアデナン・サテムが急逝した。代わって、アバン・ジョハリ (Abang Johari) が新たな州首相に就任した。「平和の森」構想の行方をはじめ、プナン人の闘いはまだ予断を許さない。

〈参考文献〉

日本語文献

奥野克巳 (2003) 「ブルーノ・マンサーの死とプナン人の闘いの変貌」『JAMS News (日本マレーシア研究会会報)』第 26 号、pp. 6-9。

金沢謙太郎 (2009) 「熱帯雨林のモノカルチャー：サラワクの森に介入するアクターと政治化した環境」信田敏宏・真崎克彦編『開発の風景：南アジア・東南アジアの現場から』明石書店、pp. 119-54。

——— (2015) 「平和の森—先住民族ブナンのイニシアティブ」 宇沢弘文・関良基編, 『社会的共通資本としての森』 東京大学出版会, pp. 193-212。

マンサー・ブルーノ、山口昌男 (1991) 「サラワクの森：未来へのノスタルジア」 『世界』 第551号, pp. 278-295。

マンサー・ブルーノ (1997) 『熱帯雨林からの声：森に生きる民族の証言』 野草社。

谷島亘 (2016) 「バラム・ダム反対運動はなぜ勝利したのか」 2016 年度日本マレーシア学会 (JAMS) 研究大会ポスター発表レジュメ。

英語文献

Kumar, G. Siva (2014) *Taib: The Visionary*, APR New Media Sdn Bhd, Malaysia.

Langub, Jayl (1990) A journey Thorough the Nomadic Penan Country, *Sarawak Gazette*, Vol. CXVII No. 1514: pp. 5-27.

Penan (2011) *The Penan Peace Park: Penans self-determining for the benefits of all*, 2017 年 1 月 31 日最終アクセス、http://www.penanpeacepark.org/resources/2012_Penan_Peace_Park_Proposal_English.pdf よりダウンロード

Peace_Park_Proposal_English.pdf よりダウンロード

Ritchie, James (1994) *Bruno Manser: The Inside Story*, Summer Times, Singapore.

——— (2005) *Abdul Taib Mahmud: 41 Years in the News*, Wisma Printing, Malaysia.

Sahabat Alam Malaysia (2002) Press Release: Penan Community Meeting and Anniversary of the Sarawak Penan Association 7-9 June, 2009 年 9 月 9 日最終アクセス、<http://surforever.com/sam/pressrelease/reportcard.htm> よりダウンロード

——— (2015) *Penan Land Rights in Sarawak: 13 years after the Long Sayan Declaration 2002*, Sahabat Alam Malaysia.

Straumann, Lukas (2014) *Money Logging: On the Trail of the Asian Timber Mafia*, Bergli Books, Switzerland.

Suter, Ruedi (2015) *Rainforest Hero: The Life and Death of Bruno Manser*, Strategic Information and Research Development Centre, Malaysia.

(かなざわ・けんたろう 信州大学)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

一党優位体制の資源としてのサラワク

鈴木絢女

はじめに

サラワクは、マレーシアの与党連合国民戦線 (Barisan Nasional: BN) が常に議席を維持することのできる「定期預金 (fixed deposit)」と称されている。実際、BN の下院議会における獲得議席の割合が 60%と過去最低に落ち込んだ 2013 年総選挙においても、BN はサラワク州の 31 の下院議席のうち 25 議席を維持することに成功した。

2008 年総選挙以降、連邦政府をめぐる BN と野党連合人民連盟 (Pakatan Rakyat: PR、2015 年より希望連盟 Pakatan Harapan: PH) の競争が激しくなるなかで、BN の定期預金であるサラワクが選挙政治の焦点の一つとなっている。サラワク再生エネルギー回廊 (Sarawak Corridor of Renewable Energy)、パン・ボルネオ高速道路 (Pan Borneo Highway) などの大型インフラ事業に加えて、同州における農村開発や低コスト住宅建設を連邦予算に盛り込む BN 政府に対して、サラワク州内の BN の切り崩しを狙う PH は、同州からの 50%の税収を州に還流させることによる財源の拡大や雇用創出を謳っている (*Free Malaysia Today*, June 24, 2017)。

本稿では、選挙および連邦政府予算データにもとづき、連邦レベルの政治におけるサラワクの意義を考察する。具体的には、連邦議会における BN の優位において、サラワク州の BN 構成政党 (以下、サラワク BN) が重要な役割を果たしていることを示した上で、その要因を指摘する。さらに、連邦開発予算の配分から、同州が連邦選挙における役割に見合った報酬を得ているのか否かを確認する。

1. 連邦下院議会選挙におけるサラワク

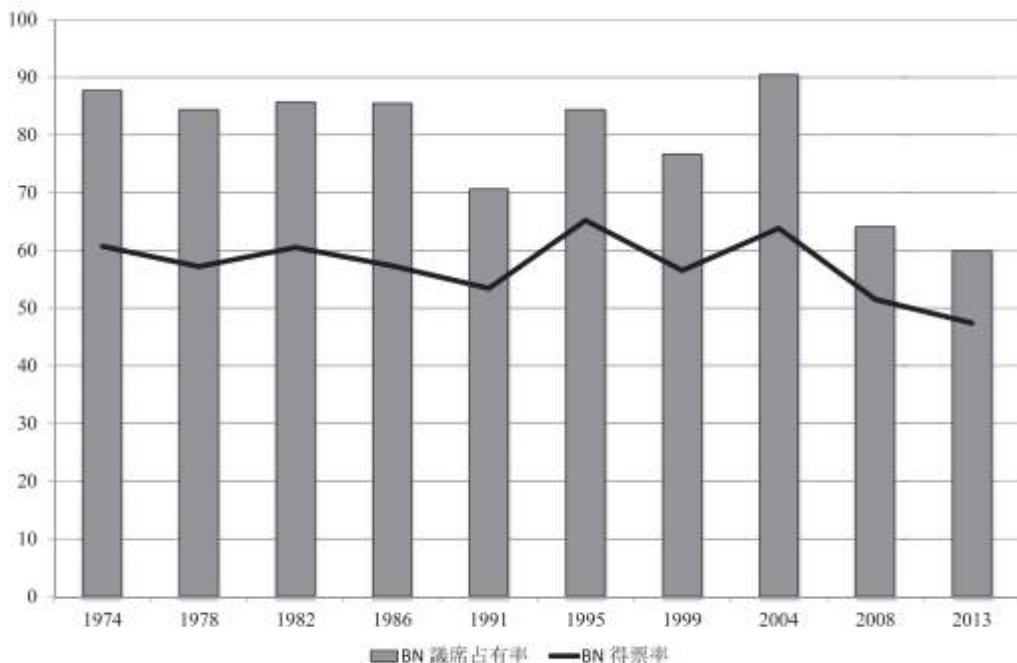
(2) BN を下支えするサラワク BN

今日のマレーシア政治について最も注目すべきは、BN と PH による競争的な選挙が実現し、BN の下院における優位が侵食され続けているという選挙政治の趨勢である。この趨勢は、アジア通貨危機を契機とした「レフォルマシ (Reformasi)」とよばれる社会運動を契機としている。この社会運動では、アンワール・イブラヒム (Anwar Ibrahim)

元副首相の更迭、逮捕、起訴や、警察による非人道的な扱いに憤った野党、人権 NGO、イスラーム団体、学生が、街頭で政治の自由化や汚職撲滅、マハティール・モハマド (Mahathir Mohamad) 首相の辞任を要求した。この運動を触媒として、政治の自由化や司法の独立、汚職撲滅といった争点を結節点に野党の選挙協力がはじまったのである。この際、アンワール支持者の組織した国民正義党 (Parti Keadilan Nasional、のち Parti Keadilan Rakyat: PKR)、イスラーム党 (Parti Islam Se-Malaysia: PAS)、民主行動党 (Democratic Action Party: DAP) の 3 野党による野党連合代替戦線 (Barisan Alternatif: BA) が成立した。

もっとも、野党連合は必ずしも安定的とはいえなかった。2004 年には、イスラーム刑法実施をめぐる PAS と DAP の対立から選挙協力は不成立となった。ひるがえって、2008 年下院選挙では、PKR、PAS、DAP による PR が成立し、伝統的に BN が保持してきた下院議席の 2/3 の安定多数の阻止に成功した。「政治的津波 (Political Tsunami)」とも呼ばれた 2008 年選挙に続く 2013 年選挙においては、PR が BN 議席をさらに侵食したものの、2015 年には再びイスラーム刑法実施問題をめぐる対立から PAS が連合を離れ、PKR、DAP と、PAS の離党組からなる人民信託党 (Parti Amanah Rakyat) による PH が成立した。

こうした野党連合のダイナミクスは、下院議会選挙の結果を左右してきた。図表 1 は、



図表 1 下院議会における BN の議席占有率および得票率 (1974 年～2013 年)

出所: Election Commission of Malaysia 各年。

図表 2 総選挙におけるサラワク BN の獲得議席数および議席占有率 (1995 年～2013 年)

	1995	1999	2004	2008	2013
総下院議席数	192	193	219	222	222
BN獲得議席数	162	148	198	140	133
サラワクBN獲得議席数	26	27	27	30	25
BN獲得議席／下院議席数 (%)	84%	77%	90%	63%	60%
サラワクBN獲得議席／サラワク州下院議席数 (%)	96%	100%	96%	97%	81%
サラワクBN獲得議席／BN獲得議席数 (%)	16%	18%	14%	21%	19%

出所：図表 1 に同じ。

BN 成立以降の下院における議席占有率および得票率を、総選挙ごとに示している。BA および PR による選挙協力が実現した 1999 年、2008 年、2013 年選挙において、BN の議席と得票率が下落している。

BN 議席が侵食されるこのような国政の趨勢において、サラワクは下院議会における BN のプレゼンスを支えるという役割を果たしてきた。図表 2 は、1995 年から 2013 年の総選挙におけるサラワク BN の獲得議席比率などを示している。

BN の下院における議席シェアが、前回選挙の 84% から 77% へと下落した 1999 年選挙では、サラワク BN は州内のすべての選挙区で勝利した。また、BN の議席占有率が 63% となり、歴史上はじめて BN が下院の 2/3 の安定多数を逸した 2008 年選挙でも、州都バンダル・クチンの議席を DAP に奪われるにとどまり、州内の下院選挙区に占めるサラワク BN 勝利区の割合は、97% と高止まりした。BN の議席シェアがさらに縮小した 2013 年選挙では、バンダル・クチンに加えて、ミリ、シブなどの華人有権者が多数を占める都市部の 6 つの選挙区で負けたため、サラワク BN の州内での下院議席占有率は 81% に下落した。とはいえ、BN の議席占有率 60% に比べれば、サラワク BN は、高い議席シェアを維持することに成功している。

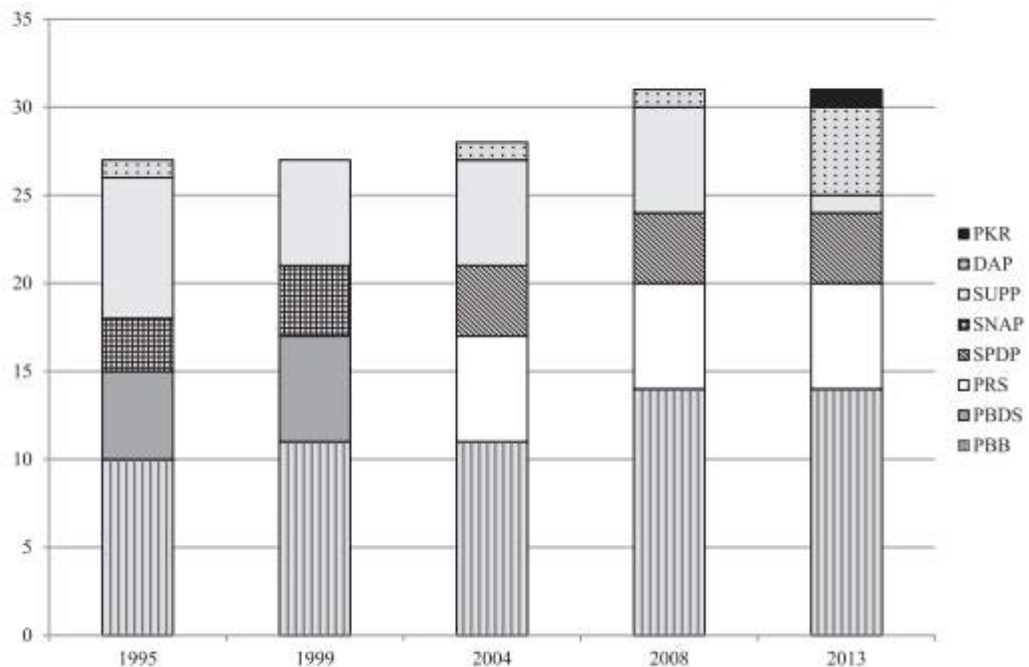
このように、1999 年選挙以降、野党連合の攻勢によって BN 全体の獲得議席数が減ったにもかかわらず、サラワク BN は議席を維持している。このことは、BN の下院議席をサラワク BN が下支えていると解釈することができる。また、サラワク BN 獲得の全 BN 議席に占める割合を見ても明らかとなおり、BN におけるサラワク BN 議席の割合は拡大しているといえる。

(2) 2013 年選挙に見るサラワク BN の強さ

それでは、なぜサラワク BN は下院議席を維持することができているのか。選挙デー

図表 3 サラワク州下院議席を有する政党

略称（カッコ内は獲得議席数）	正式名称（英語表記）	概要
PBB (14)	統一プミプトラ伝統党 (Parti Pesaka Bumiputera Bersatu)	1973 年成立。マレー、ムラナウ、一部ダヤクを支持基盤とする。
PRS (6)	サラワク人民党 (Parti Rakyat Sarawak)	Parti Bangsa Dayak Sarawak の解散を受けて、2003 年成立。
SPDP (4)	サラワク進歩民主党 (Sarawak Progressive Democratic Party)	1961 年に成立し、1973 年に BN 政党となっていた Sarawak National Party が 2002 年に登録抹消されたのをうけ、同年、設立。
SUPP (1)	サラワク人民連合党 (Sarawak United People's Party)	1959 年成立。華人と一部ダヤクを支持基盤とする。
DAP (5)	民主行動党	1965 年成立。SUPP から分離した党员によるサラワク支部設立 (1978 年) 後、1982 年総選挙ではじめて同州において候補者擁立。
PKR (1)	人民公正党	1999 年の成立以降、サラワク州における候補者擁立 (ただし、当時の政党名は国民正義党)。



図表 4 サラワク州下院選挙における政党別獲得議席数 (1995 年～2013 年)

出所：図表 1 に同じ。

図表 5 サラワク州下院選挙区の規模 (2013 年選挙)

全国順位	選挙区番号	選挙区名	登録有権者数	華人有権者比率
41	P196	Stampin	84,732	78.0%
72	P219	Miri	71,170	55.0%
87	P212	Sibu	64,601	60.0%
102	P217	Bintulu	59,893	26.3%
109	P211	Lanang	57,143	73.0%
119	P195	Bandar Kuching	53,336	90.3%
134	P194	Petra Jaya	49,750	12.0%
161	P198	Mambong	42,344	24.5%
177	P197	Kota Samarahan	38,158	1.9%
184	P193	Santubong	37,017	5.6%
185	P208	Sarikei	36,550	67.2%
186	P199	Serian	33,713	12.4%
193	P202	Sri aman	29,789	15.8%
194	P220	Baram	29,385	12.9%
197	P218	Sibuti	28,351	-
200	P205	Saratok	27,562	7.4%
201	P201	Batang Lupar	27,360	4.0%
203	P213	Mukah	26,477	9.5%
204	P204	Betong	26,322	5.0%
205	P215	Kapit	26,195	11.0%
207	P192	Mas Gading	25,771	22.7%
208	P214	Selangau	25,461	4.9%
213	P221	Limbang	24,278	23.8%
214	P209	Julau	22,522	6.3%
215	P216	Hulu Rajang	21,686	1.1%
216	P200	Batang Sadong	19,839	6.5%
217	P210	Kanowit	19,433	14.8%
218	P203	Lubok Antu	19,303	8.7%
219	P206	Tanjong manis	19,215	-
220	P222	Lawas	18,845	15.6%
221	P207	Igan	17,771	-

出所：図表 1 に同じ。華人有権者比率は、*New Straits Times*, May 7, 2013.

注：「-」はデータなし。

タからみると、有権者数が小さい農村部の選挙区で議席数を稼いでいることが、その一因であることがわかる。

サラワク BN が 6 議席を失った 2013 年選挙では、6 つの政党が下院選挙区で立候補し

た（図表 3）。政党別の獲得議席数は、図表 4 のとおりである。この選挙では、PBB、PRS、SPDP は候補者を擁立したすべての選挙区で勝利した。他方で、華人やダヤク人を主な支持基盤とする SUPP が、華人が有権者の過半数を占める都市部の選挙区で DAP と PKR に敗北し、前回選挙の 6 議席から 1 議席へと大きく獲得議席数を後退させた。

野党が勝利した華人多数の都市部選挙区は、有権者数が多いという特徴も持っている。他方で、先住民族の有権者が多数を占める農村部選挙区の規模は概して小さい。マレーシアの選挙制度は、選挙区内で 1 票でも多く得票した候補者が勝利する小選挙区制であるため、各選挙区の有権者数の違いは、そのまま票の重みの違いとなる。サラワク BN の強みは、このような都市と農村の一票の格差に由来している。

図表 5 は、全国 222 の選挙区を有権者数により並び替えたうえで、サラワク州内の選挙区のみを抜粋したものである。サラワクで最も大きい選挙区は、84,000 人の有権者を持つスタンピンであり、全国で 41 番目の大きさを持つ。次点が 72 位のミリ、87 位のシブと続く。中間値となる 111 位の選挙区よりも大きい選挙区は、サラワクでは 5 選挙区のみであり、さらに州内の約半数の選挙区が、全国 200 位以下の零細選挙区となっている。

サラワク州内の下院選挙で野党が勝利したのは、図表 5 で網掛けしたスタンピンやミリなどの大規模な選挙区である。この図表から明らかなように、サラワク BN は票の重みの大きい零細選挙区（その多くは農村部にある）で勝利することで、議席数を稼いでいるのである。農村部選挙区における BN の優位は、インターネットアクセスおよびオルタナティブ・メディアへのアクセスが制限されていることや、低所得者層向けの公的扶助プログラムに由来している（Chin 2013）。

2. 十分な報酬は得ているのか？

多数の小規模な選挙区を掌握することで、サラワク BN は、1999 年選挙以降半島部で票と議席を失う BN を支えてきた。それでは、サラワク BN はそれに見合った報酬を得ているのだろうか？

この問いに答える一つの方法として、ここでは州別の連邦予算データを確認したい。図表 6 は、5 カ年経済計画（マレーシア・プラン）の事業実施のための開発予算を州ごとに示したものである。開発予算の州別データは、第 9 次マレーシア・プランを最後に公表されていないため、ここでは 8 次、9 次マレーシア・プランのデータのみを示す。

概して、サラワク州は開発予算の分配において、多くの州よりも優遇されているといえる。1 人あたり開発予算額はマレーシア平均よりも低いものの、州別の予算額、1 人あたり予算額の双方において、サラワクは中間値よりも多くの配分を受けている。とはいえ、サラワク BN が、BN 全体の約 2 割を支えていることを考えれば、サラワクの政治的な貢献にみあった経済的な報酬があるとはいえない。

図表 6 各州開発予算総額、割合、1 人あたり予算額 (2001~2010 年)

州・連邦直轄区	人口 (100万人)	8MP (2001-2005)			9MP (2006-2010)		
		予算 (100万リンギ)	州/連邦 (%)	1人あたり予算 (リンギ)	予算 (100万リンギ)	州/連邦 (%)	1人あたり予算 (リンギ)
ブルリス	0.25	1,581	1.4%	6,324	2,201	1.1%	8,804
クダ	1.95	5,180	4.7%	2,656	7,817	3.9%	4,009
クランタン	1.54	2,905	2.6%	1,887	6,651	3.3%	4,319
トレンガヌ	1.04	2,443	2.2%	2,349	5,806	2.9%	5,583
ペナン	1.56	4,040	3.7%	2,590	6,152	3.1%	3,944
ペラ	2.35	4,849	4.4%	2,063	7,614	3.8%	3,240
パハン	1.5	3,821	3.5%	2,547	9,853	4.9%	6,569
スランゴール	5.46	7,848	7.1%	1,437	15,539	7.8%	2,846
連邦直轄区	1.83	9,868	9.0%	5,393	31,090	15.5%	16,989
ヌグリ・スンビラン	1.02	5,221	4.7%	5,119	5,884	2.9%	5,769
マラッカ	0.82	2,465	2.2%	3,006	3,686	1.8%	4,495
ジョホール	3.35	5,937	5.4%	1,772	10,200	5.1%	3,045
サバ	3.21	7,990	7.3%	2,489	15,658	7.8%	4,878
サラワク	2.47	8,676	7.9%	3,513	13,437	6.7%	5,440
複数州	-	37,176	33.8%	-	58,412	29.2%	-
連邦全体	28.35	110,000	100.0%	3,880	200,000	100.0%	7,055

出所：Ministry of Finance, Economi Report, 各年

注：人口は、2010 年センサスによる。

さらに、この配分額が十分かという点も、慎重に考える必要がある。図表 7 は、各州の平均所得、中間所得、ジニ計数、貧困者比率を示したものである。この表からは、全国平均を下回る所得、高いジニ計数と高い貧困者比率により特徴づけられるサラワクの状況が浮かび上がる。

このようなサラワクの経済的な後進性は、サラワクの有権者によっても問題視されている。2016 年 1 月にサラワクの有権者を対象としてムルデカ・センターが行った調査では、「サラワクが解決しなければならない 2 つの最も重要な問題は何か」という質問に対して、33.2%が経済問題、27. %が開発とインフラと回答している。経済問題としては、生活費の上昇 (13.2%) に加えて、農村部の貧困 (8.1%)、貧困者と農村部への補助 (4.6%) が回答の上位を占めている。開発とインフラ分野の問題としては、公共インフラ整備の遅れ (22. %)、農村部における学校をはじめとする公共インフラへの投資の遅れ (2.5%) が問題視されている。

つまり、開発予算の優先的な配分にもかかわらず、サラワクの人々は、インフラ整備の遅れや貧困問題の持続に典型的な経済的厚生 の低さを問題視している。このような状況を背景に、同じ調査では、回答者の 54%が、中央政府による待遇を不公平と感じていると答えている (Merdeka Centre, January 20-26, 2016)。

図表 7 各州の社会経済統計

州・連邦直轄区	平均所得	中間所得	ジニ係数	貧困者比率 (%)
ブルリス	4,445	3,500	0.346	0.2%
クダ	4,478	3,451	0.365	0.3%
クランタン	3,715	2,716	0.393	0.9%
トレンガヌ	4,816	3,777	0.36	0.6%
ペナン	5,993	4,702	0.364	0.3%
ペラ	4,268	3,451	0.366	0.7%
パハン	4,343	3,389	0.36	0.7%
スランゴール	8,262	6,214	0.379	0.2%
クアラルンプール	10,629	7,620	0.407	0.1%
ブトラジャヤ	10,401	7,512	0.374	0.1%
ヌグリ・スンビラン	5,271	4,128	0.361	0.4%
マラッカ	6,046	5,029	0.316	0.1%
ジョホール	6,207	5,197	0.324	0.0%
サバおよびラブアン	4,985	3,800	0.39	3.9%
サラワク	4,934	3,778	0.391	0.9%
連邦全体	6,141	4,585	0.401	0.6%

出所：Economic Plannig Unit, “Household Income and Poverty,” .

(<http://www.epu.gov.my/ms/sosi-ekonomi/pendapatan-kemiskinan-isi-rumah>) 2017 年 8 月 29 日最終アクセス

注：貧困者比率は、国内貧困線による。

おわりに

サラワク BN は、BN の一党優位体制の維持に不可欠な資源を提供している。連邦歳入の約 3 割を支える原油のロイヤルティもあわせて考えれば、サラワクの貢献は極めて大きいといえる。にもかかわらず、サラワクは経済的後進性により特徴付けられ、これを是正することを目的のひとつとした開発予算の分配は、必ずしもこの貢献に見合った大きさとはいえない。

ここで、大きな謎が残されている。なぜ、サラワク BN の構成政党は、BN にとどまり続け、せっせと票を集め続けるのか。本稿で示したデータにもとづき直感的な仮説を提示するならば、経済的に後進的な地域が多く残されていることが一つの要因といえるかもしれない。

経済的後進性を解消するためには、政府支出が必要である。しかし、マレーシアでは、州の税収は土地、鉱物資源、森林、水の利用に対する税、自動車や事業に対する免許交付金に限られている。しかも、鉱物資源のうち、石油と天然ガスは連邦の管轄のため、各州

の近海で採掘される油田とガス田からの収入の多くは、連邦政府の歳入となる。

限られた州歳入にもかかわらず、農村部を中心とした開発事業に必要な資金を確保するためには、連邦政府に依存せざるをえない。実際、連邦政府から州への交付金は、全国平均で州歳入の約 2 割にものぼる。連邦と州の間の権限や収入源をめぐる不均衡が続き、また、BN が連邦政府を握り続ける見通しが続く限り、サラワクの政党が BN に加盟し続けるインセンティブは続くのである。

もっとも、このような連邦・州関係が今後も持続するとは限らない。たとえば、サラワクの有権者を対象としたメルデカ・センターの調査によれば、59%の回答者が経済分野での州の自律性が必要であると述べており (*Merdeka Centre*, January 20-26, 2016)、これに呼応するようにして、野党連合 PH は税收の 50%をサラワク州、サバ州に返還すると発言している。このような PH の戦略がゲーム・チェンジャーとなり、サラワク州の下院議員が PH 側につけば、連邦政府の交代と、公約に従った連邦・州関係の再編が起ころうるかもしれない。

〈参考文献〉

Chin, James (2013) , “So Close and Yet So Far: Strategies in the 13th Malaysian Elections,” *The Round Table: The Common Wealth Journal of International Affairs*, Vol. 102, No. 6.

Free Malaysia Today, “Pakatan Harapan Offers New Deal to Sabah and Sarawak,” June 20, 2017. <http://www.freemalaysiatoday.com/category/nation/2017/06/20/pakatan-harapan-offers-new-deal-to-sabah-and-sarawak/> (最終アクセス 2017 年 6 月 24 日)

Election Commission of Malaysia, *Report on the Malaysian General Elections*, 各年。

Election Commission of Malaysia Website (<http://www.spr.gov.my>)

Merdeka Centre (2016) , “Sarawak State Voter Opinion Survey, 20-26th January 2016.” http://www.merdeka.org/pages/02_research.html (2017 年 6 月 24 日最終アクセス)

Ministry of Finance, *Economic Report*, 各年。

Economic Planning Unit, “Household Income and Poverty,” <http://epu.gov.my/en/socio-economic/household-income-poverty> (2017 年 6 月 25 日最終アクセス)

謝辞：本稿の執筆にあたり、サラワク政治の構造を理解するうえで極めて有益なコメントを、匿名の査読者から頂いた。筆者の力不足ゆえに、そのすべてを咀嚼、反映することはできなかったが、ここに記してお礼申し上げる。

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワク作家のダヤク人表象

李永平と張貴興を例に

及川 茜

はじめに

サラワク出身の華語で創作する作家のうち、李永平（1947 生）と張貴興（1956 年生）は台湾に暮らしながらボルネオを題材にした作品を発表している。この二人の小説を例に、先住民ダヤク人が描かれた作品を取り上げ、そこに見られるダヤク人と華人との関係をたどった上で、植民地としてのボルネオの歴史を俯瞰し、ひいては台湾とのつながりの中でサラワク華人という出自がどのようにとらえ直されているかを考察する。

なお、サラワクの華語文学においては、ダヤク諸族は特に区別されず、ダヤクと総称して「達雅克」「達雅」「達亞」などと表記されることが珍しくない。本稿では特に注記しない場合「ダヤク人」の呼称でダヤク諸族を表し、文中に言及する作品でイバン人、ビダユ人、ケニヤ人などのように各エスニック集団の呼び分けがされている場合は、それぞれ原文の呼称に従うものとする。

I 作家紹介

1. 李永平 (Lee, Yung-ping)

1947 年、英領ボルネオ（英属婆羅洲）のサラワク・クチン生まれ。両親は大陸出身で、廣東・揭陽を原籍とする客家人である。

1966 年に小説「ボルネオの子（婆羅洲之子）」を発表、翌 1967 年に台湾に留学、台湾大学外国語文学系に入学する。台湾モダニズム文学の旗手のひとりであった王文興の授業を聴講したことをきっかけに本格的に創作を始め、「ダヤク人妻（拉子婦）」を発表した。卒業後、1971 年より同大で助手を勤める傍ら、72 年より雑誌『中外文学』の編集に携わった。

1976 年に渡米、ニューヨーク州立大学で比較文学修士、セントルイス・ワシントン大学で比較文学博士の学位を得る。

1982 年に台湾に戻り、中山大学で教壇に立ったのをはじめ、専業作家の期間を挟みつつ東呉大学、東華大学で英米文学を講じる傍ら、「吉陵鎮ものがたり（吉陵春秋）」「海東青」「不思議の国の朱鴿（朱鴿漫遊仙境）」「雨雪霏霏——ボルネオの幼年時代（雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事）』『放浪——李永平自選集 1968～2002（迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二）』『大河の果て（大河盡頭 上巻：溯流）』¹「大河の果て（大河盡頭 下巻：山）」「朱鴿ものがたり（朱鴿書）」を発表し、長編小説を中心に精力的に執筆を続けている。

その作品にはサラワク（クチン）の幼年時代と台湾での生活、米国留学という三つの土地の体験が反映されるが、底流として窺われるのは原郷としての中国に対する意識である。台湾での公的な評価としては、2016 年 3 月に「国家文藝獎」を受賞したことに示されるだろう。受賞理由には「文学の才と芸術精神で台湾の小説に他地域の風土人情と歴史的視点を注入し、二〇世紀から二一世紀まで創作力が衰えずにいる」「凝縮され要を得た文体と、広範囲に及ぶ作品で、台湾文学を多面的で豊富なものとするのに深い影響を及ぼした」「1960 年代から現在に至るまで、その創作量は 500 万字を超え、まさに大河小説の重鎮である」ことが挙げられている（國家文化藝術基金會、2016）。

2. 張貴興 (Chan, Kuei-hsin)

1956 年、サラワク・ルトン生まれ。高校卒業後の 1976 年に台湾に渡り台湾師範大英文系に進学した。在学中に作品の発表を開始し、短篇小説集『伏虎』を上梓した後、卒業後も台湾に残り高校の教壇に立ちながら創作を続けている。短篇小説集には『柯珊の子女（柯珊の兒女）』、長篇小説には「セイレーンの歌（賽蓮之歌）」「薛理陽医師（薛理陽大夫）」「腕白家族（頑皮家族）」に加え、雨林三部作「象の群れ（群象）」「猿の杯（猴杯）」「我が慕える長き眠りの中の南国の姫（我思念的長眠中的南國公主）」がある。

同じサラワク出身で台湾在住の作家として、李永平と並び称されることが多く、日本でも 2010 年から 2011 年にかけて人文書院から刊行されたシリーズ「台湾熱帯文学」に李永平の「吉陵鎮ものがたり」と並んで「象の群れ」が収録されている。

II サラワクにおける華人とダヤク人との関係

サラワクの文学者である林武聡²は先住民を題材とした創作の困難について次のように

¹ シリーズ「當代小説家Ⅱ」の 1 冊として 2008 年に刊行後、「下巻：山」の刊行に併せ「李永平作品集」として 2010 年に再版されている。

² 1960 年クチン生まれ。1986 年に星座詩社に加入、詩作に親しむ傍ら、サラワクの新聞の文芸副刊の編集も務めた。（戴小华・叶嘯，2006：236）

語っている。

「サラワクの状況を見ると、内陸の先住民（土著）同胞の困難について私たちは理解が及ぶにくいところがあります。多くの人々の生活環境は苦しく、将来の見通しもつかない。（中略）それに比べると、都市部の華人の生活は比較的楽なもので、先住民同胞の心のうちを理解することは難しいのです。そこに潜む問題こそが文学創作者が発掘するにふさわしい題材だろうと思います」。（林, 2010:10）³

この言葉から、沿岸部の都市に暮らす華人と内陸部の先住民とが二つの全く異なる集団として意識されていることが窺える。では、両者が交わるのはどんな局面なのだろうか。

1. ダヤク人の土地と「チナ人の町」

(1) 李永平「包囲された町の母（圍城的母親）」（1970）⁴

市街地やプランテーションといった華人の集住地はダヤク人の暮らす土地の中に点として存在しており、民族的な緊張関係が表面化する時、華人の側からはダヤク人に町を襲撃されるという恐怖が共有されることになる。

李永平「包囲された町の母」に描かれるのはこうした緊張関係である。作品冒頭で「ダヤク人（拉子）」⁵たちが町を包囲し今夜にも攻め入ろうとしていると伝えられる。旱魃によって飢えたダヤクの人々が上流の町の商店を襲撃し、「中国人」⁶商人が殺害されたとの噂が流れる中、数日前には刀や斧を手にしたダヤク人が主人公の住む町にも侵入しており、主人公は深夜に銃声を耳にし、夜が明けて 10 人のダヤク人の死体が転がっているのを目にしていた。

主人公は五歳の時に両親に連れられて南洋にやって来たが、もう妻を迎える年頃にさしかかっている。もともと一家は「唐山（中国）」では小作人で、あるとき収穫したばかりの穀物を軍隊に徴発され、小作料が払えなくなったために南洋に流れてきたのだった。早世した父や同郷の人々は斧と鋤、そして自らの手で土地を開墾し、「ダヤク人とマレー人

³ 本稿の引用は既訳のあるものも含め、引用者が新たに訳した。以下も同様である。

⁴ 李永平（1976）所収。本稿の引用は李永平（2003）収録の本文に拠る。

⁵ 華語では一般に「ダヤク」を「達雅克」「達雅」「達亞」などと表記するが、「拉子」は口語で侮蔑的な意味を帯びることが多いようである。ただし、Dayak の D が L に転訛して「拉子」となったとも言われ、必ずしも貶義を含むとは限らないようだ。梁放（2014:199-200）は次のように記している。「黄金茄（Terung Mas, Terung Asam）は俗に拉子茄と呼ばれる。茄子に黄金と名づけたのは近年のことだ。華人は拉子茄と呼ぶが、達雅茄（Terung Dayak）、つまり土着の茄子ということで蔑む意はない。反対に、イバン人は普通の紫色の茄子を華人茄（Terung Cina）と呼ぶ。どこの華人の原籍の方言か知らないが、D を L に当てることがあり、隣国の Medan は棉蘭、Bandung は万隆、こちらの Dungun は冬雲や東運ではなく龍運と呼び、Batang Sadong は砂隆河に変じ、Ludun は倫楽に、Dayak は拉雅になるのである。さらに省略すれば「拉」の字を長くのばし、「ラー」となる」。

⁶ 原文ママ。この作品では「華人」「支那人」ではなく「中国人」の呼称が用いられている。

のいうところのチナの町」(李, 2003: 74) を築き上げた。それが数十年に一度という早魃に襲われ、近隣のダヤク人たちは育てた稲が壊滅的な被害を受けたため、町に出て「中国人」の経営する商店で食糧を購入する。掛け売りを断られたダヤク人たちは飢えに耐えかねて夜陰に乗じて店を襲撃し、商品を強奪しようと試みたものの、主人公の暮らす町にはイギリス人の主導でマレー人警官が配備されており、ダヤク人たちはむざむざ命を落とすことになったのだ。

それから、二度目の襲撃を警告されて主人公と母は舟で避難しかけたものの、途中で引き返すことを決める。家に戻ってみると、外には年老いたダヤク人がしゃがんでいた。身寄りのない老人で、荷担ぎや雑用をして暮らし、学校で寝泊まりしていたが、教職員も避難して学校が閉鎖されたので行き場を失ったのだった。母が彼に豚肉と白飯を与えるのを見ながら、主人公は「年老いてしまえばみなこうなるのだ、ダヤクかチナかなんて区別はつかない」(李, 2003: 80) と考える。その日、母は農園で夜を明かし、主人公は夢うつつに銃声を聞いたように思う。夜が明けて外に出てみると、ダヤクの老人が胸を撃たれ目を見開いたまま死んでいた。そこに旧知のイギリス人が通りかかり、ダヤク人をみな追い払ったという。

ここでは町に攻め入るダヤク人の姿は伝聞でしか伝えられず、自分たちの土地にありながら生計が立てられなくなった窮境こそかつての主人公一家と共通するものの、その具体的な姿は描かれない。他方、ダヤクの共同体から剥落し町でその日暮らしをする老人の姿は克明に描写される。ひと碗の白飯を与えるのが唯一の接点だが、そこからダヤク人は華人にとって恐怖の対象となるばかりではなく、緊張関係にありながらも困苦を共有する同胞として捉えうる可能性が示唆されるといえよう。

(2) 張貴興「猿の杯 (猴杯)」(2000)

また一方で、華人の暮らす場所から主人公が外に足を踏み出すのは、自分たちとは異なる条件のもとに暮らす他者の世界に踏み込むことを意味し、それによって物語は緊張をはらんだものとなる。こうした設定は張貴興の「象の群れ」「猿の杯」、李永平の「大河の果て」に見られるが、ダヤク人とその土地に入植した華人との関係が最も先鋭的に描き出されているのは「猿の杯」においてであろう。

張貴興「猿の杯」では、曾祖父の代からサラワク・ルトン近郊で大規模農園を経営する余一族の四代目である主人公・雉の前に、近くに暮らすダヤク人⁷一族との代々に渡る恩讐が明らかにされる。彼らが暮らすのは 1860 年にイギリス人商人が開拓してプランテーションを建設した土地で、1882 年にそのイギリス人が殺害されたことから、主人公の曾

⁷ 作中では「達雅克」と記されるが、女性が耳たぶを長く伸ばしているとの描写があることからイバン人を指すものと思われる。「猿の杯」の前に著された「象の群れ」では張貴興はイバン人を「伊班人」と記している。

祖父が植民地政府と契約を結び代理で農園を管理するようになり、それから余家の土地となっていた。

曾祖父が開拓を始めた時、ダヤク人たちは抵抗し、三回にわたって英植民地政府の官僚に自分たちの土地に対する権利を訴えていた。しかし植民地政府の官僚はプランテーションからの豊かな収入を貪るばかりで、ダヤク人たちの訴えを聞き入れようとしない。対抗手段としてダヤク人は井戸の水を汚染し、農具や果樹園の果樹を盗み、必要な用品の供給を妨げ、放火するといった報復に出る。曾祖父は植民地政府を通じて銃で武装した警邏隊を配備し、数十人のダヤク人を牢獄に送る。しかし数ヶ月後に出獄して再び破壊を始めたため、曾祖父は発砲して犬をけしかけ、三人のダヤク人を殺害した。その報復としてプランテーションの労働者が首を切られ、曾祖父は犯人を捜し出して公開処刑し、さらに死体をトカゲに喰わせた。それによって全面的な抗争へと発展し、300人のダヤクの戦士が農園に攻め込む事態に至る。最初の衝突では7、80人のダヤク人と30名あまりの苦力が死亡したが、二度目の衝突では50人あまりのダヤク人が死亡、曾祖父の警邏隊が勝利を収めた。しかしそれで対立の火が終熄することはなく、事あるごとにダヤクの人々は余家の土地に侵入し、様々な手段で抵抗を試みる。

最後に曾祖父は殺害され、ダヤクの長老であるアバンバン（阿班班）⁸によって首を狩られる。祖父は報復としてアバンバンを殺害し、その結果、アバンバンの一族からつけ狙われるようになる。

しかし主人公の雉はそういった事情を一切知らされないまま、高校卒業後に台湾に送り出されていた。台湾で英語教師として中学校に勤めていた雉は、教え子との性関係がスキャンダルとなって辞職し、ルトンの実家に帰ってくる。そこに妹の麗妹が出産したとの知らせを受けて病院に行くが、早産で生まれた子は胎内で全身を骨折していた上、重い障害を負って生命維持装置をつけられていた。さらに麗妹は赤児を抱いて病院を抜け出し、密林に姿を消してしまう。雉は麗妹と同室だったダヤクの少女ヤニニ（亞妮妮）の助けを借りて妹を探しにバラム川を溯る。ヤニニたち姉妹の腕には、麗妹と同じウツボカズラの刺青があった。

麗妹を追って密林に入った雉は、ダヤク人たちの土地で繰り返し自分の無力さを思い知らされる。ボートが転覆して投げ出された後では、ガイドとして同行したヤニニの一族の青年バトゥ（巴都）が仲間にダヤク語で「この中国人は体力もないし軽い怪我もしてる、持たないんじゃないかな。そのときは悪いけど頼むぜ」（張，2000：119）と話すのを耳にして羞恥に駆られる。ロングハウスでは客人に対するもてなしの儀式として生きた豚が供され、雉はその豚を屠るよう勧められるが、矛でどれだけ突いても致命傷を与えられず、最後にはヤニニの手助けでようやく期待された役割を完遂する（張，2000：125）。

⁸ 以下、ダヤクの人名は原文の漢字表記に基づいてカタカナを当て、初出時のみ（ ）で原文の漢字表記を示すものとする。

ヤニニー家の暮らすロングハウスでしばらく休むことになった雉は、今度は夜中にサソリに刺されて生死の境をさまよう。実はバトゥはアバンパンの孫であり、わざとボートを転覆させ、さらにサソリを放って雉を害そうとしていたことが判明する。そもそも、ヤニニーの一族は雉をおびき出して人質にすることにより、祖父に罪過を認めさせ、さらにダヤク人を搾取して築いた富である金塊の埋蔵場所を吐かせようと企図していたのだった。彼らの土地で雉は知らぬ間に幾度も命の危険にさらされており、その都度ヤニニーに守られていたことを知る。

2. ダヤク人女性を弄ぶ華人男性

マレーシア華語文学（以下「馬華文学」とする）において、華人の目を通した他民族という題材は一つのジャンルを形成しているといえよう。馬華文学の教科書として 2012 年にマレーシアで出版されたアンソロジー『馬華文学文本解説』は、作品の題材に基づいて設けられた 21 の章に各二、三編の作品を収録しているが、その章の一つが「少数民族書写」である。マレーシアにおいて華人はエスニック・マイノリティーであるが、「少数民族書写」とは彼らの目に映る「他者」こと「少数民族」と文学を通じて交流を試みたものと見なされう。アンソロジーのこの章の序文には次のように記される。

「悠久の「先住民文化」と「ジャングルの生態」という経験は、サラワクの華語作家に地方文学を称揚するに足る資源をもたらしており、「少数民族書写」はかなりの部分においてこの二つの資源が創作の題材を開発したといえる。マレーシア華語創作の領域では期せずしてマレーシアの人口が構成した歴史の形がくっきりと浮き彫りにされ、さらに具体的に作者のエスニック・グループの経験の構造を描きだしている」。(許、孫, 2012: 558)

そこにはサラワクのダヤク人を描いた李永平「ダヤク人妻」、梁放「ブリーディングハート（龍吐珠）」、インド系マレーシア人を描いた張依蘋「静かなサリー（寂靜的紗麗）」の三編が収められる。ダヤク人を題材にした作品は二篇とも華人商人がダヤク人女性との間に子供をもうけた後、母子を棄てて中国ないし中国人妻のいる家庭に帰るというもので、夫に去られた妻がロングハウスに帰った後に病死するという結末まで共通する。編者の作品選択の基準についても考察する必要があるが、いずれにせよ、華人とダヤク人を一つの作品に登場させるには、不幸な婚姻が背景となるのが典型的であったと見ることができよう。ダヤク人女性が華人男性に棄てられる不幸な妻として描かれることは、同時に植民地としてのボルネオがダヤク人女性として表象されることにつながり、特に李永平の長編作品に顕著であるように蹂躪される幼い少女としての表象に発展する。

本節では上述の二篇に加えて、華人とダヤク人の婚姻を描く李永平「ボルネオの子」と張貴興「猿の杯」を取り上げ、年代順に分析する。

(1) 李永平「ボルネオの子（婆羅洲之子）」（1966 執筆、1968 刊行）

李永平が台湾留学以前に発表した唯一の中篇小説である。18 歳の主人公ダルス（大祿士）はダヤク人⁹であることを疑わずにロングハウスで育ったが、実は父がチナ（中国人）であることが明らかになる。父はかつて近くで商店を経営しており、雇われて身の回りの世話をしていたダルスの母と男女の関係となりダルスをもうけた。しかしダルスが満一歳になった時、「唐山」（中国）の妻子のもとに帰ってしまったのだった。父の店で働いていたダヤクの青年ルカン（魯幹）がダルス母子の世話をし、ダルスはルカンを実の父と信じて育っていた。

出自が明らかになった主人公は、それまでの有為の青年としての立場を完全に失い、仲間たちからは排斥され、思いを寄せている少女の父からも嫌がらせを受ける。同時に、同じロングハウスからやはり中国人に嫁いだ女性が離縁されて幼い娘とともに帰ってくるが、彼女も同様に排斥を受けるばかりか、ダルスと性的関係があるように疑われて追いつめられる。

そんな騒ぎの中で主人公の親友は「なぜ君がチナで彼がダヤクだなどと言わずにはいられないんだ？ みなこの土地に暮らしているんじゃないか」（李、1968：67）と言い、主人公ははっとするが、「チナはひたすらダヤクの金をむしり取り、ダヤクの女を慰みものにして捨て、哀れな「半チナ（半個支那）」¹⁰を残してダヤク人の八つ当たりの的にするんだから…」（李、1968：67）と言ってしまう。そこに鉄砲水が襲来し、皆は山上に避難する。ダルスは避難してきた中国人商人のサンパンがひっくり返ったのを見て、水に飛び込み、中国人店員と一緒に商人を助ける。雨が上がり、主人公は恋人の少女に「もう誰も俺を半チナなんて呼ばないだろう」と言い、親友の言葉を繰り返す。少女も「そうよ、私たちはみなボルネオの子なんだから」（李、1968：78）と答える。

(2) 李永平「ダヤク人妻（拉子婦）」（1976）¹¹

主人公の阿平は「土人のおばさん（拉子）」¹²が死んだとの知らせを受ける。三叔の妻であった彼女に、主人公は二回しか会ったことはなかった。三叔が彼女を娶った時、郷

⁹ 原文は「達雅」。具体的な民族名は記されない。

¹⁰ 原文は「半個支那」。原注に「支那とは現地語で「華人」の意で、半個支那とは華人と先住民（土著）の混血である」。（李、1968：78）とある。

¹¹ 1967 年に台湾大学の『大学新聞』に「土婦の血」として発表された後、顔元叔の推薦で翌 68 年に「拉子婦」と改題し『大学雑誌』11 月号に発表した。後に単行本『拉子婦』（臺北：華新、1976 年）に収められるが、本稿の引用は『坦然：李永平自選集一九六八—二〇〇二』（臺北：麥田、2003 年）収録の本文に基づくものである。

¹² 作中では「拉子」の呼称について次のように記される。「サラワクでは、僕たちは土人を「拉子」と呼んでいた。物心がついてから、この二字に含まれる軽蔑のニュアンスを感じとるようになったが、もう呼びなれてしまって改めようがなかった。しかも、もし拉子と呼ばず、もう少し聞こえのよい、友好的な名詞に替えたなら、中国人には違和感をもたらすだろう」（李、2003：51）。従って「包囲された町の母」とは異なり、本作については「土人」の訳語を用いる。

里からサラワクにやって来た祖父は激怒し、結婚を認めようとしなかったが、三叔を家から追い出すことまではしなかった。三叔は長年ダヤクの村で商売をしており、クチンに出てくるのは年に一、二回だった。彼女は色白で美しく、「唐人話」（中国人のことば）も話せた。だが伯母たちが集まると誰も彼女に話しかけようとせず、母だけがあれこれ尋ねてやるのだった。子供たちは彼女が「大耳の土人（大耳拉子）」だと言ったが、彼女は耳の長い海ダヤク（イバン）ではなく、山間部に暮らす陸ダヤク（ビダユ）の出身だった。彼女が差し出した茶を祖父は飲もうとせず、そればかりか手でひっくり返す。華人の習慣に馴染みのない彼女が跪かなかったのが理由だった。それから六年後、阿平は父の使いで妹と一緒に山中の三叔を訪ねる。三叔が 18 歳の娘と結婚しようとしているという噂が伝わるが、一族の女たちは彼がダヤク人妻を離縁することを喜ぶ。叔父の暮らすのは数十戸の胡椒農園を営む「中国人」のほか、数里離れたところに土人のロングハウスが点在するばかりの人里離れた土地だった。おばはすっかり老け込んで、出産した直後だというのに塩漬けの魚を干す作業に従事していた。子供たちが入ってくると、叔父は「半唐半拉」（半分華人で半分土人）と罵る。主人公兄妹はなんとか彼女を慰めたいと思うが、口を開くことができず、そのまま帰ってくる。後悔する妹に阿平は「土人なんだから仕方ないだろう」（李, 2003:60）と言い放ち、妹を悲しませてしまう。叔父が酒浸りで妻を殴っていると聞いた阿平はたしなめようとするが、「土人女は生まれつきのあばずれなんだ、一生添い遂げるなんてできるもんか」（李, 2003:61）と言い返される。彼女は不正出血が続いていたが、叔父は病院に連れて行ってやることもなく、八ヶ月後には彼女を離縁し、その四ヶ月後には中国人の娘と再婚する。さらに八ヶ月後、おばは静かに世を去った。

先住民の女性が中国人商人と結婚するという設定は「ボルネオの子」と共通するが、「ボルネオの子」に見られた希望は、台湾で書かれた「ダヤク人妻」においては影をひそめる¹³。

(3) 梁放「ブリーディングハート（龍吐珠）」（1984 年）

先に引いた李永平の二作に加え、台湾ではなくイギリス留学の経験を持ち、サラワクに居住して執筆を続ける 1953 年生まれの作家（戴、叶, 2006:219）、梁放の「ブリーディングハート」もよく似た構造を持つ。華人とダヤク人との関係をテーマに創作する時、華人の妻となったダヤク女性の悲劇がそれだけ想像しやすいものであったことが窺われる。他方、李永平「ボルネオの子」と同様に、華人からもダヤク人からも排斥され、自らの父か母かのいずれかを否定せねばならないこうした婚姻から生まれた子供の存在をテーマとすることで、華人の境界の自明性を問うという動機が共有されていたことが考えられるだろ

¹³ 台湾の王禎和が 1961 年に発表した「夏日」は、台湾原住民の女性の視点から「平地人」（漢民族）の夫の裏切りを描いたもので、李永平のこの作品も当時の台湾文学における原住民女性の表象の系譜に位置づけるべきかもしれない。

う¹⁴。

語り手はケンブリッジ資格試験を経てクアラルンプールで3年間学び、それから七年間は仕事ばかりで一度もロングハウスには帰っていない。それどころか、母の存在をずっと妻にさえ隠していたのだった。10年ぶりに母に会いに帰郷する彼の脳裏に、少年時代の記憶がよみがえる。父はロングハウスを回って仕入れをする商人だった。家政婦として雇った16歳のイバン人少女との間に語り手をもうけたが、語り手が10歳の時に母子を置いて中国へと帰ってしまっていた。父は妻子を食卓にもつかせず、自分の足下にむしろを敷いて食事をさせるほど、ことごとに自分の優越を誇示していた。父の店を処分して、母はロングハウスに帰ると言うが、語り手は「あんなイバン人たちと一緒に住みたくない！」（梁、2012: 577）と泣き喚く。しかし父は息子を華人の血を継ぐ者とは認めておらず、福建語や華語で話しかけることさえなかった。語り手は長年母の存在を恥ずかしく思っており、中学の時に骨折した彼を見舞いに來た母を追い返したばかりか、同室の友人に尋ねられて母ではないと答えたことすらあった。結婚式にも呼ばずにいたが、ついに妻に打ち明けたところ、クチンに引き取って一緒に暮らそうと提案されたので、はじめて母を迎えに行こうとしているのである。しかし故郷で彼を待っていたのは、母は子宮癌で世を去ったという知らせであった。母は龍の飾りのついた父のトランクを大切に保管していたが、中には父と語り手の写真、そして父が中国から送って來た手紙がしまわれていた。

李永平の「ボルネオの子」の主人公とよく似た設定だが、10歳まで父と暮らした記憶をもつ「ブリーディングハート」の主人公は自分を華人の側に置き、そのためにイバンの母から受け継いだ血を否定しようとする。そして一度は母を捨てた主人公だったが、生まれてきた自分の子供に母の面影を見出し、ようやく妻に打ち明けることができるようになる。

（4）張貴興『猿の杯（猴杯）』（2000年）¹⁵

この作品では、華人とダヤク人の二組のカップルが生まれることがそれぞれ因縁の発端と結末となる。

発端となるのは、苦力の娘の華人女性がダヤクのロングハウスに逃げ、そこでダヤク人男性と婚姻を結んだことであつた。小花印という少女は、余家の農園で働く苦力の娘だっ

¹⁴ なお、梁放はその後2014年に長編小説『風の中に君のすすり泣きが聞こえた（我曾听到你在风中哭泣）』を発表し、再び華人の父とイバン人の母の間に生まれた青年を主人公に設定している。しかしこの夫婦の結びつきは、華人男性によるダヤク人女性の性的搾取とは次元を異にする。その結びつきは、イギリス植民政府とインドネシア警察の双方から追われた父が、サラワク側へ逃亡中に川辺に倒れていたところを母に救われたことに端を発するものであつた。婚姻は幸福なものであり、間に生まれた主人公は父をイバン語で「阿拝（アバイ）」と呼び、華文中学ではなく英文中学に通うが、後に共産党組織に身を投じる。本稿で詳述する暇はないが、こうした主人公及びその家族の造形は、馬華文学では稀な例である。

¹⁵ 本稿の引用は2010年の第二版に基づく。

だが、父が雉の曾祖父からアヘンを盗んだため、その代償として曾祖父の経営する娼館に売られていた。曾祖父の息子で雉にとっては祖父にあたる余漢は小花印に思いを寄せるが引き離されてしまう。小花印は後に脱走してダヤク人の妻となりロングハウスで人生を終えた。

小花印に対する雉の祖父の執着が、余家と「ウツボカズラ一族」の女たちとの関係を抜きがたいものとする。後年、小花印の孫にあたる麗妹という娘がいると知った雉の祖父は、麗妹の父にわざと多額の金を貸し付け、借金のかたに麗妹を引き取ったのだった。麗妹は余家の一員となり、主人公の妹として育てられながらも、ウツボカズラの刺青を持つ一族の女としてひそかにロングハウスに出入りしている。華人家庭で育ちながら、同時にダヤクの女でもある麗妹は、成長すると共に雉にとっては不可知の存在となってゆく。彼女は後に高校を中退して家を離れ、国外に出稼ぎに行ったままほとんど家に手紙すら寄せさないような生活をするようになり、台湾にいる雉は彼女の状況をほとんど把握していない。やがて彼女は麻薬所持のかどで鞭打ち刑を受けて実家に戻るが、それからというもの腹ばいでトカゲのように移動するようになっていた。出産のために入院したとき、腹部に膀胱ができていたのを発見され、雉は母と弟に尋ねて初めて妹の異常を知る。

実は麗妹は、15歳になると雉の知らぬところで繰り返し祖父から犯されていた。彼女が出産後に病院から脱走したのは、祖父からの性的虐待に耐えかねたのと、障害を負って生まれた祖父の子が延命措置を受けて生きのびることを怖れたためであった。彼女はヤニニのロングハウスで保護されており、死んだ嬰兒も埋葬されていた。

ヤニニは一族の復讐の意を受けて雉をおびき出すことに成功したものの、しだいに彼に好意を抱くようになる。一族の者の手から彼を守るために、夜な夜な雉の休む部屋で過ごし、自分が雉の妻になった、すなわち雉はもう一族の人間だという体を作る。彼女の試みは成功し、雉の知らないうちに彼は命を救われていた。最後にヤニニの口からすべてを開かされた雉は、「僕にとって君はもう妻だ」(張, 2000: 317)と結婚を承諾する。彼がロングハウスにおびき寄せられて命を危険にさらすのは、曾祖父と祖父の残した禍根のためであり、言い換えれば華人の開拓史における原罪を贖うためでもある。代々血の応酬が繰り返されてきたダヤク人の一族の少女を妻にすることを決めたところで、華人とダヤク人との対立関係が抗争ではなく恩讐を超えた新たな局面を迎えることが期待されよう。

3. 「鰐」の殺害者——サラワク共産党とダヤク人

サラワク共産党の記憶は李永平、張貴興いずれの作品にも見られる。李永平「カラスと太陽(黒鴉與太陽)」では担任教師が共産ゲリラで、密告者の家族を皆殺しにしたためにその正体が判明して処刑され、広場に死体が晒される場面がある。「雨雪霏霏」には主人公の小学校の担任教師が夫婦で密林に入ったことが子供の(不完全な)視点から記され、

共産党の内部闘争による死がほのめかされる。そこではダヤク人が共産ゲリラの首を狩ってロングハウスに吊すといった情景が描かれる。張貴興「猿の杯」において主人公の不在の父は、共産ゲリラに加わり家を離れているらしいことがほのめかされ、彼の子を妊娠したという女性ゲリラが余家を頼ってくる場面がある。

しかし、サラワク共産党とイバン人の関係がもっとも鮮明に描かれたのは張貴興「象の群れ」であろう。

主人公の施仕才はイバン（伊班）人のクラスメート朱徳中の助けの下、ラジャン川を遡行して共産党の基地を訪ね、「鰐」を殺害する。作中では華人の象徴として龍と鰐が重ねられるが、同時に鰐は常に主人公の一家に害を為す存在として登場する。

「象の群れ」において鰐は常に龍のトーテムと並べて描かれ、鰐のトーテムは龍のトーテムの原型であると説明される。気候の変化に伴い、鰐の分布地域は次第に南下し、最後には中原から姿を消したが、伝説の中に生き延びた鰐は龍の姿へと変じてゆくのである。王徳威（2001：27）は「龍が鰐の生まれかわりであるとするなら、古代中国のトーテムの秘密はことによると未開の瘴癘の地である鰐の郷になお潜んでいるのではあるまいか？ 言い換えれば、^{ディストピア}悪郷ないし鰐郷の華人が龍族の文化を救おうとするのには名状し得ぬ正当性があるのも無理からぬことだ」と見ている。

さらに、中国からジャワ原人の故郷であるボルネオへの移住は父祖の地への帰還とみなされる（張、1998：91）。従って、鰐は龍の原型であり、ボルネオも中国人の故郷と見なさう。ボルネオ華人にとって鰐は中国と自己をつなぐ紐帯の役割を負っているといえよう。しかも、仕才が生まれた1954年からラジャン川の遡行を経て父の死が家族の秘密を明らかにした1974年という時期において、鰐の子孫を自認することは共産思想を媒介に中国との関係を保つことを意味した。

1962年12月20日、8歳の仕才は3歳の妹・君怡の世話を任されるが、彼が川辺でトカゲに気を取られていたすきに、妹は鰐に川に引きずり込まれて姿を消してしまった。妹の敵をとろうと仕才は叔父の余家同に助けを求めるが、叔父はとりあおうとしない。

「忙しいんだよ、仕才。殺したことがあるのはオオトカゲだけだし」

「ワニを殺すのもオオトカゲを殺すのも一緒だよ。イバン人だってよく殺してるじゃないか？ おじさんが一番すごいのに……」

「仕才」余家同は両手を少年の肩に置き、目を潤ませた。「お前と君怡を一番かわいがってたんだ。君怡がいなくなって、おじさんが誰より悲しいさ。でも過ぎたことは過ぎたことだ、誰もお前を責めたりしない。運命なんだ。それにもっと大事なこともあるし……」

「あのワニを殺すより大事なこと？」

「ああ、もう少し大きくなったらわかるだろう。仕才、しっかりしろよ、そのうちお

じさんのできることを全部教えてやるからな」(張, 1998: 48)

仕才がここで口にする、イバン人は普段から鰐を殺しているという言葉が後の重要な伏線となっている。余家同には鰐を殺すことはできないが、イバン人には殺することができるのである。言うまでもなく、ここで余家同のいう「大事なこと」とは共産党組織の活動である。仕才の 8 歳の誕生日の直前にあたる 1962 年 12 月 8 日にブルネイ人民党は武装蜂起したが、一週間後に大敗を喫して指導者は国外に亡命している。すなわち、仕才の妹の事故が発生した頃、英国政府はまさにサラワクにおいてブルネイを援助して大規模な共産党狩りを行っていたのである。その肝要な時期にあつて、共産党幹部である余家同が仕才の要求に応える余裕を持たなかったのは言うまでもない。仕才はひそかに余家同の猟銃を持ち出し、単身ジャングルに分け入る。しかし途中で高熱を発して意識を失い、九日後に余家同によって発見され連れ帰られる。

19 歳になった仕才は、イバン人の友人である朱徳中と手を携えてラジャン川を遡行する。仕才の四人の兄はいずれも共産党の武装部隊「揚子江部隊」に身を投じ、例外なく密林に命を落としていた。仕才は今度の旅では敵討ちに成功し、イバン人の番刀で共産党幹部の余家同を殺害し、「龍殺しの英雄」との称号を得るに至る。まさに八歳の仕才が「鰐を殺すのはオオトカゲを殺すのと同じ」といった通りであり、オオトカゲをめった斬りにするのと同じように「鰐」を屠ったのである。しかし、その肝心なときに仕才は記憶を失い、気づいたときには首と胴の離れた余家同の死体が転がっていた。朱徳中は二人で殺したのだと主張するが、仕才はただ「トカゲを一匹殺しただけだよ…」(張, 1998: 207) としか答えられない。共産党の基地を立ち去る前に、仕才は余家同の飼っていた鰐を撃ち殺そうと試みるが不成功に終わる。

仕才には殺せない鰐が、イバン人の朱徳中には殺することができる。朱徳中は仕才と同じ学校で華文教育を受け、流暢に華語を操るほか、刀身の両面にそれぞれ鰐が浮き彫りにされている先祖伝来の番刀を持っている。だが彼らにとって中国は父祖の地ではなく、ボルネオこそが故郷である。だからこそためらいなく鰐を殺害し、中国との紐帯を一刀両断にできるのである。

III 植民地としてのサラワク

1. イギリスとオランダの遺産——李永平〈月河三部曲〉

ここまで主に華人とダヤク人との関係からサラワクの土地を描いた作品を追ってきた。上述の作品に比して、李永平の〈月河三部曲〉と名づけられた三部作「雨雪霏霏——ボルネオの幼年時代」「大河の果て」「朱鴿ものがたり」ではサラワクの植民地の歴史が前景

化されている。特筆に値するのは、ボルネオ島の植民者であるイギリスとオランダの描写であろう。

李永平は一貫して華語による創作を続けているが、英語公用語時代に教育を受けており、「イギリス植民地に生まれ、幼い頃から英語を学び、長じて後は英語で書くことを選ぶこともできた華裔作家」「南洋に生まれ、多言語教育を受けた華裔子弟」（李，2012b：15-16）と自身の言語的な背景を語っている。

マレーシア発足の 1963 年 9 月 16 日には高校在学中であり、英国からマレーシア公民へと身分が変更されたことに対する割り切れない思いを後に次のように表明している。

「アイデンティティーからいえば、幼時よりマレーシア人である人びとは違い、わたしは大英帝国植民地で生まれ、英国の旅券を持っていました。それからマレーシアが成立し、わたしも身分が必要になったのでマレーシアの旅券を申請しましたが、自分をマレーシア公民と思うことはできませんでした。どうやって出現した国だか知れたものではありませんし、今でもよくわかりません。ですからマレーシアを離れてからもう戻りませんでした、ボルネオもマレーシアの州になってしまっていますし。

アメリカから台湾に帰って教職に就いてから、台湾の旅券を申請しましたが大変なことでした。妻が台湾人なので、配偶者として簡単に発給されるはずなのですが、3 年間かかって 1976 年、30 歳の時、台湾には合計 10 数年暮らしていましたが、ようやく台湾旅券を手にすることができました。取得してすぐ、台北市のマレーシア代表処に行き、マレーシア国籍の放棄を宣誓してその場で署名しました」（星洲日報 2009 年 3 月 15 日）

興味深いのは、「朱鴿ものがたり」において白人ラジャことジェームズ・ブルックをボルネオの守護神として造形し、彼の口を借りて元サラワク州首相を批判していることである。

「鴿、ある醜聞を聞いてほしい。現在のサラワクで政務を取っているダトゥ・スリ・アブドゥル・マラムッド（拿督・斯里・阿布杜馬拉目）は大規模な汚職事件の犯人なんだ！ 州首相を二〇年にもわたって務め、世界最大の最もよく茂り美しい雨林の一つであるサラワクの原生林を、九割方信じられないような安値でたたき売り、木材会社から受け取ったリベートは 100 億リンギットに及んでいる。スイスのブルーノ・マンサー基金会の報告によれば、娘のファティマと娘婿のショーン・ブランツ¹⁶を通じてカナダに設立した投資会社だけでも十億米ドルの不動産を持っているという。このアブドゥル・マラムッドというやつは、サラワク史上一番大胆な盗人だ！ 鴿、サラワクの建設者として私は行動せねばならない。神とサラワクの人々の名にかけて、この件を明らかにして不法の輩に適正な正義の処分を与えるのだ」（李，2015：352）。

¹⁶ 原文は法蒂瑪と西恩・布朗。州首相としてタイプを直接名指しせずわずかに変更しているところ、娘夫婦の名にジャミラ（Jamilah）とショーン・マーレイ（Sean Murray）を避けているところは舞台を現実のボルネオとわずかにずらす手法であるかもしれない。

政治家とその家族の名前は変更されているが、タイプ元首相をあてこすっていることは明らかだろう。現在のサラワクの政治批判が、かつての植民者の口を借りてなされ、さらにジェームズ・ブルックが制裁を与え血で贖わせようとするという設定は注目に値しよう¹⁷。

物語の中でイギリスとオランダの存在が強く打ち出されるのは「大河の果て」（上巻 2007・下巻 2010）である。この作中では、英領サラワク・クチン出身の作家である永が、3 年前に「雨雪霏霏——ボルネオの幼年時代」で新店溪の黒い淵に沈めた台北の少女朱鴿の霊を召喚し、過ぎ去った 15 歳の夏（1962 年 7 月 31 日から 15 日間）の記憶を語る。彼は父からの高校合格祝いとして、インドネシアのポンティアナックに 38 歳のオランダ人女性クリスティーナを訪ね、彼女の農場でひと夏を過ごすことを許される。彼女はかつて日本軍の収容所に監禁され、二年の間「慰安婦」とされた経験を持つ。クリスティーナはカプアス川の水源に連れて行くことを永に約束し、二人は 30 人ほどの白人の男女と共に生命の根源を求めてカプアス川の遡行の旅に出る。しかし途中で様々の不可解な出来事に襲われ、同行者は少しずつ脱落し、15 日の後に二人だけでイバン人の聖山バトゥ・ティバンに登頂する。そこで永はクリスティーナによって再度この世に産み出される。15 歳の少年永はこの旅路において、ボルネオ島に生きる華人としての原罪意識と、より普遍的な心の魔に対峙し、旅路の果てに生と死、そして性交の三つを経験することで新たな生を受けられる。また、成人して作家となった少年永は、朱鴿に語りきかせることで大河の旅を追体験する。その語りによって作家李永平は、中国語作家としての出発の地に帰り、ボルネオ島・台湾・アメリカの経験の集大成を遂げる¹⁸。

物語中の少年永の再生とは、中国を母に、イギリスとオランダを第二の父母とし、ボルネオ先住民であるケニヤ人のマリアとは来世で家族となることを誓い、植民地の歴史を身体に刻印されたボルネオの子としての再生である。中でも、旅の途中でサラワク博物館の館長であるイギリス人アンドリュー・シンプソンと「父子の関係にすら近い默契と交流」（李，2010：406）を結ぶくだりは寓意に富む。シンプソンは「天閨」との噂があり、性的不能者であることが暗示されるが、日本兵の凌辱によって子宮を失っているクリスティーナと同様、かつてボルネオで植民者の地位にあったイギリスもオランダももはや子孫を残すことができないことを暗示している。シンプソンとの擬似的な父子関係に加え、永がクリスティーナによって再び生み出されるということは、イギリスとオランダがボルネオにもたらした遺産の継承を意味するだろう。

¹⁷ 実際、李永平は自身がボルネオ独立主義者であると雑誌のインタビューにおいて明言している（翁智琦，2015：28）。

¹⁸ 及川（2014）に詳述した。

2. 密林の食物連鎖——張貴興「猿の杯」

他方、張貴興「猿の杯」では、サラワクの植民者（イギリス人、ひいては日本人）と先住民ダヤク人、それから華人の関係は動植物の比喻によって浮かび上がる。主人公の曾祖父は「総督」と名づけた犀と思しき巨獣を罠にかけて捕らえ、番犬の代わりに自分の土地を守らせる。「総督」はイギリス人によって両親を殺され隻眼となったが、生きのびて後は余家が植民政府と契約した土地の主として君臨していた。それを主人公の曾祖父、すなわち華人の入植者が手なずけることによって土地を自分のものとし、さらに勢力範囲を拡張してゆく。

余家に手なずけられた「総督」に対し、ダヤク人の象徴である「猿の杯（Monkey Cups）」ことウツボカズラは、華人の血で繁茂する。作中にはウツボカズラの袋の中に切り刻まれた嬰兒の死体が押し込まれている情景が、曾祖父の記憶として繰り返しフラッシュバックのように挿入される。これは 1942 年 8 月の記憶として語られ、日本兵がルトンの市立病院を襲い生後間もない嬰兒を切り刻んだことが早い段階で説明されるが、なぜそれがウツボカズラに入れられたかは物語の終盤まで明かされない。この謎が物語の主軸を為す民族間の因縁をあぶり出す働きを担っている。実は、殺戮を逃れたダヤク人の母親が病院に戻り、そこで起きた惨劇を知った後、帰りに暑熱によって枯死寸前の巨大なウツボカズラを目にした。女はそれを救うため、他に食物となるものを見つけることができず、病院から嬰兒の死体を運んで捕虫袋に入れたのであった。切り刻まれた嬰兒の大部分が華人の子だったと語られる。日本人によって華人が殺害され、その身体で大地を潤しダヤク人が再生するという構図が読み取れる。

IV 台湾を経てのボルネオ

李永平と張貴興の二人は高校卒業後に台湾の大学に進学している。李永平の長編小説「海東青」「雨雪霏霏」「大河の果て」はいずれもボルネオ出身の台湾の大学教師が主人公ないし語り手で、名前は変えてあるが作家自身の背景を共有している。張貴興の長編小説「セイレーンの歌」「猿の杯」「我が慕える長き眠りの中の南国の姫」の主人公たちも作家と同様に台湾の大学に進み、舞台は台湾とボルネオを行き来する¹⁹。

¹⁹ 1953 年のニクソンの訪台後、米国政府の援助で台湾は華僑華人学生の受入を行い、1954 年から 1965 年まで継続された。この時期に留学した華僑華人学生は学費の全額補助に加え、往復の航空券が支給されたという。1966 年から台湾駐クアラルンプール副領事を務めた蕭万長も、華文学校の卒業生を台湾の大学に送り出すようマレーシア政府に働きかけたというが、背後には反共政策があり、大学の定員枠の制約からマレーシアで高等教育を受けられない華人学生が共産党に吸収されるのを防ぐことが期待されていた。黄錦樹（2015）注 19・20 参照。

1. ボルネオの鏡像としての台湾——張貴興「猿の杯」

「猿の杯」で主人公の雉は台湾に送り出され、戻ってこないようにと祖父から言い含められる。それは彼を恩讐の地から遠ざけておくためだった。移民四世にあたる雉にとって、もはや祖父の代までのダヤク人との抗争は昔のことで、農園にダヤク人がしばしば侵入していることは知っているものの、その原因を意識することはない。

しかし、台湾に渡った彼も、やはりボルネオの密林の呪縛から離れることはできない。彼の眼を通じて台北の都市は密林に変じ、人間は禽獣に変ずる。作品冒頭でボルネオに帰還した彼の意識には、ボルネオの現在に、幼少年期の記憶と台北での教師時代の記憶がフラッシュバックし、同じ段落の中でシームレスに転換が行われる。

そこで次第に輪郭を結ぶのは、祖父がまだ少女の麗妹に対して犯した罪を、知らず知らずのうちに雉自身も台北で反復していたという事実である。彼はある夜、同僚に誘われて行った店で源氏名を鳳雛という少女に出会い、泥酔して彼女と一夜を過ごしていた。それが実は 12 歳の教え子、王小麒だったことが判明し、勤務先の学校にも露見してスキャンダルとなり、退職を余儀なくされたのだった。ロングハウスでヤニニと過ごした夜も同様に、彼は意識が混濁したままではっきりした記憶を持たない。だが、最後に彼はヤニニの一族との恩讐の全てを知った上で彼女を妻に迎えることを決める。

雉が泥酔して、あるいは高熱に浮かされて、意識が混濁した状態で少女と関係を持つという箇所は、「象の群れ」の主人公が泥酔して叔父である共産党幹部の余家同を殺害したくぐりどりと重ねることができよう。「鰐」である余家同を殺すことは中国と自己をつなぐ紐帯を断ち切ることを意味するため、意識の鮮明な状態では手を下し得ない。すると、少女との関係を持つことも、主人公の意識の表面では鰐殺しと同様にタブー視される行為だといえよう。これは未成年の教え子と関係を持つことが許されないという道徳的な規範というより、少女はボルネオの土地と重ねられるため、それを穢すことが主人公には物語上許されていないと見るべきであろう。

「猿の杯」においても華人男性がダヤクの少女を慰みものにするという構図は反復される。ルトンの華語教師でサラワク文壇の長老と目された羅老人は、高校生に金を渡して性交を迫っていたことが明るみに出て退職した後、密林の奥に隠居していたが、やはり様々な品物でダヤクの少女を誘惑することを繰り返していた。しかし、ヤニニの妹にあたる幼い双子姉妹を犯したことが露見し、男たちに袋だたきにされる。実はヤニニも病気の妹の治療費を援助するという申し出に屈服し、老人に身体を与えたことがあったということが後に判明する。

雉が台北に送り出されるのは、ダヤクの少女を犯す華人男性に成長することを避けるためである。しかし、台北に移動しても雉はボルネオ華人としての運命から逃れることはできない。台北という密林を駆けめぐる野生の獣や魚（張、2010: 99-103）として描写され

る教え子の少女王小麒と関係を持つことは、少女を犯しボルネオの土地を穢す運命をなぞることになる。「猴の杯」で描かれる台湾はボルネオの鏡像であり、主人公はそこでひとたびは自分の意志を超えたところで少女を犯す存在となるが、ボルネオに戻ってヤニニを妻とすることで、ダヤクの「ウツボカズラ一族」の一員となり、ダヤクの少女を犯す華人男性と華人男性に犯されるダヤクの少女という枠組みを超えて新たな関係を築くことに成功する。

2. 淪落の台北とボルネオ——李永平〈月河三部曲〉

李永平の長編三部作〈月河三部曲〉においても、ボルネオと台湾は二つの植民地として重ねられ、そこでは繰り返し少女の淪落が描かれている。

二つの土地を結びつけるのは朱鴿という少女である。李永平のミューズ「朱鴿」について整理しながら、ボルネオと台湾の関係をなぞってみよう²⁰。

(1) 紅色の水先案内人

台北の少女朱鴿は、李永平の五部の長篇作品「海東青」「不思議の国の朱鴿」「雨雪霏霏」「大河の果て」「朱鴿ものがたり」に登場する。彼女が果たす役割は、自由に飛びまわり好奇心に満ちた瞳に台北の姿を映し出す小鳥から、内的世界の最深部へと導く水先案内人へと変遷してゆく。

「海東青」「不思議の国の朱鴿」では、朱鴿はそこに描き出される主人公のボルネオ華人、五の内的世界の登場人物として飛びまわる。そこで幼い少女の姿をとった彼女が象徴するのは、内なる無垢であり善である。ただし、それは成人した五の内面においてはすでに「心の魔」によって犯され穢されている。したがって朱鴿も淪落への道を歩むことが決定づけられている。同時に、外省人を父に、本省人を母に持ち台北に暮らす彼女は、台湾を体現する存在でもある。めざましい経済発展の陰で少女たちの性を搾取する台湾もまた、日本統治の陰影から抜け出し得ずにおり、朱鴿の一家も娘の性と引き換えに日本の老人から経済的恩恵を受ける。

「雨雪霏霏」「大河の果て」においても、朱鴿は内的世界の無垢や善の象徴であると同時に、台湾を象徴する。しかし彼女はすでに悪徳の都たる台北および五の「心の魔」に呑み込まれて肉体を滅ぼされており、「鴿」と同音の「霊」、ないしミューズとして復活し、語り手の永を帰郷の旅に誘う。彼女は内的世界を外側から見つめ、聞き手として、語り手の永を過去の自身と対峙させる。

この二編で一貫して聞き手の立場にあった朱鴿は、2015年に発表された「朱鴿ものが

²⁰ 朱鴿については及川（2015）に詳述した。

たり」で自らが語り手となってボルネオでの冒険の旅を語ることになる。

「雨雪霏霏」で 8 歳だった朱鴿は、「朱鴿ものがたり」では初潮を迎える 12 歳に成長している。彼女は 1962 年と思われる『大河の果て』の舞台のボルネオに送り込まれる。

「プロローグ：朱鴿が舞台に立ち口を開く」「エピローグ：朱鴿、再び台北の舞台へ」はボルネオの冒険の旅の前後に朱鴿が台北の中山堂で行う講演の形をとっている。「プロローグ」では朱鴿が「李永平先生」との邂逅を語り、二人の対話を再現しながら自分がなぜこれからボルネオに送り込まれるかを説明する。

その目的は、「大河の果て」において主人公の永が経験した旅を朱鴿に反復させることであり、ひいては彼女を小説家にするのである。「李永平先生」は朱鴿に次のように告げる。「でも、本当の、優れた小説家になるまでには、一人で冒険の旅に出て、ハック [ルベリー・フィン] …いや、ローマ史詩の英雄のように、大事業を成し遂げる前に、自分で冥界に赴いて、死を経た後に生き返ることで、必要な鍛錬を完遂しなければならない」(李, 2015: 153)。この台詞はそのまま、「大河の果て」の永の経験の意味を解き明かしたものであることは疑いの余地がない。

だが一方で、永の旅は自己鍛錬のみが目的ではなく、使命も授かっていた。それは「朱鴿ものがたり」の中で、幽霊船に朱鴿と同乗するダヤクの青年ネルソン・ダルス・シフィリス・ビハイ (納爾遜・大祿士・西菲利斯・畢) の口から明かされる。彼は「大河の果て」にも登場し、さながら梅毒の化身の如く白人の旅行者に罰を与えた。「大河の果て」で語られなかったこととして、彼が「自由ボルネオ」の首領であったことが朱鴿に告げられる。「自由ボルネオ」とは「ボルネオを解放し、ダヤクとイバンの人民を防衛し、貪婪な日本人とチナ人を駆逐し、邪悪なヨーロッパ人とジャワ人を処刑し、ブロン神の照覧のもと、公正にして大義あり、純潔にして平和なるカリマンタン自由邦を築く」(李, 2015: 498) ことを謳う武装組織である。ビハイは永と別れて 5 年後、決死隊を率いてサンガウ警察を襲撃したが、生け捕りにされ、拷問の末に 35 歳で死亡したのだった。彼は永に授けた任務を次のように語る。

「あの年の夏、大河の涯てのバトゥ・ティバン、巡礼の終点で、若い友人かつ弟分の永に俺は宣言した。「友よ、いつか君がどこにいても、英語で書くにせよ、東方の古いトーテムのように神秘的で複雑な中国の象形文字で書くにせよ、必ずこの大河の旅を忠実に、完全に余すところなく書き付けなければならない。母なるボルネオの蒙った苦難と恥辱のために、神の前で証言するのだ。旅の途上で起きた全ての出来事を、どんなに汚らわしく卑しくとも、どんなに悲惨で血なまぐさく冒 的でも、書き漏らしたり粉飾を加えたりしてはならない。永、ダヤク民族の友人にして信頼に足る友よ、これは俺がボルネオの聖山のふもとで自ら授ける任務だ。この頼みに背いてくれるな！ さもなければ、この世の果てまで、俺は——自由ボルネオの聖戦士ビハイは——君を追いかけて、この手で不忠の支

那人を、イバンの豚コレラ神シフィリスの前に生贄として捧げよう」多年の時を経て、この神聖な付託は、今なお俺の頭に残っており、一字一句ははっきりと覚えている」(李, 2015: 495-496)。

(2) 物語の呪縛からの解放

それでは、なぜこの旅を台北の少女がなぞらなければならないのだろうか。本作の内容を確認してみよう。

「プロローグ」「エピローグ」に加えて 42 話が、それぞれ 6 話ずつ 7 巻に収められている。各巻には「初めてのボルネオ」「シンガラン・ブロン神の娘たち」「ロード・ジム」「川の畔のつがいの飛燕」「幽霊船巡航記」「ボルネオの新たな伝説の誕生」「トンユー・ラルー（登由・拉鹿）の決戦」の標題が付され、各話もそれぞれが標題を有する。

オーストラリア人弁護士のパパ・オーギーの亡霊は、死後なおインドネシア政府顧問を名乗り、ボルネオのロングハウスを巡っては 9 歳の誕生日を迎えた少女を見つけ、オーストラリアに迎えると騙しては犯すことを繰り返している。ボルネオのカプアス河畔に到着した朱鴿は、ロングハウスを逐われたイバンの少女イマーン（伊曼）と共に、幼い死者の暮らす「小児国」トンユー・ラルーに向かううち、パパ・オーギーの召喚を受けて彼の後宮に集う少女たちと合流する。朱鴿自身もパパの魔力に屈し、ハーレムの一員にされそうになるが、間一髪でジェームズ・ブルックに救われ、彼と共に時代を溯りサラワク王国の興隆を目睹する。

朱鴿はその後、少女たちを救うために再びパパ・オーギーの後宮へ向かうことを決意する。ジェームズ・ブルックから授けられた短剣と、少女の頭骨で作られた太鼓という二つの法器を手にした彼女は、旅の果てに少女たちと共にパパ・オーギーを打ち倒す。そして「黄色い魔女」（姑寧・姐央／kunik dayang）とあだ名され、カプアス流域の神話となるのだった。

朱鴿が台湾の象徴であることはいままでもないが、同時にボルネオの各民族を象徴する少女たちと並んで華人としての役割を負っている。一緒に後宮に集う少女たちはケニヤ人で 16 歳のランガ（蘭雅）、バダン人のシャピン（莎萍）、カヤン人のヤサン（亞珊）、ムラナウ人でムスリムのイスミナ（依思敏娜）、陸ダヤク人のプラボン（蒲拉蓬）、プナン人のアメシシア（阿美霞）²¹である。また、途中で旅の仲間となる少女に 13 歳のバダン人のディディ・ロンボック（娣娣・龍木）がおり、失踪した姉のビダダリ（比達達麗）²²と共に頭骨を太鼓にされ、朱鴿に力を与えることになる。

「大河の果て」の主人公「少年永」は、ボルネオの少女たちが白人男性の手に落ちるのを座視するのみであったが、「朱鴿ものがたり」では台湾から送り込まれた朱鴿が後宮に

²¹ 彼女はムスリムで名前は「朝露」を意味すると説明される。

²² 名前はマレー語で「仙女」の意と説明される。

囚われたボルネオの少女たちを解放する。ジェームズ・ブルック（英国）から授けられた短剣と、ビダダリ姉妹（ボルネオ先住民）の頭骨で作られた太鼓の法力によって最後の決戦に勝利を収めるということは、取りも直さず台湾と英国、そしてボルネオ先住民の三つの力でババ・オーギーを倒すということになるだろう。しかも、ジェームズ・ブルックに授けられた蛇型のクリスとは、ブルネイのスルタン、オマル・アリ・サイフディン二世が 1841 年 9 月 24 日にジェームズをサラワクのラジャに冊封した時、自ら授けた神器だと説明され、ボルネオの統治者の間で受け継がれてきたものである。ビダダリとディディ姉妹の太鼓は、二人の頭蓋骨と臀部の皮膚から作られたものだ。

「大河の果て」の少年永は、オランダ人女性のクリスティーナが日本兵に蹂躪された時には生まれておらず、ボルネオ先住民の少女たちが白人男性に蹂躪される光景も窃視するのみで何もできない。それどころか、恐怖と共に秘かな興奮を覚える。無力な少年の旅は、クリスティーナに導かれての再生によって幕を閉じる。しかし、ボルネオの密林すなわち語り手である現在の永の内的世界には、ソドムの市さながらに悪徳が蔓延し、少女たちが蹂躪され続けるままになっていた。ここで先住民の少女たちは、植民者によって収奪されるボルネオの大地と重ねられると同時に、語り手永の繰り返し穢される無垢をも象徴する。一方で、少女たちを蹂躪する日本兵や白人のペドファイルたちも、植民者の隠喩であると同時に、語り手永の内に潜む欲望にも重ねられる。

「朱鴿ものがたり」では、植民者の欲望と男性の欲望に対決するために、これらの欲望を共有しない存在としてこれまで語り手を導いてきた台湾の少女をボルネオに送り込み、「李永平先生」の内的世界の救済を試みている。

(3) 台湾の少女の「神話」

「台湾の少女朱鴿を主人公とするボルネオの神話が、ここに誕生する」（李，2015：784）と「朱鴿ものがたり」は結ばれる。台北の少女朱鴿は作家へと成長し、「李永平先生」の筆から解放され、少女たちを救う黄色い魔女としてボルネオに帰還する。しかし、これを台湾がボルネオを救うという構造で捉えることは不適當だろう。

朱鴿は故郷台北に家族を残しており、時にはボルネオの旅の途上に母を思いもする（李，2015：151）。つまり、異郷の人としてボルネオに身を置く、ボルネオの各民族にとっての他者としての華人の姿が朱鴿に投影されていると読むことができよう。さらに、大河の旅は「大河の果て」でオランダ人女性のクリスティーナから少年永に、そして「朱鴿ものがたり」で李永平先生から朱鴿に「香火を伝承する」（李，2015：604）すなわち衣鉢を伝えるものであった。植民者でありながらまた次の植民者によって蹂躪されたクリスティーナ、ボルネオ華人の永、台湾生まれの朱鴿へと旅路が継承され、その終着点に、華人が少女を犯す成人男性としての姿を脱し、同じ少女の姿でボルネオの少女たちと手をつなぎ、共に敵に立ち向かう役割が見出されるのである。

おわりに

サラワク出身の華人作家の筆のもと、先住民ダヤク人は華人の生活圏の外側にあって、時折領域を侵犯して脅威となる存在として描かれる一方で、その女性たちは華人移民の現地妻として、あるいは白人の植民者から性的に侵犯される存在として、蹂躪されるボルネオの土地の象徴として描きだされてきた。

その一方で、主人公たちは自分の求めるものを見つけるために、自らの生活圏から踏み出し、つまり父祖から継承された安全なすみかの外に出て、ダヤク人の助けを得て彼らの土地の探索の旅に出る。そこでは男としての強さは役に立たず、弱い存在として自然の中にさらされるしかない。ダヤクの女性、特に少女の助けを得て、共に行動することが主人公の生死を分けることになる。また、たとえば共産党の記憶といった、華人の家族史において避け得ない題材であっても、その暗がり主人公が自ら足を踏み入れるには、ダヤク人に伴われることが不可欠でありさえする。

さらに、イギリス及びオランダの植民地としてのボルネオの遺産を継承し、同時に台湾を通じて主に高等教育の面で「華」の遺産を継承した主人公たちは、ボルネオの開拓史をなぞりながらも、先住民の土地と資源を奪い女性を蹂躪する存在としての華人であることをやめることを試み、ダヤク人との間に新たな協力関係を築くことで「ボルネオの子」となろうとしているように見えるのである。

〈参考文献〉

日本語文献

- 及川茜 (2014) 「李永平『大河盡頭』の寓意」『野草』94号。
 ——— (2015) 「紅色の水先案内人—李永平のミューズ朱鴿をめぐって」『中国』21』43号。
 張貴興 (2010) 『象の群れ』人文書院。
 李永平 (2010) 『吉陵鎮ものがたり』人文書院。
 梁放 (2011) 「ブリーディングハート」『白蟻の夢魔』人文書院。

中国語文献

- 國家文化藝術基金會 (2016) 「國家文藝獎/第十九屆國家文藝獎」(2017年6月29日最終アクセス、<http://www.ncafrocc.org.tw/award-artist.aspx?id=39448>)
 黃錦樹 (2015) 「Negaraku——旅臺與馬共」『華文小文學的馬來西亞個案』麥田。
 李永平 (1968) 『婆羅洲之子』婆羅洲文化局。
 ——— (1976) 『拉子婦』革新。

- (1986) 『吉陵春秋』 洪範。
- (1992) 『海東青』 聯合文學。
- (1998) 『朱鴿漫遊仙境』 聯合文學。
- (2002) 『雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事』 天下遠見。
- (2003) 「黑鴉與太陽」『迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二』 麥田。
- (2003) 「拉子婦」『迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二』 麥田。
- (2003) 「圍城的母親」『迢迢：李永平自選集一九六八—二〇〇二』 麥田。
- (2008) 『大河盡頭上卷：溯流』 麥田。
- (2010) 『大河盡頭下卷：山』 麥田。
- (2012a) 『大河盡頭上卷：溯流』 上海人民出版社。
- (2012b) 「简体版序 致“祖国读者”『大河盡頭 上卷：溯流』 上海人民出版社。
- (2012c) 『大河盡頭下卷：山』 上海人民出版社。
- (2013) 『雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事（全新修訂版）』 麥田。
- (2014) 『雨雪霏霏：婆羅洲童年紀事』 上海人民出版社。
- (2015) 『朱鴿書』 麥田。
- 梁放 (2012) 「龙吐珠」『马华文学文本解读』 马拉亚大学中文系毕业生协会、马拉亚大学中文系。
- 梁放 (2014) 『我曾听到你在风中哭泣』 獏出版社。
- (2014) 「故乡的野菜、野果」『流水暮禽』、砂拉越华族文化协会。
- 林武聪 (2010) 「走一趟婆罗洲文学的现代之旅——专访林武聪」『中文·人』第九期。
- 王德威 (2001) 「序論：在群象與猴黨的家——張貴興的馬華故事」『我思念的長眠中的南國公主』 麥田。
- 王禎和 (1993) 「夏日」『嫁粧一牛車』 洪範。
- 翁智琦 (2015) 「寫作是一趟精華的旅程」『聯合文學』2015 年 8 月号。
- 星洲日報 (2009) 「人生浪遊找到了目的地李永平訪談（上）」『星洲日報』2009 年 3 月 15 日 (2016 年 6 月 29 日最終アクセス、
<http://news.inchew.om.my/node/106020?ti=15>)
- 許文榮、孫彥庄 (2012) 『马华文学文本解读』 马拉亚大学中文系毕业生协会、马拉亚大学中文系。
- 張貴興 (1980) 『伏虎』 時報文化出版。
- 張貴興 (1988) 『柯珊的兒女』 遠流。
- (1992) 『賽蓮之歌』 遠流。
- (1994) 『薛理陽大夫』 麥田。
- (1996) 『頑皮家族』 聯合文學。
- (1998) 『群象』 聯合文學。

- (2000) 『猴杯』 聯合文學。
- (2001) 『我思念的長眠中的南國公主』 麥田。
- (2003) 『伏虎』 麥田。
- (2003) 『賽蓮之歌』 麥田。
- (2013) 『沙龍祖母』 聯經。

(おいかわ・あかね 神田外語大学)

2017 年 9 月 22 日、李永平氏の逝去の報に接しました。氏の功績を偲び、ここに謹んで哀悼の意を捧げます。

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

コメント

Sarawak for Sarawakians

石川 登

今回のシンポジウムのテーマは「サラワクから見るマレーシア」ですが、第二部¹は「マレーシアの中のサラワク」と題されています。この言葉に触発されて私が考えたこといくつかと最近サラワクで見聞きしたことをご紹介してコメントに代えたいと思います。

マレーシアという国家機構 (state) のなかにサラワク州があることは事実です。しかしながら国民 (nation)、特に歴史、文化、アイデンティティといった点については、私の場合「マレーシアの中のサラワク」に「？」が点灯します。すでにご発表のあった選挙でのサラワク州のもつ意味を考えるにあたってはもちろん「マレーシアの中のサラワク」は重要です。特にサラワク州の人々の投票行動が与党連合 (BN) を支える重要な力の一つとなっていること、その理由を分析することはサラワクと半島を「複眼的」に考えるためにきわめて重要です。

しかしながら、ことサラワクの人々の半島との関係、とくに非マレー系のダヤックや華人系の人々に注目すると、「マレーシアの中のサラワク」という問題設定は、「所与」もしくは「初期設定」として取り扱う前に先ず疑問符をつけて考えてみたい、というのがあります。ただし「？」の部分を深く論じることは、コメンテーターの今日の役回りではありません。代わりといっただけですが、ちょうど先日サラワクでの調査を終えてきたばかりで、面白いことを見聞きしてきましたので、写真とともにご報告します。

ご覧いただいている写真はここ数年のあいだにサラワクでよく見られるようになったステッカーです (写真 1、2)。大きなステッカー、小さなステッカー、Tシャツのプリント、帽子的ロゴなどいろいろなバージョンがありますが、基本的には以下の文言と植民地時代のブルック政府の用いた紋章がプリントされています。

Sarawak for Sarawakians

Since 1841

Dum Spiro Spero

¹ 第一部のテーマは「サラワク研究のフロンティア」で、佐久間報告、森下報告、竹内報告、加藤報告、金沢報告で構成された。第二部は、祖田報告、鈴木報告、及川報告と、石川コメント、篠崎コメントで構成された。



写真 1



写真 2

これらのメッセージはサラワクの日常いたるところで見ることができます。ステッカーを貼付けた 4WD ピックアップトラックがクチンやミリの街中や伐採道を走っています。ロングハウスの若者の T シャツには、ロゴは同じでもイバンの Bunga Terung（花）の入れ墨入りのバージョンやサラワク州の地図がプリントされたものもあります。ミリのアポロという海鮮レストランでは、食事代を支払ったあとのレシートと釣り銭をのせたトレイにべったりとこのステッカーが貼ってありました（写真 3）。

このステッカーのメッセージの面白いところは、まさにベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』（Anderson, B. (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origins and Spread of Nationalism*）で論じたナショナリズムの起源をサラワクの人々がブルック植民地政府に遡り、トンチャイの説いた「ジオ・ボディ」（Thongchai Winichakul (1994) *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*）の原像をブルック王朝に求めていることです。

私はロゴ入りの T シャツ数枚をクチンの国際空港の近くの華人の店で買いました。街



写真 3 [祖田亮次 1]

のどこでも買えるというものではないようで、市の中心部から車を走らせました。店では、ヨーロッパのフットボールチームのユニフォームやタオルや下着とともにたくさんの種類の “Sarawak for Sarawakians” グッズが売られていました。T シャツに関しては、コストを下げるためにタイでプリントしてサラワクに持ち込まれていると噂されていますが、真偽のほどはわかりません。

このようなサラワク・ナショナリズムの植民地期への回帰は、サラワクの正統なナショナル・ヒストリーをつかさどる人々、特にマレー人の歴史家などからリアクションが出ています。私は居合わすことはできませんでしたが、州都クチンでは、「植民地化と植民地期を美化するな」といったスローガンのもとで路上デモが行われたということです。これはサラワクの津々浦々に拡がるこの合い言葉への対抗運動であるというのが地元の友人の解釈です。

最後に、ステッカーや T シャツにつねにプリントされるブルック植民地政府の紋章に記された言葉 —— 少々意味深なラテン語を紹介してコメントを閉じたいと思います。この “Dum Spiro Spero” というフレーズはローマの哲学者キケロなどが用いたもので、このような意味です。

“While I breath, I hope” 「息をしている限り、私は希望をもつ」

(いしかわ・のぼる 京都大学)

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

コメント

マレーシアの中のサラワク

篠崎香織

本コメントは、直接には第二部の三つの報告¹に対するものとなりますが、第一部の報告²もなるべく踏まえてコメントをしていきたいと思います。

コメントをするにあたり、時代を 3 つに区切って考えてみたいと思います。第一に、マレーシアやマラヤ、サバ、サラワクといった領域が存在していなかった時代です。第二に、国家の枠組み作りが進展していく時代で、植民地統治からマラヤの独立を経てマレーシア結成に至る時代です。マラヤ、サバ、サラワクがそれぞれの政治的領域となるまでに、またそれらの政治的領域が今日のマレーシアという政治的領域となるまでにかかなり長い時間がかかったわけですが、そのことを念頭において考えたいと思います。第三に、2000 年代以降の時代です。マラヤで構築された「民族の政治」という枠組みが、それまではマラヤである程度うまく機能していたのが、うまく機能しない部分が出てきた時代です。そうしたなかで、マレーシア全体が一つのシステムに組み込まれていくような状況が発生していることに着目したいと思います。

第一の時代である、マレーシアもマラヤも、サバもサラワクも存在しなかった時代と関係が深いご報告として、佐久間さんのご報告がありました。佐久間さんのご報告では、後背地、港市、海洋交易の関係性をつないで考えることの重要性が指摘されました。こうした関係性は、マラッカ海峡地域からボルネオに至る広義のマレー世界を対象とする歴史研究において、それなりに研究の蓄積があるお話であるように思います。ただ半島部を研究対象としていると、どうしてもマラッカ海峡地域にしか目が向かなくなりがちとなります。しかし広義のマレー世界を対象とする歴史研究は、ボルネオ地域も含めたより広範な領域に対して通用する議論として展開してきました。半島部を研究対象とするにしても、サバやサラワクを研究対象とするにしても、東南アジアにおける広域秩序に関する議論をふまえることが重要であることを改めて認識しました。

第一の時代に広義のマレー世界では、王国の版図が明確な境界線をもたず、広域的な秩序が存在していたわけですが、そうしたなかで明確な国境が植民地期以降形成されてい

¹ 本特集では、祖田論文、鈴木論文、及川論文がこれら第二部の報告に当たる。

² 本特集では、佐久間論文、森下論文、竹内論文、加藤論文、金沢論文が第一部の報告に当たる。

き、国境線に沿って秩序が形成されていくという側面がありました。これが第二の時代です。半島部の視点からこの時代を見ると、植民地期を経て自治を獲得し、独立していく過程の中で、華人、インド人、マレー人／ムスリムというまとまりが形成されたことがまず指摘されます。またこのことに関して、マレー人／ムスリムはスマトラやジャワ、スラウェシ、中東、インドなど多様な地域を出自とする人たちを内包していたにもかかわらず、マレー人という一つの集団性にカテゴライズされることをその構成員となる人たちが受け入れていったことが指摘されます。こうしてマレー人／ムスリム、華人、インド人という 3 つの民族が形成され、各民族が代表者を出して政治に参加するという枠組みが 1946 年から 1948 年にかけて構築され、そのなかでマレー人が優位となる政治構造が 1957 年のマラヤ独立までに確立していきました。

そのようなマラヤと一緒に国家を構成するとなった時に、サラワクの人たちがどのように対応したのかについて、趣旨説明やいくつかの報告において、サラワクが自身とマラヤとを区切るという対応をしたことが指摘され、マラヤからサラワクへの入境が制限的となっていることがその例として挙げられました。サラワクの人たちの対応は、これ以外にも多様な対応がおそらくあったと思われます。及川さんが報告した李永平の事例も、マレーシア結成期におけるサラワクの人たちの対応の一つとして理解できるように思いました。李永平は、マレーシアとなったボルネオから出て行き、台湾に行きました。李永平は、マレーシアは嫌いであることや、自分が属する国家ではないと認識していること、マレーシアの一州となったボルネオには帰らないことなどを発言している一方で、文学を介した精神世界のなかでボルネオに回帰してきます。しかしそこで発見するボルネオは、マレーシアを介していない世界です。マレーシアの結成があったからこそ、李永平の世界が生まれたという側面があるようにも思いました。

石川さんがコメントで、サラワクにはマラヤ優位、あるいはマレー人優位を受け入れるのは嫌だという心境があると述べられていました。また祖田さんが報告のなかで、サラワクではマレー人概念が状況可変的であることを石川さんの研究を引用するかたちで紹介していました。これに関して思い起こすことは、先ほども述べたように、半島部のマレー人ももともと一枚岩ではなく、多様な地域に出自を持つ人たちであったということです。サバやサラワクでは先住民系のムスリムのなかにはマレー人とは個別の民族を名乗る人たちも多いのに対し、半島部では多様な出自を前面に出さず、マレー人として一枚岩的に自らを名乗る状況が進展してきたと言えるように思います。なぜ半島部では、自らの出自をあいまいにするかたちでマレー人概念が展開していったのか。このことは、サラワクにおいて「マレー人は嫌い」という感情が存在することの大きな背景となっているようにも思われます。祖田さんの報告のなかで、サラワク研究を相対化することの必要性について触れていましたが、半島部についてもサラワクを参照点の一つとすることで、半島部の社会のあり方を相対的にとらえ、新たな視点を打ち立てていく必要があるようにも思いまし

た。

最後に、第三の時代である 2000 年代以降についてです。半島部では、マレー人、華人、インド人の代表者を自任する政党が連立与党（BN）を構成し、連立与党内の民族政党を通じて人々が政治に参加し、資源の公的な分配を受けるという仕組みが 1990 年代まではそれなりにうまく回っていたように思います。しかしこうした仕組みは 2000 年代以降、うまく回らなくなってきた側面があるように思います。2008 年以降、半島部では与党と野党が拮抗しています。これに対してサラワクでは、鈴木さんと森下さんの報告にあったように、BN が安定的に勝利しています。半島部では 2008 年以降、BN 以外の政党に政権を一度任せてみてもいいかもしれないという思いが一定程度存在しています。そうした思いを抱いている人たちからすると、サラワクの人たちは現政権の政治運営を支持しているように見えるようです。総選挙やサラワク州議会選挙の時には SNS に、「なぜサバやサラワクの人たちは BN に投票するのか？」という嘆きにも近いコメントが多数見かけられました。

しかし本日の報告やコメントでも指摘されていたように、サラワクの人たちは BN を全面的に肯定しているわけでもないようです。サラワクの人たちは、ナジブ政権と交渉するうえで現在の状況は自分たちにとって非常に有利であるからこそ、BN はあまり好きではないけれど BN を支持するという判断をしているのかもしれないかもしれません。半島部のやり方に対して異議申し立てをしたい、そのやり方を変えたいからこそ、半島部において与野党が拮抗し、BN がサバとサラワクに票を依存している状況を利用して、BN から利益を引き出そうという判断が働いているように思います。つまり、サバおよびサラワクが積極的に BN を利用する状況を、半島部における政治的な分裂が生み出しているというわけです。サバおよびサラワクの支持を基盤として BN が政治的な安定を維持するなかで、半島部の政治はますます分裂しつつあるようにも思います。そのような意味において今日のマレーシア政治は、半島部、サバ、サラワクが相互に関連する一つのシステムのなかで動いていると見ることができます。サバおよびサラワクにおいて BN への支持が安定していること、またそのために BN 政権が安定していることは、半島部とサバおよびサラワクの双方を見ないと理解できないように思います。

（しのぎき・かおり 北九州市立大学）

【研究ノート】

マレーシアの中等教育における歴史考査問題にみる国家的価値観

内藤裕子

はじめに

1. マレーシアの国家方針における教育の方向性

独立後のマレーシアの教育政策の根幹をなしてきた「1961 年教育法」は、1951 年の「バーンズ報告」¹、1956 年の「ラザク報告」、1960 年の「ラーマン・タリブ報告」²などを基盤として制定され、マレー系を中心とした国家統一政策の一環をなしてきた。その根拠となるのはマレーシア憲法（鳥居、竹下、1996:00）第 153 条第 1 項の規定で「最高元首は本条の諸規定に従い、マレー人およびサバ州、サラワク州の原住民（Malays and Natives of any of the States of Sabah and Sarawak）の特別な地位（special position）、およびその他の種族の正当な利益（legitimate interests）等を守ることを、自己の責任とする」となっており、第 2 項では「国王は本憲法中のいかなる条項にも関わらず、第 40 条および第 153 条に従い、マレー人およびサバ、サラワク州の原住民の特別な地位を保護するために、必要な方法により自己の権能を本憲法及び連邦法の名のもとに行使用することができる」とされていることにある。また、憲法第 152 条では国語はマレー語であると明記されている。

しかし、1969 年の人種暴動事件や 1987 年の政府批判勢力の大量逮捕³に象徴される非マレー系の根強い不満と、冷戦終結後の国際情勢の変化を踏まえて「1996 年教育法」が施行された。その前提となるのは 1990 年に発表された「国家開発計画」と 1991 年に当時のマハティール首相が発表した Wawasan 2020（以下、ビジョン 2020 と表記）であり、2020 年までに先進国入りをめざすマレーシアは、教育政策の面でも大きな方向転換を行っ

1 この報告書が初等教育におけるマレー語以外の言語教育を認めなかったことへの反発がおり、1952 年教育令では華語とタミル語の使用を認め、後の「ラザク報告」を受けた独立後最初の 1957 年教育令により「国民型学校」を認めた。

2 1960 年に議会で承認された。マレー語優先政策を強め「1961 年教育法」に反映された。

3 1987 年に起こった政府批判勢力の大量逮捕事件以後、反政府的な言論に対する言論規制・社会統制関連法規の厳格な適用、与党系資本による主要メディアの買収や経営参加を通じた間接的な統制などが進み、政府批判の余地は限定された（金子、2004:25-6）。

た。「1996 年教育法」による改革内容については後述するが、従来のマレー系への同化政策から、文化的多様性を保持した「マレーシア人」による国民統合をめざすという軌道修正が行われた。また 2020 年までにすべての学校のスマートスクール⁴（杉本, 2005:20-26）化をめざし、単に技能的リテラシーを身につけるだけでなく、21 世紀のグローバル経済に対応できる批判的思考力を持つ人材育成を目指すとしている。マレーシアでは教育省の下、教育企画委員会、各州の教育庁、地方教育事務所、各学校という系統的で強力なヒエラルキーにより教育行政は管理され、この新しい目標に向かって現在の教育改革が実行されている。とはいえ、「ビジョン 2020」が教育におけるマレー系優先主義を放棄したわけではなく、国立寄宿学校や大学進学に際してのマレー系優先政策は未だ続いているといわれる（鴨川, 2008:104）。

このように一方で教育のグローバル対応を目指しながら、実際の運用にあたってはマレー系優先主義に立つナショナリズムの立場を堅持するというアンビバレントな姿勢をとることが、教育現場にどのような歪みをもたらしているのかを検証していきたい。

2. 本稿の目的

前節で述べたように、マレーシアの教育行政には、グローバル化への対応と国家的価値観の保守という異なる方向性が見られる。杉本（2005:15）はノラニ・オスマンの見解を紹介して、マレーシアが進めている教育改革について、グローバリゼーションへの対応をめざすべき分野として、「科学技術教育、高等教育（規制緩和・民営化）、教育用語（英語）」を挙げ、これらに関しては積極的に変容し適応すべきとし、一方で「文化防衛」すべき分野として「現地文化と多元的教育、宗教教育・価値教育」を挙げている。マレーシアの高校段階、すなわちフォーム 4 とフォーム 5 における歴史教育はこの「文化防衛」すべき「価値教育」に該当すると思われる。人文・社会科学の分野での「価値教育」は、先に述べたスマートスクール化が目指す批判的思考力の育成をどのように可能にするのであろうか。この点を明らかにすることを本稿の目的とする。そのための方法として、後期中等教育での世界史考査問題と教科書の分析を行うことにした。世界史を選んだ理由は、この教科が後期中等教育における必修科目であり、マレーシアの国家的価値観を最も端的に示す科目の一つであるからだ。1996 年の教育法改革に先だって行われた、梅津（1993:40-41）の指摘を見ると、梅津は当時の中中等教育カリキュラム Kurikulum Bersepadu Sekolah Menengah (KBSM) の世界史のシラバス分析を行い、マレー系、非マレー系の両者に共

⁴ マレーシア教育省の“*Smart School Conceptual Blue Print*”（1997）によればその冒頭で「ビジョン 2020」を実現させるためには批判的思考が求められるとしており、1996 年末以降、同省は Multimedia Super Corridor 計画の一環として教育の ICT 化に取り組んでいる。そこでは 2010 年までにすべての初等・中等学校をスマートスクール化するという計画が示された。

⁵ マレーシアでは前期中等教育をフォーム 1-3、後期中等教育をフォーム 4-5 としている。

通する教科である世界史に国民統合教育の中核的役割が期待されている、としている。KBSM 指導要領においても「歴史教育の目的は、マレーシア国民としての、そして世界市民としてのアイデンティティを自己の内に確固としたものにすることにある」として 9 つの重点目標を示している。梅津はこれを要約して、①歴史的知識の理解、②歴史研究の技能の育成、③価値観の形成、④マレーシア国民としての望ましい実践的態度の育成、の 4 点がカリキュラム全体を貫く統合教育の理念を反映していると評価した。

世界史の内容として何を記述し、何を簡略に扱っているのかは、マレーシアの国定教科書の内容分析によって明らかになる。さらに教育現場で行われる定期考査の問題を分析することにより、教科書の記載事項のうちどのような内容や価値観を重視しているのかを検証したい。定期考査問題を分析対象とした理由は、考査問題には教育者が生徒に理解させたい重要項目が凝縮して表現されていると考えたからである。

I マレーシアの中等教育の現状

1. 過去の教育問題と教育行政

ここでは 1996 年の教育法改正をめぐるエスニック集団の間での対立点を簡単に見ていこう。1996 年教育法の制定により、いくつかの大きな教育改革が行われた。杉村 (2000: 136-39) によると、第一に「ビジョン 2020」の国家発展計画の一環として、国際社会における競争力の強化がうたわれており、社会的公正や倫理の点で十分に発達した国家として、民主的な自由とダイナミックな統一社会実現に教育が寄与することが求められているとされる。第二にマレー系以外のエスニック集団の言語での教育を行う国民型学校を、マレー語での教育が行われる国民学校に転換させる可能性を規定した条項 (第 21 条 2 項) の削除により、華人などマレー系以外のエスニック集団の要望に応えた点が大きな変更点である。しかし、他のエスニック集団の言語教育を認めつつも、同時に条文の中にマレー語は必修言語であることが明確に組み込まれた点や「すべての初等および中等学校は、共通の教育課程を採用し、それに準拠した公的修了資格試験の受験に対処すべきであること」(第 21 条および第 75 条) として、国家がすべてのエスニック集団の教育を管理しようとする姿勢を強めた、と杉村は指摘する (2000:138-139)。

このように 1996 年教育法に対して、マレー系以外のエスニック集団においては、同法が必ずしも彼らの教育政策に対する主張を完全に認めたものとは言いがたいという意見がある。一方でマレー系の立場からは、当然この教育法改革に対し強い反発が起こった。マレーシア北部大学の教授であるイスハックは次のように指摘する。「マレー系は教育水準の改善を通じて、社会的地位向上を目指すだけでなく、国家教育政策においてマレー語は国語として中核的な役割を果たしていると考えていた。1956 年のラザク報告書の基本的

な部分は、教育政策においても維持されるべきだとマレー系住民は考えていたのである。幅広い場面でマレー語を使うようにすることで、マレー人の属性こそが国家アイデンティティの根幹を形成するよう目指していた。この目標や期待は正当なものであり、必ず実現しなければいけなかった」(下線は筆者による)(イスハック, 2015:89)。「多くのマレー系インテリ層にとって、1996 年教育法はマレー語というマレー人の属性の最も重要な部分を犠牲にして成り立ったものであり、政府がラザク教育報告書から妥協してしまったのだと考えていた」(イスハック, 2015:90)。

実際に、1996 年教育法第 75 条 (a) 項の、私立の中等後教育機関に関する条文は「国語以外の言語を授業用語とする教育機関は国語の授業を提供しなければならない」として、マレー語以外の言語を教授言語とする学校の存在を前提としている(杉本, 2005:16)。

ここに見られる政府の姿勢のある種の不明瞭さは、グローバル化に対応するため、国際的に優位な言語である英語や華語習得の要求の前にマレー語優先政策が譲歩せざるを得なくなった結果であろう。

2. 現在の状況

マレーシアの教育行政全般の根幹をなすのは 1969 年に政府が発表した国是である「ルクネガラ」⁶に示された項目であり、これに沿って教育企画委員会が教育方針を発表している。Malysia Education Blueprint 2013-025 (2012:75) の発表では、2010 年の統計によると初等教育就学者 91%、中等教育就学者 76%、高等教育就学者 15%となっている。また、2012 年の OECD 生徒の学習到達度調査 Programme for International Student Assessment (PISA) の順位では、全参加国 65 カ国のうち、読解力で 59 位、数学で 52 位、科学で 53 位となっており、いずれの分野でも OECD の平均値を下回っている。イスハック (2015:83) によれば 1996 年の教育法改正で、東南アジアにおいてマレーシアが高等教育の中心になる道を開くことが目的とされた。しかし、冒頭で示したスマートスクール構想が掲げる批判的思考力の育成・暗記中心の学習からの脱却は、中等教育段階の現状では、未だその目的にはほど遠い状況であるといわざるを得ない。

マレーシアの学制と学校の種類について簡潔にまとめると、5 才から就学前教育が始まり、6 才から 6 年間の初等教育、12 才から 3 年間の前期中等教育、15 才から 2 年間の後期高等教育が行われ、その後 2 年間の大学準備教育が用意されている。前掲のブループリントによれば初等教育に該当する生徒数の 74%がマレー系の「国民学校」に通い、21%

⁶「神への信仰、国王と国家への忠誠、憲法の支持、法の支配、良識ある行動と道徳」からなる五大方針で、「複合民族が統一された社会への到達、民主的な社会の形成、すべてのものに平等で公正な社会の創造、多様な文化的伝統を持つ自由な社会の確保、科学と現代技術を志向する進歩的な社会の建設」の五項目がそこから導かれる。

が華語、3%がタミル語の教育が可能な「国民型学校」に通っている（中等教育, 2012: 93）。近年ではマレー系の国民が華語習得をめざして華人を中心とする「国民型学校」に入学する例が見られる。後期中等教育では理科系、文科系、技術系、職業系、に分かれ、一部の成績優秀者は前期と後期中等教育を一貫で行う理系の国立寄宿学校へ進学する。また、これらの国立の教育機関の他に私立のインターナショナルスクールや華文独立中学等が存在し、1996 年の教育改革以降は高等教育においても「新紀元学院」をはじめとする私立の大学が設立された。このように、高等教育の受け皿は大きくなっているが、実際にはマレーシアの国策ともいえるブミプトラ優遇政策により、マレー系の女性は進学に際し、その恩恵に与っていると、鴨川（2008:5）は指摘する。逆に華人の場合は、国内の高等教育機関が不十分のため海外の大学への留学を余儀なくされているという（杉村, 2000:141-149）。

ここで示したように教育におけるグローバル化への対応が求められる中、学校現場での教育内容がそれに合致したものになっているのかを、以下の章で見ていきたい。

II フィールドワークの概要と歴史教育

1. 調査対象

調査対象としたのは、1960 年代に設立された南部の州にある国立の寄宿制中高一貫女子校である⁷。この学校を選択した理由は、同校がマレーシアの代表的な進学校であり、マレーシアが理想とする教育モデルに近い教育実践を行っていると考えたからである⁸。同校は 2016 年のマレーシア寄宿制学校の最優秀賞をとっている。この学校の生徒は、現在すべてマレー系であるが、筆者に同行した小池寿子によれば、小池が青年海外協力隊員としての派遣で同校において日本語教師を務めていた 1991 年には少数だが非マレー系の生徒も存在しており、華人系の教師もいたとのことである。現在は約 60 人いる教員の中で非マレー系はインド人の女性教員（家庭科）1 名のみで、男性教員は 10 名、歴代校長はすべて女性である。生徒数は全校生徒約 720 人で各学年に 5 クラス、各クラスは 25～30 名で構成されている。生徒たちは学年縦割りの四つの寮で生活しこの寮の単位で表彰などが行われる。

⁷ 女子校を選択したことについては、鴨川（2008:137）による「ブミプトラ政策の下で、特にマレー人女性がマレーシア計画と教育政策文書により勧告された各種政策の恩恵を被ることとなった。」との指摘や三木（2015:219-246）によるマレーシアでの女性進出の現状分析を参考にした。

⁸ ただし、この分析はあくまで国立の寄宿制女子中高一貫エリート校におけるマレー系の生徒を対象にした事例研究であり、必ずしもマレーシア全体の動向を象徴しているわけではないことを明示しておく。

同校への訪問調査は二度行った。第一回は2016年2月21日（日）に実施し、取材先は同校の日本語教員 Z.A.、中学部（1～3年担当）歴史教員 S.U.、高等部（4～5年生担当）歴史教員 B.M.の三名である。日本語教員 Z.A.は同校の教員研修担当も務めているとのことであった。取材は英語と Z.A.によるマレー語－日本語通訳によって行った。ジョホール州ではスルタンの意向により 2014 年から金曜日と土曜日が公共機関の休日となったため、日曜日は授業が行われている。金曜日の礼拝を重視したイスラーム化政策の一環であろう。

第二回の訪問は 2016 年 7 月 17 日（日）に行い、前述の小池が同行した。小池は JICA 派遣により 1990～92 年、取材先同校の日本語教員を務めていた。第二回の取材先は前回と同様に、中学部歴史教員 S.U.、高等部の歴史教員 B.M.、その他に主任歴史教員 S.R.と校長の H.K.とも懇談を行った。ちなみに小池は現在の校長の教員時代に同校で同僚であった。今回の分析対象とした定期考査問題は、高等部の歴史教員 B.M.の作成によるものである。第二回の取材は主に英語で行った。

第一回の取材時の日本語教員 Z.A.によると同校の生徒たちの進路概況については、ほとんどが大学に進学し半分近くは海外の大学へ留学するとのことであった。留学先はイギリス、アイルランド、アメリカ、日本などである。他の生徒は国内の大学へ進学するが、大学卒業後の就職問題が深刻であるとのことだった。同校におけるカリキュラムは以下の通りである。中学部で履修する科目は理科総合、数学、英語、宗教、体育、芸術（音楽と美術）、公民、家庭・技術、情報、第二外国語（日・仏・アラビア語から一つ選択）、マレー語、歴史である。高等部で履修する科目としては物理、生物、化学、数学、上級数学、英語、宗教、体育、公民、第二外国語、マレー語、世界史⁹である。この中で歴史とマレー語は成績不振の場合には進級できないが、同校の生徒には不認定者はいないとのことであった。

2. 歴史教科書と定期考査問題の概要

本節では、具体的な歴史教育の内容を概観していきたい。マレーシアの歴史教育ではマレー語で書かれた国定教科書を使用する。中学校と高校に該当する学年の教科書の執筆者は以下の表の通りである。なお、中学校に相当するフォーム 1～3 で学ぶ歴史はマレー史が中心であり、高校に相当するフォーム 4～5 での歴史は世界史となっている。著者の構成において哲学や教育学専攻者が多く、歴史の専門家が比較的少ない。

現在のフォーム 5 の生徒は前述の KBSM と呼ばれるカリキュラムに従った教育を受けている。2016 年度入学生からは新しいカリキュラムへの移行が行われたが、本稿では旧

⁹ マレー語での科目名は歴史であるが、内容は世界史であるため中学部の歴史と区別して世界史と表記する。

表 1 中学・高校教科書の執筆者一覧

フォーム 1～3 歴史教科書の執筆者一覧	
執筆者名	経歴・研究専攻分野等
Nik Hassan Shuhaimi bin Nik Abdul Rahman	教師経験後マラヤ大学卒業、ロンドン大学で哲学博士、考古学と古代スマトラ王国を研究、2014年～マレーシア国民大学教授
Muhtd. Yusof bin Ibrahim	フィリピン大学で哲学を専攻、著作多数、2014年～マレーシア国民大学講師
Muhammad Bukhari bin Ahmad	シカゴ大学、カリフォルニア大学バークレー校で哲学専攻、フィルドウシー大学とイランのテヘラン大学でも学ぶ
Rosnanaini binti Sulaiman	マラヤ大学とマレーシア国民大学で学位取得、イスラム教育分野を専攻、哲学博士
フォーム 4～5 世界史教科書の執筆者一覧	
執筆者名	経歴・研究専攻分野等
Ramlah binti Adam	マラヤ大学の歴史学科教授、政治史、教育史、マレーシアの憲法などを専攻
Shakila Parween binti Yacob	マラヤ大学歴史学科講師、ウェスタンミシガン大学で学ぶ西洋近現代史専攻
Abdul Hakm bin Samuri	マレーシア国民大学で教育学専攻
Muslimin bin Fadzil	マレーシア科学大学で教育学専攻

KBSM のフォーム 5 の生徒を対象とするテストについての分析を行った。後期中等教育では 5 月と 10 月の年に 2 回の定期考査が行われる。この定期考査は学習した全範囲を対象とするもので、3 部構成となっている。第 1 部（ペーパー 1）は四択のマーク問題を 40 題、一時間で解答する。第 2 部（ペーパー 2）は数行程度の論述問題で二時間半かけて解答する。最後の第 3 部（ペーパー 3）は論述問題を三時間かけて解答する。その他にも範囲を限定して行われる確認テストが年に二回ある。小テストは随時行われている。今回は 2016 年 5 月にフォーム 5 において行われた世界史の定期考査の問題の分析を行った。全体として、日本の高等学校での考査問題に比べて非常に時間を長くとり、大学の試験に匹敵するような出題形式であると感じた。では、その内容はどのようなものになっているのか、次章で考査問題の具体的内容とそれに関連する教科書記述を概観する。

Ⅲ 後期中等教育での世界史考査問題分析

本章では、試験問題の出題分野と設問の特徴について個別に見ていきたい。幅広い出題範囲の中からどの時代を多く扱っているか、また各時代のどのような分野に焦点をあてた問題を出题しているかを分析することにより、マレーシアにおける世界史教育で生徒にどのような価値観を学ばせようとしているかが推察できるはずである。以下の分析の対象については文末掲載の資料（日本語に翻訳した考査問題）を参照されたい。

1. ペーパー 1 の内容と分析

四択問題 40 題の出題分野と出題数は古代史 7 題、中世史 13 題、近世史 1 題、近現代史 19 題である。

比較の対象として日本の高校世界史教科書の記述を中心に、日本の世界史教育との相違点の分析を中心に行った。日本の教科書では、中国史と西洋史の扱いが大きすぎるという批判が従来からあったが、近年ではイスラーム史や東南アジア史の記載が増えている。

マレーシアの教科書の特徴的な点は、近現代の政治制度に関わる記述が非常に少ないことである。市民革命、選挙制度の発展、社会主義などにはほとんど触れられない。それらが主に西洋的価値観に立脚している点が理由のひとつであろう。古代史においても、ギリシア、ローマ史の扱いが非常に小さい。それを反映して考查問題でも第 4 問でローマの「水道橋」の目的を尋ねる問題が唯一の出題である。教科書での具体的な扱われ方を見ると、フォーム 4 の教科書 284 ページ、フォーム 5 の教科書 276 ページの合計 560 ページ中で、古代メソポタミア史が 7 ページ、古代エジプト史が 6 ページ、インダス文明が 5 ページ、中国文明が 5 ページであるのに対し古代ギリシア史は 2 ページとなっている。ギリシアの古代史についての教科書の具体的記述を見ると、要塞を持ったポリスが戦争状態にあったことが短く記述され、別のページで民主制について約 1 頁分の説明がなされている。哲学者や建築等の文化史は後のページで他の文明とまとめて説明される。参考までに山川出版社の『詳説世界史』¹⁰（佐藤、木村、岸本、2012:24-79）では古代メソポタミア史、古代エジプト史、インダス文明がいずれも 2 ページ、中国文明が 5 ページであるのに対し、古代ギリシア史には文化史も含むと 12 ページを充てている。

扱いが少ない上に、マレーシアの教科書におけるギリシア史の説明の中にはやや正確さを欠くと思われる部分が散見された。たとえば、王政から貴族政へと移行する時期の説明文には次の資料にあるように *konsul* と名付けられたとされる組織がたびたび現れる。ギリシア古代政治史の最も重要な文献であるアリストテレスの『アテナイ人の国制』によれば、王の政治権限はアルコンと呼ばれる行政官に移行し、貴族寡頭制が成立した。王政期にはブーレーと称する王への助言機関も存在したが、王政から貴族寡頭制の時代のアレオパゴス会議も存在した。いずれにせよ、このいずれとも異なる *konsul* と名付けられた組織に王が補佐されたという教科書の記述は不適切であろう。また、民主政の説明についても「抽籤制」であったことには触れられず、民主政形成期に活躍した人名や陶片追放に関する記述はない。逆に王政から貴族政への移行の時期の記述が比較的詳しく、民主政の扱いは簡単なものである。後述するように、ここに現在の王政への配慮を読み取ることができる。

¹⁰ 口絵も含み全体で 425 ページの内容である。

(以下はマレーシア世界史教科書 p. 42 ギリシアの貴族政の説明箇所) *konsul* の記述がある部分の筆者による日本語訳)「民主主義制度が人びとに知られるようになる前には、アテネは王政を行っていた。この制度では王は *konsul* と名付けられた組織に補佐されていた。王は、裁判の指導者、軍の指導者、そして宗教の指導者としての役割を果たしていた。*konsul* の権力が強くなった場合には、(王の) 裁判の指導者、軍の指導者、そして宗教の指導者としての役割は低下していった。最終的に、選ばれた王というシステムでは権力は低下した。その理由は、富裕層からなる *konsul* により権力が行使されるようになったからだ。この統治制度は何人かの *konsul* の寡頭政治と名付けられた。この *konsul* 集団から強い貴族集団が生まれた。彼らは大きな権力を所有し、この貴族集団による統治は貴族政と呼ばれた。」

反面、古代メソポタミアの説明は詳しく、ラガシュの王グデアの図版をはじめとして多くの図版を使用し社会経済史まで説明されている。教科書に忠実な出題であれば当然考查問題にも古代ギリシア史が出題されにくいであろう。古代史 7 題のうち中国史が 2 題、ローマ史 1 題、インド史 1 題、東南アジア史 2 題、古代史全般が 1 題となっている。

中世史 13 題のうち 7 題が中東のイスラーム史であり、東南アジア史からの 5 題中の 3 題はイスラーム関連の出題で、残る 1 題が中世ヨーロッパの封建制に関する設問である。歴史の他に「宗教」という科目もあり、イスラームに関する学習はそこでも行われているわけだから全体的にイスラーム重視は明瞭になっている。中世史の中ではムハンマドの業績に関する出題は 4 題あり、東南アジア史ではスマトラ、マラッカ王国など島嶼部の出題が多く、半島部の隣国タイに関する出題はない。

近世史はルネサンスに関する出題が 1 題あるのみである。近現代史 19 題のうち 1 題のみが西洋史で、11 題が 19 世紀の植民地時代のアジア史とナショナリズムに関連する問題、7 題が独立前後の現代史である。19 世紀の西洋史では「カヴールとビスマルク」の類似点は「実益政策をとった」人物として出題されるに止まっている。19 世紀のアジア史では第 24 問において、日本の日清、日露戦争について、そのアジアへの影響を問い「ナショナリズム精神の出現」を正解としている。特徴的なのは第 34 問において「民主主義を手に入れる権利を持っているのは誰か」という設問で「マレーの王の国民」を正解として、不正解の選択肢を「移民集団」「マレーの土地で生まれた者」「地元の人と結婚した人」としている点である¹¹。ここでの「マレーの王の国民」の定義が授業でどのように説明されているかが興味深い。第 37 問では独立に際してのインドネシアとの衝突を、第 39 問は独

¹¹ ワーヒド、ザイナル＝アビディン＝ビン＝アブドゥル (1983:208-209) は独立直前の状況分析の中で「そもそも当時マラヤには公民権法自体が施行されていなかったから、非マレー系住民が法律上「マラヤ国民」になることはできなかったのである。一方、マレー人は生来この土地の住民であり、かつスルタンの臣民でもあったのである。」としてマレー系の優先的な地位を主張している。

立時のシンガポールの動向についての設問で、全 40 問の中では現代史にはかなり比重を置いている。

このように、マレーシアの考査問題は世界の歴史を扱ってはいるが、イスラーム史の出題が非常に多い。イスラーム史においてはムハンマドの時代に詳細な出題が見られる他、道徳的な価値観を問う問題も散見する。近現代史では、アジアのナショナリズムを中心としている。近現代の西洋史についての出題が非常に少なく、欧米の革命や民主主義の歴史については一切の出題がない点が特徴的である。そこから窺われるのは、国家的価値観の柱である王制への批判材料となる史実を回避し、むしろ過去の諸文明における王制を積極的に学ばせようとする姿勢である。

2. ペーパー 2 の内容と分析

ペーパー 2 は前述したとおり、2 時間半かけて行われる論述を中心とした問題である。大問 12 題のうちで、解答指定されているのが 4 題、残る 8 題のうちから 3 題を選択して解答する。それぞれの小問には 3~4 の小問がある。答えるべき小問の数を合計すると、32 題となり、この設問に対してほとんどの場合 4~8 行にわたる論述形式での解答が求められる。

出題分野では、指定問題 1. が古代エジプト史、2. がマレーの伝統とイスラームとの関連、3. が東南アジアにおけるナショナリズム、4. が国家原則に関する問題で、原則的な特徴を「憲法」と「君主国」と答えさせている。選択問題では 5. がギリシア・ローマの文明、6. 7. がイスラーム関連、8. が多民族社会の形成、9. 以下は独立史であった。

出題内容に関して、1. のエジプト史では、先に挙げた日本の世界史教科書では「住民の大部分は不自由な身分の農民であり、生産物への租税と無償労働が課せられた。」(佐藤、木村、岸本、2012:8) という認識が一般的である。一方マレーシアでは、なぜエジプト王国では教育が重視されたか、国民が教育を受けられないと国にどのような影響があるか、など、日本の世界史教育とは全く違う切り口の設問が見られる。2. のマレーの伝統に関する小問では、価値あることを日常生活で実施できないのはなぜかという設問が見られ、価値観教育の一断面が垣間見える。この価値観に関わる設問は 3. のアジアのナショナリズムに関する問題にも登場し、国民にナショナリズムの精神が必要なのはなぜかと問うている。同様に解答指定された最後の問題 4. でも国家統治システムの策定を提案させている。

選択問題の 5. ではギリシア・ローマの教育について問うた後で、世界の国が教育の発展に力を入れたのはなぜか、という設問により、古代ヘレニズム世界の政治システムのあり方を問うのではなく教育文化の理解に重点をおいている。8. では複合民族国家であることは国にとって利益になるか、というまさにマレーシアの国家的価値観に肉薄する問い

を立てている。他にも 9. で現代の新しい植民地支配に対抗するための提案、11. 独立時のサラワク譲渡反対運動に対する生徒自身の姿勢を問う問題など生徒の政治的価値観が問われる設問が目立つ。

3. ペーパー 3 の内容と分析

最も試験時間が長い論述問題であり、出題内容は大問が 9 問でほとんどがイスラームと国家の関係を答えさせるものである。最も配点が高い設問は第 3 問で、3 つの小問合計で 25 点の配点として、「社会・文化に対するイスラームの影響」を問うている。また、第 6 問、多民族社会を平穏にさせる方策を、第 7 問では社会の団結を阻害する要因とその克服手段を答えさせている。これらの問いにはそれぞれレポート用紙約 1 枚分の解答が要求されている。教師の話によれば、ペーパー 3 は資料持ち込み可としてテーマの概要は事前に知らされているとのことだった。

マレーシアの考查問題を概観してみると、歴史を証拠資料に基づいて科学的に分析するというよりは、国家的価値観への関連づけを行って、そこへ導こうとする意図が明らかなものとなっている。

IV 考查内容の分析からみる国家的価値観の考察

定期考查の出題形式と分量は日本の公立高校のそれと比較すると論述形式の設問中心で大量である。筆者が経験した愛知県の公立高校の世界史の定期考查は回数こそ年に 4~5 回と多いものの、一回の考查は 100 点満点となる問題を 50 分で解答する場合がほとんどで、出題形式はマーク式、記述短答問題が中心で論述問題の出題量は少ない。しかし重要なことはいかに分量が多く論述形式が中心であろうとも、何を問うているかである。また、論述問題の解答にどの程度の許容範囲を持って正解としているかも重要である。まず気づくことは、イスラーム教を国教としているため当然といえるだろうが、イスラーム関係の出題が中心となっていることだ。特にペーパー 3 の論述はイスラーム関連のみである。

ペーパー 1 の考查問題は教科書を忠実になぞる形で出題され、使用された写真や図表も教科書からの引用が中心である。ペーパー 2, 3 には個人の価値観に迫る設問が多く見受けられたが、特にこのような設問では採点基準の許容範囲が気になるところだ。イスラームの歴史については、日本の世界史教育においては時代順にスンナ派、シーア派関連王朝ともに学習している。一方マレーシアでは、ムハンマドに関する出題など初期イスラーム史において詳細な内容を出題している反面、ブワイフ朝、ファーティマ朝、サファヴィー朝などのシーア派王朝に関連する出題やモンゴル帝国についての出題も見当たらない。これは教科書においても同様であり、スンナ派を国教とするために意図的にシーア派関連の王

朝の歴史は排除しているか、別に行われる宗教の時間に学んでいる可能性もある。付け加えると考査問題、教科書ともに出来事はイスラーム暦でなく西暦で示されていた。

東南アジア史ではタイに関する出題がなく、スマトラの歴史を多く取り上げていた。マラッカ王国の初期の時代にはタイに朝貢していた¹²にも関わらず、タイの歴史は重視されていないようである。

教科書では中世以降の西洋史に関して、封建制度、ルネサンス、宗教改革、大航海時代に続き農業革命と産業革命を扱っているが、その後はアジアにおける帝国主義へと飛躍する。梅津（1993）の報告ではかつてのシラバスでは「ヴォルテール」の扱いがあったようだが、現在の教科書には見当たらない。日本の世界史で大きな比重を占めている「市民革命」の歴史は素通りされ、19世紀の西洋史ではカヴールとビスマルクがとりあげられる程度で、普通選挙や議会制発展の歴史もほとんど述べられない。現代史ではインド独立史に関連してガンディーが、東南アジア史ではフィリピンのホセ・リサルやアギナルド、ベトナムではホー・チミン、ミャンマーのアウンサン、インドネシアのスカルノらが写真とともに取り上げられている。

「ルクネガラ」の中心的価値観である「神への信仰」「国王と国家への忠誠」に対して障碍となる歴史事象は、それがいかに先進諸国間で周知された出来事であろうと、注意深く排除あるいは婉曲表現に留める姿勢が顕著である。杉本（2005: 97）は中等教育の KBSM 理科において、「有徳な価値観の吸収もしくは『刻印（*penerapan*）』と呼ばれる道徳的価値、宗教的価値、美的価値、社会的価値などを意識的に生徒に伝えることをカリキュラムの特徴として挙げている。さらに「問題はこうした特定の文化目的を持った価値教化のメソッドと、事実には則して物事を批判的・合理的に考察しようとするヒューリスティック（*heuristic*）なアプローチとの間に予想される衝突である」（2005:100）「資料の持つ意味に無限の解釈が考えられる人文・社会科学系科目においては、このアプローチを取り入れるならば、とりもなおさず教師がこれらの解釈をあらかじめ一本化（解釈の強制）してしまうことを意味している」（2005:101）と指摘している。先に挙げた梅津の指摘のように世界史教育は、より国家的価値観注入を求められる分野であるため、「刻印」の傾向は顕著なものとなっていることが予想される。

アンダーソンは「なによりもまず西欧において、18世紀がナショナリズムの時代の夜明けであるばかりか、宗教的思考様式の黄昏でもあった」（2007:34）と指摘するが、マレーシアではマレーの地に生まれマレー語を話ししかもムスリムである事が国家アイデンティティを支えている。しかも多和田（2005: 2008）の以下の指摘のようにイスラームはそれ

¹² 生田（1977）によれば「シャムのアユタヤ王国（1350-1767）はマレー半島の各地の首長国に使者を派遣し、定期的に貢物を徴集するとともに、金と銀で木の枝に葉や花をつけたものをつくらせて、これを献上させていた。」とし、初期のマラッカ王国のアユタヤ朝への朝貢を記述している。

自体がよりイスラーム化を指向する傾向を持つ。「絶対的理念を指向するイスラームの「普遍性」がマレー社会の政治的対立という「個別的」状況のなかで、より強く理念へと向かう方向に進み出したのである。」イスラームが志向する超国家的価値観と進行するグローバリズムのそれは全く異なる方向性を持っている。この二つに対して、今後のマレーシアはどのように特殊マレーシア的なマレー系優先主義に立つ国民統合理論との整合性を見つけていくのだろうか。

おわりに

近現代の世界の形成過程を学ぶことは、日本の高等学校における世界史教育のねらいの中心となっている（高等学校学習指導要領解説 2010:13）。市民革命を経て「西ヨーロッパとアメリカ合衆国では、市民の政治的発言権の拡大が進み、国民国家形成の動きが生まれた」（前掲書:20）ことは民主的な社会の存在意義を確認するために不可欠の内容である。マレーシアの歴史教科書には、近代の民主主義政治が確立していく過程への言及がほとんど見られない。日本の世界史教育においては、未だなお西欧史中心の内容に偏りがちであるとの批判もありその点については別に論じたいが、もし西洋史の内容を精選するとしても、市民革命や民主主義の歴史は最後まで残るであろう。この歴史過程の理解を抜きに現代の世界が求める社会的公正などの価値観は正しく理解されないからである。翻ってマレーシアの生徒たちは歴史教育の場において民主主義の形成過程をほとんど学ばないとすれば、「ビジョン 2020」が求めている「社会的公正」や「民主的な自由」の概念をその来歴を知ることなく正しく理解することができるのであろうか。土屋（2011:1）は「学習内容におけるメタ認識」について「歴史には複数の見方が存在するという前提に立って」解釈を行うことの重要性を指摘している。国定教科書を採用している多くの国は開発途上国であり、国家的価値観を国民に注入することを重視していると思われる。しかし、知識基盤社会における重要な能力である思考力、判断力を育成し、グローバル社会で異なる文化や文明と共存できる市民を育てるためには、多面的多角的なものの見方こそ必要とされるであろう。

〈参考文献〉

日本語文献

アンダーソン、ベネディクト・白石隆、白石さや訳（2007）『定本 想像の共同体』書籍工房早川。

池端雪浦、生田滋（1977）『世界現代史 東南アジア現代史 2』山川出版社。

イスハック、モハメド・ムスタファ・岡野俊介・森林、高志・新井、卓治訳（2015）『マレー

シア国民のゆくえ』紀伊國屋書店。

梅津正美 (1993) 「マレーシア後期中等教育における『歴史』の研究—新中等教育カリキュラム (KBSM) 『歴史』を中心として」『社会科研究』第 41 号。

金子芳樹 (2004) 「マハティール体制の確立過程：マレーシアにおける政治体制とリーダーシップ」関根政美・山本信人編『海域アジア (現代東アジアと日本)』慶応義塾大学出版会。

鴨川明子 (2008) 『マレーシア青年期女性の進路形成』東信堂。

佐藤次孝、木村精二、岸本美緒 (2012) 『詳説世界史』山川出版社。

杉村美紀 (2000) 『マレーシアの教育政策とマイノリティ』東京大学出版会。

杉本均 (2005) 『マレーシアにおける国際教育関係』東信堂。

多和田裕司 (2005) 『マレー・イスラームの人類学』ナカニシヤ出版。

土屋武志 (2011) 『解釈型歴史学習のすすめ』梓出版社。

三木敏夫 (2011) 『マレーシア新時代』創成社。

ワーヒド、ザイナル・アビディン・ビン・アブドゥル、(1983) 『マレーシアの歴史』山川出版社。

マレー語文献 (国定歴史教科書)

Dewan Bahasa dan Pustaka Kuala Lumpur (2014) “*Sejarah Tingkatan 4*”

Dewan Bahasa dan Pustaka Kuala Lumpur (2014) “*Sejarah Tingkatan 5*”

Kurikulum Bersepadu Sekolah Menengah (注) マレー語文献翻訳の確認と校正には久保祐子先生のご指導を頂いた。

インターネット上の資料

Ministry of Education Malaysia (2012) “Malaysia Education Blueprint 2013-2015” (2016 年 8 月 28 日最終アクセス <http://www.moe.gov.my/userfiles/file/PPP/Preliminary-Blueprint-Eng.pdf> よりダウンロード)

Ministry of Education Malaysia (2016) “Executive Summary Malaysia Education Blueprint 2013-2015” (2016 年 8 月 28 日最終アクセス https://www.um.edu.my/docs/default-source/about-um_document/media-centre/um-magazine/4-executive-summary-pppm-2015-2025.pdf よりダウンロード)

Smart School Project Team (1997) “Smart School Conceptual Blue Print” (2016 年 12 月 28 日最終アクセス http://www.msomalaysia.my/sites/default/files/pdf/publications_references/Smart_School_Blueprint.pdf よりダウンロード)

鳥居高、竹下秀邦 (1996) 「マレーシア連邦憲法 [解説と翻訳]」(2016 年 12 月 21 日最終アクセス <http://hdl.handle.net/2433/187624> よりダウンロード)

(ないとう・ゆうこ 愛知教育大学大学院修士課程、愛知県立常滑高校教諭)

〈参考資料〉

【参考資料】 世界史試験問題の日本語訳 (ペーパー1, 2, 3)

【資料1】 ペーパー1 の問題内容

1. 文明と川の関係について、不適切なものはどれか。
A. 文化の中心 B. 中継貿易 C. 早期文明の中心 D. 計画的な港市の組織化
2. 黄河文明の商 Shang 王朝の統治期の社会における次の資料に見られる信仰は何か。
(資料) 「国民と王国の繁栄は命令する王に依存している」
A. 神の影響 B. 受動的、能動的な権力 C. 神からの権限移譲 D. 自然と人間
3. 人類最初の文明における乗馬技術の発明品を表す以下の写真 (ウマと馬具の絵; 省略) についてこの技術が現れた文明はどれか。
A. ローマ B. インド C. 中国 D. ギリシア
4. (ローマの水道橋の) 次の写真について、機能を答えよ。
A. アーチのドア B. 防衛用の堤防 C. 貿易のための道路 D. 水を供給する水路
5. 次の宣言は誰が行ったか。
(資料) 小さな国々を統一する インドで最初の帝国
A. アショーカ王 B. ビンピサール王 C. スールヤヴァルマン2世 D. チャンドラグプタマウルヤ
6. 初期の東南アジアの王権について次の表に述べられた王国のそれぞれの形状に分かれる原則は何か。
(資料は農業王国と海洋王国の二つの形状について)
I. 王国の能力 II. 地理学的な位置 III. 社会経済 IV. 統一機構
A. IとII B. IとIV C. IIとIII D. IIIとIV
7. スマトラのクティにある石碑は何か。
A. 王の命令 B. 仏教 C. 諸規則 D. 王の家系
8. ジャーヒリアの時代とイスラームの時代について、次に述べられた両者を分割する事件はどれか。

ジャーヒリアの時代	イスラームの時代
-----------	----------

↓
(分割する事件)

A. Al-Basus 戦争(494-534)	B. surah Al-Alaq の最初の啓示 (コーラン 96 凝血の章)
C. カーバの黒石 Batu Hajar Aswad	D. Abrahah の象軍の襲撃 (コーラン 105 章)
9. ムハンマドに用いられた戦略は、メッカのクライシュ族のアラブ人に受け入れられた。その戦略を次の I～IV から二つ選べ。
I. ムハンマドはイスラームの人々に、ハブシャへの移動を求めた
II. イスラームの人々の全集団がタイフの方へ移動する
III. ムハンマドが友人たちとハブシャに移動する
IV. ムハンマドがアラブの許可の後にメディナに移住する
A. IとII B. IとIV C. IIとIII D. IIIとIV
10. 予言者ムハンマドがウマイルをメディナへ送ったことに関するムハンマドの任務は何か。
A. イスラームを拡大する B. 対立を和解させる
C. 行政権を得る D. イスラーム社会の生活を視察する
11. メディナのイスラーム教徒が樹下の誓い (フダイビヤの和議) を行った原因となる出来事は何か。
A. ウスマン・ビン・アフファンの死亡のうわさ B. クライシュ族を協定に従わせることの失敗
C. クライシュ族の戦争捕虜が殺されたこと D. スハイル・ビン・アムルの逮捕

12. 下の図表はコルドバの後ウマイヤ朝時代のある社会共同体に関連している。この説明に合致する X は何か。

☒ X ☐ キリスト教信仰する地元民 ☐ イスラーム文化の実行 ☐ アラビア語を話すことができる

A. マワーリー B. ジンミー C. ムデハル D. モサラベ

13. 次のアッバース朝の有名な人物の貢献は何か。

☐ アブー・サラマー・アル・ヒラル

☐ アブー・ムスリム・アル・ホラサン

A. 知識人の中心となった
C. 行政システムを安定化させた

B. 軍事活動を指導した
D. 貿易活動を強化した

14. オスマン・トルコ帝国の社会はイスラーム教を維持するために、ヨーロッパのキリスト教集団の関心をどのようにして引きつけたか。

A. 個人の業績を強調する
C. 団結の精神を広める

B. 地位の類似性を強調する
D. 親族関係の権利を重視する

15. アチェのスルタン・イスカンダル・ムダ・マフコタ・アラムのとった措置に関する次の宣言について、王がそのような行動をとった目的は何か。

(資料) 北スマトラのいくつかの地域を保護下に置くマレーの国々を征服する

A. 統治権の拡大
C. キリスト教の膨張を防ぐ

B. マレーの島々の経済
D. アチェをセランビ・マッカ（メッカの出店）のようにさせる

16. ジャワにイスラームを布教した Wali Songo（ジャワにイスラームを伝えた 9 人のスーフィー）によって重視された事柄は何か。

I. 怠惰な生活態度を改めさせる II. 浪費をやめさせる III. 外国による植民地支配に反対する
IV. イスラームの戒律の知識を重視する

A. I と II B. I と IV C. II と III D. III と IV

17. マラッカ王国の時代に教育分野において貢献した次の人物について、マラッカのスルタンにこの人物たちが果たした役割は何か。

☐ マウラナ・アブ・バクル

☐ マウラナ・サダー・ジャハン

A. イスラームの知識
C. 王に対する儀式を決定する

B. 統治者への助言
D. 外交使節団を導く

18. 次の資料はマレー社会の生活の基準に関連することわざである。これらのことわざの意味するところは何か。

(資料) ☐ キンマのように一つにまとめる

☐ レモンガラスのように繋る

☐ 鉄のように愚直だ

A. 寛容であること B. 団結すること C. 不屈の精神 D. 感謝の気持ち

19. Diat はペルバティという（スマトラのミナンカバウの）先住民の習慣のうちの罰の形状のひとつである。この罰とは何か。

A. 山羊を屠殺する
C. 使者の奴隷になる

B. 血には血で報復する
D. 財産の損失の代理をする

20. 中世においてヨーロッパの貴族が果たした役割は何か。

A. 農民に保護を与える
C. キリスト教会の組織を支配する

B. 職人的芸術家のパトロンになる
D. 封建制度の支配者を務める

21. ルネサンス期のイタリアのパトロンはどのような点に貢献したか。

A. 医学校を建築する
C. 課税制度を安定化する

B. 芸術家階級の費用を負担する
D. 法律を執行する

22. 次の表はマレーの土地にやってきたイギリスの使節団についてである。これらの会社の役割は何か。

(表) ☐ ガスリー

☐ サイム・ダービー

☐ ハリソンズアンドクロスフィールド

A. 天然ゴム農園を始めた
C. 金融組織を設立した

B. 鉱業を行った
D. 海運会社を組織した

23. 以下の年表は 1881 年の K.L.の火事と 1892 年のイポーでの火事がマレーの社会経済に及ぼした影響に関連する。この事件はマレーの社会経済にどのような関連があったか。

A. 新しい港町の開設
B. 病院数の増加
C. 通信システムの発展
D. 病院サービスの発展

24. 軍事の分野における日本の勝利と関連する次の年表の事件について、日本の勝利の東南アジアに対する影響は何か。

(年表) 1895 年の中国 (日清戦争) と 1905 年のロシア (日露戦争)

A. 防衛システムの強化
B. 統治地域の拡大
C. ナショナリズム精神の出現
D. 地元統治者の力の安定

25. 次の X はビルマにおける最初の段階のナショナリズム組織である。X は何か。

X 1906 年に設立された 鞭の争点を利用する

A. 反分離同盟
B. ベリア・ブグダ協会 (青年仏教徒連盟)
C. ドンマアシアオン党 (タキン党)
D. 反ファシスト国民解放同盟

26. 東南アジアにおける西洋諸国の植民地では官僚制度が実施された。その特徴は何か。

A. 君主制統治の恒久化
B. 郡の高官の任命
C. 事務局を通じた行政事務
D. 貢物制度による身分証明

27. マレーの地におけるイギリスへの抵抗活動に立ち上がった人物に関連する下の表について、彼らの抵抗はなぜ失敗したのか。

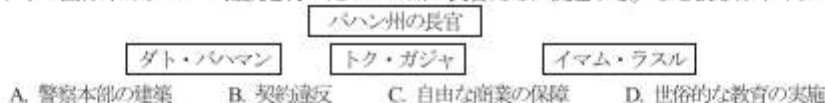
(表)	(国)	(人物)
	クランタン	トク・ジャングット
	トレングヌ	ハジ・アブドゥル・ラーマン・リムボン
A. 外部からの援助が遮断された		B. 財源の不足
C. 彼らの熱心な支持者が分裂していった		D. イギリスが官廷の影響を利用した

28. 下の表は 19 世紀末のマレーの地での植民地時代の教育システムについてである。マレーの地におけるナショナリズムの高揚に対して教育システムはどんな貢献をしたか。

(表) 英語による教育システム マレー語の学校

A. 地元の指導者層を輩出した
B. 新聞や雑誌の出版を促進した
C. 識字率を増加させた
D. 学校に行くマレー人数の増加

29. 下の図はイギリスへの抵抗を行ったパハン州の長官たちに関連する。なぜ彼らはイギリスに抵抗したのか。



30. 次の二名の人物は 19 世紀のヨーロッパにおいてそれぞれの国を統一させることに成功した。二人の類似点は何か。

カミーロ・ベンゾ・ディ・カヴール伯爵 オットー・エドゥアルト・フォン・ビスマルク

A. 肌の色の違いを無視した
B. 多民族社会を統一した
C. 実益政策の方法をとった
D. 広大な帝国を構築した

31. スグリ・スンビランでのスマトラのパルパティの伝統的な行政制度における委員会の役割は何か。

A. 法律を制定する
B. 宗教的指導者になる
C. 威厳ある伝統を見張る
D. 国の政策を策定する

32. 次の宣言 (筆者により省略) はマレーの王国の行政におけるジョホールとトレングヌの法律に関するものである。内容の類似点は何か。

I. 王が顧問制度を通じて選ばれる II. 土地税が徴収される III. 公式の宗教としてのイスラーム
IV. 王はマレー民族に属さなければならない

A. I と II B. I と IV C. II と III D. III と IV

33. イギリスがマラヤ連邦を設立した目的は何か。
- A. 忠誠を集める
B. 軍の部隊を強化する
C. 行政を援助する
D. 共産主義の脅威を取り去る
34. 1948 年のマラヤ連邦憲法の中で民主主義を手に入れる権利を持っているのはどのような人々か。
- A. 移民集団
B. マレーの王の国民
C. マレーの土地で生まれた者
D. 地元の人と結婚した者
35. 1951 年にイギリスが会員制度を導入したのはなぜか。
- A. 新憲法を起草する
B. 国民の条件を討論する
C. 王国の独立を地元の住民に教える
D. 大衆の選択を実行する
36. マレーの地の独立のために 1956 年にリード委員会が設立された。この委員会の任務は何か。
- A. 憲法を起草する
B. 新しい行政官僚を任命する
C. 総選挙の日程を提案する
D. エスニック集団の交渉にあたる
37. 下の表は 1963 年のマレーシアとインドネシアの間での緊張関係を説明している。次の出来事でインドネシアがとった措置は何か。
- (表) 日付: 1963 年 1 月 20 日
出来事: マレーシアに対するインドネシアの対決
運動: 「打倒マレーシア」
- I. 領空侵犯 II. 公使の抗議を送る III. 反乱・暴動の進行 IV. 漁民の船への攻撃
- A. I と II
B. I と IV
C. II と III
D. III と IV
38. 「20 項目の合意」はマレーシア憲法の統治下に入れてもらうために、サバとサラワクの同盟党が要請したものである。このことが意味することは何か。
- A. 独立を加速する
B. 国民の権利を隠す
C. インドネシアの影響を防ぐ
D. イギリスの影響力を減らす
39. 社会主義戦線は 1961 年の 4 月にシンガポールでフォン・リムの選挙に勝利した。この勝利はなぜ、リー・クアンユーをためらわせたのか。
- A. 強固なイギリスの強さ
B. 独立の過程が脅かされる
C. 経済発展が妨害される
D. 民族の団結が台無しになる
40. コッポルド委員会はマレーシアの形成を成功させる上で、どんな役割を果たしたか。
- A. シンガポールが同盟に参加するように説得する
B. 与党連合の組織化を奨励する
C. 西洋の官僚システムを実施する
D. サバとサラワクの国民の意見を調査する

【資料 2】 ペーパー 2 の問題内容

1. 下の写真は古代エジプト文明に関連したものである。
- (資料) エジプトの地図、パピルス草、神聖文字の絵
- (a) 上の地図上の、X の印のある河は何という名前か。
- (b) なぜ X の河の流域の地域が初期人類文明の集住地になったのか。
- (c) 古代エジプト社会の創設者は、その後文字や紙を産出するに至った。この進歩は教育の発展をもたらした。なぜ古代エジプト王国は教育分野を重視したのか。
- (d) もしも教育の充実を国民が享受することがなければ、その国に対してどのような影響があるか。
2. 以下の写真はマレーの土地の統治者とマレー社会にイスラームが到来したことを示す。
- (資料) 王族の結婚式の写真、ベールを被った人びと、食事風景
- (a) ウマイヤ朝の影響を受けた王の任命と即位式の習慣が始まった時代の良き慣習を説明せよ。
- (b) イスラームの到来はマレー社会で行われている生活行為に大きな影響を与えている。以下の点を説明せよ。
- i 統治者の集団について
- ii 伝統的なマレー社会

- (c) 本当に価値あることを毎日の生活において実施することが十分にできない事例が、なぜ現在の社会の一部には存在するのか。あなたの意見を述べよ。

3. 次の図は東南アジアにナショナリズムの思想が出現したことに関連している。



- (a) XとYは何か。
 (b) 東南アジアにおけるナショナリズムの出現の背景となった外部の影響を二つ説明せよ。
 (c) 知識人集団の登場によって、東南アジアにおけるナショナリズムの動きが始まった。このことを説明せよ。
 (d) ナショナリズムの精神がマレーシアの国民の一人一人の中に存在することがなぜ必要だと思うか。あなたの考えを述べよ。
4. 下の資料は国民の建設において原則的な特徴の一つと関係している。(資料は省略)
- (a) 国家と国民の形成において原則的な特徴を二つ説明せよ。
 (b) 次の法律を紹介したのであれ。
 i ジョホール王国の法律
 ii トレンガヌ王国の法律
 (c) われわれの国にとって憲法はなぜ重要か。理由を述べよ。
 (d) より素晴らしい国家の統治と行政制度を策定するために、あなたの提案を示せ。

——この部分からは(5～12のうちから)どれか3つの問題に答えよ——

5. 教育は文明の果実としての発展内容の基礎であり柱である。
- (a) ギリシア文明に関して教育の分野を明確に説明せよ。
 (b) ローマ文明の教育の特徴を説明せよ。
 (c) i なぜ全世界の国々は教育分野の発展に力をそそいできたのかを説明せよ。
 ii 生徒の達成度を検査に基づいて評価する方法は存在するか。あなたの意見とその根拠を示せ。
6. 幼少期からムハンマドは、生計を立て商売の方法を学ぶため努力するようにしつけられていた。神の使徒になるよう命じられた後で、ムハンマドはイスラームの教えを一生懸命に説いたけれども、様々な妨害に直面した。
- (a) ムハンマドの、商売の分野における経験を説明せよ。
 (b) すべての側面において当然見本とされる理想の人物としてムハンマドの個性を明らかにせよ。
 (c) i ムハンマドは卓越した個性を持っていたが、アラブ社会の大部分は彼によって教えがもたらされることを許可しなかった。なぜこのような状態が起こったのか。
 ii ムハンマド個人の業績が、どのように輝かしいマレーシアの社会組織の参考になるか。
7. アッパース革命の後、西暦750年に樹立されたアッパース朝は、ウマイヤ朝を倒すことに成功した。
- (a) アッパース朝の形成の過程を明らかにせよ。
 (b) 知識の分野におけるアッパース朝の貢献を明らかにせよ。
 (c) i イスラーム諸国の学問の素晴らしさは、過去のイスラーム王朝の時代の栄光と比較しても現在ますます評価されている。この状態はなぜ起こったか。
 ii 人間の文明の歴史におけるイスラーム諸王朝の栄光を回復するためのあなたの提案を述べよ。
8. 19世紀以来私たちの国における外国人労働者の到来は、多くの民族社会をつくりあげた。
- (a) なぜ19世紀に私たちの国は外国人労働者が集まる場所となったのか。
 (b) イギリスによる植民地支配の時代の、複合社会の特徴を明らかにせよ。
 (c) i 複合民族社会を有することは私たちの国の利益になるか。
 ii 力強く団結した複合民族社会をつくるための提案をせよ。
9. マレー人の目標の下で団結したナショナリズムの高揚は、植民地支配の圧力から我々自身を解放した。
- (a) マレーの地のナショナリズムを促進した諸要因を明らかにせよ。
 (b) 現在でも植民地支配は様々な方法において起きる可能性がある。あなたはこの点について賛成すると考えるか。論述せよ。
 (c) 現代の新しい植民地支配の様式に立ち向かうためにはどうしたらよいのか。提案せよ。

10. リード委員会は1956年3月に、独立マラヤ連邦の憲法を討論するために組織された。
- (a) わが国の憲法の起草において、この委員会を準備する役員が指名されたことについての問題点を答えよ。
 - (b) 1957年のマラヤ連邦協定の重要な問題点を明らかにせよ。
 - (c) i なぜ1957年に独立した憲法の諸原則が、国の発展の歴史とマレーシア国民において、重要だと考えられているのか論評せよ。
 - ii 国の独立を求めるトゥンク・アブドゥル・ラーマンのアプローチは聡明な措置であった。あなたの意見とその根拠を述べよ。
11. 次の写真は第二次世界大戦の後、イギリスにサラワクを譲渡することへの反対運動に関連している。
- (a) なぜ1949年にイギリスへサラワクを譲渡することへの反対運動が起こったのか。
 - (b) サラワクの政治政党の反対闘争がその結果として、サー・ダンカン・ステュアートの殺害に至ったことを分析せよ。
 - (c) i もしもあなたが、その時に地元の住民だったとしたら、譲渡反対のデモンストレーションに参加するか。
 - ii ロスリー・ドビーのサー・ダンカン・ステュアート総督殺害は当然のことであるか。あなたの視点を述べよ。
12. リード委員会は、独立したマレーの連邦憲法の起草の検討を行うために1956年3月に組織された。
- (a) わが国の憲法の起草においてこの委員会のための手引き書が発生させた問題点を明確にせよ。
 - (b) 1957年マレーの地の連邦協定の重要な論点を明確にせよ。
 - (c) i 1957年の独立の憲法の諸原則が、国の発展の歴史とマレーシア国民において重要と見なされたのはなぜか。
 - ii トゥンク・アブドゥル・ラーマンのアプローチは、国の独立を手に入れるための聡明な措置であった。これに対するあなたの意見とその根拠を述べよ。

【資料3】 ペーパー3の問題内容

1～9の問題に対し、解答用紙にそれぞれ論述型で解答せよ。質問は以下の通り。

1. マレーシアにおけるイスラームの歩みの背景。
2. 政治に対するイスラームの影響。 (a) 行政 (b) 立法
3. 社会・文化に対するイスラームの影響。 (a) 教育 (b) 言語と文学 (c) 生活スタイル
4. 経済に対するイスラームの影響。 (a) 貿易 (b) 課税
5. マレーシアの偉大さに関して、イスラームの価値観を実施することで成功した政策。
6. イスラームの価値観である善行が多民族社会の中で国をどのように平和にさせるか。
7. マレーシアにおいて力強く団結した社会に存在する障害と、それを克服する手段。
8. 研究されたテーマの根拠と、そこから得られる教訓。
9. 以下のすでに話し合われた内容のすべての結論をまとめよ。
 - ・得られた知識
 - ・自分と民族と国にとっての教訓
 - ・輝かしく卓越した民族とマレーシア国家を作り上げるための今後の課題

【エッセイ】

知識探訪—— 多民族社会マレーシアの横顔を読む

マレーシアは、世界のさまざまなものを内に取り入れ、新しいアイデアを常に世界に向けて発信している社会です。

植民地化やそれ以前の経験から民族混成社会として形成されたマレーシアは、世界遺産として認められるほどの民族的多彩さを持つとともに、イスラム経済の分野で世界を先導しようとする積極性も備えています。国内では、ブミプトラ政策によって安定と成長をはかる一方で、教育を通じて人材育成の努力を重ねてきました。多数派であるマレー人はイスラム教を日々の暮らしの参照点としていますが、主要三民族のほかに多彩な民族世界があり、また、近隣諸国出身の外国人も成長と多様化をもたらす存在としてマレーシア社会に欠かせない存在です。このように多種多様な人々が集まるマレーシアでは、いろいろなメディアを利用して意見の調整がはかられてきました。

「知識探訪・ 多民族社会マレーシアの横顔を読む」では、マレーシアの日常生活で見られるものごとを切り口に、多民族社会マレーシアの横顔を紹介します。

■歴史と社会・ 混成社会のかたちと成り立ち

めぐり、めぐって……マレー王権の伝統と現代 (富沢寿勇)

■政治と経済・ ブミプトラ政策という挑戦

マレーシア・イスラム党 (PAS) 党大会と野党連合解体 (塩崎悠輝)

選挙とハッド刑と政界再編 (中村正志)

サラワク州議会選にみる地元政党の圧倒的存在感 (山本博之)

マレーシア自動車産業の行方 (穴沢眞)

ペトロナス・ 国家を支える巨人 (辻修次)

■イスラムと宗教・ 日々の暮らしを支える参照点

アラビア半島と東南アジアの人的つながり (新井和広)

<二元法制> に見る多民族社会の共生 (光成歩)

マレーシア・ムスリムの子どもとイスラーム学習 (久志本裕子)

マレーシアのヒンドゥー教寺院建設をめぐる問題 (古賀万由里)

■文化とメディア・ 民族混成社会に公共圏を作る

マレー舞踊の魅力と特徴 (新井卓治)

香り立つハイブリッドなマレー半島の食文化 (櫻田涼子)

演劇で描かれる多民族国家の姿 (滝口健)

■教育と研究・ 国際化と競争で人材育成

マレーシアの医療ツーリズム (小野真由美)

裾野広がる高等教育と PTPTN ローン問題 (田中李歩)

■民族―「三民族」では語りきれない多彩な民族世界

オラン・アスリの川筋ナビゲーション (河合文)

■外国人・ マレーシアに成長と多様化をもたらすもの

中国が造り出すマレーシアの新領土―「フォレスト・シティ」(金子芳樹)

難民をめぐる過去の遺産と新たな試み (篠崎香織)

■近隣諸国・ 近しき仲にも垣を結え

リー・クアンユーとシンガポール、そしてマレーシア (黄蘊)

シンガポールのムスリム女性にとってのトゥドゥン (市岡卓)

2015 年末の ASEAN 経済共同体の実現 (清水一史)

南シナ海問題と米中対峙時代のマレーシア外交 (鈴木絢女)

■日本との関係

「昭南島」で描かれたマンガの中のマレー半島 (松岡昌和)

戦争の記憶とマレーシア (渡辺洋介)

このコラムは、JAMS の協力による『The Daily NNA マレーシア版』の月刊コラム「知識探訪―多民族社会の横顔を読む」(2015 年 3 月～2017 年 2 月掲載分)を再掲したものです。再掲にあたり表現を一部変更し、写真や図表は割愛しました。執筆者の所属先は原稿発表時のものです(原稿発表日は本文の末尾参照)。過去の記事は JAMS ウェブサイトで閲覧できます。

めぐり、めぐって……マレー王権の伝統と現代

富沢寿勇

現マレーシア国王は 2015 年 12 月で任期 5 年の満期を迎える。周知の通り同国王制度は 1957 年の独立以降に創出されたものである。それは当時のマラヤ連邦を構成したマレー半島 11 州のうち、伝統的支配者を擁する 9 州の統治者たちの互選で国王が選出され、しかも 5 年の任期が定められているという、世界でも稀有な制度である。この国王を選挙で選出する制度は、ヌグリスンビラン州の伝統的な王を地方首長たちが合議で選出する仕組みから、また、国王が輪番制（ローテーション）で交替する仕組みは、ペラ州のスルタンを同王家の複数の分岐間の交替で出す制度から、それぞれ着想されたものといわれる。

特に被治者層の合議というボトムアップで王が選出されるヌグリスンビランは、民主社会における王制の伝統モデルとして近代的評価を得たが、それは統治者が他州ではスルタンなどの称号で呼ばれたのと異なり、ヤンディプルトゥアン・ブサル（「統治者となされし者」）の称号で言及されてきた事実にも反映している。

国王制度創出の際にもこれをそのまま国王の称号に採用しようという議論もあり、最終的にヤンディプルトゥアン・アゴンという称号で落ち着いたが、発想の源はやはりヌグリスンビランにあった。また初代国王にヌグリスンビラン王が就任したこともあり、同州の王のかぶり物の様式「デンダム・タッ・スダー（果てしなきあこがれ）」が、その後の歴代国王のかぶりもの（デンコロック）として定着することになった。ちなみにこの様式は同州のムハンマド王（在位 1888～1933）の時代に創出されたものである。その王子で初代国王となったアブドゥルラーマンの肖像はマレーシア紙幣に一律に印刷されており、国王と国家を代表するシンボルとなった。

ヌグリスンビラン王が初代マレーシア国王になったのは歴史的偶然も作用した。国王選出に際しては各州統治者の就任年次に従って国王候補の順位リストが作られ、筆頭候補が互選投票で過半数の承認を得れば決まるといった仕組みである。初代国王選出では、第一候

補ジョーホルのスルタンが高齢と健康上の理由で辞退し、第二候補パハンのスルタンも辞退したため、最終的にヌグリスンビラン出身の初代国王選出に至ったというのが真相のようである。

初代国王はこのようにやや不安定な選出となったが、その後、第 9 代国王（在位 1989～94、ペラ州）で 9 州の各統治者の国王就任が一巡し、第 10 代国王（在位 1994～99、ヌグリスンビラン州）から二巡目に入ったが、現在の第 14 代国王まで、奇しくも一巡目と同じ順序で、結果として規則的に国王が交替している。

国王制度は上述の通り近年の創出だが、毎回の国王即位式の報道ではマレー王権の伝統慣習を踏襲していることが強調される。しかし、よく見ると同儀礼も微細に変化している。即位式の中心的役割を果たすダトゥッ・パドゥカ・マハラジャレラの儀礼所作は、第 9 代国王までは、臣下が王の前で両手を合わせる合掌の宮廷伝統を反復していたが、第 10 代国王以降は、宮廷の儀礼言語は維持しつつも合掌の所作は廃止され、会釈のみの簡略な形式になった。これは 1990～93 年前後に展開した国王・スルタンの権限縮小を求める連邦政府の姿勢が儀礼上の変化に反映した部分が大きいと解釈できる。この変化はまさに一巡目と二巡目の歴史的区切りに対応して起きている。

クダ州出身で 88 歳の現国王は第 5 代（1970～75）と第 14 代（2011～現在）の二度にわたり国王を務めた史上初の事例として当初から話題になった。同一人物であるがゆえに、自らが輪番制の原則を国民にわかりやすく具現することにもなった。また一昨年には歴代国王の国家への貢献に敬意を表し、クアラルンプールの 9 つの主要道路名が、現国王の初回の国王就任以降に満期を務めた歴代国王の名前に改称され物議を醸したのも印象的であった。9 という数字が常に不思議な力をもって人々を動かしているかのようでもある。[2016. 3. 1]

（とみざわ・ひさお 静岡県立大学）

マレーシア・イスラム党 (PAS) 党大会と野党連合解体

塩崎悠輝

日本人がマレーシアで長年暮らしていたとしてもポンドックという施設に立ち入ることは稀であろう。ポンドックというのはイスラームについて学ぶ施設であるが、学校というよりも、老若男女のムスリム (イスラーム教徒) が、多くは住み込みで、期間もバラバラで、ともに生活しながら学ぶ共同体である。学ぶ者はポンドックの主催者であるトゥ・グルと呼ばれるイスラーム学者に弟子入りすることになる。

マレー半島ではポンドックは 20 世紀前半に最盛期を迎え、特にクランタン、トレングス、クダーなどに数多く見られたが、その後、政府による近代学校制度の整備などにより、現在では伝統的なポンドックはほとんど姿を消した。マレーシアの野党の一角を占めるマレーシア・イスラム党 (PAS) の党組織は、創立以来ポンドックのトゥ・グルたちやその後裔のイスラーム学者たち (ウラマー) によって担われてきた。

マレーシアの政権を担当し続けてきた統一マレー人国民組織 (UMNO) は、さまざまなマレー人団体の連合体として 1946 年に設立された。UMNO は当初ポンドックやウラマーも組織に取り込もうとしたが決裂し、56 年の総選挙に際して PAS は独自の政党として政党登録した。以後、マレー人の全体的な支持を得ることで安定した政権を確立したい UMNO にとって PAS は最大の障害であり続けてきた。一方で PAS は党組織を拡大し続け、現在では党員 100 万人と称し、マレーシアの政党でも最大の動員力を有する。

ポンドックのトゥ・グルたちは政治に参入する目標として、「イスラームの教義 (シャリーア) に基づいたイスラーム国家」ということを主張し続けてきたが、その具体像はあいまいであり、国政レベルの政策、例えば経済政策や非ムスリムへの対応についても関心が薄かった。そのため PAS ではウラマーは、いわば党のオーナーのような意識を持ちつつ

も、高等教育を受けた専門知識を持つ人材を迎え入れて選挙の候補者として擁立するということが当初から見られた。特に 70 年代にアンワル・イブラヒム (後の副首相) らのイスラーム系学生運動が活発化すると、その経験者を数多く迎え入れた。

2015 年 6 月に開催された PAS の年次党大会では、野党連合である人民連盟を構成する 3 党の中の民主行動党 (DAP) との連合を断つ、という決議が党内外で物議を醸した。党大会で選出された新指導部はほとんどがウラマーであった。これまで野党連合を支持してきたのはイスラーム系学生運動出身者が多くアンワル元副首相の支持者が多いが、新指導部では選出されなかった。ウラマーの一部は党大会前から野党連合からの離脱を画策しており、その一環としてハッド刑 (シャリーアで量刑を定められた刑法、複数形はフドゥード) の施行のための法案を下院に提出した。

窃盗犯の手首切断や婚外性交渉を行った既婚者への石打による処刑で知られるハッドは、サウディアラビアやイラン、ターリバーン、近年ではイラクとシリアでイスラーム国を名乗って活動する勢力が施行していることに見られるように、世界中のイスラーム運動が共通して掲げる政策である。PAS もまたハッド刑の施行を従来から主張し続けてきたが、最近改めて法案として提出したのは、DAP との決裂を促すための政争の一手段という側面があったであろう。

ウラマーの中でも、長年 PAS の最高指導者を務めクランタン州の首席大臣でもあったニック・アブドゥル・アジズ・ニック・マットは、野党連合による政権奪取を通してイスラーム国家を実現するという路線を優先していたが、15 年初めに死去した。その後、PAS 総裁のアブドゥル・ハディ・アワンらによる DAP との決裂を促す画策が活発化した。ウラマーの多くは、野党連合よりも UMNO と

の協力の方にハード刑施行を含むイスラーム国家実現の可能性が高いと考えているとみられる。党大会後、野党連合の解体、PAS 党内の分裂といった新展開が起きると見られたが、いずれも実際は未確定であり、今後もし

ばらくは PAS 党内や野党間での画策が繰り広げられると見られる。[2015. 2. 24]

(しおざき・ゆうき 日本学術振興会特別
研究員)

選挙とハッド刑と政界再編

中村正志

2017年の早い時期に総選挙が行われるのでは、という噂がしばらく前から出回っている。下院の任期は18年6月までだから時期尚早にも思えるが、近々解散総選挙になると予想する人が少なくないようだ。

早期解散説の背景には、いま選挙になれば与党が有利との見方がある。その根拠は、6月におこなわれた下院の補欠選挙だ。この選挙は与党・統一マレー人国民組織（UMNO）の議員2人の事故死にともない実施されたものだが、13年の総選挙ではどちらも僅差での勝利だったため、与党にとっては必ずしも楽観視できる状況ではなかった。ただし、今回は実質的にUMNO候補と野党・汎マレーシア・イスラーム党（PAS）候補の一騎打ちだったのに対し、今回は15年9月に発足した国民信託党（アmana）が加わり、二つの選挙区のどちらもUMNOとPAS、アmanaの三つ巴の戦いになった。この違いがUMNOにきわめて有利に働いた。アmanaは、15年6月の党役員選挙で敗れたPASの進歩派幹部が結成した政党である。PASが分裂したために、今回の選挙では野党支持票が二手に割れた。その結果、UMNO自身の得票はさほど伸びなかったにもかかわらず、同党候補は2番手候補に大差をつけて勝利できた。マレーシアの選挙制度は小選挙区制のため、野党支持票が割れれば与党が俄然有利になるのだ。

野党はPASが分裂しただけでなく、野党連合・人民連盟の枠組みが15年6月に崩壊している。人民連盟は、08年選挙で躍進した民主行動党（DAP）と人民公正党（PKR）、PASが旗揚げしたもので、以来、マレーシアの政治は与党連合である国民戦線と人民連盟との二大政党連合制を軸に展開してきた。この枠組みが崩れた原因は、ハッド刑（イスラーム刑法）をめぐるPASとDAPの対立である。

ハッド刑の実施はPASにとって結党以来の目標である一方、華人が主体のDAPはそれに強く反対してきた。08年選挙から13年選挙までの間は、両者は汚職撲滅や民主化な

ど利害の一致する争点を前面に打ち出して共闘した。ところが、14年4月にブルネイでハッド刑が施行されると、PASが主導するクランタン州政府がハッド刑施行に向けて動き出す。これがDAPとの対立を招くとともに、PASの内部に野党連携を重視する進歩派とウラマー（宗教指導者）派との軋轢をもたらした。

PASはDAPとの対立を深める一方で、UMNOに接近する。PASがハッド刑施行にむけた法的な準備を進めるのを、UMNOは裏で支えてきた。それがはっきり表面化したのが、16年5月の下院での審議である。このとき、ハッド刑施行に向けた布石ともいわれる法案をPASのハディ・アワン総裁が議員立法案として発議した。議員立法案の優先度は低いため、同法案は討議されずに会期切れを迎えると見込まれていたが、政府は最終日に突然、この法案を討議すると決めた。結局、審議入りは実現しなかったが、同法案は17日に始まった会期での討議の対象になっている。

国民戦線では、UMNO以外の政党はハディの法案に強く反対しており、いまこれが討議に付せられれば与党側も混乱を避けられない。一方で、審議の先送りを繰り返すことになれば、PASはUMNOに裏切られたと考えるかもしれない。そうなればPASは、他の野党との選挙協力に再び転じ、政策面での合意には至らずとも水面下で野党間の候補者一本化には応じるかもしれない。それはUMNOにとって大きな痛手となる。つまりUMNOは、PASを落胆させることなくハディ法案に関する意思決定を先延ばしにするという課題に直面している。ハディ法案が今会期中に審議されるとすれば、それは来年度予算案可決後の11月23日ないし24日になる。そこでの政府・与党の対応が注目される。[2016.10.25]

（なかむら・まさし 日本貿易振興機構
アジア経済研究所）

サラワク州議会選にみる地元政党の圧倒的存在感

山本博之

2016 年 5 月 7 日に行われたサラワク州議会選挙では、連邦の与党連合・国民戦線 (BN) が、BN の中核政党でナジブ首相の出身母体である統一マレー人国民組織 (UMNO) による多数の応援を受け、定数 82 議席の 72 議席を占めて圧倒的勝利を収めた。半島部に基盤を置く野党・民主行動党 (DAP) は、サラワク州議会選挙で候補者を立て続けて 17 年目の 1996 年によりやく初当選を果たし、それから 15 年間で 12 議席まで増やしてきたが、この選挙で 7 議席に後退した。

この結果を大雑把に言えば BN (UMNO + 地元政党) と DAP が争って BN が勝ったという図式になるが、それをブミブトラ対華人のように民族別に見るだけでは中央対地方というサラワクの文脈を見逃してしまう。今回の選挙は BN ではなくサラワクの地元政党の勝利である。議席増だけでなく、以下に見るように「UMNO は要らない」と公言したことがサラワクの地元政党にとって一番の「勝利」だったのかもしれない。

マレーシアの選挙と言えば、街頭に無秩序に貼られる政党の旗や候補者のポスターが名物だ。地方では手描きのユニークな選挙ポスターも珍しくない。最近はソーシャルネットワークの発達もあって街頭の旗やポスターは減る傾向にあり、サラワク州クチンでも 2011 年の選挙から旗やポスターが減っているが、今回の選挙でも大きな道路が交わるラウンドアバウトには与野党の選挙ポスターがいくつか立ち並んでいた。

目立っていたのがサバ州を引き合いに出した選挙ポスターだ。「サラワクの自主権を守れ サバのようになるな」「サバの二の舞になるな DAP が躍進したら UMNO がサラワクに進出してくるぞ」などと書かれている。UMNO がサラワクに進出したら州の自主権が失われてしまうため、UMNO にサラワク進出の口実を与えないように DAP に議席を与えるなど訴えている。興味深いのは、州の

自主権を唱えて UMNO の進出を嫌うこの選挙ポスターを立てたのが BN だということだ。連邦レベルで UMNO と連立を組み、今回の選挙でも UMNO に多数の応援に来てもらっておきながら、「UMNO が来るぞ」を脅し文句に使っている。そして名指しされた隣のサバ州では、UMNO の地元幹部が、連邦政府からの支援が減るとサラワクのように地元政党だけになってしまい強権的な州首相が出てコントロールがきかなくなるぞと応じた。

一見するとサラワクとサバがけん制しあっているように見えるが、これは連邦政府から譲歩を引き出そうとする工夫の現れである。半島部では与野党の勢力が拮抗しており、BN にとって政権運営のためサバとサラワクの支持は欠かせない。サバもサラワクも州与党は BN だが、サバでは 1990 年の選挙で地元与党が BN と対決姿勢をとったため、UMNO がサバに進出してサバ BN を組織し、2003 年以降は UMNO がサバ BN の過半数を占めているのに対し、サラワクには UMNO が進出していないため、地元政党が構成するサラワク BN と半島部の BN が緩やかな連携関係にある。

UMNO の進出でサバは中央の影響下に入ったが、選挙の候補者選びや州の予算などを見ると中央の影響力は助言程度にとどまっており、逆に中央の UMNO にサバ BN を支援する必要が強まっている。サラワクは中央の UMNO から指示を受けないという意味では自主性が高いが、選挙や開発政策などで中央から必ず支援が得られるとは限らない。助言を受ける態度を取りつつ支援を引き出すのか、支援を当てにしないかわりに介入も受けないのか、単純に優劣を判断できるものではないが、サラワクは「サバのようにならないように」、サバは「サラワクのようにならないように」とそれぞれ理由をつけて連邦から譲歩を引き出そうとしている。[2016. 5. 24]

(やまもと・ひろゆき 京都大学)

マレーシア自動車産業の行方

穴沢 眞

クアラルンプールでの朝夕の渋滞を経験した人は多いと思う。公共交通機関が整備されてきているが、依然として充分とはいえない現状では自動車に頼らざるを得ない面がある。また、自動車を所有することはステータスでもあり、郊外や地方では不可欠な移動手段である以上、人々は自動車を購入し続けるだろう。3.7 人に 1 台の割合で乗用車を保有しているマレーシアは世界平均の 10 人に 1 台を大きく上回り、2 人に 1 台という先進国のレベルに近づきつつある。自動車の普及やモータリゼーションを経済発展の一つの指標とするならば、マレーシアは十分に豊かな国といえる。

一方で、人口 10 万人当たりの交通事故死者は 24.6 人と日本の 4.5 人を大きく上回り、世界の中でもワーストの部類に入る。高速道路や郊外の道路での運転を見ていると車間距離をほとんどとらず、猛スピードで運転する車をよく見かける。後部座席でシートベルトを着用していないことも高い死亡率の一因のようである。

1985 年のプロトン社「サガ」の発売以来、マレーシアの自動車市場は国民車により席巻されてきた。第一国民車メーカーであるプロトン社は 80 年代後半には市場の 6 割近くを占めたこともあった。その後、第 2 国民車メーカー、プロドゥア社の参入により、プロトン社の市場シェアは低下したが、両社の市場シェアの合計は 90 年代末から 2000 年代の初めまでに 8 割近くを占めていた。国民車がマレーシアのモータリゼーションを牽引したことは事実である。

このような状況に変化が見え始めたのが、アセアン自由貿易地域 (AFTA) のもとでの関税の軽減が始まる 2004 年頃からである。これに続き 2006 年の日本との EPA (経済連携協定) 締結などにより貿易自由化が浸透し、プロトン社の市場シェアが低下し、同年には

プロドゥア社に首位の座を明け渡した。そして、14 年には両社をあわせた市場シェアは 50% を切るに至っているが、特に、近年、プロトン社のシェアの低下が進んでいる。その一方で、トヨタ、ホンダ、日産といった日本メーカーのシェアが増加し、同年の 3 社合計の市場シェアはおおよそ 34% に達した。

通常、国民車メーカーといった場合、皆が思い浮かべるのはプロトン社とプロドゥア社であるが、様々な意味で関心を集めるのは長く政府が関わってきた第 1 国民車メーカーのプロトン社である。12 年にプロトン社の政府持ち株が DRB ハイコム社に売却され、同社は DRB ハイコム社のグループ企業となった。政府による直接のコントロールから外れたことにより、経営のフリーハンドは増えたが、自動車産業を取り巻く環境は厳しく、同社の再建の道のりは平坦ではない。そして同社の生みの親であるマハティール元首相が 14 年に同社の会長となり、その舵取りを任されることになった。新聞報道では外資系企業との資本提携も視野に入れているという。

同じ 14 年は新たな国家自動車政策 (NAP) が公表された年でもある。その中で、ハイブリッド車、電気自動車、そして高燃費車への優遇が再度明記された。一方で、20 年までに乗用車の国内生産を 125 万台と現在の 2 倍以上にし、そのうち 25 万台を輸出するなどの指標も初めて提示された。自動車価格の引き下げもあわせて謳われており、プロトン社、プロドゥア社は低価格のコンパクトカーを 14 年から市場に投入している。タイやインドネシアが急激に自動車の生産を伸ばし、特にタイは域内の輸出基地となっている。これまでの国民車中心の自動車政策も転換点を迎えてつつある。今後の動向から目が離せない。
[2015. 5. 26]

(あなざわ・まこと 小樽商科大学)

ペトロナス・ 国家を支える巨人

辻 修次

マレーシアで最も有名な建物といえば、KLCC のペトロナスツインタワーだろう。そして、あのタワーの 1 本に拠点を構えるのが、国営石油企業のペトロナスである。ペトロナスは、かつて政権を担ったマハティールにとって成長と貧困削減を達成するための切り札だった。また、現代のマレーシアにおいても国家の礎というべき存在である。

1981 年——。この年はマレーシアという若い国家にとって記念すべきものとなった。この年、以後 22 年の長きにわたり政権を担うマハティールが首相の座につき、そして、トレンガヌ州沖の油田・ガス田が稼働を始めた。以後、マレーシアはエネルギー資源国としての道を歩むことになる。国内の鉱床の権益に対し外国企業が支払うロイヤルティーや、政府が保有するペトロナス株の配当が財政の余力を生み、ブミプトラ政策を支える多岐にわたる補助金の原資となった。

また、ペトロナスは国内向けのガソリンの卸売を長年独占しており、ガソリンスタンドの経営の許認可を原則としてマレー人だけに与えた。こうして国内の随所に生まれたガソリンスタンドは、国産車プロトンの製造と対をなすように、モータリゼーションとマレー人の第二次・第三次産業への就労を推し進めた。また、マハティールは、マレーシアの原油・天然ガスのほとんどを輸入する日本・韓国との関係を、ルックイースト（東方政策）により一層親密化させていった。このように、マハティールの主な政策には何らかの形で常にエネルギー資源、そしてペトロナスの存在が見え隠れしている。

エネルギー資源は、マハティールの後継者たちにとっても政権の礎でありつつ、ときに

大きな悩みの種ともなってきた。中国の急速な成長に伴う資源高は、国庫を潤してはきたが、結果的に、2000 年代には歳入の 40%前後が何らかの形でペトロナスに関連するほど財政の資源依存度が高まった。他方、国内の鉱床は稼働開始から 30 年を経て、設備の老朽化などでパフォーマンスが低下し、ペトロナスは利益率の低下に苦しむようになった。かくして、ペトロナスと国家財政の共倒れという最悪の事態がささやかにはじめた。

しかし、こうした状況の下、やむを得ず取られる増税策や補助金の削減は、その都度、政権の人気に暗い影を落としてきた。また、15 年以降の資源安の局面では、ペトロナスの業績の低迷が政府に厳しい緊縮財政を迫ることになった。では、資源が高いほど政権が安定するかといえば、それも否である。穀類や飼料の国際相場はエネルギー資源の相場に連動しているので、資源高の局面ではガソリンと食料品の高騰が低所得層の生活を圧迫する。このため、資源高のピークの時期に政権の座にあった前首相のアブドゥラは、低所得層の間で日増しに強まる政府への反感に悩まされ、ついには政権の座を追われている。

資源の恩恵で、深刻な財政赤字や対外債務に悩まされず、強力な公共セクターを運営できたことは、マレーシアの強みであったことは間違いない。しかし、原油や天然ガスの国際相場に振り回される現代のマレーシアは、図らずも天然ゴムや錫の相場に一喜一憂した英領マラヤの脆さを引き継いでしまったように思われる。[2016. 8. 30]

(つじ・しゅうじ 元国際交流基金 KL
日本文化センター)

アラビア半島と東南アジアの人的つながり 宗教教育が結ぶ二つの地域

新井和広

14年ぶりにインドネシアでまとまった期間調査することができた。私が今まで注目してきたのは、東南アジアと中東間の人の交流、特に南アラビアのハドラマウト地方（現イエメン共和国）からマレーシア、インドネシア、シンガポールなどに移民したアラブの歴史である。移民自体は20世紀中頃に終わったが、現在でも両地域間の人の移動は続いている。その多くは親類の訪問だが、1990年代以降は宗教教育を介した新たな形のつながりが目立ってきた。今回の滞在では、特にその思いを強くした。

ハドラマウト地方には留学生を受け入れている宗教教育機関が複数あり、特に内陸部のタリームという町ではダールル・ムスタファー（預言者の家）、リバート・タリーム、アハカーフ大学シャリーア（イスラーム法）学部の3つの機関が集まっている。留学生とは言っても、その多くはマレーシア、シンガポール、インドネシアから来ているので、町を歩いていると見慣れた顔つきの若者たちによく出会う。最近はいエメンの治安が急激に悪化しているので勉学の途中で帰国する学生もいるが、ハドラマウト地方の治安はまだ安定しているという（筆者は2009年以降治安の問題からこの地域を訪れることができないため、雑誌記事や知人からの情報ではあるが）。

これらの学校を卒業した人々は、帰国後自前の勉強会を開いたり、地元の宗教学校で教鞭をとったりしている。そしてハドラマウトの教師が東南アジアを訪れる際には受け入れや各地での活動の手配をする。特に預言者が誕生したイスラーム暦3月前後には、イスラーム世界各地で盛大に預言者生誕祭が行われるので、ハドラマウトの宗教教師や名士の訪問が相次ぐ。

ハドラマウトからの招待客は、預言者生誕祭や聖者祭での祈祷を主導したり、演説を行ったりする。演説はアラビア語なので、元の弟

子が現地語、つまりインドネシア語やマレーシア語へ翻訳する。演説の内容は、預言者や聖者の人生を振り返り、参加者に正しいイスラームとしてそれらの人物を手本に行動すべきこと等、道徳的なものである。また、筆者が観察する限り、演説者が喫煙の禁止を訴えることもよくあった。逆に言えば、思想的に深い内容を話すわけではない。参加者の大多数は専門的な宗教教育を受けたわけではない地元の人々なので、演説もそれに合わせた内容なのだろう。ハドラマウトから招待されたのが有名な宗教者の場合、これらの行事のほか、地元の宗教教師との対話集会やセミナーも開催される。そこで感銘を受けた教師が自分の弟子をハドラマウトに送ると、その弟子がまた東南アジアに帰ってきて宗教学校で教えるという、自律的なルーチンが出来上がっていると筆者は考えている。

これらの活動が最も盛んに行われているのはインドネシア、特にジャワ島なので、マレーシアを含むその他の地域ではまだそんなに知られていないかもしれない。しかし、近年ではマレーシアでも預言者生誕祭や他の宗教行事におけるアラブの活動が盛んになってきているとのことなので、そのうち街で看板などを目にするようになるかもしれない。

東南アジアから中東への留学生と言うと、とかく過激な思想に影響を受けて帰ってくるというイメージがある。しかし、ハドラマウトでは、預言者や聖者の生誕祭を開催したり、先祖の墓参に重点を置いたりするなど、東南アジアでの信仰実践と親和的で、かついわゆる急進派から批判されている内容の教育が行われている。両地域のつながりが新たな形で盛んになっている理由は、そんなところにもあるのだろう。[2015.4.28]

（あらい・かずひろ 慶応義塾大学）

＜二元法制＞に見る多民族社会の共生

光成 歩

マレーシアでは、ムスリム（イスラム教徒）のためにイスラム家族法、非ムスリムのために世俗の家族法が設けられている。ムスリム同士の結婚や離婚を扱う、いわゆる「家庭裁判所」機能を持つのが、シャリーア（イスラム法）裁判所である。筆者は 2011 年のマレーシア留学中に、このシャリーア裁判所で係争の傍聴をしていた時期があり、その手続きのあまりの簡潔さに驚いた。それまで手にしたイスラム法廷に関する研究書は、法規範にはまり切らない夫婦の揉め事を通して、地域のイスラム実践の特徴を分析したものがほとんどだったのだ。対して、マレーシアのシャリーア裁判所で見た離婚事案の多くは、大変すっきりとしたプロセスのもとで進んでいた。

離婚時案に占める割合が最も多い夫による離婚宣言の認定は、次のように進む。裁判官は、いつ、どこで、どのような状況で、またどのような表現と手段で、夫が離婚宣言をしたのか、夫婦双方から聴取する。裁判官は、夫婦間の不和の元凶や経緯については減多に尋ねず、当事者が捲し立てても、制止する。離婚宣言の認定以外の離婚事由でも、重視されるのは離婚の要件が満たされるかどうかで、不和の原因には踏み込まないのが常だ。日本における調停と裁判の区別同様、マレーシアのシャリーア裁判所は調停を切り離した、フォーマルな場である。

シャリーア裁判所のこのような性格づけは、1980 年代に州ごとに進められた、イスラム法制改革以来のものである。この改革の結果、以前には調停と準司法的な機能を併せ持っていたイスラム法廷の機能を分化し、司法機能に絞った機関としてシャリーア裁判所が設置された。このとき、近代法から手続き法が取り入れられ、シャリーア裁判所は詳細かつ定式的な手続きに則ってイスラム法規範を運用するようになった。つまり、夫による離婚宣

言といったイスラム独自の法規範を維持する一方、その認定プロセスは世俗の司法制度と酷似することになった。先に紹介した、すっきりした離婚裁判は、この時の制度改革に始まっている。改革の初期には、世俗の裁判所判事がシャリーア裁判所判事と臨席し、手続き実務を手ほどきしていたと言え、驚く向きもあるかもしれない。シャリーア裁判所は、この 1980 年代を境に、州ごとに三審制を取り、世俗の裁判所とシャリーア裁判所の管轄分離はさらに明確になっていったが、その前提には、シャリーア裁判所が近代的な法運用機能を備えるという質的な変化があったのだ。

1980 年代の改革は、女性の離婚事由の拡大や多妻婚の抑制、財産権の男女均衡など、家族法における女性の権利拡大も推進した。この改革では、マレーシアと同じく英米法文化圏のインドとパキスタン、そしてシンガポールのイスラム家族法が参照された。また、国内の非ムスリム向けの家族法との均衡が意識されていたことも指摘されており、興味深い。実は、1960 年代に進められたシンガポールのイスラム家族法改革においても、非ムスリムの家族法との均衡は重要な課題であり、争点だった。ムスリムのためのイスラム家族法と、非ムスリムのための世俗の家族法が、分離し、かつ均衡している。この関係性は、近代司法の体裁を整えることで独自の管轄を確立した、シャリーア裁判所と世俗の裁判所の関係性にもあてはまる。筆者はこれを＜二元法制＞と呼んでいる。

異なる法枠組みの下で、独自の改革を追求しながらも、互いの存在を意識する。これも、隣り合って生きる他者との共生のあり方なのだ。[2015. 1. 24]

(みつなり・あゆみ 国立国会図書館)

マレーシア・ムスリムの子どもとイスラーム学習

久志本裕子

夕方 5 時、6 時といった時間に車を運転していると、モスクの近くなどで写真のような服装のムスリムのこどもたちが集まっているのをよく見かける。これは、モスクなどで開かれている、塾のような位置づけの宗教クラスに通うこどもたちである。マレーシアの多くの小学校は、午前中に通う学年と午後に通う学年が分かれている二部制をとっているため、ムスリムの子どもの多くは、小学校の授業がない方の時間帯に宗教クラスに通うのである。

マレーシアではイスラームが公式宗教とされているため、公立学校でも「イスラーム教育」という名でイスラームの教育が行われている。他の宗教の子どもたちは、特殊な場合を除いて「道徳教育」という授業を受ける。これらの「イスラーム教育」「道徳教育」は、小学校で平均週 4 時間 (240 分) ほどの時間を占めており、日本の小学校の道徳教育が年間 35 時間に過ぎないのに比べると格段に多い。それにもかかわらず、特に都市部ではムスリム小学生のおよそ 90% が、小学校のイスラーム教育に加えて、モスクなどの KAFA クラスで毎日 3 時間ほど宗教の勉強をするのである。それほど多くの時間を割いて、一体何を勉強しているのだろうか。

イスラームの宗教に関する学問には、信仰に関わる学習 (神学)、信仰に基づく行為に関わる学習 (法学)、道徳と心のあり方に関わる学習 (道徳・神秘主義) の三つの大きな分野がある。さらに、これらの分野全ての基礎として、聖典クルアーンの読み方や解釈、

預言者の言行録 (ハディース) に関する学問、アラビア語に関する学問などがある。このように並べると、どれも子どもには縁遠いもののように見えるが、小学校と KAFA のイスラーム教育はこれら全ての分野を含んでいる。

例えば、クルアーンの読み方は、アラビア文字を知ることから始まる。最初は一文字ずつ、次に筆記体のようにつなげた形の読み方、クルアーン独特の音の伸ばし方のルール……と段階的に勉強していくので、ひらがなやカタカナを勉強する以上の時間が必要になる。

また、「法学」の分野では、礼拝の仕方や礼拝の前に手や足を洗う方法、礼拝のときに言う文句などを勉強する。これも基礎的内容は簡単な動作なので、小学生でも分かるのだが、一つずつ教え、実践させ、確認テストなどをしていると、時間はいくらあっても足りない。こうした学校のような場で、子どもに対してきめ細かい宗教教育を行う、という発想は、マレーシアでは 1970 年代に「ダアワ運動」と呼ばれるイスラーム復興運動が発展した後急速に広まった。だが、宗教に割く時間が増えるほど、その効果に対する親の不満も増えるものである。マレーシアのイスラーム教育で「良いムスリム」が育つかは、日本の学校でどうしたら「良い子」が育つか、というのと同じくらい、悩ましい問題なのである。
[2016. 1. 26]

(くしもと・ひろこ マレーシア国際
イスラーム大学)

マレーシアのヒンドゥー寺院建設をめぐる問題

古賀万由里

英領時代のマレーシアでは、インドのタミル地方から来た移民がエステートで、ラバータッピングなどの仕事に携わっていた。当時、イギリス政府は彼らのために、ヒンドゥー寺院を建てることを許可したため、インド人コミュニティの住居に隣接した場所に、小さな寺院が数多く建てられた。独立後、エステートを離れて町に働きに出てくるようになると、彼らは新しい居住地にも礼拝の場を求め、寺院を建設しようとした。また、かつてエステートであった場所が、町となり、住宅地や商店、工場などが建てられるようになった。

そこで生じているのは、寺院を取り壊して商業ビルや住居を建てようとするデベロッパーと、それに反対する住民との衝突である。政府は寺院を、個人の土地または国やブミプトラのための土地に建てられた違法な建物であるとみなし、取り壊しを支持する。一方でインド系住民は、イギリス政府から認められて建てた寺院であるので、取り壊しに反対するか、移転地を要求する。

デベロッパーが与える移転地は、下水溝の脇のように、不要の土地であり、寺院を建てるにはふさわしくないため、インド系住民は反対するが、訴訟を起こしても寺院は取り壊されてしまうのだった。だが、寺院がうまい具合に再建される場合もある。

クアラルンプールの商業施設「ミッドバレー・メガモール」東側の駐車場の出入り口脇には、カラフルなヒンドゥー寺院がある。主神として祀られているのは、ムーガンビカ女神であ

る。主神の脇には、菩提樹の木があるが、元々は正面のハイウェイの反対側にあった。メガモールが建設される前、この場所にコンドミニアムを建てようとした中国人がいた。菩提樹の木を切ろうとしたところ、木から水が3か月間流れ続けた。神の涙だといって、インド系住民はそれを飲んで癒された。

デベロッパーの中国人は破産し、その後に来たミッドバレーは、寺院の土地を売るように所有者に要求した。だが、3代目の所有者である女性はトランスに入り、寺院はここにあるべきだと言った。中国人エンジニアは夢の中で、菩提樹の木を一部とって、移動するようにというお告げを得た。ミッドバレーは寺院の再建を援助し、モールに隣接した寺院が建設された。

その他、プタリンジャヤにある寺院では、中国系デベロッパーが寺院の近くで蛇を殺したために、機械が止まって工事が中断し、インド系女性がトランスに入って蛇を殺した中国人を非難したという。またクランでは、エステートに建てた寺院を、下水溝近くに移すように言われたが、寺院関係者らは反対し、近くの土地を獲得した。寺院再建の際に、3匹の蛇が現れ、祠の移転を確認しに来たなど、不思議な話が聞かれる。寺院は取り壊されてもヒンドゥー神は住処を獲得する。まるで、抑圧されながらも自文化を守ろうとするインド系住民のようである。[2017. 1. 31]

(こが・まゆり 開智国際大学)

マレー舞踊の魅力と特徴

新井卓治

多民族国家マレーシアにはさまざまな「民族舞踊」があるが、今のマレーシアが位置する「地域の伝統舞踊」という観点では、マレー系の人々の間で継承されてきたマレー舞踊がそれにあたると考えることは、歴史的、文化的に妥当なことであろう。

筆者は、2000 年に当時のマレーシア文化芸術観光省が世界の主要都市でマレーシア舞踊団を立ち上げた際に、東京のグループ設立に参画し、その後、マレー舞踊を中心とした踊りを披露する活動を行っている。自ら踊るだけでなく、各地の舞踊家や指導者らとの交流の中で実感してきたマレー舞踊の魅力と特徴をお伝えしたいと思う。

マレー舞踊は基本的に群舞であり、「王宮舞踊」、「舞踊劇」、「民衆の踊り」の 3 種類に分類される。

「王宮舞踊」は、かつてマレー半島に興った王国の宮中で踊られていた舞踊で、優美でゆっくりとした動作が特徴である。女性の衣装はタイやジャワとの共通性も見られる。クランタン州の Asyik、パハン州とトレンガヌ州の Timang Burung、プルリス州の Layang Mas などが有名である。筆者は、今年 3 月にマレーシアの衛星放送アストロで放映された日マ共同制作ドキュメンタリー番組にて、クランタン州の王宮舞踊伝承者や州立舞踊団と Asyik を踊ったのだが、王宮舞踊の奥深さを垣間見ることができた貴重な機会であった。

マレー半島北部の「舞踊劇」では、劇にドラマ性と美しさをもたらすために舞踊が盛り込まれている。代表的なものが Mak Yong の幕開けの踊り Menghadap Rebab である。踊り手が Rebab と呼ばれる弦楽器に面して (menghadap) 踊ることからその名が付いている。リードダンサーは自然や生命の美を称

えた歌を歌いながら踊る。

「民衆の踊り」は、自然への畏敬や感謝、宗教的信仰心、人々の繋がりなどをテーマとしているが、現在のマレー舞踊では全ての要素を融合し、現代的な音楽と振付で踊るプログラムが主流となっている。舞踊のスタイルは以下の 4 種類に分けられる。

「Asli」は、ゆっくりとしたテンポの曲を使い、動きはシンプルである。足が床から離れず、両腕をしなやかに振って踊るのが特徴である。

「Inang」は、Asli より速いテンポの歩く踊りであり、Inang 調と呼ばれる曲で踊るダンスの総称。腕を軽やかにゆり動かし、パートナーと視線を交わしながら踊る。

「Joget」は、マラッカへやってきたポルトガル人の音楽が起源とも言われるリズムの音楽に合わせて、足で細かいステップを踏み、手と腕でリズムをとる踊りである。「Zapin」は、中東から伝わった音楽とリズムがマレー文化と融合した踊りで、ダイナミックなステップで様々なフォーメーションを展開する踊りである。現代マレー舞踊では、テンポの速い音楽に合わせて、シンプルでモダンなステップが多用されている。しかし、ある指導者いわく、マレー舞踊に特有の身体技術が用いられている限り、それは伝統を引き継ぐマレー舞踊であり続けるとのことで、このような解釈のもと、バラエティに富んだマレー舞踊が産み出されている。

マレー舞踊とは、時代と共に常に進化し続けている伝統舞踊であり、そのような視点で鑑賞すれば、舞踊からマレーシアの世相を感じ取ることにも出来るのではないかと思う。

[2015. 7. 28]

(あらい・たくじ 日本マレーシア協会)

香り立つハイブリッドなマレー半島の食文化

櫻田涼子

2015 年 8 月に独立 50 周年を迎えたシンガポールでは、ここ数年、庶民の食文化をナショナル・ヘリテージへと押し上げようとする動きが盛んに見られる。屋台で楽しめる海南鶏飯やサテなどの食事類はもちろんのこと、マレー半島の喫茶文化コピティアムが人びとのノスタルジックな感傷を刺激しつつ、国民的文化としての価値を見いだされ、脚光を浴びている。

コピティアム (kopitiam) とは、マレー語で「コーヒー」を意味する kopi と福建語で「店」を意味する tiam からなる語で、コーヒーや紅茶などの嗜好飲料と軽食を提供する喫茶店で、主に中華系によって経営されるのが一般的だ。砂糖とマーガリンを加えて焙煎した濃厚な味わいのコーヒーや、ココナッツミルクとパンダンの香り豊かなカヤジャムを塗ったトーストなどが楽しめ、マレー半島の街角に遍在するフードスケープである。

そんなコピティアムは、かつては華人男性が政治談義に花を咲かせる「男たちの空間」であった。コピティアムは 19 世紀後半からマレー半島に大量に流入した中国南部からの移民の中でも、特に後発移民の海南島出身者によって 1930 年代にはシンガポールで始められ、労働移民として単身渡来した中国人男性が寝間着のまま朝食を食べる場所だった。テレビが一般家庭に普及するまで、コピティアムは人びとが集い、情報交換する重要な社会空間として機能したという。実際、筆者のフィールドであるジョホール州北部の田舎町にある住宅団地内のコピティアムは、現在でも男性が中心となって利用する社会空間であ

る。例えば、儀礼に参加するなじみの男性客たちがツケ払いで利用する機会もあるため、女性が一人でふらりと利用するにはどうも落ち着かない独特の空気が流れているような気がするのだ。

その一方で、今日ではコピティアムの懐かしさを喚起する雰囲気商機を見だしチェーン展開を図る「オールドタウン・ホワイトコーヒー (Oldtown White Coffee)」や「クルアン駅コピティアム (Kluang Station Kopitiam)」などの勢いが顕著である。「オールドタウン」はマレーシア国内に 200 以上の店舗を擁し、インドネシアやオーストラリアなど海外展開にも力を入れている。これらのチェーン店コピティアムの特徴は、閉ざされた「華人男性の社会空間」からマレー人も飲食可能なハラル・フードを提供する国民的飲食空間へと変貌を遂げている点に尽きるだろう。つまりチェーン店コピティアムは、民族の垣根を超えての共食を可能とする使い勝手の良いコスモポリタンの飲食空間となっているのだ。都市部のオフィス街のランチタイムにこれらのコピティアムを覗いてみると、マレー人、華人、インド系の同僚とおぼしき人びとがテーブルを囲み談笑しながらランチをとる様子を目にすることが出来るだろう。このように見てくると、多様な文化、多様な人びとを架橋するコピティアムがナショナル・ヘリテージとして再発見される近年の様子は、マレー半島のハイブリッドな文化生成の過程と重なり、なるほど納得がいくのである。[2015. 9. 29]

(さくらだ・りょうこ 育英短期大学)

演劇で描かれる多民族国家の姿

滝口 健

毎年秋に開催される国際的な舞台芸術祭、フェスティバル・トーキョー (F/T) は、東京のアートシーンにすっかり定着した感がある。近年、F/T はアジア地域から 1 カ国を選び、その国の注目すべき作品を特集上演する「アジアシリーズ」を展開しているが、その第 3 弾となった今年はマレーシアの特集が組まれることとなった。その中でひととき大きな注目を集めたのが、クアラルンプールに拠点を置くインスタントカフェ・シアターカンパニー (ICT) による公演『NADIRAH』だったと思われる。

この作品の主人公、ナディラはシンガポールの大学で学ぶマレー系シンガポール人。彼女の母親は中華系であり、マレー系の父親と結婚するためにイスラム教に改宗した過去を持つ。現在は離婚して女手一つでナディラを育てている母親に恋人ができたことがわかる。再婚をほのめかす母親を最初は祝福するナディラ。しかし、母の恋人は敬虔なキリスト教徒である中華系男性だった……。イスラムの教えに忠実であろうとする自分と、宗教よりも恋愛を優先する母親とのすれ違い。混血であるという出自と、マレー人としてのアイデンティティー。『NADIRAH』は多民族社会における主人公の苦悩と成長を優しいタッチで描き出していく。

今回の作品の大きな特徴は、マレーシアと、その隣国のシンガポールのアーティストたちがさまざまなレベルで互いに影響を与えながら作られたものだという点にある。作者のアルフィアン・サアットはシンガポールを代表する劇作家であるが、『NADIRAH』を書くにあたって彼が大きなインスピレーションを得たのは、マレーシアの映画監督、故ヤスミン・アフマドの作品であった。ヤスミンは、多民族国家であるマレーシアの日常生活で人々が出会う文化や宗教の違いによる摩擦や対立に鋭い目を向けつつ、それでもなお共に生き

る喜びを暖かく描いて大きな支持を得た。東京国際映画祭でも特集上演されるなど、国外でも高く評価された彼女が追い続けたテーマを、アルフィアンが同じく多民族国家であるシンガポールに舞台を移して作品としたのが『NADIRAH』であるとも言える。

ただ、ICT による『NADIRAH』の上演にあたっては、シンガポールの劇団による初演時からさらに一工夫が加えられている。マレーシアの劇団と共同作業を行うに当たり、アルフィアンはナディラの親友、マズナーの設定をシンガポール人からマレーシア人留学生に変更したのである。イスラムの教えに時にかたくななまでに固執しようとするナディラに対し、それとは対極的な態度を示すマズナー。マイノリティーとして、シンガポールの能力主義社会の中で自らのアイデンティティーと存在意義を示そうと苦闘するナディラと、マレーシア本国で享受していたマレー系優遇政策による特権をあつさり捨ててシンガポールにやってきたマズナー。彼らのやりとりを通じて、元は一つの国でありながら、過去 50 年間、異なる方法で多民族国家を作る実験を続けてきた両国におけるマレー人の意識や立場の違いが浮かび上がってくる。この変更により、『NADIRAH』はマレーシアとシンガポールという二つの国にまつわる物語としての性格をも色濃く持つことになったのである。

マレーシアとシンガポールのアーティストの共同作業によって、多民族国家における複雑な民族意識をこのように重層的に描き出すことが可能となった。そうした試みが演劇というメディアを通じて始まっていることを示したことが、今回の公演の最大の成果だったのではないだろうか。[2016. 2. 7]

(たきぐち・けん)

マレーシアの医療ツーリズム

小野真由美

1997 年のアジア通貨危機以降、アジアの新興国では、医療を求めて国境を超える患者を対象に、医療産業と観光産業の連携のもと、医療ツーリズムと呼ばれる新しい観光形態の産業化が推進されている。東南アジアの医療ツーリズム先進国のシンガポールやタイに比べ後発であるマレーシアは、2000 年代後半より医療ツーリズム振興に本格的に着手した。

マレーシア医療観光協会以下 (MHTC) は、09 年 7 月に設立された、医療ツーリズム振興と医療産業育成を官民協働で行う保健省管轄の政府系組織である。良質な高度医療を安価に提供できることが、マレーシア医療の強みとされる。治療目的の外国人渡航者の場合、ビザを 30 日間、6 ヶ月、最大 1 年まで延長可能である。国際的な医療認証機関である JCI の認証を取得した 8 つの病院を含む国内 73 の民間病院を医療ツーリズム受け入れ病院に認定し、外国人患者の受入れ体制を整備している。さらに、インドネシア、香港、バングラデシュに海外オフィスを開設し、戦略的なマーケティング活動を行っている。

医療ツーリズムは先進国から新興国へ安価な医療や健康増進を求める患者の国際移動と捉えられてきた。しかし、LCC の普及による交通手段の拡大と中間層の増加により、アジア域内での患者の往来が活発化している。11 年以降、マレーシアの外国人患者受入れ数は 3 年連続で前年比 15%増加しており、14 年には 88 万 2,000 人となった。MHTC によると、13 年度の国別患者数ランキングは、1 位から順に、インドネシア (43 万 7,000 人)、インド (2 万 7,000 人)、日本 (2 万 2,000 人)、中国 (2 万 1,000 人)、リビア (1 万 9,000 人) であり、総患者数のうちインドネシア人患者が過半数を占める。統計が示す通り、マレーシアの医療ツーリズムは、アジア・中東諸国のムスリムが主要なターゲットと位置付けられる。

MHTC は 14 年 8 月に東京で「マレーシア日本ヘルスケアカンファレンス」を開催し、

初めて日本で本格的なプロモーションを行った。マレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラムに参加する日本人高齢者の滞在先として人気のあるペナンの民間病院の紹介に続き、不妊治療の専門病院として実績のあるクアラルンプールの民間病院の専門医が日本では制限のある着床前遺伝子スクリーニングを含めた治療について紹介した。少子高齢化の進展する日本の現状を踏まえ、マレーシアへの医療ツーリズムを提案しているのである。保健省は、在留邦人の医療ニーズを満たすだけでなく、高度医療を求める日本人医療ツーリストの市場開拓を視野に入れ、新しい顧客ターゲットの潜在的需要に照準を合わせて促進活動を行っていることがわかる。

マレーシアでは、「ハラル医療ツーリズム」を新たなサービスとして展開する向きがある。オマーン、リビア、カザフスタンは、マレーシア政府と患者受入れに関する政府間協定を締結しており、自国民のマレーシアでの医療費を負担している。中東湾岸諸国からの患者を呼び込むために「ハラル治療」の開発を進めており、ムスリム対応の食事や病院施設整備に加え、豚ではなく牛の成分で造られたインスリンやゼラチン、手術用の縫合糸、ハラル薬品を使った治療を行っている。

「マレーシアの医療は秘宝である」と述べた MHTC 初代最高経営責任者メアリー・ウォン氏。成長産業としての医療ツーリズムの可能性に期待を寄せるマレーシアは、自らの文化資源を巧みに利用しながら、世界の様々な国や地域から患者・消費者を集めている。事実、期待通りの成果がでていることは明らかであろう。今後、アジア新興国と中東諸国の中間層の患者の医療ニーズを満たすだけでなく、医薬開発や医療人材育成においてもマレーシアがイニシアチブを発揮していくことが予測される。[2015. 2. 8]

(おの・まゆみ 岡山大学)

裾野広がる高等教育と PTPTN ローン問題

田中李歩

クアラルンプールの街中や郊外の車道沿いには、大学やカレッジなど高等教育機関の広告がよく見られる。マレーシアには私立の高等教育機関が 500 校近くあることを思えば、それは不思議なことではないかもしれない。全国の国立・私立高等教育機関に延べ 120 万人近くの学生が在籍している（2013 年、就学率は 30% 以上に及ぶ）こともあり、現在のマレーシア社会において高等教育は特別なものではなくっているとと言えるだろう。

しかし、マレーシアで高等教育がここまで普及したのは最近のことである。いわゆる「ブミブトラ政策」の一環で、学位授与権のある大学は 1990 年時点で国立の 7 校のみ、国内の大学就学率はわずか 2.9% 程に抑えられていた。その後、国家政策の力点が経済開発にも置かれていくにつれ、教育政策にも転機が訪れ、96～97 年には私立の高等教育機関が公的に認可されるようになったほか、国立大学の定員も大幅に増やされ、現在まで続く高等教育拡大の下地がつくられた。

もっとも、近年のマレーシアの高等教育をめぐるのは、教育費用の負担に関する要素も重要だと考えられる。現在のマレーシアの大学やカレッジの学費は、学校や課程による差異も大きいものの、例えばいわゆる文系学科の学士課程では、国立大学で年間 5,000～1 万 3,000 リンギ程度、私立大学で年間 2 万～3 万リンギ程度と、進学に伴う経済的負担は決して小さくないと言える。進学先選定時に費用の面は重視されているようで、進学関連の雑誌やウェブサイトは奨学金情報を大いに取り上げ、高等教育進学フェアでも各校がこぞって奨学金の存在をアピールしている。

ただ、費用負担という点では、1997 年に導入された国家高等教育基金（PTPTN）ローン制度が果たしている役割が大きいだろう。国私立のおよそどの高等教育機関に進学する学生でも申請可能という対象の幅広さもあり、

2015 年までに 188 万人がこのローンを利用しているといい、それまで高等教育に手の届かなかった層の進学を後押ししたという点で大きな功績を挙げていると言える。

しかし、PTPTN はあくまでローンであるということも見過ごせない事実である。実際に返還滞納者の多さと滞納額の大きさが問題になっており、15 年末で滞納者数は全利用者の約 35% にあたる 66 万人以上、滞納額の累積は 54 億リンギに上ると報じられている。政府は返済額の軽減、滞納者の出国制限・ブラックリスト登録などの措置をとり対応に躍起になっているが、滞納者数は増加の一途、財源不足も生じ、貸出対象者を限定する方向に進んでいるという。

他方、ローン返済への不安感から、初職を迷えず不本意な職に甘んじて就く大卒者や、そもそも進学を断念する者の出現も指摘されている。経済的な進学制約条件を緩和し多くの学生に高等教育の恩恵を行き渡らせるという理念に裏打ちされてきたはずの PTPTN ローンだが、最近では社会的なイメージも悪化していると見る向きもある。

このところ日本でも学生支援機構の「貸与奨学金」への問題視が強まっているが、教育費負担増とローン拡大が教育の機会均等に与える影響への懸念は世界の各所で高まっている。その意味では、長らく限られた機会の民族間分配をめぐる議論の対象となってきたマレーシアの高等教育も、そうした問題の入り込む余地のある段階に到達したのだとも言える。いずれにせよ、未だに国立大学入学選抜の公平性に疑義が付されるなど民族の側面の議論も廃れていない中で、マレーシアの高等教育は経済面での機会の保障・均等化という更なる課題にも直面していることは確かであろう。[2016. 4. 26]

（たなか・りほ 東京大学大学院博士課程）

オラン・アスリの川筋ナビゲーション

河合 文

マレーシアで生活していると、社会と河川の親密さに気づくことがあるかもしれない。「クアラ・ルンプール」のように川に関連した地名が多い。日本語で「右も左も分からない」と言うところを、「上流も下流も分からない」と表現することもある。また日本にも同様の表現法がありはするが、経済の分野では、原料や部品を提供する産業を「上流産業」、加工等を担う産業を「下流産業」という。その昔、河川が主要な交通網であったマレーシア半島部では、上流で採集された森林産物が下流の河口へと運ばれ、外海との交易に充てられていた。その名残だといわれている。

上流部で籐や沈香などの森林産物を採集するオラン・アスリのなかには、現在も川をナビゲーションに用いる人々がいる。オラン・アスリとは、マレーシア半島部のエスニック・グループである。居住域、生活様式、使用言語等によって複数のグループに分けられている。なかでも狩猟・採集と森林産物の取引を主な生業とし、遊動的な暮らしを送ってきた人々は、セマンと呼ばれる。オラン・アスリの多くは各地のオラン・アスリ村に居住しているが、クランタン州のタマン・ヌガラ近辺に暮らすセマンの 1 グループ、バテッは、村の生活と森でのキャンプを組み合わせ暮らしている。雨期は村に滞在するが、3 月頃より森での生活が増え、吹矢猟やランブータンなどの果実採集、現金収入源となる森林産物採集を行うのである。

オラン・アスリがキャンプや森林産物採集で利用する一帯には、標高 300～1,000 メートル程の山々が林立する。裾野の水は集まって流れをなし、合流して緩やかに蛇行する川となる。川の流れる森に道は存在しない。木々やツタが茂って見通しが悪く、たとえ道や目印をつけても短期間で森に埋もれてしまう。このような環境を、地図やコンパスを使わずに移動するのである。

森を歩く際の経路決定、ナビゲーションに

おいて重要なのは、水系と、移動時に感じられる重力である。身体と重力との関係で地形を把握するのだ。これは彼らが用いるバテッ語の特徴を生かして行なわれる。移動を表す際に、「行く」というような水平の動きを表す動詞が使われることは稀である。そのかわり、身体を重力に逆らって上に移動させるか、重力に沿って移動させるかという点を含めて意味が規定された語が用いられる。例えば「ガラッ (本流を筏で上る)」、「スィンセン (支流を歩いて上る)」、「チュワ (斜面を登る)」といったものである。方位に関しては、「上流・下流」という方位語が使用され、東西南北や左右という語はバテッ語には存在しない。

水系の把握には母子関係との類似性が利用される。本流は「母川」と呼ばれ、そこに流れ込む支流はその「子供の川 (子川)」としてセットで記憶される。そして、個々の「子供たち」がどういった順番で母川に並んでいるのかも記憶されている。このようにして多数の川が体系づけられ、水系の構造として把握されているのである。

例えば、尾根伝いに標高の高い地点へ移動したいとする。尾根は本流と並行するため、母川の上流への移動を応用したナビゲーションがとられる。尾根にある溪のいくつかは、子川と結び付けられて記憶されている。このため地面の起伏を意識しながら尾根を歩き、アップ・ダウンが終わった辺りで、その溪と結びつけられた子川が母川のどの辺りの支流かということから、自分の位置を確認するのだ。これが、道路のない森を移動する際の彼らの川筋ナビゲーションである。

しかし、こうした彼らの間でも、奥地における道路建設に伴って車やバイクの利用が増加している。マレーシアの人々の暮らしと川との関係は、変容を遂げつつあるようだ。

[2016. 3. 29]

(かわい・あや 千葉大学大学院博士課程)

中国が造り出すマレーシアの新領土― 「フォレスト・シティー」

金子芳樹

中国が南シナ海で造成している人工島は国際紛争の火種となりかねない情勢だが、その中国がマレーシアとシンガポールの間のジョホール海峡を埋め立てて巨大な人工島を造っている。いまやこれは架空の話ではなく、日々進行する現実となっている。この人工島を 2 月半ばに視察してきた。

新設された道を行くと土を運ぶトラックが行き交う埋め立て現場が左右に広がる。全 4 島を造る計画の 1 島目の工事が進んでおり、建物の建設や植栽も始まっていた。さらに進むと、この島だけでも数十棟が建設予定の高層コンドミニアムのうちの 4 棟、大規模ホテル、さらに大型の体育館ほどあるセールス・ギャラリーが見えてきた。

つまりこの計画は、海にゼロから造成した土地の上に住宅街、オフィス街、学校、病院などを含む総合的な未来型都市を建設するという極めて大胆な巨大開発プロジェクトなのである。埋め立て面積 20 平方キロメートル（セントーサ島の 4 倍、新宿区よりやや広い）、想定人口 70 万人というからまさに地図が変わる。未来都市にありそうな要素をすべて盛り込んだ魅力的なスペックや、緑あふれるエコ重視のイメージが強調される。その名も「フォレスト・シティー」。

これだけなら大型開発投資の話だが、問題は誰が何のために進めているかである。この事業、「カントリー・ガーデン・ホールディングス（碧桂園集団）」という中国の不動産開発企業が仕掛け、投資額 5 兆円の 20 年計画を仕切って企画、投資、建設、販売のすべてを担う。そして、事業の重要部分である住宅販売の主要顧客には中国本土の中国人が想定されているのだ。

実際に、巨大な完成予想模型や豪華なモデルルームが並ぶギャラリーを埋める見学者の過半数が中国人、残りの大半がマレーシア・シンガポール両国の華人。200 人のセールス担当者も 9 割が大陸からの社員で、筆者の案

内役も重慶から来た青年だった。仕事熱心な好青年だが、辞書引き引きで英語では仕事にならない。そもそも中国語話者の客しか想定していないようだ。建設作業員も 4 分の 1 は中国からだという。

中国政府も支援しているのかと尋ねると、完全な民間事業だと否定した上で、政府が進める「一帯一路」「走出去」などの対外戦略には沿っていると語る。第 1 島の住宅販売物件 1 万 6,000 戸は 1 割もできていないのに既にほぼ完売、契約者の 6 割が中国人だそうだ。2LDK で 200 万リンギと安くはないが、それでも上海の 4 分の 1 程度だという。

別に話を聞いた地元ジョホールの大学を出たての華人セールス嬢は、「マレーシア政府、州政府、スルタン（州王）が支持する会社なので中国企業でも不安はない。何より給料がいい」と言う。中国人バイヤーは投資目的なのかと聞くと、半分はそうだが子や孫の教育や老後の生活を考えての購入も多く、そのために英語のインターナショナルスクールや高度医療病院を備えているとのこと。体制崩壊でも起こったら中国人が大量に押し寄せるかも、と笑って付け加えていた。

彼らが言うようにマレーシア・中国の両政府が後援するビジネス事業であるが、完成すればマレーシアの領土が増える。すでに「Jalan Forest City 1, Pulau Satu, 81550」という住所まで付いていた。自らの懐は痛まらずに新たな領土と経済効果を生み出してくれるのだから文句はなかり、とナジブ首相は言うのだろう。

もとより同事業はマレーシアが国策として進めるジョホール開発の「イスカンダル計画」の一部を成す。シンガポールの経済発展モデルの外縁を越境して引き込み、ジョホールを香港に対する深センにしようというこの計画に中国企業が目を着け、折からの中国の海外投資ブームと結び付けて事業化したのだ。対岸のシンガポールも、事業の実現には懐疑的

であったとしても反対はしていない。

仮に計画通り実現すれば「三方良し」だが、はたしてそれだけで済む話だろうか。従来、マレー世界に浮かぶ華人の小国としてシンガポールは中国との関係に神経を使い、マレーシアも国内の民族関係や米中間のバランスに配慮して対中政策には慎重であった。スキャンダルで窮地にあるナジブ首相が、次々に助

け船を出してくれる中国からのオファーになびく傾向が強まっているが、さて、こんな両国間の海に生まれた新領土とその上の中国製の「森」は、経済だけでなく政治や外交との絡みの中で、将来マレーシアに何をもたらすのだろうか。[2017. 2. 28]

(かねこ・よしき 獨協大学)

難民をめぐる過去の遺産と新たな試み

篠崎香織

ミャンマーおよびバングラデシュからの出国者が海上を漂流していた問題をめぐり、マレーシアは周辺の東南アジア諸国とともに国際的な非難を浴びた。マレーシアは 2015 年の東南アジア諸国連合 (ASEAN) 議長国であるため、ASEAN 内での調整を求められる立場にもある。これに関してマレーシア国内において、「政府は過去の経験を活かして人道的な立場から積極的に関与すべきだ」との声がしばしば聞かれる。「過去の経験」とは、ベトナム難民問題を指す。

ベトナム戦争後、中越戦争が勃発し、ベトナムからの出国者が 1970 年代後半に大量に発生した。マレーシアにも 75 年 5 月以降、ベトナムからの出国者が漂着した。マレーシアは難民を受け入れていないが、これら漂着者を一時的に受け入れ、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) による漂着者の第 3 国移住を支援した。ベトナム人が多数流れ着くトレングヌ州ビドン島の一部をマレーシア政府が提供し、4 万人を収容できる難民収容所が 78 年 8 月に開設された。ちなみにクアラルンプールにも、スンガイブシに 6 万人を収容できる難民収容所があった (82 年 6 月開設)。

しかし、こうした対応をはるかに上回るペースでベトナムからの漂着者が増加した。ベトナムは出国者を規制せず、難民受け入れ国は消極的だったためである。79 年 4 月までにマレーシアは、ベトナム人漂着者 8 万 4,000 人を受け入れたが、そのうち 5 万 3,000 人が国内に留まっていた。その数はその後も増加の一途をたどり、同年 6 月に 7 万 7,000 人に達した。これを受けてマレーシアは、ベトナム人漂着者の上陸を一切認めない方針に転換した。さらに、収容しきれない難民を船に乗せて公海上に送り出す措置を開始した。同様の問題を抱えていた ASEAN 諸国と難民阻止の合同作戦も開始した。ASEAN 外相会議ではベトナムが名指しで批判され、難民問題は流出源で解決すべきとされた。

こうした動きを受けて、同年 7 月に国連インドシナ難民会議が開催された。この会議でベトナムが難民抑制を約束し、難民受け入れ国が受け入れ枠を拡大したため、マレーシアの負担は徐々に軽減されていった。マレーシアは 90 年までに 25 万 2,452 人のベトナム難民を受け入れ、うち約 24 万人が第 3 国に移住し、9,000 人がベトナムに帰国した。ビドン島の収容所は 91 年に、スンガイブシの収容所は 96 年に閉鎖した。2005 年 8 月に、マレーシアに残っていた最後のベトナム難民がベトナムに帰国した。

ミャンマー・バングラデシュの出国者をめぐる問題に関して、マレーシア・インドネシア両国政府は 15 年 5 月 20 日、漂流中の約 7,000 人を一時収容する用意があると表明した。ただし国際社会が主体となって、漂流者たちの第 3 国移住またはミャンマーへの帰還を 1 年以内に実施することが条件である。地域の課題に国際社会を関与させ、負担を共有させるという点において、過去の経験が参照されているように思われる。

他方で、新たな展開も見られる。同年 7 月 2 日にマレーシアの主催で、ASEAN 越境犯罪担当閣僚緊急会議が開催された。その際、人身売買に関わる案件に対して各国が法執行力を強化し、調査・分析の実施と情報の共有を図ること、また 07 年以降策定が検討されてきた人身取引に関する包括的な協定の採択を急ぐことが合意された。さらに、人身売買の被害者を救済する基金の設立が提案された。過去の経験をただ参照するだけでなく、地域の課題を地域で対応するという新たな試みも徐々にではあるが進展していると言えよう。外国人労働者に依存する国内経済が、不当な搾取の上に成り立たないように、マレーシアの対応が官民において問われている。[2015.9.1]

(しのぎき・かおり 北九州市立大学)

リー・クアンユーとシンガポール、そしてマレーシア

黄 蘊

2015 年 3 月 23 日にシンガポール建国の父といわれるリー・クアンユー（李光耀）が 91 歳の生涯を閉じ、一つの時代もとうとう終わりを告げようとしている。リー氏の死に伴い、連日リー・クアンユーの功績や、今後のシンガポールの行方を占う論評が相次ぎ出され紙面をにぎわせている。そのうち、シンガポールの新聞、テレビ各社は最も多くの報道、論評を発信しているが、その次が隣国のマレーシアで、さらに中国の紙面もリー・クアンユー関連の報道を多く掲載している。このような熱度からも、上記の国々とリー・クアンユー、シンガポールとの関係性の深さやうかがい知ることができる。

英領植民地からの自治領としての独立（1959 年）、マレーシア連邦への加入（63 年）、シンガポール独立（65 年）、その後の諸立国政策制定の諸々はリー・クアンユーの人生物語そのものともいえ、氏の人生とシンガポールという国の誕生、成長とは切り離せないほど融合している。一方、リー・クアンユーは 90 年に首相を引退したものの、顧問相として政権内に居続けた。

息子で現首相のリー・シェンロン氏は 2004 年より第 3 代首相を務めるなど、管理政治という政治文化を築いてきた「リー王朝」は批判にもさらされている。シンガポールは中国語では「新加坡」と漢字表記されるが、「李家坡」とも揶揄されているほどである。

しかし、いずれにせよ、マレーシア連邦より追い出されるかたちで余儀なく独立の道を歩み始めたシンガポールが、危機意識のなかで無資源の小国から先進国まで成長した軌跡に、リー・クアンユーの卓越した指導力、その政策的叡智の光がしっかりと刻まれており、功績は否定できないものといえよう。

リー・クアンユーの政策の中で最も重要なものの一つにバイリンガル、バイカルチャー政策がある。その根底には純粋な西洋的な価値観でもなく、また東洋的な世界観、言語のみに依拠するわけでもないという哲学がある。結果として今日のシンガポール人の多くは 2 つか 3 つの言語を同時に武器にし、世界に通ずる人材がたくさん輩出されている一方、

どちらもしっかりとできておらず地に足がっていない人が少なからずいるのも事実である。言語的多様性と同時に、シンガポールはマレーシアと同じく華人、マレー人、インド人という多民族性を有しており、それが媒介となって多様な人材が集められることで今日のシンガポールの栄光が築かれてきたと言っても過言ではない。

その中で、シンガポールの華人とマレーシア華人、また近隣諸国の華人との関係性は最も深く、シンガポールが東南アジアの華人の「首都」、ハブともなるような状況は見逃せないであろう。リー・クアンユー自身も父祖の世代からずっとシンガポールで生活しているわけではなく、父親は今日のマレーシアで生まれ、イポー、マラッカで生活したのち、リーの祖父とともにマラッカからシンガポールに渡ってきた。リー・クアンユーの夫人である故柯玉芝氏（Kwa Geok Choo）は移民四代目のインドネシア華人で、小さい頃より教育を受けるため父親にインドネシアからシンガポールに送り込まれ、そこでリー・クアンユーと出会った。今日でも、東マレーシアのサバ、サラワク、マレー半島やインドネシアの華人住民たちは教育の機会、よりよい就職のチャンス求めてシンガポールに渡る人が後を絶たない。医療などの関係で定期的にシンガポールを訪れる各国華人の姿もよくみる風景だ。

もっともマレーシアの政治家をはじめ国民は、かねてより隣国のシンガポールに対して複雑な感情を抱いている。エスニック政治に苦しむマレーシア華人はさらに幾重の感情を持つとみられる。その中で、羨望、妬みに近い感情が入り混じっているが、共通の植民地時代の歴史、近い社会状況に由来する心理的親近感が両国の華人にあることは否めない事実といえよう。リー・クアンユーの逝去をめぐるマレーシア華字紙の論調、読者のコメントからは、国内のエスニック政治に対する失望、シンガポールにその希望を託す心情がはっきりと読み取れるものである。[2015. 3. 31]

（こう・うん 関西学院大学）

シンガポールのムスリム女性にとってのトゥドゥン

市岡 卓

トゥドゥンで髪を覆ったマレー人女性の入国審査官に見送られ、クアラルンプール国際空港を後にする。1時間後、黒い髪を見せたマレー人女性の入国審査官が、シンガポールのチャンギ空港で迎えてくれる。シンガポールでは、入国審査官など制服を着用する公務では女性はトゥドゥンを着けることは禁止されているのだ。

「トゥドゥン」は、ムスリム女性が髪を隠すために頭から首までを覆う布である。世界的にはアラビア語の「ヒジャブ」が広く通用するが、マレーシアとシンガポールではマレー語の「トゥドゥン」が使われることが多い。

シンガポールでは、1970年代以降、ムスリムの宗教意識が高まる「イスラーム復興」が進み、トゥドゥンが広まった。現在では、確実に半数以上のムスリム女性がトゥドゥンを着けていると思われる。トゥドゥンの着用が宗教上の義務かについては議論があるが、多くのムスリム女性が、「よいムスリム」になるための宗教実践の一つとしてトゥドゥンを着けることを選んでいる。バラエティ豊かな鮮やかな色のトゥドゥンをまとった女性が連れ立って歩いている様子は目にも楽しい。宗教意識の高まりによりトゥドゥンが広まった点では、シンガポールもマレーシアと同じである。しかし、シンガポールではトゥドゥンの社会的な位置づけはマレーシアとは大きく異なる。公立学校の生徒や公立病院の看護師、警察官、入国審査官などの職種では、制服の規則上、トゥドゥンの着用は認められていない。

シンガポールでは、華人が多数派（人口の約74%）だが、1950～60年代の民族紛争の経験などから、すべての民族・宗教の平等を保障する「多人種主義」を標榜してきた。しかしこれは、未然に紛争の芽を摘むために、「バランス上の配慮」を理由に、民族・宗教

グループからの様々な要望を抑制するものであった。ムスリムからはトゥドゥンの規制見直しの要望が寄せられてきたが、政府は「宗教間のバランスに配慮し、公的な場での宗教の表出は抑制すべき」との立場を崩していない。

特に、2001年に9・11テロ、シンガポールでのテロ未遂犯の拘束があり、ムスリムの宗教意識の高まりを過激主義と結びつける華人の懸念に配慮して、政府は2002年から公立学校でのトゥドゥンの規制を徹底した。しかし、国会では議長を含め数名の議員がトゥドゥンを着け、また、公立学校でも教師はトゥドゥンを着けられるため、規制は不合理だとの議論もある。13年にも規制見直しを求める運動がネット上を中心に広がったが、政府の立場は変わっていない。

トゥドゥンを抑制しようとするシンガポールの社会状況は、政治・社会のイスラーム化が進み、一部の州でトゥドゥンの着用が義務づけられるなど、トゥドゥンを着けさせようとする圧力が働くマレーシアとは対照的である。シンガポールのムスリムの中には、少数派（人口の約15%）の自分たちの要求は通らないという不満の声もある。

世界でイスラーム過激主義によるテロが増加する中で、シンガポールでもトゥドゥンを着けたムスリム女性への嫌がらせや就職差別が増えており、過激主義と本来関係のないトゥドゥンがイスラームに対するネガティブなイメージを背負わされる状況がある。トゥドゥンはムスリム女性にとって宗教実践の一つに過ぎないが、人目を引く外観からも、当事者と異なる意味を他者から付されてしまうのである。[2016.9.27]

(いちおか・たかし 法政大学大学院)

2015 年末の ASEAN 経済共同体の実現

清水一史

今年 2015 年末には、東南アジア諸国連合 (ASEAN) 経済共同体 (AEC) が実現される予定である。この重要な節目の年の ASEAN 議長国は、マレーシアである。ASEAN 首脳会議ほか、多くの ASEAN 関連の重要な会議がマレーシアで開催されている。そしてマレーシアが、この重要な年に ASEAN の舵取りを担当している。

東アジアでは、ASEAN が経済統合と FTA を牽引してきた。1976 年から域内経済協力を進め、1992 年からは ASEAN 自由貿易地域 (AFTA) の確立を目指してきた。そして 2003 年の「第 2ASEAN 協和宣言」では、ASEAN 単一市場・生産基地を構築する AEC 構想を打ち出し、その実現に向かってきた。07 年には「AEC ブループリント」が出され、15 年までの AEC の 4 つの戦略目標として「A. 単一市場と生産基地」、「B. 競争力のある経済地域」、「C. 公平な経済発展」、「D. グローバルな経済統合」を示した。

現在、今年 15 年末にどこまで AEC が実現されるかが注目されている。「A. 単一市場と生産基地」の「物品の自由な移動」は AEC の中心であり、とりわけ「関税の撤廃」に関しては、AFTA とともにほぼ実現に向かっていて、AFTA は東アジアの FTA の先駆であるとともに、東アジアで最も自由化率の高い FTA となっている。先行加盟 6 カ国は 10 年 1 月 1 日にほぼすべての関税を撤廃した。15 年 1 月 1 日には、CLMV (カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムの 4 カ国) 諸国も一部例外を除き関税を撤廃し、ASEAN 全加盟国の関税撤廃割合は、95.9% となった。現在の日本の FTA (厳密には EPA) の関税撤廃割合が 90% 以下であることを考えると、この数字はきわめて高いと言える。尚、CLMV 諸国においては、関税品目表の 7% に関しては、18 年 1 月 1 日まで撤廃が猶予されている。18 年にはベトナムの自動車なども関税が撤廃される予定である。

「物品の移動」では、AFTA の原産地規則も利用しやすいものに改善されてきた。原産地証明の「自己証明制度」の導入や「税関業務の円滑化」等も進められている。尚、非関税措置の撤廃は、先進国でも難しく 16 年以降の課題となるであろう。「サービス貿易の自由化」、「投資や資本の移動の自由化」、「人の移動の自由化」も徐々に進められている。

「B. 競争力のある経済地域」と「C. 公平な経済発展」に関係する、輸送プロジェクトやエネルギープロジェクト、経済格差の是正等も多く取り組みがなされている。ただしこれらは、2015 年末に目標を達成するのは難しく、15 年末を通過点として更に 16 年以降の課題となるであろう。「D. グローバルな経済統合」は、ASEAN+1 の FTA 網の整備や、東アジア地域包括的経済連携 (RCEP) 交渉の進展によって、目標に比べて大きく進展し、当初予定の 15 年末よりも早く達成された分野である。ASEAN は東アジアの経済統合においても中心となっている。

15 年末に、「AEC ブループリント」で述べられた目標のすべてが実現するわけではないが、AFTA の実現により ASEAN 域内の関税の撤廃はほぼ実現され、域外との FTA も整備される。現在の状況は、域内経済協力が開始された 1970 年代半ばや、AFTA が提案された 90 年代前半の状況とは大きな違いがある。

ASEAN は、遅れがちではあるが時間を掛けながら着実に AEC の実現に向かってきた。AFTA という自由貿易地域 (FTA) を確立し、資本 (投資) の自由移動、熟練労働力の自由移動という、共同市場 (CM) の一部の要素を取り入れた AEC の確立へ向かっている。東アジアでは初の自由貿易地域を越えた試みである。また輸送やエネルギーの協力、経済格差の是正にも取り組んでいる。ASEAN は、EU とはタイプが異なるが、現代の経済統合の最重要な例の一つである。

11 月 18～22 日には、クアラルンプールで第 27 回 ASEAN 首脳会議と関連諸会議が開催される。今後の ASEAN 統合を考える上で、最近では最も重要な会議となるであろう。その際には、16 年以降 25 年に向けての今後 10 年間の AEC のビジョンが示される予定である。

ASEAN は、今年末を重要な通過点として、更に AEC の実現に向けて統合を進めて行くであろう。まずは、来月のクアラルンプールでの ASEAN 首脳会議に大いに注目したい。
[2015. 0. 27]

(しみず・かずし 九州大学)

南シナ海問題と米中対峙時代のマレーシア外交

鈴木絢女

2016 年 6 月 14 日に雲南省で行われた中国・東南アジア諸国連合 (ASEAN) 特別外相会議は、会議終了後に共同声明が撤回されるという異例の展開となった。共同声明は、南シナ海における状況に「深刻な懸念」を表明するとともに、関係各国に対して同地域の非軍事化や自制、国連海洋法条約 (UNCLOS) に準じた航行などを呼びかけるものであった。中国からの要請を受けたラオスによる反対が、共同声明撤回の背景といわれている。これにより、南シナ海問題をめぐる ASEAN 内部の亀裂と中国による干渉の実態が、あらためて露呈することとなった。

これまで、南シナ海問題をめぐる態度については、(1) 親中派のカンボジアとラオス、(2) 中国に対する厳しい姿勢を貫くフィリピンとベトナム、(3) 中立のインドネシアとシンガポール、という構図で語られることが一般的であった。このなかで、自らも南沙諸島における紛争を抱えるマレーシアは、一体どのような立場をとってきたのだろうか。

ナジブ政権以降のマレーシアの南シナ海問題に対する態度は、中国との対立回避と、米国との慎重な関係強化のコンビネーションによって特徴づけられる。例えば、2013 年から 14 年にかけて、サラワクの沿岸から約 80 キロメートルにあるジェームス礁において中国海軍が軍事演習を行った際、マレーシアは、軍事演習を把握しているというメッセージを中国に送りつつも、「マレーシアが領有権を主張しているのは、南沙諸島のほんの一部にすぎない」(アニファ外相) と述べ、これを大きな争点としないよう努めた。これは、「中国を脅威とみなさない」というマハティール政権期以来の対中政策を踏襲したものである。他方でマレーシアは、中国の軍事行動拡大リスクに備えるため、アメリカの李バラシグ政策への明示的な支持表明や、頻繁な首脳会談を通じて米国との関係を着実に発展させてきた。ただし、「中国封じ込め」という

シグナルを送らぬよう、たとえばアメリカ・フィリピンの年次軍事演習に一部だけ参加するなど、米国との関係強化は慎重に進められた。

しかし、中国による人工島造成および軍事施設建設が世界的に報じられるようになった 15 年以降、マレーシアの南シナ海問題への対応は少しずつ変化している。たとえば、15 年 11 月には、ヒシャムディン国防相が、カーター米国防長官の案内で、南シナ海に展開中の米海軍航空母艦に乗船した。同相はさらに、今年 3 月、南シナ海における中国による軍事施設建設が真実ならば、我々は「中国に抵抗せざるをえない」と述べ、オーストラリア、フィリピン、ベトナムの国防相との会合を持った。米国の南シナ海における軍事的プレゼンスへの賛同を表明し、中国を名指ししながら米国の同盟国を含む地域の国々との関係強化を進めるというこのようなヒシャムディン国防相の振る舞いは、「中国を脅威とみなさない」という従来の立場の修正と見ることができる。

他方で、マレーシア外交においては、首相の意向がその方向性を決定することにも留意しなければならない。マレーシアは、ナジブ首相がトップを務める政府系投資会社ワン・マレーシア開発公社 (1MDB) の巨額の負債や、首相への不正送金疑惑、資金洗浄疑惑に由来するリンギ安に直面している。これに対して、中国は、15 年 11 月の李克強首相によるマレーシア訪問以降、国債の買い増しや、1MDB の発電部門買収などによりナジブ首相に助け舟を出すことで、マレーシアに対する影響力確保を目指している。

このように、マレーシアの南シナ海問題をめぐる立場は、主権や地域秩序の保持と、首相の生存という 2 つの要因に依存しており、国内政治の動向次第で、大きく変化する可能性がある。[2016. 6. 28]

(すずき・あやめ 同志社大学)

「昭南島」で描かれたマンガの中のマレー半島

松岡昌和

第二次世界大戦期、日本陸軍の占領下に置かれたマラヤでは、現地住民の宣撫（せんぶ）のためのさまざまな施策が行われた。マラヤ軍政の中心であったシンガポールをはじめとして、南方占領地の各地で陸軍によって徴用された「文化人」たちがプロパガンダの任に当たった。その中で、「昭南島」と呼ばれたシンガポールで「文化人」として活動した漫画家に倉金良行がいる。戦後、倉金章介というペンネームで『あんみつ姫』などの作品を残した彼は、戦時期はシンガポールでマンガやイラストレーションなどを描いた。

ここでは、倉金が子ども向け新聞で描いた4コママンガを取り上げたい。『サクラ』と題されたこの新聞は、学校向け副教材として、現地児童に日本語を普及させる目的で編集された。倉金を描いたマンガは、擬人化した動物を描いた一部の作品を除き、マーチャンとレーチャンという名の二人のマレー系児童を主人公としている。当初は日本語学習など2人の日常生活が描かれている。その後、空白期を挟んで、5回にわたって「マライノタビ」と題するマレー半島の訪問記が始まる。シンガポールのマレー系児童という設定の2人は果たしてマレー半島で何を見るのだろうか。

「マライノタビ」は、マーチャンとレーチャンが風光明媚なキャメロン・ハイランドとうず高く積まれた錫のインゴットが描かれた絵葉書を眺め、旅心をくすぐられるところから始まる。2人は作者の倉金に旅行したいとねだり、旅が実現する。そして2人は鉄道に乗ってクアラルンプールに向かう。引率するのは

軍服姿の青年で、倉金本人かあるいは別の日本軍兵士であるかははっきりしない。

マレー半島で2人がまず訪れたのは農事訓練所である。そこでは日本軍兵士によって農業や教練の訓練を受けているマレー人青年と出会う。2人はそのマレー人青年がまるで日本軍兵士のように見えたことに感銘を受けている。続いて、2人はペラの錫鉱山を訪問する。そこで、多くの錫が採掘されるという説明を受け、また採掘跡に多くの水溜りができていることに驚嘆している。その上で、マーチャンがこれだと夜歩いたら危ないという感想を残している。2人の旅は唐突に終りを迎える。地元の親子連れ、また親子の牛を見た2人は帰ろうと軍服姿の青年に持ちかけ、そして連載が終わることが告げられる。

一連の連載で錫が強調されていることから、この戦争が資源の戦争であったことをあらためて示しているとも見ることができよう。また、自ら日本語を積極的に勉強している2人のマレー系児童、日本軍兵士のようなマレー人青年の姿は、日本化教育が進んでいるということを示そうとしたものと捉えることもできよう。一方で、描かれた天真爛漫な児童の姿や、こどもたちが主体的に動くという場面設定は、倉金が戦前・戦後に描いた作品の特徴と相似形をなす。この倉金の作品は、戦時期のクリシェに彩られつつも、軍政当局の教育政策や文化政策よりも作者個人の個性が強く表現されたものと言えよう。[2016. 7. 26]

(まつおか・まさかず 秀明大学)

戦争の記憶とマレーシア

渡辺洋介

日本では 12 月 8 日は日米開戦の日と記憶され、一般には真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まったと理解されている。しかし、これは米国中心の見方にすぎない。日本は英国、オランダとも開戦しており、当時英国領であったマレー半島のコタバル（現クランタン州）に真珠湾攻撃の約 1 時間前に上陸している。太平洋戦争は真珠湾ではなくマレーシアで始まったのだ。

残念ながら、この事実はマレーシアでも広く知られてはいないようだが、そもそも、太平洋戦争がマレーシアではなく真珠湾で始まったという話が広まったのは、それが米国の方針だったからだ。日本を占領していた連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）は、1945 年 12 月 8 日から「太平洋戦争史—真実なき軍国日本の崩壊」という GHQ 作成の文書を新聞各社に掲載させた。この文書は、米軍の役割を強調するため、中国や東南アジアではなく太平洋を主戦場として戦争を描いている。多くの日本人の戦争認識はこの時期に GHQ 主導で作られたのだ。この頃から「太平洋戦争は日米戦争であり、その戦争は真珠湾で始まった」という片手落ちかつ不正確な認識が広まったといえる。

このように権力者には、自分たちにとって都合のいい歴史のみを取り上げて広めようとする傾向がある。マレーシアもその例外ではない。現在のマレーシアの歴史教科書（マレー語版）は、日本占領期をマレー人ナショナリズムの揺籃期として描いており、その例として、マレー人ナショナリストで戦時中は日本軍と協力したイブラヒム・ヤーコブと、激しく日本軍に抵抗して「マレー人魂」を示したとされるマレー連隊司令官アドゥナン・サイディを大きく取り上げている。一方で、日本軍による華僑虐殺にはほとんど触れていない。

マレーシアの教科書が日本占領期をやや「好意的」に描くのは、それがマレーシアで政治権力を握るマレー人の見方を反映しているからであると同時に、日本からの投資をマレーシアの経済発展に結びつけたいというマハティール政権以来の思惑があるからだ。

しかし、マレーシア全体がこうした「好意的」な見方をしているわけではない。日本軍はマレー半島を占領する際、主にマレー人を官僚や警察に雇って占領統治の一翼を担わせ、インド人は日本が創設したインド国民軍に編入し、インド東部にある英軍の拠点・インパールまで攻め込ませ、日本の戦争に協力させた。他方で敵国国民である中国人（華僑を含む）、英国人、オーストラリア人、オランダ人とユーラシアン（欧亜混血）は厳しく弾圧し、特に反日的と嫌疑をかけられた華僑に対しては、女性や子どもも含め、集落ごと焼き払って皆殺しにしたりした。マレー半島を占領した日本軍の幹部には中国から転戦してきた者が多く、中国大陆で行ってきた残虐行為と同じことをマレーシアでも行ったのだ。

残念なことに、こうした事実に対してマレー人は一般に無知あるいは無関心である。その背景には、上述のように、華僑虐殺の事実が若い世代のマレー人に十分に伝えられていないことがある。他方でマレーシアの華人社会は若い世代に戦争を伝えようと努めている。戦争を起こした日本人としては、マレー人の「好意的」な見方や無関心に安住せず、侵略の歴史から真摯に学び、戦争で被害を受けた華人の感情にも理解を示すべきであろう。

[2016. 1. 29]

（わたなべ・ようすけ シンガポール国立
大学博士課程修了）

【Summary】

The Relationship Between Sarawak and Malaysian Studies

SODA Ryoji

(Osaka City University)

The Bornean states of Sarawak and Sabah are considered important parts of Malaysia in terms of land area, population size, and economic scale. However, because of the differences in historical backgrounds, ethnic compositions, and administrative organizations, as well as their geographically separated locations, these states have often been treated separately. Moreover, these states' political and administrative autonomy has been overemphasized. Sarawak and Sabah became independent states in 1963, constituting a new federal country, Malaysia. They began to be subject to political assimilation pressure from the federal government, which is called "Malayani- zation." After the 1990s, social and economic relationships between the Bornean states and the peninsula have become stronger, which is also expressed as "peninsul ar connection." Despite the delicate distance in recent years between Sarawak and the peninsula, as evidenced by the political slogan "Sarawak for Sarawakians," the "peninsular connection" certainly exists in various aspects. It is now becoming diffi- cult to treat Sarawak as an independent regional unit.

Under such social, economic, and political circumstances, in what direction should research on Sarawak be aimed? In the latter part of this paper, I look back over the past half-century at the so-called "Sarawak studies" and explore the possibil- ity of future development of Sarawak studies. Conventional research on Sarawak of- ten focuses on culture and ethnicity, and, unlike peninsular-based studies, is not able to expand upon diversified research subjects such as politics, administration, re- ligion, and literature. On the other hand, Sarawak-based studies have the benefit of collaborating with natural science fields such as ecology and the promotion of inter- disciplinary research projects. However, most of these studies have been completed within the closed space of Sarawak.

Given that the Sarawak-peninsular relations are changing, previous Sarawak studies need to be relativized. For this purpose, it is important to explore the possibility of articulating Sarawak studies to the so-called "Malaysian studies" that have been advanced on a peninsular basis. However, a part of the Sarawak stud- ies has also taken into consideration its relations with Indonesia, Singapore, China, Oceania, the Middle East, etc., and also may be developed beyond the framework of the nation-state, Malaysia. Relativization of Sarawak studies should be promoted af- ter taking into consideration various spatial scales and multidirectional regional networks.

【Summary】

Genealogy and Current Issues in Anthropological
Studies of Sarawak

SAKUMA Kyoko
(Ritsumeikan University)

This paper aimed that to: 1) review the many anthropological/ethnographical studies on Sarawak (Malaysian Borneo) that have been written against the trend of the anthropology and the global social condition; and 2) establish the distinctiveness and challenges of anthropological studies on Sarawak. “Anthropology of Sarawak” refers to anthropologic/ethnographic studies that were compiled and conducted using Sarawak as their research field.

The first part of the paper confirms that the current study situation has followed the ethnic category based on anthropology as an objective science, which was introduced by the United Kingdom. Indigenous people’s world of Sarawak was described by heroic explorers and distinguished district officers of Sarawak Kingdom under the Brooke family, who spoke Sarawak Malays fluently, in historical times. After the Brooke era, Sarawak was ravaged by the Second World War. The first in-depth anthropological study in Sarawak was started in the 1950s by the British colonial service, headed by Edmund Leach. Subsequent studies adhere fundamentally to the ethnic category that was stated within that milestone research. After overview of the anthropological/ethnographical studies, this paper gives a description of the anthropologist, Peter Metcalf, who challenged the generally accepted category, and examines the significance of his work.

The latter half of this paper shows an empirical analysis of the situation where the ethnic category does not reflect the everyday-life of these indigenous peoples. In contrast to the previous description, certain aspects of their identity have been enhanced within their life in the Tutoh basin, Northern Sarawak. Various small ethnic groups have occupied this area who are generally called *Orang ulu*, and the ethnic name, personal name, and the name of the place. This paper describes how the people negotiate their identity this complex situation, and how they choose an ethnic name in today’s particular situation.

【Summary】**Changes in Sarawak Politics and Its Impact on
Federal Politics in Malaysia**

MORISHITA Akiko
(Kyoto University)

The essay explores changes in Sarawak politics and political elite in the past 50 years and the future through an analysis of state assembly members since 1969. The author compiled a database of those who were elected in Sarawak state elections for the period between the first state election in 1969 and the recent election in 2016. The data includes election year, constituency, name, political party, and party alliance. Through an analysis based on the database, the author found three crucial changes in the structure of state assembly members, one occurred in the mid-1990s and the others gradually over the years. Firstly, the composition of major opposition parties in Sarawak shifted from local parties (i.e. SNAP and PBDS) to peninsula-based national parties (i.e. DAP and PKR) since the 1996 state election. This change made it difficult for the ruling coalition in Sarawak (Sarawak Barisan Nasional) to bring the opposition parties into the coalition platform unlike the time when local-based parties were the major opponents. The headquarters of the peninsula-based opposition parties have now become one of the stakeholders in Sarawak politics. Secondly, a certain amount of new comers are constantly recruited and elected in every state election, which resulted in an accelerated ‘metabolism’ in the Sarawak political elite. The transformation within can be seen in any party in Sarawak. However, the state chief minister and significant state ministers have not been changed so often. The Sarawak major ruling parties and the state cabinet today is still led by senior members of the state assembly, many of whom were first elected in the 1983 state election (i.e. Abang Johari and James Masing) and the 1987 state election (i.e. Awang Tengah). They are the minority in number among state assembly members today, 93.9 percent of whom were first elected after the 1991 polls. The third significant change was the gap in years of political experience and leadership between the state leaders and the rest of state assembly members. It became wider and wider over the years. There is a lack of grooming of the next generation of political heirs who are now mid-career state assembly members. This could create future leadership problems in Sarawak politics, disrupting continuity and affecting the federal-state relationship after today’s Sarawak leaders retire from politics.

【Summary】

Evaluation of Biodiversity and Ecosystem Services
in Sarawak, Malaysia

TAKEUCHI Yayoi

(National Institute for Environmental Studies, Japan)

Biodiversity and ecosystem services contribute to human well-being, and have therefore gained increasing attention. However, because of excessive land use and development by humans, forest cover is declining, especially in the tropical region, which is a hot spot for both biodiversity and ecosystem services. In this paper, first, I describe the background of biodiversity and ecosystem service studies and focus on biodiversity issues in Borneo, especially in Sarawak, Malaysia. Second, I introduce our ongoing study on the local community's forests in Sarawak. These forests provide essential ecosystem services, such as drinking water, cemeteries, recreation, hunting, plant gathering, and ritual/spiritual use, to the indigenous people. The study aims to understand whether or not the forests could be a conservation target for maintaining regional biodiversity and ecosystem services; therefore, we conducted a biological survey and analyzed the diversity of tree species in these forests, which are generally fragmented and surrounded by secondary forests in the current rural landscapes. However, similar to primary forests, these forests also have high species diversity. Moreover, we found that all the forests harbored unique and endangered species. Thus, we have concluded that community forests would be suitable conservation targets for sustaining regional species diversity and endangered species. Third, I discuss the perspectives of multidisciplinary studies, especially the importance of collaboration between ecology and sociology. A multidisciplinary study is essential to our understanding of both biological and sociological consequences of biodiversity and finding a balance between conservation and development in order to move toward a sustainable society.

【Summary】Co-living Among Indonesian Migrant Workers
in Longhouse Communities in SarawakKATO Yumi
(Kyoto University)

Human mobility has increased greatly due to advances related to globalization. People from India and China have lived in Malaysia for a long time, and in recent years, the number of foreign workers from neighboring countries including the Philippines and Indonesia has increased. In Sarawak, employment of Indonesian workers has increased, especially since the 1990s, when the oil palm plantations required massive labor forces. Coexistence of minority foreign workers and local residents who comprise the majority of the nation-state has significant issues, as multiculturalism becomes common even in the inland rural communities. Considering these circumstances, this paper does not address human mobility from a state policy or institutional point of view. However, it discusses the ways of cooperation between Indonesian migrant workers and local residents in longhouse villages. The paper particularly focuses on the motivation of the Indonesian migrants in terms of them leaving their original villages in Indonesia to move to longhouses in Sarawak, and how they cooperate with local residents of longhouse villages.

The cases of six Indonesian migrants who live in longhouses located in the Kapit Division are discussed in this article. These migrants originally worked in various sectors, including logging, oil palm harvesting, construction, or transportation, and now they live in the longhouses. As individuals enter the local longhouses, the daily relationships formed between the longhouse residents and these Indonesians is noteworthy, and another significant point is the formation of a communal space by people of various backgrounds. The Malaysian labor force is constantly insufficient, especially in the oil palm industry, and the existence of foreign workers is becoming unavoidable. This paper shows the viewpoint of a multicultural society by describing the daily practice of people who seek co-living and cooperation.

【Summary】

Rainforest Hero or State Enemy?:
Bruno Manser and the Fight of the Penan

KANAZAWA Kentaro
(Shinshu University)

On the cover of the Asian version of *Time* dated September 3, 2001, there was a face of Bruno Manser. The heading of the table of contents is “missing in action” and continues as follows. Swiss activist Bruno Manser was one of the loudest champions of Borneo’s Penan tribe and the slice of rain forest they call home. But Manser, demonized by Malaysian loggers and officials, vanished last year – and the forest keeps disappearing. Manser invited the Western media to the rain forest in Sarawak, Malaysia, and attracted worldwide attention to commercial logging’s endangerment of the life of the indigenous Penan tribe.

Manser had been called a “hero of the rainforest,” while the Sarawak state government named him “state enemy number one.” He was tracked by the police, under accusations of radical foreign incitement because he supported the Penan, who were erecting blockades across logging roads. Hero or enemy; these are both biased images. Because the Penan, with whom he was living, actually called Manser a “Penan man.”

After his death, the Swiss-based nongovernmental organization (NGO), the Bruno Manser Fund (BMF), welcomed historian Lukas Straumann as its new executive director. Straumann rebuilt the stagnated BMF lacking the founder. He emphasizes role-sharing within the BMF and overseas NGO networks, and has created a flat and open organizational structure. At the same time, he has cut into the corruption and illegal fund flows related to export of tropical timber. Meanwhile, in Sarawak, the Penan still face various conflicts involving commercial logging, oil palm plantation development, and construction of dams and natural gas pipelines. Issues concerning Native Customary Rights are still pending.

Abdul Taib Mahmud, who was the Chief Minister of Sarawak for 33 years, has stepped down, and the voice of the Penan has begun to surface. For example, progress has been made on the “Penan Peace Park” initiative regarding a proposed community-managed, protected area to maintain the unique and species-rich ecosystem of the Upper Baram River. A delegation of Penan representing 18 villages expressed gratitude that in 2016 the government finally consented to discuss their proposal. This marked the first time in three decades that the Sarawak government spoke with the Penan community that was opposed to commercial logging.

【Summary】**Sarawak as a Resource of One-Party Dominance**

SUZUKI Ayame

(Doshisha University)

Sarawak State has been called as a “fixed deposit” for the Malaysia’s long-serving ruling coalition Barisan Nasional (BN). In fact, in the 2013 General Election when BN’s share of seats in the Lower House was only 60% --the lowest in its history, the BN component parties in Sarawak could retain 81% of the seats allocated to the state.

This paper examines the significance of the state of Sarawak in the national politics based on the electoral and budget data. Through the examination of the data of the past five elections from 1995 to 2013, it will be shown that the BN component parties in Sarawak have succeeded in retaining higher share of Lower House seats than that of BN as a whole: 81% to 100% of the Lower House seats in Sarawak BN versus 60%-90% for BN across Malaysia. The primary reason for the success of Sarawak BN can be attributed to the small size of constituencies that are mostly located in the rural areas in the state. In these constituencies, voters do not have access to the alternative media, and cash-handouts by the BN works as an effective tool to earn rural votes.

Despite their electoral contribution, this paper argues that the Sarawak BN has not received the commensurate fiscal and development support from the central government. While the per capita developmental budget to the state from year 2001 to 2010 exceeds that of a median state, the allocation to the state may not be sufficient given the lower average and median per capita income and higher inequality, as measured by the GINI coefficient, in the state.

The paper concludes by providing a possible explanation for the Sarawak BN’s decision to remain in the coalition in spite of the limited reward by the federal government: a limited revenue base of the state government as well as social and economic backwardness. These two conditions prompt the state government to continue to rely on the grants by the federal government, resources that could only be secured if they remain within the coalition that controls the federal government.

【Summary】

The Representation of Dayak People
in Sarawakian Authors' Novels

OIKAWA Akane

(Kanda University of International Studies)

Among the Sarawakian writers who use Chinese as their literary language, Taiwan-resident novelists Li Yong-ping (born in 1947) and Chan Kuei-hsing (born in 1956) have produced some novels that are set in their homeland of Borneo. We will examine their works and consider how the novelists redefine their identities as Sarawak-born Chinese, following a brief look at the relationship between the Dayak, the native people of Borneo, and the Chinese, and a short overview of the history of colonial Borneo, as described in Li and Chan's novels.

Chinese writers have described Dayak people as some kind of external threat, while at the same time portraying Dayak women as a symbol of the overrun land of Borneo. Dayak women have been assigned their roles as the wives of Chinese immigrants and the victims of sexual assault by the white colonizers.

However, when the novels' protagonists step out of their safe living sphere into the jungle in search of something, they always need the help of the Dayak people. Even when facing the memory of Communism, inevitable when examining the history of Sarawakian-Chinese, the Dayak people's help is essential.

The protagonists have inherited both the legacy of Anglo/Dutch-colonized Borneo and that of the Chinese, with the latter being mainly in terms of higher education through Taiwan. They trace the pioneering history of Borneo, while at the same time trying to avoid the situation of being Chinese: the people who have oppressed the Dayak people, abused the Dayak women, and have deprived them of the lands and resources. The young protagonists seem to be attempting to build a collaborative relationship with the Dayak people and are becoming *the children of Borneo*.

【Summary】The National Value of History Education as Evident
in Malaysian Secondary-school Examinations

NAITO Yuko

(Aichi Prefectural Tokoname Senior High School/Aichi University of Education)

How is it possible to improve students' competence in 21st century skills, such as critical thinking, when the national policy focuses on specific values, such as critical thinking, when the national policy focuses on specific values, such as allegiance to the Sultan and religion? Through an analysis of history examinations, this paper will show how history education in Malaysia is connected to the aforementioned national policy. In Malaysia, there was a shift in the government's educational policy to adapt to global changes resulting in the 1996 Education Act. Then in 2012, Malaysia participated in the 'Programme for International Student Assessment' (PISA), and now aims to provide education based on global standards.

What does history education actually involve? This paper studies 'history' as a compulsory subject, especially the examination papers and textbooks. The research was conducted in a typical boarding high school in Malaysia, located in the southern part of the Malay Peninsula. The history examination conducted in May 2016, which comprised three papers, was analysed. The first paper was of 1-hours' duration and composed of 40 multiple-choice questions; the second, of 2½-hours' duration, required a short essays; and the last, of 3 hours' duration, longer essays. These examinations were offered biannually and covered the whole of the history curriculum. If any students failed their history examinations, they could not move up to the next grade.

The result of this analysis reveals that the Malaysia government demands that 'history' be made a compulsory subject, teaching the national policy regarding the abovementioned specific values rather than 21st century skills. This also shows how history education provides the background needed by the government to establish a bond between different ethnic groups. Further, one peculiarity found with history textbooks is that the viewpoint differs from that of the West; for example, revolutions and the 18th century Enlightenment are only briefly described.

There are just a few years left until the deadline for "Vision 2020", when Malaysia should have achieved a world-class standard of education. This plan states that Malaysians should be 'living in a society that is democratic, liberal and tolerant'. However, if modern history education does not teach the process of establishing democracy and liberty, how can the students understand these concepts? Having intellectual abilities such as critical thinking skills, and applying multifaceted, multidirectional perspectives will be crucial in the 21st century.

編集後記

『マレーシア研究』第6号をお届けします。発行が大幅に遅れたことをお詫びします。今号は「サラワクから見るマレーシア」というタイトルで開かれたシンポジウム（2016年12月）をもとに、特集号を組みました。これまで、サラワクを含む東マレーシアに関する研究が本紙に掲載されることは少なかったのですが、これを機に、東西マレーシアを含みこんだ、あらたな

マレーシア研究へのヒントが得られればと思います。

昨年掲載できなかったものも含め、エッセイ24編をまとめて収録しています。関係者の皆さまにはお詫びすると同時に、ご協力をお礼申し上げます。（祖田）

〔第6号編集担当〕

祖田亮次（委員長）、坪井祐司、信田敏宏、篠崎香織、光成歩、山本博之

投稿募集

『マレーシア研究』への投稿を募集しています。下記の投稿要領およびJAMSウェブサイトに掲載されている募集要領に沿って原稿をお送りください。

・投稿は随時受け付けております。

・投稿先：編集委員会

(malaysia_studies@jams92.sakura.ne.jp)

投稿要領

『マレーシア研究』は日本マレーシア学会の会誌であり、広い意味での「マレーシア研究」に関する論説、研究ノート、書評論文、および書評を掲載する。刊行は1年に1回とし、投稿は随時受け付ける。

1. 投稿資格：会費を納めた会員および編集委員会が依頼した執筆者とする。
2. 投稿内容：未発表のものに限る。ただし、学会、研究会での口頭発表はこの限りではない。また、同一の原稿を本誌以外に同時に投稿することはできない。
3. 使用言語：投稿原稿で使用できる言語は日本語とする。ただし、注記などにおいてはその他の言語を使用できる（日本語・アルファベット以外の文字を使う場合は編集部と相談すること）。また、採用された原稿については英文要旨を併せて掲載する。
4. 原稿の種別：論説、研究ノート、書評論文、書評の4種類とする。投稿原稿の枚数は40字×30行を1枚と換算して、論説が15～20枚、研究ノートが10～20枚、書評論文が5～10枚、書評が2～5枚とする（いずれも注・図表・参考文献を含む）。原稿に挿入される図表については、大小にかかわらず3点を1枚と換算する。
5. 執筆要領：投稿に際しては、本学会のホームページ

に掲載された「執筆要領」に準拠した完成原稿を提出する。また、論説、研究ノート、および書評論文については、論文要旨（1200字程度）を提出する。

6. 査読制度：投稿された原稿は、レフェリーによる審査結果を考慮の上、編集委員会が採否を決定する。
7. 英文要旨：採用された場合には約400語の英文要旨を提出する。英文要旨は提出前にネイティブ・チェックを受ける。ネイティブ・チェックにかかる経費は投稿者が負担するものとする。また、編集委員会が必要と考えた場合、同委員会は投稿者の経費負担によりネイティブ・チェックをかけることがある。
8. 著作権：本誌に掲載されたすべての原稿の著作権は日本マレーシア学会に帰属する。なお、原著者が本誌に掲載された文章を他の出版物に再録しようとする場合には、編集委員長に申請し許可を得る。
9. ホームページ上での公開：『マレーシア研究』に掲載されたすべての原稿は、日本マレーシア学会のホームページにて公開する。
10. 投稿先：投稿先および問い合わせ先は下記のとおりとする。なお、投稿に際して、投稿者は、氏名（ふりがな）、所属、連絡先の住所・電話番号・E-mailアドレス、投稿題目、原稿の種別を明記する。

『マレーシア研究』第6号

発行：2017年10月30日

発行者：日本マレーシア学会（JAMS）

（ウェブサイト）<http://jams92.org/>

（連絡先）〒802-8577 北九州市小倉南区北方4-2-1

北九州市立大学外国語学部 篠崎香織研究室

発行責任者：金子芳樹

編集責任者：祖田亮次

Malaysian Studies Journal

Vol. 6 (October 30, 2017)

Editorial Office: Japan Association for Malaysian Studies (JAMS), c/o Shinozaki Kaori, Faculty of Foreign Studies, University of Kitakyushu, 4-2-1 Kitagata, Kokura Minami-ku, Kitakyushu, 802-8577, Japan.

Website: <http://jams92.org/>

© 2017 Japan Association for Malaysian Studies (JAMS)

Malaysian Studies Journal

Vol.6

2017

CONTENTS

〈Symposium〉

Malaysian Studies from Sarawak's Viewpoint

- Introduction ----- YAMAMOTO Hiroyuki
The Relationship Between Sarawak and Malaysian Studies ----- SODA Ryoji
Genealogy and Current Issues in Anthropological Studies of Sarawak
----- SAKUMA Kyoko
Changes in Sarawak Politics and Its Impact on Federal Politics in Malaysia
----- MORISHITA Akiko
Evaluation of Biodiversity and Ecosystem Services in Sarawak, Malaysia
----- TAKEUCHI Yayoi
Co-living Among Indonesian Migrant Workers in Longhouse Communities
in Sarawak ----- KATO Yumi
Rainforest Hero or State Enemy?: Bruno Manser and the Fight of the Penan
----- KANAZAWA Kentaro
Sarawak as a Resource of One-Party Dominance ----- SUZUKI Ayame
The Representation of Dayak People in Sarawakian Authors' Novels
----- OIKAWA Akane

〈Research Note〉

- The National Value of History Education as Evident in
Malaysian Secondary-school Examinations ----- NAITO Yuko

〈Essays〉

- Malaysian Bricolage ----- 24 Short Essays on Multi-Ethnic Society

〈Summaries in English〉

Japan Association for Malaysian Studies (JAMS)

<http://jams92.org/>